

---

# 灰色の街でキミは微笑む(真性中二病ファンタジー)

なかみん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

灰色の街でキミは微笑む（真性中二病ファンタジー）

### 【Nコード】

N2559L

### 【作者名】

なかみん

### 【あらすじ】

神森には、吸血鬼がいる。

立て続く猟奇殺人事件から、そんな噂が流れる神森町。そこに住む高校二年生、七瀬 広樹は平凡な学園生活を送っていた。

ある夜、偶然にも広樹は吸血鬼に遭遇し致命傷を負ってしまふ。

薄れゆく意識の中で広樹が最後に目にしたのは、血の海の中に悠然と佇む、クラスメイトの水原 真依の姿だった……。

魔術を扱う人間      神術師。

光の象徴と人々から祝福され、十七世紀にその知名度を不動のものとした、異端狩りの組織『世界総合神術同盟』。

異能の能力を持つ異端      破戒者。

闇の象徴と人々から疎まれ、迫害され続けた彼らが集う組織『銀の歯車』。

これは、その抗争に巻き込まれた、一人の少年の物語。

## プロローグ（前書き）

> i 2 5 8 3 7 | 3 3 6 8  
<

プログラマー

空が紅く染まった。

煌々と燃え盛るは、地獄の炎。赤き焰が家々を飲み込み、黒煙が街を支配していく。

僅か一刻前までは、鬱蒼と生い茂っていた緑は見る影もなく、紅蓮の炎と共に灰塵へと消えた。

「バカな……こんな事って」

燃え盛る業火は、人々を煉獄へと引き摺り込む灼熱の怪物。時折、炎を纏った人間が業火から飛び出し、そしてまた周囲の焰に飲まれていく。

何だ、これは？

崩れるレンガ。燃える木々。倒壊する人家、瓦解する教会。迷える子羊を導く神の家すらも崩れ去り、街が崩壊していく。

耳に届くのは、悲鳴悲鳴爆音悲鳴悲鳴爆音悲鳴爆音悲鳴悲鳴  
悲鳴悲鳴悲鳴悲鳴悲鳴。

「一体、これは……」

それは  
地獄。

一切の慈悲も救いもなく。苦しみと怨嗟に満ちた場所。

第二帝国連合の首都、ガルノイア。自然に囲まれた豊かな都市だった筈のそこは、まさに地獄と呼ぶに相応しい惨状だった。

「嘘です……こんな事って」

そんな地獄の真つ只中で、佐伯さえき冬花とうかはガクリと膝を着いた。

冬花を支配するのは恐怖ではなく、驚愕。身体の中から沸き起る感情が、冬花の足を地面に縫いつけていた。

情けない、と思った。

あまりに現実離れた光景に、我を忘れて座り込むことしか出来ない。こう言う時の為に、今まで訓練を積んできたというのに、いざとなれば結果はこれだ。

「……………」

このままではいけない。頭では分かっているのに、何をすれば良いのかが分からない。

「ッ!？」

目の前の人家が倒壊した。さつきまで、助けてくれと、こちらに手を伸ばしていた老人が瓦礫の下に消える。

駄目だ駄目だ。こんな時こそ、自分がしっかりしなくてどうする。

出来ること。何か出来ることがある筈だ。

そう、例えば直ぐ近くで怯えている子供。歳は恐らく十にも満たない女の子。彼女を救うことくらいなら、今直ぐに出来る。

「待つて、直ぐに助け」

再びの爆音。横殴りの衝撃が冬花を襲う。

「ぐっ……………」

付近で、何かが爆発したらしい。まるで空襲にでもあっているような気分だ。痛む身体を起こしながら、冬花は奥歯を噛み締めた。

そして、直ぐに先程までの行動を再開しようと視線を戻すと……。

「嘘……………」

瓦礫が燃えていた。先程まであった家が無くなり、代わりにレンガの山がそこにあった。

「くっ、許さない」

何が起こっているのかは分からない。ただ一つ、分かっている事があるとすれば、これを引き起こした人物を許してはいけない。それだけだ。

その誓を胸に刻み、冬花はこの町にいる筈の仲間を探し始める。しかし、ここは阿鼻叫喚の地獄。

返って来るのは苦悶と恐怖の叫びのみで、この町に入った彼らの声は聞こえない。

「くっ……………」

「ならば!」

冬花は意を決したように立ち上がると、自らの杖を頭の上に掲げ

る。

様々な文字が刻みこまれた柄に、蒼穹の如き光を放つ宝石。  
その先端に浮かぶのは、槍のように鋭い刃。

『 The prayer sounds far and wide (私の祈りよ、彼方へ届け) 』

声が届かないなら、感じ取ればいい。  
彼らの存在、彼らの鼓動。そして 彼らの命を。

『 The ocean is beyond the prayer across thousands mountains and valleys, too (私の祈りは何処までも。千の山と谷を越え、幾里にも連なる大海をも渡る) 』  
故に、冬花は言葉を紡ぐ。

流れるように円滑に、それでも尚且つ正確に。  
何よりも早く、何よりも効率的に、彼らを捜すために。

『 Will my prayer arrive if over more several night? (嗚呼、あと幾つの夜を越えれば、私の祈りは届くのだろうか?) 』

杖に刻まれた文字が輝き、蒼き光が冬花を包む。  
断末魔が木霊する地獄の中でも尚、周囲に響き渡る不思議な旋律。  
この詩は、決して誰かに向けられたものでない。

人間を超越した存在。言うなれば ”世界” に対して、語りかけられたもの。

『 Should I surpass pains of several degrees to let prayer arrive? (幾度の苦しみを越えれば、私の祈りは届くのだろうか?) 』

高らかに、そして優雅に紡がれていく言葉。

それは、さながら地獄のオペラ。周囲の悲鳴は器楽伴奏。猛る

炎は舞台照明。観客のいない、一人だけの舞台で繰り広げられる歌唱劇。

☞ Prayer does not need to touch God……（例え、この身が滅びようと……）☞

同時に、冬花の足元から四方八方に広がって行く、複雑な文字の羅列。

それらは、ある力によって生み出された物だ。

☞ My body may rot away……（例え、神に祈りが届かなくても……）☞

アウター・ドライブ

”神術”。

”神術師”のみに使用が許されたそれは、明らかに常識を逸脱した力であり、”神の術”と言える。

☞ I do not mind if I reach you（貴方に届けば、それでいい）☞

最後の一言が紡がれ、世界法則が改竄される。

完璧な理論と、完璧な法則によって組み立てられた”神術”は、世界を欺き誤認を生み出す。

そして

☞ Dminet puroces”（あなたに届いて、私の祈り（ドミネント・プロセス））☞

”願望”は、現実となる。

紅く染まる街の中を、文字の行列が駆け抜けて行く。

燃え盛る炎を物ともせず、崩れ去る家々をすり抜け、周囲の状況を冬花に伝えてくる。

「くっ……！ 酷い……」

街の中心に向かうにつれて、更に地獄が深さを増していく。



首を切り落とされた者、身体が真っ二つに切断された者、原型がなくなる程に切り刻まれ、ただの肉塊となって街路地に散乱している者。

……一体、何が起こったの？

訳が分からない。数時間前までは、何の異常もなかった筈の街が、いきなり地獄絵図と化している。

「……………」

だが、今はそんな事を考えている場合ではない。

とある任務で冬花より先に、町に入った三人の仲間。彼らから救援要請が来たのが、およそ十五分前。

まずは、彼らを捜す方が先だ。

彼らは、過去に幾度の修羅場を潜り抜けてきた歴戦のエリート。この程度で死ぬとは考えにくい。

「……見つけた」

案の定だ。街の中心部にある、建物一室に彼らの姿を確認した。多少の怪我はしているようだが、どうやら三人とも無事なようだ。「良かった。やっぱり、生きていてくれたんですね」

彼らの姿を確認した、冬花は安堵の息を吐く。

これで何も心配はいらない。

彼らと合流して、この地獄が起こった理由を聞き出せばいいだけの話し。

そうと決まれば、さっそく行動だ。これ以上、民間人の犠牲を増やす訳にはいかない。

そう心に決め、冬花が足を踏み出した瞬間だった。

『The empty full moon seems to be a ruler (聳える満月は、支配者の如く)』

不意に響いた声は、詩歌<sup>しうか</sup>を謳うような美しい音色。

「えっ……………」

それは、紛れもない”神術”。

先程、冬花が行ったものと同じ、神の領域<sup>ネルト・エデン</sup>への力ギを開く為の”詠唱”。

一体、誰が唱えているのだろうか？

冬花は思わず足を止め、その詩に耳を傾けた。

☞ You are a person gathering up silver（其<sup>そ</sup>は白銀を束ねし者）<sup>㊦</sup>

距離が離れすぎていて、聴覚を強化しても所々しか聞き取れないが、全く聞き覚えがない。

☞ Remove a cloud hanging on the moon（払い去れよ、月の叢雲<sup>むらぐも</sup>）<sup>㊦</sup>

嫌な予感がする。

自分は、現存する”神術”の殆どを知り尽くしている。だから、聞き覚えのない”詠唱”など、本来ならあり得ない。

「なっ……！ まさかッ！」

☞ Become the light to knock down all（全てを打ち抜く光となりて）<sup>㊦</sup>

……いけないッ！

反射的に、身の危険を悟った冬花は、急いで建物の陰に隠れ、杖を地面に思い切り突き刺した。

☞ Mearil aiglice”（不朽を示せよ、神の盾<sup>メアリル・アイギス</sup>）<sup>㊦</sup>

一際大きな声で、冬花は”神術”を完成させる。

先程のように、悠長に”詠唱”をしている暇はない。

一刻を争う事態では”詠唱破毀”も止む終えない。

もっと早くに気付いていれば、せめて三節……いや、一節でも”

詠唱”が出来ただろう。

そんな後悔の念と共に、冬花はありったけの”魔力”を杖に込める。

「えっ……？」

急ごしらえの障壁を完成させ、何気なく空を見上げた　その時  
だった。

彼女が、そこに現れたのは。

「……………」

驚愕で言葉すら出ない。

恐らく、町の中心に位置するだろう場所の上空。

闇を切り裂く白銀を纏って、彼女はそこに君臨していた。

「……………」

何故、今まで気が付かなかったのだろうか？

街が一瞬にして炎に包まれた時、どうしてこの可能性を予期しなかったのか？

「はは……………ははは」

自分の滑稽さに、乾いた笑い声が口から漏れた事も、冬花にはどうでもよかった。

「なるほど。そう言う事ですか」

莫大過ぎる”魔力”。そして、聞き覚えのない”詠唱”。

それらが意味するものは、たった一つの真実<sup>こたえ</sup>

「つまり、敵は”神術師”ではなく……………」

人間ですらなかった。

空を覆うは、白銀の光幕。

それは　天使。

圧倒的な存在感で、周囲の認識を強要し、蒼穹の彼方より悉く<sup>じゅうく</sup>を見下ろす、神の使い。

”上位存在の召喚”。それが、この街で起こった現象の全て。背中に六枚の翼を持った銀翼の天使は、労るように、嘆くように、その横顔に憐憫の色を漂わせ　術名を告げた。

“Familia of alutemice”（回廊を

刹那　全てが白銀に包まれた。

それはまるで、光の洪水。

それはまるで、光の暴風。

一気呵成に押し寄せる光が、全てを蹂躪<sup>つみじく</sup>していく。

先の見えない、白銀が支配する世界。

それは、暗闇の中にいるよりも恐ろしいものだった。

初めに、耳が聞こえなくなった。

過ぎ去っていく光の咆哮で、一瞬にして音が消える。

その次は、視界だった。

目を閉じてても、容赦なく襲い来る光の刃。

……眩しいなんてレベルじゃない。

今、自分が立っている場所すら分らない。

そんな状況の中、冬花は必死で耐え続けた。

両手だけは、何としても離すまいと杖を握りしめる。

「ぐっ……あ……！」

しかし、それも限界に近付いている。

天使の放った白銀の津波が、冬花の意識を遠退かせていく。

「やはり、これは……」

混濁する意識。それでも、冬花は遥か彼方の天使を見上げる。

「……………」

それは、恐らく一瞬にも満たない刹那の時間。

気付く筈のない、見える筈のない距離で、確かに天使と目が合った。

「そんな……貴方は……」

冬花の意識は闇へと落ちるのと同時に、第二帝国連合の首都が、地図の上から消え去った。

## プロローグ（後書き）

作者「最近、中二病の作品を見かけないのでムシヤクシヤしてやった。反省はしている。だが、後悔はしていないww」

中二作品が好きな人は、これからも読んでくれると嬉しいです。ちなみに、画像は主人公とヒロインです。

あと『』のマークが入った章には挿絵があります。

## 悪意の円環は永遠に

世界は、悪意に満ちている。

あの人が憎い。あの人なんていなくなればいいのに。

誰だって、一度くらいはそう思った事があるだろう。

羨望の眼差しは、やがて嫉妬へと変わり、行き過ぎた愛情は憎悪となつて燃え盛る。

どれだけの虚偽を重ねて自分を偽ろうとも、その裏には隠しきれないほどの悪意が渦巻いている。

それが 人間。

一度、街に出れば嫌でも聞こえてくる誰かの悪口。

何とか先生がウザい。何とか君はキモい。

始まりは、本当に小さな悪意。

もしかしたら、たった一度の舌打ちかも知れないし、何となく呟いた愚痴かも知れない。

きつかけなんて、所詮はそんなもの。

一度、放たれた小さな悪意は、本人の意思とは無関係に人々の間を廻り廻る。

友達から友達へ、他者から他者へと語り継がれた小さな悪意は、確執的でより凶悪な悪意へと変化して誰かを傷付ける。

傷付けられた誰かは、復讐の為にまた違う誰かを傷付け、悪意は更に大きくなる。

つまり、それは円環。連なる悪意に終焉はなく。

終わる事のない“永劫の環”<sup>メビウス</sup>を生み出す。

「なら、キミはどうするんだい？」

全てが灰色に包まれた街で、崩れかけの廃墟に木霊する誰かの声。何処から聞こえるのかは分からない。

前から聞こえる様にも思えるし、後ろから聞こえる様にも思える。男のようにも聞こえるし、女のようにも聞こえる。

無邪気な子供のようであり、その裏には底のない悪意が渦巻いている。

「人のある所に、必ず悪意は存在し、そして連鎖する。もし、この世に悪意を抱かない人間がいるとすれば、それは何かが根本的に壊れた人間だろうね」

人間とはそういうものだ。人と悪意は、常に表裏一体。共に在るモノだと声は言う。

なら、どうすればいい？

どうすれば“永劫の環”<sup>メジラス</sup>を破壊出来る？

誰に投げるでもなく、あくまで自分自身に放ったその問いに、

「ふふつ、簡単な事だよ」

<sup>ファウスト</sup>悪魔は、不気味に微笑んだ。

「何かを創り変えるなら、まずは全てを壊す必要がある。悪意を生み出した者への復讐。それはすなわち、破壊と創造。キミには、その力があるだろう？」

そうだ。樂園を創りたいなら、最初に掃除から始めなければなら  
ない。

だから、

「さあ、宴を始めよう」

これから、宴が始まる。神の箱庭を、焼き尽くす死神の宴が。<sup>タナトス・ライブ</sup>

人間が、神の創作物とは、良く言ったものだ。

創造された小さな箱庭で、謳歌するは仮初の生。<sup>イマージュ・オペラ</sup>

樂園と言う牢獄の中で、繰り広げられる幻想戯曲。<sup>ドールズ</sup>

自らを縛る糸にすら気付かずに、哀れな人形は踊り続け、やがて  
朽ち果て消えて行く。

……ふざけるな。そんな事が許されるのか？

創造主だかなんだか知らないが、私はそれを許さない。

「ふふふ、キミはどんな物語を僕に見せてくれるのかな？」

耳元で聞こえる、心底楽しげな声。

その声と共に、私の目の前に出現する黄金の扉。

それを開けていいのかと、一瞬だけ悩んだが、既に後戻りは出来ない事に気付き苦笑を洩らす。

頬を伝うは一滴の涙。

その涙が、一体何なのかは私にも分からない。

後悔などない。でも、哀しみが無いと言えば嘘になる。

「迷っているのかい？」

まさか、と悪魔の声を一蹴し、再び扉を見据える。

涙は此処に置いていこう。

この先、私が創るのは地獄にして真の楽園。

血を血で洗う虐殺の世界。

死山血河に、涙の後は似合わない。

故に

☞ M e m e n t o M o r i (死を想え) ☜

涙を拭って、私は扉を開け放った。



## 悪意の円環は永遠に（後書き）

一応、第零章として入れたかった話です。  
本編は次の章からです。

## 人が死を想う瞬間

M e m e n t o   M o r i (死を想え) .

初めて、人の死を目の当たりにしたのは、オレが中学生の時だった。

今まで息をして、隣で話していた“人間”が“モノ”に変わる瞬間。

それが、人の“死”だ。

身体から赤い水が流れ出し、徐々に冷たくなっていく両親を、オレはただ茫然と見詰めていた。

不思議と、哀しみはなかった。

別に、両親の事が嫌いだったわけじゃない。

それなりに愛情を注いで貰っていたし、家族の中が悪かったワケでもない。

それでも、涙は出なかった。

その時、オレは両親に縋って泣くべきだったのだ。

死なないでくれ、目をあけてくれ、とドラマのワンシーンのように叫び続ける。

そうしなければ、いけなかったのだ。

でも、現実残酷だった。

愛する家族が死んだというのに、オレの目から涙は零れず、逆に乾いた笑いが込み上げて来た。

オレは死ぬのか？

こんなにも、あっさりと。

たった十数年生きただけで、終わってしまうのか？

それは    ありふれた悲劇。

何処かの男子中学生の人生が、不幸な出来事で幕が閉じる。

そんな事は、世界では日常茶飯事で、逆にもっと理不尽な悲劇が

溢れている。

オレの人生なんて、所詮はそんなもの。  
毎日起こる、特に珍しくもない悲劇。

偶然にも、被害者が自分だっただけの事。

その程度の悲劇なら、世界中に溢れ返っている。

だから、それはありふれた悲劇。

ニュースで報道されても、数時間後には話題にすら上がらなくな  
って、数日後には存在すら忘れられてる過去の出来事。

逃げなさい、と誰かに言われた。

それで、オレは駆け出した。

酷く悲しそうな声だったが、それが誰のものなのかは分からない。  
そんな余裕は、オレには無かった。

血に染まった身体で、オレは階段を駆け降りる。

死にたくない。

ただ、その一心で足を前に踏み出す。

Memento (死を) Mori (想え) .

その時、頭の中に浮かんだのは、いつも姉が言っていた言葉。

昔の芸術作品のテーマで、今でも有名な格言でもあるそれが、不  
意に脳裏に蘇ってきた。

人生の中で、本当の意味で人が一番“死を想う”瞬間、それは自  
らが死に瀕した時だと思う。

オレのように生と死の瀬戸際せうぎわにいる者なら、それがはつきりと分  
かる。

だから、死にたくないと思った。

多分、誰でもそう思うのではないだろうか。

オレが死ぬと身体は、持ち主の所有権を離れ、ただのモノになっ  
ていく。

放置されて朽ち果てるのか、それとも焼かれて灰になるのかは知  
らない。

でも、つまりはそう言う事。

所有権を失った身体は消滅して、オレは何処に行けばいいのか？  
その先を知ってしまうのが、たまらなく恐ろしい。

天国と地獄。

そう言った類のモノがあるなら別にいいが、確証があるわけじゃない。

天国から戻って来た者がいなければ、地獄から帰って来た者もない。

だから、怖いんだ。

死ぬ事が怖い。肉体を失う事が怖い。オレがいなくなる事が怖い。一体、どれだけの距離を走っただろう？

恐怖に駆られて、我武者羅に走り続けた所為で、自分が何処にいるのかも分からない。

死にたくない、身体を壁にぶつけながら走った。

階段を踏み外して、足を挫いても止まらない。

ただ死にたくなかったから、足を引きずって歩いた。

息が苦しくて、心臓が破裂しそうだったけど、無理やり足を動かした。

その内に、足が動かなくなっただから、両手で地面を這って、階段を転がり落ちた。

醜くても良い。それでも、死にたくない、何かの強迫観念に突き動かされるように、ひたすら前に進んだ

もう、頭の中に両親の事なんて微塵もなくて、オレの中に在るのは生に対する執着だけ。

酷い奴だと思われるかも知れない。最低だと、罵られるかも知れない。

何にしても、オレがそう思えたのは、目の前に光が見えてからだった。

大切な家族を置き去りに、何もかもを放り捨てて、やっと辿り着いた光。

でも、それでも、届かない。

距離なんて、あと数メートルもない。

いや、もしかしたら数センチかもしれない。

たった、それだけの距離なのに、今のオレには越えられない。

……ごめんなさい、と心の中で呟いた。

一体、誰に向けたものなのか、それは自分でも良く分からなかった。

動かない身体。傷だらけで、もしかしたら骨折もしているかも知れない。

……もう、いいじゃないか？

誰かが、そう囁いた。

頑張つて、頑張つて、死にそうになるくらい頑張つても、届かないモノはある。

お前は努力した。犠牲も払った。だから、もういいじゃないか？  
囁く声は、まさに“悪魔”。

蕩ける様に甘く、優しく響く蛇の声。

……ごめんなさい、と再び呟いた。

本当なら、ここでオレは死んでいたのかも知れない。

身体はボロボロだし、動く事も出来ない。

ここで、オレの物語の幕が下りて、ありふれた悲劇が生まれる。  
その筈だったのに

七瀬 広樹は手を伸ばした。

自らの行動に、何よりオレ自身が一番驚いた。

届かないと分かっている光。

それでも、未練がましく手を伸ばした。

我ながら、ここまで来ると呆れてしまう。

死にたくない、死にたくない、死にたくない、死にたくない、死にたくない。

そうまでして、生きたいか？ 何処まで、生き汚いんだよ、お前

は？

自分自身でそう思ってしまう程、オレは手を伸ばし続けた。  
そして、その手が誰かに掴まれた瞬間、オレの意識は闇に堕ちた。

「　　……あ……」

何かに揺さぶられる感覚の後、オレは夢から目覚めた。

「よう、やっとお目覚めか、広樹？　もう、とつくに放課後だぞ？」  
顔を上げると、良く知った友人が呆れ顔でこちらを見ている。

「達也……」

あらい  
荒井　達也。たつや

ツンツンに立てた髪に、少し鋭い目。

中学から付き合いがある達也は、元々あまり友人が多くないオレ  
にとって唯一親友と呼べる存在だろう。

「おう、起きたなら俺はもう行くぜ。また、明日な」

手を振りながら教室を出て行く達也に、挨拶を返ししながら、オレ  
は何気なく時計に目をやった。

時刻は四時過ぎ。

どうやら、帰りのHRは終わっているらしく、教室に人は殆んど  
残っていない。

「うわぁ……完全に寝過ぎした。全然、ノート取ってないし……」  
当然、黒板の文字は綺麗に消されており、オレはがっくりと肩を  
落とす。

今更の言い訳になるんだが、最初は真面目に授業を受けるつもり  
だった。

でも、時間が経つにつれて睡魔が襲ってきて、授業の後半を過ぎ  
たあたりから記憶がない。

「はぁ……仕方ない。後で、達也に見せて貰おう」

取り敢えず、ノートの事は達也に頼る事にして、オレも帰り支度

を始める。

もう、期末テストが二週間後に迫っている。

オレは普段からあまり真面目に授業を受けているワケではないので、そろそろ勉強を始めないと留年しかねない。

「あの、七瀬君……」

二週間後に迫ったテストの心配をしながら、鞆に教科書を詰めていると、目の前に一冊のノートが差し出された。

「えっ……?」

驚いて顔を上げると、隣の席の水原<sup>みずはら</sup> 優依<sup>ゆうい</sup>がそこに立っていた。

「水原……?」

透き通るような瞳に、緩やかなウェーブを持った長い黒髪。

前髪を二本の水色のヘアピンで止めており、華奢な体格と少々下垂れ目から、綺麗と言うよりは可愛いと言った印象を受ける。

「良かったらこれ使って。ノート取ってないでしょ?」

先ほどの呟きが聞こえたのか、優衣は苦笑と共にノートをオレの机に置く。

「あ、ありがとう。助かったよ」

一応、達也に頼めば写させてくれるだろうが、アイツに頼むと見返りに何かしら奢らされかねない。

あまり交流のない優衣に話しかけられ少し戸惑ったが、オレにとって彼女からの申し出は非常に嬉しいものだった。

「へえ……凄いな」

ノートを開いたオレは、思わず感嘆の声を上げる。

赤や青で色分けされた丁寧な文字。更に、隅の方には細かくポイント等も書き加えられており、かなり分かりやすいノートになっている。

さすが、学年で上位に入るだけの事はある。

普段、黒板に書かれたことを乱雑に写しているだけのオレとは大違いだ。

「……………」

今日の分のページを開くと、書かれている内容がやたら多いことに気付く。

「どうやら、今日に限って板書が多い所だったらしい。」

一週間分と言う事もあり急いで写しても、恐らくかなりの時間が掛かってしまいそうな量だった。

「えーと、すまん水原。少し、時間が掛かりそうなんだが大丈夫か？　もし、急いでるなら一度返して、また明日借りるから帰ってもいいんだぞ」

オレは先程から暇そうに、外を眺めている優依にそう告げる。

本当は、今日中に写しておきたい所だが、これだけ量があると下校時刻を過ぎてしまうかもしれない。

親切で言ってくれた優依を待たせてしまつのは、さすがに気が引けた。

「えっ……？　あつ、別にゆつくりで大丈夫だよ。何なら、持ち帰ってもいいよ。私はただ、お姉ちゃんを待つてるだけだから。ほら、何か最近、変な殺人事件が連続で起きてるでしょ？　だから、一人で帰るのはちょっと怖くて」

そう言いながら優依はある一つの机に目を向ける。

そこにはカバンが掛けられており、机の所有者がまだ学校内にいることを告げていた。

「ああ、あの殺人事件ね……」

古風な街並みが特徴の、この神森町で最近、立て続けに起こっている殺人事件。

『　吸血鬼、神森に現る……！』

確か、新聞ではこんな見出しで書かれていたような気がする。被害者達に共通しているのは、全身の血を抜き取られて殺されている事らしい。

その特殊な殺害方法から、ニュースでも大きく取り上げられてい



る。

生徒の間では本当に吸血鬼がいる、なんて噂も流れ始める始末である。

「……下らない。どうせ、犯人は猟奇殺人を起こして、世間の注目を集めたいだけの異常者だ。必要以上に騒ぎ立てるから、犯人も調子に乗るんだろうに」

「う、うん。そうだね」

吐き捨てるように呟いたオレに、優依は驚いたような目を向けた。しまった。子供の頃から人の死が絡むと、いつもこうだ。

自分でも、少し過敏に反応し過ぎだと思っただが、どうしても熱くなってしまう。

少し、居心地が悪くなったオレは、さりげなく話題を変える事にした。

「あつ、そう言えば、お姉ちゃんて、もしかして  
「そこまで言った時、教室のドアが音を立てて開く。」

「あつ、お姉ちゃん！」

音のした方に目を向けると、そこには水色の髪の少女が立っていた。

「……優依。わざわざ、待っていたの？」

「うん。お姉ちゃんと一緒に帰りたくて」

ドアを開けたのは、水原 真依。優依とは双子の姉妹らしい。

細い手足に、華奢な身体。

肩までの髪は水色に染められ、さすがは姉妹と言うべきか顔は優依に似ている。

だが、優依とは徹底的に違っているのが、その目だった。

優しげな垂れ目の優依とは逆に、真依の目は猫のように釣り上がっている。

大人びている、と言うのが一般的な感想なのだろうが、オレにはどうしてもそうは思えなかった。

以前に一度だけ、授業中に真依と目が合った事があるが、その瞬

間、背筋に冷たいモノが奔った。

ゾツとする程に冷たい。一切の光を拒絶し、深い闇を宿した瞳。その瞳に恐怖すら覚える。

吸い込まれそうな真依の瞳を見てみると、まるで底の見えない深淵<sup>み</sup>を覗き込んでいるような気分になる。

「まったく、いつも待たなくていい、って言ってるでしょう？ 私じゃなくて、友達と帰ってもいいのよ」

ため息混じりに、真依はそう呟く。

冷たく突き放すような口調だったが、優依はそれを気にする事無くニコニコと微笑んでいる。

真依の性格は、優依とは正反対だ。

持ち前の明るさと優しさで、いつも皆の輪の中心にいる優依に対し、真依は常に一人でいるように思える。

別に嫌われていると言うワケではないのだろうが、その髪の色と冷たい口調から、あまり話しかける者がいない

そして、何よりも彼女自身が他人との交流を避けているように感じる。

「はあ……行きましょう、優依。さつさと、帰るわよ」

真依は自分の机からカバンを取ると、オレには一瞥もくれずに教室から出ていこうとする。

「あつ、待ってよ、お姉ちゃん。じゃあね、七瀬君。ノートは明日の朝、返してくれればいいよ」

優依は真依の後を慌てて追いながら、オレに手を振る。

「あ、ああ、分かったよ。じゃあな、水原」

オレもつられて手を振り返すと、意外な所から声が上がった。

「えっ……？ 七瀬君、ですって？」

その声は、今まさに教室から出て行こうとしていた、真依からだ。った。

普段、感情の起伏がない真依にとっては珍しく、すこし驚いたような声だった。

「貴方が、七瀬 広樹？」

真依の冷たい双貌がオレに向けられる。

「ッ！？」

まるで、心臓を掴まれたような気分だった。

反射的に後ずさりをしようとするも、足が動かない。

「ふーん。なるほどね……」

真依は鞆を床に置くと、踵を返してオレに近づいてくる。

真依の口元に浮かぶのは、ゾツとするほどに冷たい笑み。

それは、まるで捕食者。

獲物が逃げられない事を知っているから、何も慌てる必要はない。

ゆっくりと、そして確実に足を進める、真依。

やがて彼女は、立ち尽くすオレの目の前で足を止める。

嫌な汗が頬を伝い、背筋は凍りつく程に冷たい。

心臓が早鐘のように鳴り、手が震える。

駄目だ。この目を見てはいけない。

そう思うのに、何故か目を反らせない。

それが一体、どうしてなのか自分でも分からなかった。

「ねえ……」

次の瞬間、予想外の事が起こった。

「えっ……？」

突如、こちらに倒れ込んでくる真依の身体。

まさに、一瞬の出来事だった。

一瞬の内に、真依はオレの背後に腕を回し、顔を胸の中に埋めた。

他人から見れば、真依がオレに抱き着いたように見えた筈だ。

「えっ……？ お、お姉ちゃん！？」

優依が目を見開き、驚愕の声を上げる。

それもその筈、オレだって驚いている。

頭が混乱して、今の状況を理解するのに少し時間が掛かった。

「お、お前ッ！？ 一体、何を……？」

咄嗟に真依を押し退けようとするが、彼女はそれよりも早くオレ

のネクタイを掴み、そのまま下に引く。

「ぐっ……！」

首が締め付けられ、頭が強制的に真依の身長と同じ位置まで下がる。

そして彼女はオレの耳元に口を寄せ、こう囁いた。

「明日の放課後、屋上で待ってるわ」

真依の水色の髪がさらりと揺れ、とろけるような甘い香りがオレの鼻孔をくすぐる。

冷淡で、何処か妖艶な響きを持った彼女の囁きに、今度は別の意味で心臓の鼓動が速くなるのを感じた。

「……………」

それだけを告げると、真依は無言でオレから離れ、鞆を手取る。

「さあ、行きましょう、優依」

何事もなかったように言い放ち、真依は教室から出て行く。

「あっ、お姉ちゃん！　ちよ、ちよと待ってよ！」

優依が呼び止められるが、真依はそれを無視して教室から出ていく。

「ごめんね、七瀬君。お姉ちゃんは、かなり変わってるから……じゃ、じゃあ、また明日ね」

早口でそう言って、走り去って行く優依。

「一体、何なんだよ……」

誰もいなくなった教室で、オレはボソリと呟いた。

教室を出て階段を降りる。

昇降口は閑散としており、生徒の姿は一人も見当たらない。

「はあ……まいったな」

時刻は午後八時三十分。

下校時間はとくに過ぎており、優依から借りたノートを写すことに夢中になっっている内に外はすっかり暗くなっていた。

「さて、どうしたものか……」

当然、昇降口のカギは閉められており、ガチャガチャと揺すってみるも扉が開く気配は無かった。

……こうなったら残ってる教師にカギを開けてもらうか。

恐らく、運が悪ければ説教の一つでも食らうだろうが、この際仕方がない。

ため息混じりにドアノブから手を離し、職員室へ向かおうとした瞬間

「何かお困りですか、先輩？」

背後から、凜とした声が響いた。

「……………ッ!？」

突然の声に驚き、オレは慌てて振り返る。

いつの間にそこに居たのだろうか、薄暗い昇降口に制服姿の一人の少女が立っていた。

「昇降口のカギは下校時刻を過ぎると、閉められる規則になってます」

初対面だと言うのに、少女の口調はまるで知り合いにでも語り掛けるかのようであった。

闇に溶け込むような漆黒の長髪。

きつちりと切り揃えられた前髪に、一切の乱れのない制服。

完璧過ぎるほどに整った服装と顔立ちは、人形のようにまさに“清楚”と言う言葉がぴったりだった。

「だから……………」

彼女はゆつくりとオレの目の前を横切り、ポケットからカギを取り出す。

カチャン、と小さな音が響き、昇降口の扉が開かれる。

「……だから、今度からは下校時刻を守って下さいね」  
少女の髪がさらりと揺れる。

月光に照らされた彼女の白い肌。  
その様が彼女の美貌を更に引き立たせているように感じた。

「……………」

その姿に思わず言葉を失った。

身に纏う気品も、醸し出す雰囲気も全て神秘的で、彼女の周りだけ空気が違って見える。

オレはしばらく、その場に無言で立ち尽くした。

「あの……帰らないんですか？」

少女の不思議そうな声に、ふと我に返る。

「あつ、すみません。今、出ます」

オレがそそくさと外に出ると、少女もそれに続き昇降口の力を掛け直した。

「ありがとうございます。えーと……」

咄嗟にお礼を口にしようとするが、少女の名前が分からずに口ごもる。

そんなオレの意図に気付いたのか、彼女は丁寧に頭を下げた。

「申し遅れました。一年の佐伯<sup>さえき</sup> 冬花<sup>とうか</sup>と申します」

「えっ？ 佐伯って、あの副会長の？」

佐伯 冬花。この学校で恐らく一番有名な生徒だ。

容姿端麗で成績優秀。

教師からの信頼も厚く、一年にして生徒会の副会長を務める優等生。

そう言えば、一ヶ月に一回の全校朝礼で、挨拶をしている姿を見かけたことがある。

「はい。恐縮ながら副会長を務めております。えーと、七瀬先輩……ですよね？」

佐伯は少し考えるような仕草の後、オレの顔を見て微笑を浮かべる。

「えっ……？ ああ、そうだけど。どうして、オレの名前を？」

学校一の優等生を前に、どうも後輩と話している気がせずに、思わず気後れしながらもオレは尋ねた。

……まさか、全校生徒の顔と名前を覚えている、なんて事はないだろうな？

「それは……」

佐伯はそこで言葉を切ると、一つ息を吐き、そして告げる。

「貴方に興味があるからです、と言ったらどうしますか？」

悪戯っぽい笑みと共に目を細める、佐伯。

「……………ッ!？」

傍から見れば、佐伯のささやかな冗談に聞こえただろう。

だが、目の前にいるオレには分かる。

口元には穏やかな笑みを浮かべているにもかかわらず、目は一切笑っていない。

佐伯の瞳に不穏な揺らぎを感じ取ったオレは、知らずに数歩、後ろに下がっていた。

「ふふっ、冗談です……。おや？ どうしたんですか、先輩？ 顔色が優れませんか？」

表面上は、あくまでも表面上では、佐伯はいつも通りに見える。

他人に気を使い、何事も優雅に対処する、完璧な学生。

その姿に、憧れを抱く生徒も少なくはない。

かく言うオレも、その一人だった。

だが

「いや、大丈夫だよ。こここの所、少し寝不足で疲れてるだけだから」  
オレは、この瞳を知っている。

見詰められただけで、身体の動きが止まり、冷や汗が伝うような冷たい瞳。

つい数時間前に同じ目をした奴と、顔を合わせたばかりだ。

「そうですか。では、今日は夜間の外出を控えて、ゆっくり休まれてはいかがですか？ 特に、今の神森町は物騒ですので」

「……ああ、そうするよ」

何故か、佐伯の言い方には含みがある気がしたが、それはあえて指摘しない事にした。

「じゃあ、そう言う事で」

短く話を切り上げて、そのままオレは佐伯の横を通り過ぎる。

「あつ、そう言えば、神森町で連続殺人事件が起こっているらしいですね。先輩は、ご存知でしたか？」

別れの挨拶を告げたと言うのに、佐伯の声が後ろから響く。

いい加減イライラしてきたオレは、半ば投げやりな気分で、振り返らずに答える。

「ああ、知ってる。何処かの異常者が、吸血鬼を気取って人を殺してる事件だろ？」

オレは、その神森に住んでるからな」

比較的、都会じみた建物が多い桜花市に対して、オレが住む神森町は古風な建物が多い。

今時、街灯が一つもない町と言うのも珍しいだろう。

田舎、と言えばそれまでだが、オレはそんな神森町が嫌いではなかった

「へえ、では今から一人で神森に帰るのは危険じゃないですか？」

吸血鬼に襲われる可能性もあるのでは？」

「そうだな。襲われたら走って逃げる事にするよ。じゃあ、今度こそ、さよなら」

オレは、少し強引に話を打ち切り、早足で足を進める。

あまり褒められた態度ではなかっただろうが、オレは一秒でも早く、その場から立ち去りたかった。

佐伯 冬花。まともに話をしたのは初めてだが、話していて気分のいい人間ではない。

……まあ、もう二度と話す機会など無いだろう。

そう思った直後、

「……そうですか。では、せいぜい頑張って走って下さいね」



背後から聞こえた別れの声は、ゾツとする程に冷たかった。

「えっ……？」

驚いて振り向くと、もう佐伯の姿はなく、非常口の緑色の光が不気味に揺らめいていた。

神森町は、元々静かな町だ。

隣接する桜花市とは違い、昔ながらの街並みが色濃く残され、コンビニも駅の近くに数店舗ある程度だ。

町の住人は、高齢者の比率が多く少々、時代錯誤な風習や伝統を未だに受け継いでいる家も少なくない。

「まったく、ちょっと暗すぎないか？ 街灯の一つでも建てればいいのに……」

ため息混じりの不満を漏らしながら、オレは真つ暗な夜道を歩く。今夜は月が明るい。オレは月明かりを頼りに足を進める。

しかし、人気のない裏通りに差し掛かった時、不意に違和感を感じ取り足が自然に止まる。

瞬間 周囲を静寂が支配した。

「えっ……？」

何の兆候もなく、突然訪れた異様な程の静けさ。

頭の中に響く耳鳴りと共に、込み上がってくる恐怖。

「……………」

確かに、神森町は静かな町だ。

だが、この静けさは異常だ。“静か”のではなく“静か過ぎる”のだ。

大通りを走る車の音。木々のざわめき。

他にも日常生活で、ごく当たり前に聞こえてくる筈の音が聞こえない。

……何かがおかしい。

咄嗟にそう感じ取ったオレは、直ぐ様その場から走り出した。

「……………ッ！」

決して、何処かを目指して走っているワケではない。

ここには駄目だ。何処でもいい。ただ、人のいる場所へ。  
走る走る走る。ひたすら、路地を掛け抜ける。

今、自分が何処を走っているのかも分からない。

でも、足を止めるわけにはいかない。

足を止めれば、何かが終わってしまう。そんな予感がしてなら  
ない。

「はあ……………ッ！」

もう少し。もう少しで、路地を抜ける。

目の前には大通りの光が見えている。

距離にして、あと十メートルもない。それだけで、この違和感  
が解放される。

「はあ……………はあ……………」

そして、裏通りを抜ける寸前、通りの向こうに人影を見た。

……良かった。人がいた。

そう、心から安堵して身体力を抜いた瞬間

凜とした、そして何処か淋しさを漂わせる鈴の音が響き、身  
体の中に浮いた。

## 人が死を想う瞬間（後書き）

そろそろ、本格的な中二ワールドが始まりそうです。  
読んでくれている皆さんに、精一杯の感謝を申し上げます。

悪魔の声は優しく響く

一瞬、何が起きたのか分からなかった。

いきなり身体が宙に浮き、次に気付いた時には裏路地にうつ伏せで倒れていた。

何故かは分からないが、動こうとすると身体中に激痛が奔る。

「がっ……！」

裏通りを抜ける寸前、通りの向こうに見えた人影。

背格好からして、あれは男だろう。一瞬の事ではつきりと見えた訳ではないが、何か変な格好をしていたように思える。

黒いコートみたいな服と、手には長い棒。

あれ？ 確かそんな恰好を、何処かで見た事がある気がする。

何か漠然としたイメージが、オレの頭の中に浮かんでくるがよく思い出せない。

「ふん。中々に、しぶといな。さすがは“破戒者”と言ったところか」

コツコツと響く靴音。やっとの思いで顔を上げると、先ほど通りの向こうにいた男が、こちらに歩いてくるのが見えた。

口に咥えた煙草の火が、まるで人魂のように不気味に揺れている。

「どうした？ わざわざ、貴様らの言語に合わせてやってるんだ。

言葉は通じてるだろ？」

大げさに肩を竦めながら、男は嘲笑混じりで言い放つ。

「……おっと、挨拶が遅れたな。“破戒者”風情に名乗るのは気に入らんが、一応規則だから仕方ない」

男は、倒れるオレの前で足を止めると、面倒そうに髪を掻き上げる。

「なっ……！」

目の前に立った男の姿に、オレは思わず目を見開いた。

年齢は恐らく、二十代後半。口調や声質から想像していたのより、

ずっと若い。

しかし、オレが驚愕したのはその服装。男が纏っていたのは、コートではない。

様々な装飾が施された、黒い長服。

日本人ならば、まず着る事のないそれは、時代錯誤な真っ黒な口  
ーブ。

更に、手に持っている棒状の物は、先端に大きな鈴が付いた銀色の杖。

思い出した。今や映画、小説で当たり前のように登場する、架空の存在。

男は、それらの定番ともいえる服装をしている。

いや、まさか。そんな事はない。

アレは小説の中だけの存在。オレだって、現実とフィクションの区別くらい知っている。

だから、きつとコスプレか何かに決まってる。

だが、次に男が発した言葉に、オレは更に驚愕することになる。

「『世界総合神術同盟』所属。エルロツト家のフレイ・アルラート。世界の秩序を乱す、貴様ら“破戒者”を狩る“神術師”だ。この国だと“魔術師”って言った方が、分かりやすいか？」

“魔術師”と、確かに男はそう告げた。

そんなバカな。一体、これは何の冗談だ？

「えーと、何というか……変わったご趣味をお持ちですね。コスプレって言うんですか？その服、カッコいいですね……」

愛想笑いを浮かべつつ、オレはゆっくりと身体を起こす。

出来れば、こんな奴に関わりたくない。

その一心で、痛む身体に鞭を打ち、男から距離を取る。

「……ああ？」

コイツは、頭がおかしい。こう言った手合いは、まともに相手をしたら駄目だ。

あまり刺激せずに、直ぐに退散するのが得策だろう。

「……じゃ、じゃあ、オレはこれで失礼しますね」

何が“魔術師”だ。アニメや漫画の読みすぎじゃないか？

心の中でそう毒づきながら、オレが踵を返してその場を去ろうとした瞬間。

「おい。逃げてんじゃねえよ、テメエ」

凍てつくような、怒気の籠った冷たい声。

「もう、いいや。テメエは殺す。一般人みたいな反応しやがって、これだから『銀の歯車』は気に食わねえんだ！」

吐き捨てるように男が言い放つと、凜とした鈴と共に聞きなれない言葉が紡がれた。

「The wind becomes the wave and attacks it（風は波となって襲い来る）」

その刹那、オレは咄嗟に横に跳んでいた。

何故、そんな事をしたかは分からない。

ただ、そうしなければ危険だと直感したのだ。

言つなれば それは本能からの警告。

「……ッ!？」

響く轟音と、駆け抜ける衝撃。

先程までオレが立っていた場所を、見えない何かが通り過ぎ、地面を抉り取っていく。

何だよ、これ!？ 一体、どうなってるんだ？

分からない。理解が追いつかない。

「ちっ! だから、逃げんかって言ってるんだろ」

突然の出来事に茫然とするオレに、男は杖を向けて再び何かを呟く。

「The wind becomes the blade and attacks it（風は刃となって襲い来る）」

凜 と鳴り響く鈴の音。

次の瞬間、見えない何かがオレに牙を剥く。

「なっ！　があッ！」

切られた　いや、挟まれた。

少し掠っただけなのに、制服の胸元がバツサリと裂かれていた。

更に、オレの後ろにあつた鉄製のゴミ箱が、真っ二つに切断されている。

「おい……嘘だろ？」

夢でも見ている気分だった。

ゴミ箱とは言え、鉄で作られてるんだぞ？

オレなら思い切り蹴り飛ばしても、凹ませる程度しか出来ないその鉄の箱を、この男はいとも簡単に切断した。

ヤバイ。コイツは、冗談じゃなくヤバイ。

「ほお、これも躲すか。ハッ、ハハハッ！　いいぜ。ただの雑魚かと思つたら、そこそこ楽しめそうじゃねえか」

男はニヤリと口元を歪めると、手元の杖を器用に一回転させて見せる。

コイツ……余裕のつもりなのか？

だが、そんな余裕の態度を見せ付けられても、オレはどうする事も出来ずに後退りする。

「ほら、どうしたよ“破戒者”！？　さっさと、テメエの“破戒”を見せてみる！」

訳の分からない事を口走りながら、男は杖を振り下ろす。

刹那、再びあの凶刃がオレに向かう。

「くっ……！」

迫りくる不可視の刃を、横に転がり何とか躲す。  
今度こそ避けた。

完全に避け切った、と思つたその瞬間、

「おい、余所見してんじゃねえぞ」

「なッ！？」

立ち上がりかけたオレの鳩尾に、男のブーツがめり込む。

「がつ……ごほっ！」

空中に蹴り上げられ、そのまま吹き飛ばされる。

激痛と嘔吐感が同時に襲い、オレは激しくせき込みながら悶絶する。

あり得ない。オレと男の距離は、十メートル以上はあった。

それを、あの一瞬で詰めてくるなんて……。

「おいおい、素人じゃあるまいし、せめて受け身くらい取れよ。そんな様でよく今まで生き残れたな……いや、ただ単に第四位が甘いだけか」

ため息混じりに男は呟いて、大きく煙を吐き出す。

一体、何のつもりか知らないが、どうやら男はオレが立ち上がるのを待っているようだ。

冗談じゃない。

“魔術師”だか“神術師”だかは知らないが、そいつがオレに何の用だ？

世界の秩序を守るとか言って、やっている事はただの人殺しじゃないか。

そんな化け物に、これ以上関わってられるか。

「ぐっ、はあッ！」

先程、切断されたゴミ箱の破片。

足元に転がっていたそれを蹴り飛ばし、男に殴り掛かる。

……少しで良い。

ほんの少しでも隙が出来れば、後は大通りに逃げられる。

こんな時間でも、大通りなら人がいる。

そこまで逃げれば、この男だって手は出せない筈だ。

逃げてやる。逃げ切ってやる。

その為には、この一撃を何としても当てなければならない。

「おい……やる気あんのかよ、お前？」

オレが蹴ったゴミ箱を、男は事も無げに横に躲し、呆れたように呟く。



だが、それはいい。

避けられる事は予想の範囲内。

むしろ、オレの狙いは……。

「うおおおおッ！」

ゴミ箱を躲した瞬間を狙った、渾身の一撃。

これなら、あの男でも避けられないだろう。

万が一避けられたとしても、そのまま大通りに逃げればいい。

オレはまさしく全身全霊を掛けて、拳を放つ。

だけど……。

「だからさ、やる気あんのか、って言ってたんだよ？」

受け止められた。それも、いとも簡単に。

ゴミ箱が死角になって、オレの接近は気付かれにくくなっていた筈なのに。

「甘いんだよ、テメエ。それによ、俺は言っただよ……」

拳を横にいなされ、身体のバランスが崩れる。

しかし、体勢を立て直す暇を与えるほど、男は甘くない。

「ッ！？」

ガシッ、と男に顔を掴まれ、そのまま力が込められる。

「さつさと、“破戒”を出さないと、本当に死ぬってな！」

「があああッ！」

頭が割れるのではないかと言う、激痛。

ブレーン・クロー。別名・鉄の爪アイアンクロウで知られるその技は、握力

のみで相手の頭を締め上げるもの。

男の握力は相当のもので、じたばたと暴れてはみるが抜け出す事が出来ない。

「ふんッ！」

次の瞬間、男の力が緩んだかと思うと、顎に凄まじい衝撃。

「づあッ！」

顎骨を砕くようなアッパー。

それによって意識が飛びそうになるが、数歩後ろに下がって何と

か持ち堪える。

「へえ、意外に根性あるんだな。いいぜ、だったら……」  
感心したような男の声。

それと同時に、男は手に持った杖を投げ捨てた。

「掛かって来いよ、“破戒者”。テメエの根性に免じて、“神術”は使わねえよ。殴り合いで勝負してやる。その様子じゃ、どうせ“具現（Germination）”すら出来てねえんだろ」

「くつ、さつきから訳の分かんない事をごちゃごちゃと。何なんだよ、お前！？ どうして、オレを狙ってくるんだよ？」

「ハハッ！ だから、言っただろ？ それはな……」

男の腰が僅かに下がる。

それが“溜め”のモーションだと気付いた時には、既に遅い。

「テメエが“破戒者”で俺が“神術師”だからだよッ！」

まるで、槍の矛先のような鋭い突き。

それが、オレの頭を叩き潰さんとはかりに、眼前へと迫る。

「……ッ！？ ああああッ！」

腕を交差させて、何とかガードする事に成功したが、それでも衝撃は殺せない。

ガード越しに受けただけなのに、目の前がぐらりと揺れる。

なんて奴だ。あんなものをまともに食らったら……。

ぞくり、と背筋に冷たいモノを感じながらも、オレは反撃に移る。

このまま、守ってばかりいてもジリ貧だ。

だったら、一気に勝負を決めるしかない。ここから逃げ出してしまえば、一先ずはオレの勝ちだ。

決意と共に、一步踏み出した瞬間、

「ハアッ！」

放たれる、一閃の突き。

再びガードの体勢に入るが、同じ戦法が通用する相手ではない事を、直ぐに理解した。

「逃げ腰になってんじゃねえ！ 少しは向かってこいよ！」

するり、と腕の隙間を抜けてくる男の腕。

蛇の如き柔軟な動きで、ガードを突き抜けると、今度こそオレの頭をロツクした。

「そら、捕まえた」

……ヤバイ。

そう思うが、もはやどうする事も出来ない。

「ハハハハ！ どうした、ほら？ 何とかしてみろよ？」

そのまま、後ろの壁に叩きつけられたかと思うと、がりがり壁に押し付け引き摺られる。

「づあ、ああああ！」

それは、まるで大根おろし。

男は笑いながら、オレの頭を壁で摩り下ろしていく。

痛い、痛い、痛い、痛い、痛い。

頭皮が抉られ、頭蓋骨が削られる。

断続的に奔る痛み、徐々に意識が遠ざかって行く。

「ほら、ラストだ。壁とキスして来い！」

やがて、正面の壁に顔面ごと叩きつけられ、男の手がオレから離れる。

「う……あ……」

目の前が 紅い。

視界が全て紅く染まっている。

「フハハ、ハハハハ！ おいおい、もう終わりか？ せっかく遊んでやってるんだ。少しは反撃してこないと、こつちも面白くねえな」

男は腕の骨を鳴らしながら、不気味に口元を歪める。

……死ぬのか？

オレはこんな所で、こんなワケの分からない男に殺されるのか？

「チツ！ もう、終わっちまったのかよ？ あーあ、つまんねえの」

胸ぐらを掴まれ、強制的に身体を持ち上げられる。

男はオレの顔を覗き込みながら、バカにするように煙草の煙を吐きかけた。

「ぐっ……」

煙が目に入り、オレは思わず目を閉じる。  
くそっ、ふざけやがって。

何とか男を振りほどこうと拳に力を込めてみるが、どんなに頑張っても腕が上がらない。

「はぁ……本当に、つまんねえ」  
「がっ……！」

まるで、ゴミか何かを投げ捨てる様に、男はオレを放り投げる。  
オレはそのまま壁に叩きつけられ、ずるずるとその場に崩れ落ちた。

「もう、いいや。全然、楽しめなかったし。取り敢えず、大人しく死んどけよ、お前」

乱暴に、オレの目の前に突き付けられる、銀の杖。銀の蜘蛛が描かれた装飾が目に入る。

それは、さながら 大口径の銃口。  
もう、遊びはお終いだと、男の目が語っている。

「Your grief affects the sky.  
By all means do you grieve? (貴方の嘆きは天空に響く。嗚呼、どうして貴方は嘆くのですか?)」  
オレがもう動けない事を知っているのか、ゆったりとした口調で、男は言葉を紡ぐ。

「This world expires in your  
grief. Your tear would be called  
off, be rain soon and fall  
in the ground without stopping.  
(この世界に満ちるは、貴方の嘆き。止めどなく溢れる涙は、やがて雨となって地上に降る)」

確実に近付く、最後の瞬間。

嫌だ……こんな所で、死にたくない。

動かない身体で、声にならない声でそう叫ぶ。

“ The rain upon which I showe  
r is your tear . When it is , I ‘  
ll catch the tear . (降り注ぐ雨は、貴方の  
涙。ならば、私はその涙を受け止めよう。)”

オレの想いとは裏腹に、無情にも続く、死の詠唱。  
カウントダウン

「……………」

どうしてだ？ どうして、オレが殺されなければならない？

今まで普通に生活してきて、これからも普通に生きていければいい。

そう思っていたけなのに、これはあまりにも理不尽過ぎないか？

“ If you keep making rain fall

l …… (もしも、貴方が雨を降らせ続けるならば…………)”

死にたくない。死にたくない。死にたくない。死にたくない。

周囲に満ちる異様な気配。

先程は気付かなかったが、男の周りには霧のようなものが立ち込めている。

それが何なのかは知らないが、詩が進むにつれて、濃さを増しているように見える。

“ I ‘ll also look at the sad s  
ky today . (私は今日も哀しみの空を眺めよう。)”

流れる様に謳われていた言葉が、そこで終わる。

それは、詩の完成を意味すると同時に、カウントがゼロになった事を示している。

「アハハハハ！ さあ、そろそろお楽しみ時間だ」

響く哄笑は狂気の音色。

狂ってる。

この男は狂ってる。

でなければ、こんなにも嬉しそうに、こんなにも楽しそうに人を殺せる筈がない。

「終わりだ、“破戒者”！ お前らに、救いなんてない。精々、絶

望して……死んで行けよ」

次の瞬間、空気が一転する。

男の目の前には、光り輝く文字列。

それらが、まるでジグソーパズルのように、バラバラになって砕けて行く。

そして

『 Griev en Fa u st （嘆きの空は永遠に（グライ  
ヴェン・ファウスト）） 』

“詠唱”が完成した。

杖の先に渦巻く、無数の刃。

それは 風。

小さいが、オレを殺すには十分過ぎる風の刃が、男の杖を起点にくるくると回転している。

「ハハッ！ “神術”を見るのは初めてか？ 死ぬ前に拝めて、良かったな！」

鉄をも切り裂く疾風が、オレの首に迫る。

殺される。

この距離では、躲す事など出来ない。

なら、どうすればいい？

このまま、大人しく殺されるのか？

「じゃあな、“破戒者”！ これで、お別れだ」

……嫌だ。

そんなのは、絶対に嫌だ。

何でもいい。

オレを救ってくれるなら、神でも仏でも誰でもいい。

祈りが必要と言うなら捧げるし、取引だつてもいい。  
だから、助けてくれ。

都合がいいかも知れないけど、今はそれくらいしか出来ないから  
死にたくない、その一心で身体に力を込める。

だが、それでも、腕は上がらない。

分かつていた。心の底で、本当は分かっていた。

あの時と同じ。

幾ら祈っても、神様はオレを救わない。

もう、無理だ。どう足掻いても、オレは死ぬ。

「……………」

諦めた訳じゃない。そんなに簡単に、諦め切れるものではない。  
ただ、理解したのだ。

“想い”だけじゃ、何も出来ない。

“想い”だけじゃ、届かない。

神に願えば奇跡が起こる程、現実には甘くない。

こんなにも、人は呆気なく死ぬ。

オレは三年前に、それを嫌という程、実感している。

目の前に迫る、冷たい“現実（死）”。

今のオレには、それから逃げる気力もなければ、跳ね除ける力も  
ない。

だから、受け入れるしかない。

弱者に残された道は、それ以外にはないから。

……ごめんなさい。

最後に頭に浮かんできたのは、謝罪の言葉。

何故？ 一体、誰に謝っているのか？

それは自分でも分からない。

でも、謝らなければいけない気がした。

自分が、此処で死ぬ事に。

自分が、此処で殺される事に。

過去に見捨てた誰かに、ひたすら謝罪を告げながら刃の雨が迫り

来る。

その刹那、

M e m e n t o M o r i (死を想え)  
.

頭の中に声が響き、視界が闇に包まれた。



悪魔の声は優しく響く（後書き）

詠唱キタ（。°。°）！！

英語の文法とか、間違っていたらすいません。

作者はあまり英語に詳しくないので、何かおかしい点があったら教えてください。

## そして始まりの詩は紡がれる

気付けば闇の中にいた。

眼前には、先の見えない深淵。

まるで、夢の中にいるような奇妙な浮遊感。

落ちているのか、上がっているのかも分からない暗闇の中、誰かの声が聞こえた。

「ふふふ、良く来たね。夢と現実の狭間によっこそ」

何処から聞こえるのかは分からない。

前から聞こえる様にも思えるし、後ろから聞こえる様にも思える。男のようにも聞こえるし、女のようにも聞こえる。

無邪気な子供のようにであり、その裏には底のない悪意が渦巻いている。

怖かった。目の前に迫っている筈の刃よりも、その声の方が遥かに怖い。

「さて、唐突で悪いけど、キミはこの後どうするんだい？」

再び、闇の中から問いが投げられる。

「やがて、この夢は終わる。そうなったら、間違いなくキミは死ぬ。幾ら神に祈っても無駄。彼の刃は、確実にキミの命を刈り取るだろうね」

楽しそうに、闇の中の誰かは笑う。

……何だ？ 何だ、コイツは？

「ねえ、“想い”だけじゃ、何も出来ない。“想い”だけじゃ、届かない。キミはそう言ったね。でも、本当にそうかな？」

何を言っているんだ？

実際、何も出来なかったじゃないか？

どんなに強く想っても、現実は無情にも振り掛かる。

どんなに強く祈っても、神様はオレを救ってはくれない。

“想い”だけじゃ、奇跡は起こらないんだ。

「そうだね。奇跡なんて起こらない。でも……だからこそ、“キミが彼に負けるなんて奇跡”が起こる筈もない。そうだろう？」

一瞬、言葉の意味が分からなかった。

オレが、あの男に負ける奇跡？

それって、つまり……。

「そう。キミは彼に負ける筈がない。そう言っただよ」

さも当然のように、声の主は言い放つ。

「神はキミを救わない。だから、僕がキミに良い事を教えてあげるよ。この状況を逆転させる方法を。ふふっ、簡単な事さ。本能に従えばいいんだ」

男ようであり女でもある。子供ようであり老人でもある悪魔の声は、慈しむようにオレに告げる。

「虐殺しろ。惨殺しろ」

果たして、それは『何』の声なのか？

そもそも、人間のモノなのか？

「斬殺しろ、撃殺しろ、撲殺しろ、轢殺しろ、圧殺しろ、絞殺しろ、焼殺しろ、爆殺しろ、刺殺しろ、縛殺しろ、磔殺しろ」

ありとあらゆる方法で殺し、本能のままに殺戮の調べを奏でろ、と声は言う。

思い出した。この声は、過去に聞き覚えがある。それは、三年前に聞いた声と同じもの。

「さあ、目の前の愚者に思い知らせろ。自分が一体、誰を相手にしているのかを。己の行動が招いた結末を。凄惨に。そして残虐に、裁きの刃を振り下ろせ！」

ゆっくりと開けて行く視界。

凍結していた時間が流れ始めるように、万物が動き出す。

「これより宴が始まる。世界の全て　生きとし生けるモノが死を想う、”死神の宴”<sup>ダンス・マカブル</sup>。それを祝して、受け取って欲しい。僕が贈る、開幕の言葉をね」

心の中に浮かび上がる、詩の一節。

それは、果たして神の助言か悪魔の囁きか？

「ふふふ、キミは一体、どんな選択をするのかな？ この詩をどう使うのか？ それはキミ次第だ。彼女のように、死神<sup>タナトス</sup>となって全てを滅ぼすか。それとも、また別の選択かな？ どちらにしても、僕は期待しているよ」

心底楽しげな誰かの声と共に、視界が戻り始める。

「ははは！ さあ、選択しろ、七瀬 広樹！ キミの物語を僕に見せてくれ！」

笑い声が遠ざかり、目の前に現実が落ちてくる。

オレの首を刈り取らんと、あの刃が首筋に迫る。

これから、どうする？ 選ぶのはオレ自身だと、あの声は言った。このまま死ぬのか？

神が決めた理不尽な結末を受け入れるのか？

違う。そんな事は出来ない。

例え、この結末が神によってもたらされていようとも。

例え、神がオレを救わないとしても。

そんな事は認めない。認めて良い筈がない。

じゃあ、どうするのかと、悪魔<sup>ファウスト</sup>が問う。

……だったら、オレは……。

ならば、キミは……。

果たして、その“想い”は届いただろうか？

その刹那

『 M e m e n t o M o r i F a u s t T h e O r i  
g i n (死を想え 断獄の起源詩) 』

神の扉が開かれた。

そして始まりの詩は紡がれる（後書き）

主人公覚醒フラグ。

技名からして、完璧に中二ですww

断獄の起源詩（前書き）

> i 2 5 8 3 9 | 3 3 6 8 <

## 断獄の起源詩

☞ Memento Mori Faust The Origin (死を想え 断獄の起源詩) ☞

それを 一体、何と表現すれば良いだろうか？

それは、奇跡？ それは、魔法？

オレの命を救ったのは、何の兆候もなく虚空から出現した大きな扉。

「なつ……バカな！ このタイミングで“現界（Germinat ion）”だと？」

突如、オレの目の前に出現した黄金の扉に、男が目を見開く。

中央には大きな門が嵌められ、まるで何かを封じるように鎖が三重に巻き付いている。

「何だよ……これ？」

圧倒的な威圧感と、その場の空気すらも支配する神々しさ。

その扉からは、それらが恐い程に感じられる。

さあ、宴を始めよう。

まるで、何かに取り憑かれたように、ゆっくりとオレは扉に手を伸ばす。

「……………」

不思議な感覚だった。

今まで見た事すら無かった扉に、奇妙な親近感と一抹の懐かしさを思える。

例えるなら……。

それは 子供の頃の自分を見ているような感覚。

「ッ！？」

オレの指が金色の扉に触れる。

それと同時に門が消え、鎖もジャラジャラと音を立てながら外れ



落ちる。

固く閉ざされていた扉が、重々しい音を立てて開いていく。知っている。オレは、この中にあるモノを知っている。

扉の中に広がっていたのは深淵。

先の見えない暗黒の海が、一面に続いている。

普段のオレならば、その闇に恐怖を抱いたに違いない。

闇を恐れて、逃げ出すか後退りするか。

少なくとも、今のうちに、闇の中に手を伸ばしたりはしない。

しかし　オレは深淵に手を突き入れた。

恐怖なんて無い。

だって、知っているから。

この扉の中にあるモノを。

躊躇いなど無い。

だって、必要だったから。

この闇の向こうにあるモノが。

キミは一体、どうするんだい？

オレにそう尋ねて来た声の主。

それが、誰だかは知らないけど。

「これが、オレの……………」

オレの指が何かに触れる。

それが何なのかは、見なくても分かる。

そこに在るべきモノで、無ければいけないモノ。

オレは、それを固く握り締める。

そして

「これが…………　オレの答えだアァッ！」

一振りの黒刀を、闇から引き抜いた。

『 M e m e n t o M o r i F a u s t T h e O r i  
g i n (死を想え 断獄の起源詩) 』

フレイ・アレルド・エルロットは、目の前の光景に瞠目した。  
“神術”においては五つの指に入る『名門・エルロット家』に生まれ、それに見合う実力もアレルドは有している。

エリート達が集う『神術同盟』の特殊殲滅部隊『王者の剣』<sup>デュランダル</sup>に所属するのも時間の問題で、やがては最高位である『四大神術師』に抜擢されるのも、夢ではないと周囲からは囁かれている。

だが、そんな自分の“神術”が、“破戒者”によって防がれた。  
しかも、戦いの事など何も知らないような小僧<sup>ガキ</sup>に。

「……やってくれるな」

ああ、本当にやってくれる。

これでは、まるで自分の方が劣っているように見えるではないか？  
「ブチ殺してやる」

だからこそ 殺す。

徹底的に、この“破戒者（小僧）”に思い知らせる。  
自分の行動が、如何に愚かなモノだったのかを分からせる必要がある。  
ある。

「……………」

さあ、殺そう。

今までも、自分をコケにしてきた奴は、皆そうしてきた。  
骨を砕き、腕を切り落とし、足をもぎ取る。

あらゆる地獄を見せて、生まれて来た事を後悔させてやる。

「ふ……ふはは！ おい、小僧。お前、楽に死ねると思うなよ？」  
次の瞬間、薄暗い路地裏を、二つの疾風が駆け抜けた。

## 断獄の起源詩（後書き）

どう見ても中二です。

本当にありがとうございました。

## 姿なき従者

桜花市の夜は明るい。

様々な色のネオンに彩られた、まるで繁華街のような風景。

神森町から電車で一駅程の距離にあるとは思えない程に栄えており、中心部に行けば真夜中でも人々で賑わっている。

「はあ……まったく、嫌になるわね」

そんな街角の一角で、水原 真依はため息を吐いた。

駅前のビルに背中を預け、呆れたように呟いた彼女の言葉に反応する者はいない。

仕事を終え帰宅するサラリーマン、広告の挟まったティッシュを配る者、一際カラフルな店の前で客引きをする者も、誰一人として彼女には見向きもしない。

それだけではない。

無数の人々が行き来する駅前。

人の波の中に佇む真依を、まるで見えていないかのように、目の前を素通りしていく。

「ねえ、蓮花。何か収穫はあったかしら？」

それは一体、誰に向けられた言葉なのか？

一見すれば、真依の独り言のように思えただろう。

目を閉じたまま、彼女は静かに虚空へと呼び掛ける。

当然、その問いに答える者は存在しない。

真依の呟きは、そのまま街の雑踏に紛れて消える 筈だった。

「はい。神森町の方角で、“神術”の発動を感知いたしました。使用されたのは、風の系統。恐らく、フレイ・アレルドの“神術”かと思いますが、如何いたしましょう？」

突如として響いたのは、鈴のように綺麗な少女の声。

何処からともなく聞こえて来たその声に、真依は眉一つ動かさずに言葉を返す。

「放っておきなさい。どうせ、見当違いな調査でもしてるんですよ。“自称”名門のエルロツト家に構っている暇はないわ。そんな事よりも、私達にはやらなければならない事があるでしょう？」

『自称』の部分強調して言い放つと、真依は足元に置かれた缶コーヒーを拾い上げ、一気に煽る。

真依の足元には、既に十本以上の空き缶が置かれており、その数は彼女が長時間、こうして街角に立っていた事を示していた。

「……吸血鬼事件の調査。並びに、犯人の特定ですね？」

「そうよ。可能性は低いと思うけど、万が一って事もあるでしょう？　もしも、犯人が私だと思われて、あの女が出張ってきたら厄介な事になるわ。どうせ、“契約紋”で位置は特定されるのだから」  
飲み干したコーヒー缶を、再び足元に置き、真依が嘆息とも取る息を吐く。

そんな真依に、蓮花と呼ばれた姿なき少女は静かに同意を示した。  
「はい、真依様。もしアルフィーネ様が現れたのなら、直ぐにでも姿を隠す必要があります。しかし……個人的には『神術同盟』第四位の事が気掛かりですね。現在は目立った行動は確認されていませんが、いつ我々に牙を向かないとも限りません。不確定情報ではありますが、『銀の歯車』の協力者から『王者の剣』のメンバーが街に入ったとの知らせも届いております。真依様、どうかお気を付け下さい」

世界中の“神術師”が集う組織、『世界総合神術同盟』。

過去の大戦で、最強の軍事力を誇った第二帝国連合を、たった一週間で壊滅状態に追いやった、特殊殲滅部隊『王者の剣』。

……厄介な相手だ。

そう、真依は心の中で舌打ちした。

総人数五千人から結成される『王者の剣』のメンバーは、揃いも揃って歴戦の“神術師”。

そんな化け物達を相手にしては、命が幾つあっても足りない。  
「ええ、分かったわ。取り敢えず、貴方はこのまま調査を続けて。  
そして、場合によっては直ぐに街を出て」

真依がそう言いかけた時、不意に空気が震えた。

「……ッ!？」

真依は途中で言葉を切り、とある方角に顔を向ける。  
空気中に含まれる“魔力”の波。

“神術師”にのみ感じ取れるその振動が、爆発的に広がって行く。

「これは “現界 (Germination)” ね」  
間違える筈もない。

幼い頃から、何度も経験してきた独特の波長。

日常から非日常へ。

まるで、何かのスイッチが切り替わるように、水原 真依の世界  
は一転する。

周りの雑音が消え、感覚が研ぎ澄まされていくのが分かる。

既に、学生としての真依は何処にも存在せず、一人の“神術師”  
の姿がそこにあった。

「でも、神奈の“破戒”ではないし、一体誰のかしら？」  
まるで遠くの何かを見詰めるように、真依は目を細めて虚空を睨  
む。

一瞬にして、殺伐としたモノに変わった場の空気に、蓮花はしっ  
かりと対応して見せた。

「方角と距離から推測するに、神森町かと思われます。先程の“神  
術”の発動から鑑みるに、フレイ・アレルドと交戦中かと。如何な  
されますか？」

『神術同盟』は、世界規模で見ても大きな組織だ。  
十六世紀半ばに発足され、年数を重ねることに規模を拡大。  
今では“神術師”の約八割が『神術同盟』に加盟し、正義の名の  
もとに悪を裁いているのだらう。

「……気に入らないわね」

だからこそ、気に入らないと真依は吐き捨てる。

『神術同盟』のやり方は、嫌という程理解している。

絶対的な正義。

『神術同盟』が悪とみなした者ならば、“神術師”は女子供であ  
ろつと容赦なく切り捨てる。

それは、長きに渡つて繰り返されてきた“科学”と“神術”の戦  
いの歴史が証明している。

「真依様？」

何か不穏な空気を感じ取ったのか、蓮花が不安げな声を漏らす。

「ねえ、蓮花……」

蓮花とはこれでも長い付き合いだ。

自分の様子がいつもと違つと、直ぐに気が付いたに違いない。

「もしも 私が『同盟』に手を出すと言つたら、貴方はどうする  
？」

口元に妖しげな微笑を浮かべながら、真依は蓮花に問いを投げる。

「……それは、十分にお考えの末に至つた答えですか？」

「ええ、三年間も考えて、ようやく辿り着いた答えよ」

短い沈黙の後、蓮花から返つてきた質問に、真依は静かに言い放  
つ。

迷いなどないと、むしろ何かが吹っ切れたように真依は一步前に  
踏み出した。

「ならば、何も言う事はございません。わたくしは、ただ真依様の  
後ろに控え、貴方をお守りするだけ。今も昔もこれからも、命ある  
限り永劫にそれは変わりません」

「ふふつ、本当にいいの？ 『同盟』に手を出す。一応、聞いてお  
くけど、その意味が分かつて言つてる？」

『神術同盟』は、正義である。

そのやり方がどうであれ、それは事実。

1+1が2になるくらい、当たり前前の事。

更に、その力は強大。

世界規模の組織に、個人で立ち向かう事になる。

本当にそれでいいのか、と真依は問う。

しかし、

「真依様。失礼ながら、それは愚問です」

愚問、と。断固たる口調で蓮花は告げた。

「言った筈です。わたくしは、真依様をお守りすると。貴方が世界の敵となるのなら……それも結構。だから、何なのでしょう？」

千里 蓮花は貴方の為に在る。貴方が望み、命じてくれるなら、わたくしはどんな事でも成し遂げて見せましょう。だから、真依様はただ一言『連いて来い』と命じるだけでいいのです」

蓮花の言葉を受け、真依は、柄じゃないとばかりに肩を竦めて見せた。

「ふふつ、行くわよ、蓮花。『同盟』に一泡吹かしてやりましょう」  
背後からの声を聞きながら、真依は歩き出す。

その選択が、何を意味するのも知らずに。

七瀬 広樹と水原 真依。

“破戒者”と“神術師”。

相容れぬ二つの存在が交錯する時、死神の宴は開幕した。  
タナトス・ライブ



## 姿なき従者（後書き）

やっと、メインヒロインが出ましたね。

えっ？ 一応、この人がメインなんですよ。  
（存在感が薄いですけど）

## 死の旋風は赤く染まる

路地裏での戦いは、激しさを増していた。

吹き荒れる風に周囲の壁は抉られ、竜巻が砂塵を舞い上げる。

だが、それだけ。

そこに立つ両者は、未だに健在であった。

「ハッ！ おいおい、一体どうなってるんだ？」

数にして、十数回。

オレがそれだけの風刃を躲した時、アレルドは苦々しげに吐き捨てた。

「まったく、さっきまで思いつきりド素人の動きだったくせに、“現界”した途端、ちょこまかと躲しやがる。ピンチになったら強くなるってよ、お前、そりゃ、何処のヒーローだ？ ご都合主義がまかり通る程、世の中甘くねえぞ？」

それは どんない奇跡だろうか？

あの黒刀を握った瞬間から、オレの身体能力は跳ね上がり、アレルドの刃を躲す事に成功していた。

「……………」

ご都合主義と言われれば、その通りだろう。

主人公が敵に殺されそうになった瞬間に、何らかの能力が目覚める。

アニメや小説では、もはや王道と言ってもいいパターン。

アレルドから見れば、今のオレは、まさにその典型と言っても過言ではない。

「ハッ、羨ましいか、“魔術師”？」

だけど、そんな事は、どうでもいい。

深淵のように深い漆黒の刀身。

柄の所には、何かを御する為なのか、呪符のような布が何重にも巻きつけられた日本刀。

あの扉を開けた事によつて、先程まで見えなかった風の軌道を見切れた事も、握った事すらない刀を手足のように扱えている事も、全てどうでもいい。

理由など知らずとも、それを扱えればいい。

今、オレに必要なのは理屈ではなく、力なのだ。

目の前の“現実（死）”を跳ね退ける、人外ちからの能力。

何故？ どうして？

そんなのは生き延びてから、後で考えればいい。

「おい、コラ小僧。今……何て言つたよ？」

まあ、実際この状況を打開しないと、考える事すら出来ないわけ。

「“魔術師”じゃねえ。“神術師”だ、バカ野郎ッ！」  
振り下ろされる、銀杖。

空気を切り裂き、死の烈風が、突如として発生する。

「ッ！？」

だが 見える。

いや、“見える”と言つた方が正しいか。

はつきりとした形は見えずとも、ただそこに何かがあると言う事だけは分かる。

「ふっ……」

更に、刃の軌道は直線。

それだけが分かつていれば、躲す事は不可能ではない。

「ははッ、おい、小僧。逃げ回つてるだけじゃ、勝てねえぞ」

嘲笑混じりにアレルドが叫び、新たな刃が生み出される。

確かに、避けているだけじゃ、あの男には勝てない。

それに、今は辛うじて躲せているが、体力の問題もある。

いつもの何倍も身体は軽いが、それでも無限に動き続けられるわけではない。

なら、殺せばいい。

心の奥底から、何かどす黒いモノが湧き上がって来る。

背筋に奔る冷気は、恐怖からではなく、快感にも似た寒気。

「ほう、この状況で笑うとは……ハハハ、良い表情になって来たじやねえか。そうだよ、そう来なくっちゃ、面白くねえ」

アレルドに指摘され、初めて気が付く。

どうやら、オレは笑っていたらしい。

その事実にはゾツとした。

オレは何故、笑っていた？

この男との戦いを、楽しんでいたと言うのか？

「俺はな、ずっと思ってたんだ。狩りつてのは、喰うか喰われるか。生きるか死ぬかの殺し合いがあつてこそ面白い。なあ、お前もそう思うだろ？」

恍惚とした表情で、不気味に口元を歪める、アレルド。

その笑みに、背筋が粟立った。

何だ、コイツは？　これが、本当に人間の笑いか？

オレも、コイツと同じ笑みを浮かべていたんだろうか？

「……違う」

そんな事はある得ない。

「オレは……違う。オレは、お前みたいに狂ってない！」

そう、コイツは狂ってる。

同じ人間として、何かがおかしい。

壊れているのか、欠陥しているのかは知らないが、オレとは明らかに異なる存在だ。

そんな奴と同じなんて、オレは認めない。

「ああ？　狂ってる？　く、はは、アハハハハハッ！」

一体、何が可笑しいのか、オレの言葉にアレルドは大爆笑した。

周囲に響き渡る哄笑は空気を震わせ、崩れかけていた壁のコンクリートが、パラパラと地面に落ちた。

「な、何がおかしい？」

「ふは、ハハハ。いや、悪い悪い。今更、そんな当たり前の事を言われるとは思ってなくてな。ああ、そうだ。世間一般から見れば、俺は確かに狂人だよ。でも、だったらお前はどうか？」

アレルドの声は、まるで仲間に語りかけるように優しいものだった。

やめる。オレは、お前とは違う。

だから、そんな声でオレに言葉を掛けるな。

「お前は、楽しいと感じなかったのか？ 目の前の敵を殺したい。そうは、思わなかったか？」

違う違う違う。

オレは、そんな事なんて……。

「今更、否定しても遅すぎんだよ。第一、お前さ、最初は俺から逃げようとしてたみたいだが、“現界”してからは、もうそんな考えは吹っ飛んだだろ？ なあ、認めちまえよ？ お前は、俺と同類

」

「黙れえッ！」

アレルドの言葉を遮るように、オレは地面を蹴り、上段から斬りかかる。

この男に、これ以上言わせてはいけないと、オレの中の何かが語っていた。

「ハアッ！」

今まで刀なんて握った事すら無かった。だが、不思議な事にこの黒刀は、長年使い慣れた道具のように手に馴染む。

刃筋の立て方から、身体の動かし方。足の使い方に、確実な殺し方。

それらが全て分かっている。頭で覚えてなくても、身体の方が覚えていたような感覚だ。

殺せ！ 自分以外の全てを、殺し尽くせ！

頭の中に声が響く。自分の中の殺戮本能が、一気呵成に押し寄せてくる。

「ハッ！ いいね。やっぱり、狩りはこうでなきゃな。おい、小僧。お前は、兎か？ それとも、狐か？ ハハッ、違うだろ？ お前は……虎だッ！ 馬上の狩人を引きずり降ろし、喉元に喰らい付く人食い虎」

これはウサギ狩りでもキツネ狩りでもない、アレルドは言う。  
「さあ、行くぞ。貴様ら“破戒者”を相手に、本気を出すのは初めてだ。ふっ、お前の実力を認めて、全力を出してやるんだ。頼むから、俺を失望させてくれるなよ？」

言うが否や、放たれる一閃の突き。  
速く、そして何よりも鋭い。

再び頭を掴もうと、魔爪の如き一撃がオレを迎え撃つ。

「……ッ！」

オレの脳裏に先程の光景が蘇る。

また、あの爪に捕まったなら、今度こそ頭を握り潰されるに違いない。

「ちっ……！」

舌打ちと共に、オレはアレルドの突きを躲す。

刀を振り下ろす動作と、腕を突き出す動作。

どちらが速いかは、火を見るよりも明らかだ。

線と点。

線の軌道を描くオレの攻撃よりも、点であるアレルドの攻撃の方が僅かに速い。

「ハッ、それで躲したつもりか？ 甘いんだよ、バカが！」

「なっ……！」

目の前で巻き起こる旋風。

地面に向かって放たれたそれは、オレを直接傷付ける事はなかったが、視界を奪うには十分なものだった。

「ぐっ、目くらましかよ」

元々、それが目的だったのだろう。

至近距離での竜巻。

その凄まじい風に、オレは思わず目を覆う。

「がっ……！」

そして、その一瞬の隙を見逃すほど、この男は甘くはない。

「ほら、捕まえた」

右手でオレの首を掴み、左手の銀杖を押しつける。

この零距离からあの刃を放たれば、相手がどんなに素早くとも逃れる術は無い。

「おいおい、何だよ、その顔は？ 不満そうだな？ 言っただろ、これは殺し合いだってな」

ルールなど無いと、その目が語る。

弱肉強食。勝てばいいと。

それは、狩りと言うよりは、猛獣同士の殺し合いに近い。

「ハハハ、苦しいか？ ほら、どうしたよ、“破戒者”！？」

楽しそうに、本当に楽しそうに、アレルドはオレの首を締め上げる。

頭の中にはギリギリと不吉な音が響き、全身から力が抜けていく。

「ぐっ……あ……」

苦し紛れに振り上げようとした黒刀が、手から滑り落ちる。

それと同時に、一気に身体が重くなった。

「殺し合いはスポーツじゃない。反則だろうが卑怯だろうが、要は勝った者勝ちだ。それこそ、人質とって脅そうが、相手を騙そうが、何でもありだ」

もう駄目だ。意識が朦朧として、目の前の景色すら霞んで見える。

「まあ、その事を頭に刻んで……死んで行けよ」

やはり、無理があつたのか？

いくら、得体の知れない能力に頼つても、運命は覆らない。たつた一つの“想い”すらも、闇に落ちて消えて行く。

『A wind rages, and a blade is produced. (風は荒れ狂い、刃を成す)』

静かに、そして高らかに詩が紡がれる。

どうやら、“神術”でオレに止めを刺す気らしい。

「じゃあな、小僧。あの世で神様によろしくな」

アレルドの杖に光が灯る。

花のように鮮やかな青光の中、一つの刃が形成されていく。

そして

「何でもありって事は、当然、不意打ち（こう言つの）もありだよね？」

不意に響いた誰かの声と共に、アレルドの胸から鮮血が吹き出した。



## メルト・ダウン

「ごぶっ……ぐっ、あ？」

アレルドの目が驚愕に見開かれ、生温かい液体がオレの全身に降り注ぐ。

何だ？ 一体、何が起こったんだ？

万力の如き拘束から逃れたオレは、咳き込みながらも新鮮な空気を肺に満たす。

「ッ！？」

暗転していた視界が回復し、前を見るとそこには……。

「があっ、ああああああ！」

噴き出す血潮と、響く絶叫。

目の前に立つ“神術師”の胸からは、紅色の刃が突き出していた。「殺し合いのセオリーを偉そうに語ってるから、果たしてどんなものかと思っただらこの程度。まったく、これじゃあ『神術同盟』の底が知れるね」

呆れたように呟く声は、アレルドの後方。

声の主は刃を無造作に引き抜くと、悶え苦しむアレルドを蹴り飛ばし、オレの前に立った。

「……………！？」

その姿に思わず言葉を失った。

血に染まった桜花高校の女子の制服。やや赤に近い茶髪。

身体だけでなく手足と顔にも血が大量に付着しており、感情のない目でこちらを見据えている。

「へえ、“破戒者”？ なら、『齒車』の追手って事で解釈してもいいかな？」

そう尋ねて、茶髪の少女は一つ息を吐く。

彼女の長い髪から赤い滴がポタリと垂れて、地面を赤く染めていく。

律義に答えを待っている所を見ると、あの“神術師”よりは話  
が通じるみたいだ。

咄嗟に言葉を返そうとしたが、その考えは次の瞬間には微塵も残  
らず吹き飛んだ。

「おい……嘘だろ？」

茶髪の少女の右手　彼女が先程引き抜いたモノ。

それは、身の丈程の赤い大鎌。

まるで、死神を思わせる、真つ赤な刀身と湾曲した三日月型の刃。  
予想外の物を目にして、思考が追い付かずオレはその場に立ち尽  
くす。

連続殺人事件。吸血鬼。

そんな単語が脳裏に次々と蘇ってくる。

「おい、こらダメエ！ さっきは、よくもやってくれたな。俺の狩  
りを邪魔しやがって、覚悟は出来てるんだろっな？」

凄まじい怒気を載せて、アレルドが吠える。

一体、どんな手品を使ったのか、先程の傷は既に塞がっており、  
一滴の血も流れていない。

「ふふっ、『狩り』ね。アンタ、面白い事を言っね」

「ああ？」

狂犬のようなぎらつく瞳に睨まれながらも、茶髪の少女は涼しげ  
に言葉を返す。

「この子が虎だとするなら、アンタはただの負け犬ね。これが狩り  
？ 笑わせないでよ」

言って、少女は笑う。

低く、とても低く笑う。

『 M e l t   D o w n (奪い去れ) 』

その笑みは、まさに“狩人”<sup>ハンター</sup>

暗がりの奥で息を殺し、刹那の刻で獲物を狩る、猛禽。  
故に

「ふん、“現界 (G e r m i n a t i o n)” 如きで、俺を殺るつ

もりか？ なめるなよ、この女ア！」

銀の杖を握り締め、“詠唱”を始めるアレルド。

しかし、<sup>アレルド</sup>狂犬が<sup>ハンター</sup>狩人に勝る道理はなく

☐ Emperor of krufieze（貴方の一番、大切なモノ）☐

勝敗は、一瞬の後に決していた。

## メルト・ダウン（後書き）

ルビが上手く振れなくて、悪戦苦闘中。

読みにくい所もあると思いますが、生温かい目で見てください  
い

## 白い少女は月下に舞う

結果的に言うなら、アレルドが放った一撃は、確かに届いていた。悠然と場に佇んでいた狩人は、逃げもしなければ躲そうとすらしなかった。

ただ、面倒そうに大鎌を振り下ろしただけ。

それだけで、全てが終わった。

「一応、名前を聞いておこうか？」

肩から胸に掛けてを大きく裂かれ、もはや虫の息となったアレルドがふら付きながらも問う。

彼女は避けてなどいない。

風の刃ごと、アレルドを切り裂いただけ。

「……立花<sup>たちばな</sup> 瑞希<sup>みずき</sup>。さあ、さつさと行きなよ、“神術師”。もう、

勝負は着いたし、アンタには興味がないんだよ」

自らを立花と名乗った少女は、短く答えて通りの向こうを指さす。驚いた事に、立花はアレルドを見逃すつもりらしい。

しかし、此処で尻尾を巻いて逃げる事を、彼のプライドが許す筈がない。

「勝負は着いた？ バカ言うんじゃないぞ、“破戒者” ツ！」

まだ、自分は負けてはいない。

ふらつく身体を何とか支え、銀杖を立て花に向ける。

『 I'll give a peaceful sleep to an immediate enemy. (眼前の敵に、安らかな死を) 』

残った“魔力”を全て注ぎ込み、全身全霊で最後の“神術”を使う。

「そう。仕方ないね。なら、私は……」

威力も速さも、今までとは桁違い。

躲せる筈はない。防げる筈もない。

文字通りの最強の一撃を、切り抜けられるものなら抜けてみる。  
アレルドは勝利を確信した笑みで、立花を見据える。  
だが、

「私は アンタの全てを奪い尽くす！」

瞬間、立花の瞳が燃えるような赤に染まる。

しかし、アレルドの表情は変わらない。

当然だ。自分が負ける事などあり得ないと、確信している。

コイツが“狩人”？

バカな。狩るのは自分の方だ。

立花の口元に浮かぶ、残虐な微笑。瞳に灯る紅き光。

それを合図に、大鎌が炎に包まれる。

「ふん、なるほど。それが、テメエの“現界（Germinati  
on）”か。元になった“想い”は、憎悪か？ 嫉妬か？ 形状か  
らして、その類のモノだと思うが、まあ、どうでもいいか」

彼女が纏う紅蓮の炎。

それは闇を照らす聖炎 あるいは、全てを焼き尽くす地獄の業

火か？

「……………」

オレは、そんな魔法のような現象に思わず言葉を失い立ち尽くす。

「今はただ、この殺し合いを楽しもうぜ！」

そんな中、先に動いたのはアレルドの方だった。

もはや、言葉はいらないとばかりに、限界まで圧縮された空気の  
刃が打ち出される。

その標的は言うまでもなく、焰を纏いし紅蓮の少女。

「そうね。この一時 一瞬の会合を楽しみましょう。名前も知ら  
ない、『同盟』の“神術師”さん」

片や狂笑を、片や冷笑を浮かべて、二つの影が交錯する。

夢でも見ている気分だった。

目の前で行われている、異能者同士の殺し合い。

何だ、これ？ ファンタジーか？ それとも、悪夢か？

どちらにしても、勘弁してほしい。

雷や炎が炸裂するような非日常よりも、オレは日常に帰りたい。退屈でありながらも、平和だった日常。

そんな日々が、今では手が届かない宝石のように思えてならない。ああ、そうだ。

これは、きつと夢だ。

だって、そうだろう？

でなければ、突然、ワケの分からない男に襲われたり、ましてやその男の生首がオレの前に転がっている筈がない。

「はあ…… 本当にバカな男。せつかく、人が見逃して上げるって言ったのに。あーあ、『神術同盟』とは、出来れば関わりたくなかったんだけどね。まあ、仕方ないか」

小さなため息を吐き、立花がオレの方に振り返る。

その後ろでは、頭部を失ったアレルドの身体が、鮮血と共に地面に倒れた。

……違う。これは、夢なんかじゃない。

やりやがった。この女は、目の前で人を殺しやがった。

「それで？ 一体、キミは何なのよ？ 何か反応が一般人っぽいし、『歯車』の“破戒者”でもなさそう。もしかして、何か別の組織かな？」

大鎌を引き摺りながら、ゆっくりと近付いてくる、立花。

ヤバイ。このままだと、本当にヤバイ。

アレルドもヤバイ奴だったが、立花はもっと危ないヤツだと、本能が叫んでいる。

どうする？

何とかしなければ。

「おーい？ キミ、聞こえてる？」

そうだ。あの黒い刀。

もう一度、あれを握ればこの状況を何とか出来るかも知れない。相手はアレルドをあっさりと倒した奴だが、もしかしたら隙を突

いて逃げる事くらいは出来るかも知れない。

「ねえ、シカト？ もう、何なの？ 聞こえてるんだったら、返事くらいしてよ」

そう思い辺りを見回すが、黒刀が見つからない。  
どうして？ 確かに、この辺りにある筈なのに。

しかし、黒刀は現れた時と同じように、何の兆候もなくこの場から消え失せていた。

「ふーん、あれ？ キミ、どこかで会った事ある？」

「ッ！？」

いきなり、顔を覗き込まれオレは咄嗟に身を引く。

しかし、立花はそれを気にする様子もなく、こちらを見詰め、やがて何かに気が付いたように呟く。

「あつ、桜花高校の制服。じゃあ、キミは……」

そこまで言くと、立花はオレから離れ、少し困ったように笑う。

「そつか。キミは私と同じ高校なんだね。私は三年なんだけど、キミは？」

その問いに、オレは一瞬だけ、答えるべきかを迷った。

冷静に考えれば、この女は殺人者。

個人情報など、絶対に答えるべきではない。

ましてや、同じ高校ともなれば尚更だ。

だが、それはあまりにも自然な声で、普通の日常会話をしているかのように思えた。

「いや、やっぱり答えなくていいよ」

それは、まるで幻想のようであって

「だって、私は今から……」

そして、それが幻想であったのだと、直ぐに思い知らされた。

「キミを殺さなくちゃならないから」

切り替わりは、本当に一瞬だった。

何かのスイッチを押すように、変化する。

今まで、優しげだった立花の目。



しかし、次の瞬間には彼女の目が、殺意の籠った視線へと変化した。

「ふふっ、キミが赤の他人だったら、このまま帰してあげただけど……残念だったね」

言うが否や、少女が大鎌を構え、その刀身が紅く染まる。

「高校で私の事について言い触らされると、少しマズい事になるのよ。あの学校には、厄介なのが沢山、潜んでるの。だから、私の顔を見たキミを、このまま帰らせるワケにはいかないんだよね」

響き渡る風切り音。目の前を紅い刃が横切り、前髪が数本地面に落ちる。

「なっ……！」

振り上げられる大鎌。その刀身が炎を帯びる。

何とか、立ちあがろうとするが、先程の反動が足に力が入らない。

「さようなら。それと……ゴメンね」

悲しげで、何処か諦めを含んだ声。

その声と同時に、紅蓮の刃はオレに振り下ろされた。

……逃げられない。

そんな事は分かりきっていた。

オレに残された道は、目の前に迫り来る刃が自らの命を刈り取る瞬間を、ただ見詰め続ける事だけだった。

「えっ？」

その刹那、どちらにとっても予想外の出来事が起こった。

ガキンッ！ と響く金属音。

オレの首を確実に落としたであろう大鎌の凶刃。

それは突如、空から降ってきた黒い棺桶のような物によって阻まれていた。

「なっ……何なのよ、これは！？」

棺桶の向こうで、立花が驚愕の上げる。

そして、その背後

「『歯車』の人間だけでなく、一般人にまで手を出すとは、と

うとう見境すら無くしましたか？ 吸血鬼……いや、立花 瑞希！」  
感情の籠らない冷たい声。宝石のように透き通った深い青色の瞳。  
「一応、聞いておきます。大人しく、投降する意思がありますか？  
尚、拒否する場合はこちらの実力を行使する事を、予め警告しておきます」

月光の如き、淡い銀の長髪。

純白のドレスを見に纏った一人の少女が、そこに立っていた。

「投降？ ははッ！ “齒車”の人形風情が！ やれるものなら、やってみろ！」

立花が大鎌を構え、怒声と共に白い少女に斬りかかる。

「交渉決裂。投降の意思は皆無と判断し、交戦を開始します」

白い少女のドレスがヒラリと揺れる。

「 獄王ッ！」

彼女が短く叫んだ瞬間、黒い棺桶から立花の背中目掛けて、二本の白き閃光が迸る。<sup>ほとばし</sup>

「くっ！ 双剣……？ そんな程度で殺れると思うなッ！」

振り向き際に大鎌から炎を放ち、立花が二本の閃光を同時に弾き飛ばす。

空中に吹き飛んだそれは、彼女の言う通りどうやら白い双剣のようだった。

「なっ……！？」

しかし、そこで立花の顔が驚愕に歪む。

双剣が吹き飛んだ先、人間の跳躍力では絶対に届かないような遙か上空。

そこには、白い少女の姿があり、彼女は空中に打ち上げられた二つの刃を、さも当然のようにその手中に納めていた。

「重力支配 解除！」

次の瞬間、純白と紅蓮が交差した。

赤と白の狂乱舞（前書き）

> i 2 5 8 4 1 | 3 3 6 8 <

## 赤と白の狂乱舞

それは、人外の戦いだった。

煌めく剣戟と猛る灼熱。

紅蓮の炎が地を奔り、淡き白銀が宙を舞う。

上空に飛び上がった白い少女は、地面に突き刺さっている棺桶へと、優雅に着地を決めた。

それは、まるで体操選手のような身のこなし。

不安定な足場にも関わらず、今にも拍手が上がりそうな完璧な着地に、立花が短く鼻を鳴らした。

「へえ、凄い凄い。そのまま、ずっと立ってたら？ 案山子<sup>かし</sup>みたいで似合ってるよ」

棺桶の上に立つ少女に、立花がバカにしたように言い放つ。

「ありがとうございます。褒め言葉として受け取りましょう」

しかし、そんなのはどこ吹く風。

それがどうしたと、あっさり受け流す。

「くっ……！ この人形めッ！」

自身の挑発を冷静に対処され、立花の顔が怒りに歪む。

燃え盛る激情は、炎の如く。

その瞳を深紅へと染めた。

「木偶人形<sup>でく</sup>が、調子に乗るな！ 地獄の炎に焼かれて死ね！」

立花の両目が光り、白い少女の前に業火が姿を現す。

「なるほど。大した火力です。地獄の炎とは、良く言ったものだ。

ですが……」

轟<sup>轟</sup>、と燃え上がる、炎の大柱。

一気呵成に立ち上る獄炎が、空気を焦がし、天を焼く。

しかし、それは攻めの初手でしかない。

炎から逃れようと、棺桶から飛び降りた白い少女を紅蓮の大鎌が追撃する。

「ハアッ！」

横に一閃。

くるり、と回転する身体。

立花は大きく踏み込み、横薙ぎの斬撃を放つ。

炎で視界を奪いつつ、首を落としてに掛かる、二段攻撃。

しかし

「なっ……ぐッ！」

完全な死角からの攻撃を、少女は見事に反応して見せた。

後ろに大きく身体を反らし、紙一重で刃を躲す。そして、そのまま後方回転に持ち込み、迫りくる炎からも華麗に逃れてみせた。

更に、その離れ際、半月を描く爪先で、立花の顎を蹴り上げるのも忘れてはいない。

「その程度では、私は壊せない。それに、断罪の業火にしては、いささか寒すぎるでしょう」

口元を押さえ蹲る立花を、冷やかな微笑で見下ろす銀髪の少女。その笑みが、一瞬だけ誰かと重なって見えたのは気のせいだろうか？

「さあ、ここはわたくしが引き受けます。今の内に、貴方は避難してください」

目の前で繰り広げられる、人の域から大きく外れた戦闘に見入っていたオレに、白い少女は淡々と告げる。

そうだ。オレは何をしているんだ？

逃げるなら、今が絶好の好機じゃないか。

「……させないよ」

「ッ!？」

瞬間　身体中を悪寒が駆け抜けた。

ゆつくりと立ち上がり、こちらを睨む立花の赤眼。

焼け付くように熱く、それでいて絶対零度の戦慄がオレを支配する。

怖い、暑い、寒い、熱い、痒い、痛い。

分からない。何が何だか分からない感覚。

限界を超えた恐怖に、頭がパニックになっている。

「キミは絶対に逃がさない」

濃密過ぎる殺意の刃が、オレに向けられる。

そんな中、意識を保っていられたのは、オレを護るように間に立った、銀髪の少女のおかげだろう。

彼女の存在が無ければ、今頃はとくに気を失っていたに違い無い。

「相手を間違えないで頂けますか？ 貴方の相手は、わたくしです」  
立花の前で、少女が不敵に微笑む。

掛かって来いと、ばかりに双剣を一回転させてみせる。

「それとも、“破戒者”は人形の一つも壊せないのですか？」

一瞬の間の後、殺意の標的がオレから外れる。

「ふふ、あははは！ “破戒者”が“人形”を壊せない？ 何その

冗談？ ははっ、笑えるよ。うん、かなり笑えて、そして……」

刹那、大鎌が炎に包まれた。

目が眩む程の赤光を放ち、死神の鎌が灼熱を帯びる。

「そして 死ぬほどム力つくよ」

地の底から響くような冷たい声。

それと共に、紅蓮の死神が地を駆ける。

「この場を離れて、桜花町方面へと走ってください。人が多い駅前に行けば、取り敢えずは安全です」

早口にそう囁いて、彼女も地面を蹴る。

「ッ！？」

不意に我に返ったオレは、改めて目の前の現状を再確認する。

燃え盛る炎。振り下ろされる大鎌。

白い少女は、それをまるでダンスを踊るように華麗に避けていく。

「何してるんですか！？ 早く、逃げてください！」

……そうだ。こんな事をしている場合じゃない。

早く、ここから逃げないと……。

「ま、待ちなさいよ！ キミを逃がすワケには……くっ！ 邪魔をするな、人形がああッ！」

オレは、くると踵を返し走り出す。

「ちよつと、待ちなさい！ 逃げても無駄だよ。私からは逃げられない。絶対に見つけてやるから！」

オレは、背後から聞こえる声に追い立てられるようにして、その場を全力で走り去った。

## 赤と白の狂乱舞（後書き）

やっぱり、戦闘描写は書いていて楽しいですね。

現在、日常の描写を練習中なんですが、あまり上手く書けません。作者が中二病だからでしょうか？

画像は立花さんです。中二〓炎。うん。この方程式は崩せないぜw



## 契約は甘い痛みと共に

人気のない裏通りを、オレは無我夢中で駆け抜ける。

「……はぁ……はぁ……」

後ろを振り返っている余裕はなく、自分が今どこを走っているのかも分からない。

もう、背後から何の音も聞こえてこなかったがオレは止まらずに走り続けた。

身体中が恐怖に支配され、生きた心地がしない。既に息は上がっているが、全く疲れを感じない。

恐らく、疲れよりも恐怖の方が勝っているからだろう。

オレはしばらく走り続け、気が付くと自分の家の前に立っていた。何処をどう走ったのかは覚えていないが、なんとか家に辿り着けたらしい。

あの少女は駅を目指せと言っていたが、そんな事は知らない。

「はは……」

自分の家を目の前にして込み上げてきた安堵と疲労に、思わず乾いた笑いが口から零れた。

……助かった。

心の底から生を実感し、オレは大きく息を吐く。

これから警察に連絡したり、やるべきことは沢山あるが、まず何か温かいものでも食べよう。

その次にシャワーを浴びて……連絡するのはそれからいい。

そう思い、一歩足を踏み出したその瞬間

「えっ……」

僅かに感じる腹部への違和感。

手を当てると、生温かい液体と共にオレの腹から何かが突き出していた。

緩やかな弧を描くような彎曲した三日月。先端が鋭く尖っており、

氷のように冷たい。

それは、まるで

鎌のような形状。

「あつ……がつ！」

全身を駆け抜ける、灼熱の激痛。

オレの身体から何かが引き抜かれ、熱いものが流れ出していく。

同時に体の力が抜け、オレは糸の切れた人形のように地面に崩れ落ちた。

「ふう、何とか間に合った……って、感じかな？ キミって結構、

足速いんだね。おかげで、追い付くのに苦労しちゃった。途中で邪魔が入ったとは言え、ここまで逃げたのは大したものだよ」

視界が真っ赤に染まり、熱い塊を口から吐き出した。

「がつ……ごほっ！」

「へえ、まだ生きてるの？ 意外にタフだね。あつ、此処ってキミの家？ えーと、七瀬君……でいいのかな？ キミの最後を看取っ

てあげたいのは山々だけど……残念。私も色々忙しいんだよ」

激痛で意識が薄れる中、上から聞こえる誰かの声。

その声が誰のモノなのかは、何となく推測が付いた。

「た、たち……ばな……」

「んっ？ おお、正解正解。でも、悪いね。まあ、そう言う事だからさ、適当にもがき苦しんで、走馬灯とか見ながら死んじやいなよ。それじゃあ、バイバイ」

遠ざかる足音。目の前が霞み、立花の姿が見えなくなっていく。

「がつ……ま、待て……」

渾身の力で手を伸ばすも、指先が数センチ動くだけで彼女には届かない。

「……………」

紅の大鎌を軽々と肩に担ぎ、彼女は一度だけ振り返る。

血の海に沈むオレを、見下ろす一人の少女。

その表情が僅かに悲しげに見えたのは、死の間際の幻想だったのだろうか？

「ごめんね……」

消え入りそうな声で彼女は呟き、再び足音が遠ざかる。

「ぐっ……あぐッ……！」

霧散しかける意識を何とか繋ぎ止め、オレは最後の力を振り絞る。しかし、うつ伏せの状態から仰向けになるだけで精一杯。

無論、立花を追い掛ける事など、出来る筈もなかった。

「ちく……しょう……」

全ての力を使いきり、声を出すことすら儘ならないオレは、ふと頭上の月に目が行く。

今夜は満月。淡く寂しげな月光がオレを包み込んでいく。

見上げる月は、遙か上空。

決して手の届かない、彼方に君臨する銀色の王者。

……ああ、なんて夢いんだ。

大量に流れ出る血液と吹き付ける冷たい風に、奪われていく体温。全身を襲う寒さの中、月を眺めていると、まるで深海にいるように思える。

「……………ッ！」

上空に輝く満月に、意味もなく手を伸ばす。

……届かない。そんな事は分かっている。

意味の無いことは百も承知。そんなのは、オレが一番、良く知っている。

だからこそ　手を伸ばした。

そんなオレの姿が、見覚えのない誰かの姿と重なる。

光の届かない真っ暗な闇の中。

一人の少女が、何かに必死で手を伸ばす。

何処かを怪我しているのか、血塗れの身体で無様に地面を這いながら……それでも、諦めずに手を伸ばす。

この世に神などいないと、憎悪に顔を歪めながら、その手が誰かに掴まれる事を願って。

……何だ、これは？

こんなのは知らない。走馬灯でも、なんでもない。

記憶を辿るのは違う。まるで、何かが直接頭に流れ込んでくる感覚。

だが、その正体不明の幻影は、突如響いた足音によって遮られた。足音はまだ遠いが、一定の速度でこちらに近付いている。

「ははっ……ご丁寧に、とどめまで刺しに来たのかよ」

それが声になっていたかは分からない。

だが、どちらにしても結果は変わらないだろう。

もはや逃げる所か、指一本動かす力さえ残っていない。

足音がオレの隣で止まり、影が月光を遮った。

「えっ……？」

血の海に佇む、一人の少女。

だが、そこにいたのはオレの予想とは違った人物だった。

すらり、と細く小柄な体格。

身に纏う純白のロングコートは月光を受けて白銀に光り、水色の髪が風に揺れる。

「……そんな……嘘よ……」

薄れゆく意識の中、彼女が何か言っているような気がしたが、オレはそれを聞くことが出来ずに闇の中へと落ちて行った。

## 契約は甘い痛みと共に（後書き）

この所、毎日更新してますね。

いないかも知れませんが、更新を待つて下さっている人にはいつも感謝しております。

いつもこのペースで更新出来たらいいのになあ……

## 王者の剣に鞘はなく

吹き付ける冬の風を肩で切りながら、冬花は夜の街を歩く。

先程から不穏な空気の揺らぎを感じ取ってはいるが、今はそちらに構っている暇はない。

どうせエルロツト家の“神術師”が、点数稼ぎでもしているのだろつ。

彼は実力よりも、人格の悪さで有名な人間だ。

少し前にも、多数の一般人に“神術”を目撃された事があった。

その時は冬花も一緒だった事もあり、何とか穏便に事態を収められたが、これ以上の問題は勘弁してほしい。

「……ふう」

目的地に到着し、冬花は一つ息を吐いた。

夜の神森町に人の姿は無い。

同じ駅前だと言うのに、桜花市とは大違いだ。

時間が遅いからなのか、吸血鬼事件の所為なのかは分からないが、駅のホームで一人ポツンと佇んでいるのは、あまり気分が良いものではない。

歩いている途中で、カイロの代わりにと温かい飲み物を買ったが、外気に晒され続けてすっかりと冷たくなってしまった。

駅の時計で時間を確認すると、終電が着くまでにまだ少し暇がある。

これなら、タクシーを使えば良かったと後悔しつつも、冬花は自動販売機で新たな飲み物を購入する。

手が冷えていたからなのか、先程の物よりも暖かく感じる。

これで、しばらくは手が凍える心配はなさそうだ。

「しかし……彼は大丈夫でしょうか？」

元々、アレルドには猪突猛進な所がある。

確かに“神術”は強力だが、彼には冷静さが足りていない。

彼がこの街に派遣されてから、何度かペアを組んだが、頭に血が上れば何の考えもなしに相手に突っ込んでいく。

冬花が敵の不意打ちを防いだ事も、一度や二度ではない筈だ。

一応、今夜は目立つ行動は控えろと言っては来たが、アレルドがそれを守る保証はない。

現に、彼は“神術”を行使している。

……やっぱり、私も行くべきでしょうか？

一瞬、そんな考えが頭によぎるが、それを打ち消すかのように電車の到着を告げるベルが鳴る。

「あっ……！」

来た。

その瞬間、空気が揺らぎ始める。

何かが近付いてくる。

それも大きな、莫大過ぎる“魔力”を持った存在が。

「……………」

電車がホームに滑り込み、空気のざわめきがピークに達する。

もう、目を閉じていても分かる。

彼らが来たのだ。

「…………お持ちしてありました。この度は、ご足労頂きありがとうございます」

深々と頭を下げる冬花に、応じるのは二つの声。

「ほう、シルビアか。数年で見違えたな。一瞬、誰だか分からなかったぞ？」

その言葉に顔を上げると、長身の男が目の前に立っていた。

冬花の身長は、決して低くない。

むしろ、女性にしては高めで、クラスの中でも一、二を争うくらいだ。

だが、この男はそれを軽々と見下している。

高さにして、頭二つ分くらいだろうか？

歳はアレルドと同じくらいだが、身長は二メートルを雄に越えて

いる。

更に、黒いローブを纏う姿は異常そのもの。

特殊な“神術”を施していなければ、間違いなく人々の注目の的になっていただろう。

「久しぶりね、シルビア。ふふつ、数年ですっかり立派になったわね。ダリアの事を怖がって、私の後ろに隠れてばかりいた頃が懐かしいわ」

対して、その後ろから現れたのは、比較的小柄な少女。

宝石のように綺麗な蒼色の瞳。

長髪を靡かせ、悪戯っぽく微笑む彼女の手には、大きめのキャリ―バックとスニーカーが一つ。

服装も、黒いコートに赤いマフラーと言った、普通なものだ。

傍から見れば、外国人が観光に来ているようにしか見えないだろう。

「お久しぶりです、ソルディア卿にグラフィード卿。お二人とも、お変わりないようで何よりです」

相変わらずだ。本当に、この人達は変わらない。

普段通りの二人の対応に、冬花は苦笑を返す。

それを見て、少女が肩を竦めた。

「あら、貴方は随分と変わったじゃない。“四大神術師”第四位佐伯 冬花。『神術同盟』の最高位であり、“神術師”の頂点。本当に立派になったわね、メリアル卿」

嬉しいような寂しいような、複雑な気分だと少女は笑う。

しかし、冬花の表情は一転して影が差した。

「ええ……変わる必要がありましたから」

静かに呟いて、冬花は目を伏せた。

その声音に、一片の悲しみを響かせて。

「……なるほど。貴方も、色々あったみたいね」

冬花の態度から何かを悟ったのか、少女は納得したように告げる。  
「それで？ 私達を呼んだって事は、アレが関係してるのよね？」



「はい。詳しくは明日の“四大神術師”による定時集会で報告するつもりですが、対象は恐らく、街に潜んでいるものと思われます」  
淡々と答える冬花の顔に哀しみの色は無く、既にいつも通りの表情へと戻っていた。

「ほう、奴と会うのもガルノイア以来か。確か、奴の名は……“神を殺す者”<sup>タナトス</sup>だったかな？」

“神を殺す者”<sup>タナトス</sup>。

その名前が出た瞬間、心の奥底で激情が燃え上がった。

どんな顔で、どんな声をしているのかも分からないが、奴だけは許さないと、冬花は拳を握り占める。

「ふふっ……目的は、あの時の再現かしら？ まあ、させるつもりは無いんだけどね」

当然だ。それだけはさせない。

脳裏に蘇るのは、三年前の苦い記憶。

押し寄せる殺戮の波と街中に響く人々の悲鳴。

外路地には肉塊が散らばり、それはまさに、赤く染まった地獄絵図。

その地獄が、顕現しようとしている。

「私は<sup>タナトス</sup>“神を殺す者”を止めます。恐らく、命を賭ける事になるでしょう」

だからこそ、冬花は宣言する。

「今から、正式に名乗りを上げます。もし、連いて来て下さるのなら、己が名を。もちろん、強制はいたしません。お二人は『同盟』にとって必要な人材。わざわざ、私のような若輩と組まずとも、個人的に事態の解決にあたって頂いても結構です」

ここから先は命の保証はしない。

自分と一緒に、死地を歩く覚悟がある者だけ名を名乗れと、冬花は告げる。

「……………」

その言葉に、二人は無言で頷き、姿勢を正した。

真剣見を帯びた彼女の声に、厳粛な空気が駅のホームに満ちる。

「……我は、『同盟』の忠臣にして、断罪の使徒。今、罪を裁き、悪を滅し、正義を成さんとする汝らは何者か？」

これはただの自己紹介ではない。

“神術師”として、正式に名乗りを上げる事。

それは一種の“契約”のようなもの。

だからこそ、冬花は尋ねる。

貴方達は一切、何者であるのかと。

「我らは剣。勝者のみに許された、悪の根本を刈り取る『王者の剣』」

声は高らかに。

二人は声を合わせて、答えを告げる。

「ならば 問おう」

冬花の言葉に二人が跪き頭を垂れた。

彼らは『王者の剣』。

『剣』とは、すなわち道具であり、使用者があつて初めて勝利を掴む事が出来る。

それを全て理解した上で、冬花は問う。

「『世界総合神術同盟』。『四大神術師』第四位。アルヴィン家の佐伯 冬花。シルビア・メリアルの名において尋ねる。汝ら名は？」

“神術師”は自らの師から名を授かつて、初めて一人前と認められる。

シルビア・メリアル。この名前を名乗るのは、何年振りだろうか？

十二の時に与えられた“神術師”としてのもう一つの名前。

頂点に君臨する四つの椅子に刻まれた名前に、返される声は果たして……。

「『世界総合神術同盟』。『王者の剣』所属、ハミルトン家のエレナ・ソルディア。協力要請を受けて参上しました。貴方に忠誠を誓いましょう」

「『世界総合神術同盟』。『王者の剣』所属、トリスタン家のダリア・グラフィード。同様に誓おう」

その問い掛けに、間髪入れずに答える二つの剣。瞬間、誓いは完成された。

「汝らは罪を切り裂く剣。血に染まりし道の先に、我らが楽園を築き上げる『王者の剣』。我が元を集った両名を歓迎しよう」  
そして

「総ての罪人に死を」

「総ての咎人に死を」

『Sophia The Gnosticism（総ての人々に救いあれ）』

彼らは、誓いの言葉をもって“契約”を完了させた。

## 王者の剣に鞘はなく（後書き）

久々に来ましたね。この中二ワールド。

皆さん、黒歴史とか疼きだして、脇のあたりがむず痒くなったりしてませんか？

机の奥底に、秘密のノートとか持ってませんか？

誰にでも、一度はそんな時期がありましたよね？

何か、本気で「かめはめは」を練習し始めたり、特殊な魔眼に目覚めちゃったり。

えっ？ 作者ですか？

そんなの、決まってるじゃないですか。

作者は                      現役の中二病です！ww

## 死神の目覚め

それは、とある少女のお話。

彼女は恐らく、誰よりも“世界”を愛していた。

透き通るように純粋な、全てを包むような愛。

“悪意”を無くそうと、彼女は努力したけど。

そんな彼女を“世界”は拒絶した。

愛をもって接した彼女に、容赦なく冷たい現実を投げ付けたのだ。  
酷いとは思わないかい？

可哀相だとは思わないかい？

でもね、本当の悲劇はここからだよ。

力尽き、息絶える寸前に、彼女は神に祈った。

助けて下さい。救って下さいと。

もしも、神に少しでも慈愛があるなら、彼女は救われていただろう。

しかし、彼女は気付いてしまった。神は人を救わない。

神では人を救えない。出来る事は、悪意を生み出す事だけ。

人間は神の創造物だって、良く言うだろう？

そこで、彼女は考えた。

どうして、神は人間を創ったのだろう？

救う為ではないのなら、一体、何の為に？

ふふっ、彼女はどれくらい考えただろうね？

元々、人を疑う事をしなかった人間だ。

答えを得るのには、途方もない時間を費やした事だろう。

莫大な時間の後に辿り着いた答え。

それは、神が “悪意” をもって人間を創ったと言う事。

ふふ、あはははは！

世界は悪意に満ちている？

そうだよ。そうなんだよ。

当たり前じゃないか？

“永劫の環”<sup>メヒウス</sup>の起源。

悪意の根本は、創造主から放たれたんだから。

無くなる筈がないんだよ。

神が創った“環”を壊さない限りはね。

だからこそ、彼女は決意した。

神を殺そう。

総ての人々を救う為に。悪意の円環を打ち破る為に。

誰よりも“世界”を愛するが故に、“世界”を破壊する。

神の放った“悪意”を消し去る為に、彼女は立ち上がった。

この世界に神なんていないと。

悪意を放つ神など、神ではないと。

虚無の満ちる、灰色の街で彼女は悪魔と契約した。

そして

彼女は“神を殺す者（死神）”となった。

目を覚ますと、強烈な頭痛がオレを襲った。

「痛ッ……！」

まるで、高熱がある時のように頭の奥に鈍い痛みが奔る。

「何だ？ 風邪でもひいたのかな？」

頭に手を当て、気だるい気分の中、何とか身を起こす。その時、ある違和感を感じた。

「あれ……？」

最初に目に入ったのは、大きな暖炉だった。

どうやら古い物らしく、くべられた薪がパチパチと音を立てて燃えている。

アンティークと言うものだろうか？

相当高価なものだろうが、いかなせん知識がないので何とも言えない。

「……………」

此処は何処だ？

不思議に思い周囲を見回すと、オレの部屋とは明らかに違う事が分かった。

床には高価そうな絨毯が敷かれ、正面には全身を写せるような大鏡がある。

天井からは吊るされた小さなシャンデリアからは、淡い燈色の光が放たれ室内を幻想的に彩っている。

「…………えっ？」

何となく鏡に目を向けた瞬間、あり得ないものが目に入った。

此処は何処で、自分がどうして此処にいるのかも、全てがどうでも良くなっていた。

それは 赤。

鏡に映ったオレの姿。

ブレザーの下に着てるＴシャツが白ではなく、真っ赤に染まっていた。

「なんだよ…………これ…………」

分からない。思考が追い付かない。

一体、これは何なのか？ 理解する事を脳が拒んでいる。

「……………ッ!？」

部屋中に満ちる異様な匂い。

恐らく、誰もが一度は目にした事があるであろう 赤い液体。

「ガッ…………あアア!」

突如、頭に激痛が奔る。

「ぐッ…………!」

それが合図となったのか、忘れていた昨日の記憶が頭の中を駆け巡る。

「そうだ……思い出した。オレは昨日、大きな鎌を持った女に追いかけられて……」

次々に思い出していく記憶。オレはあの後、白いドレスの女に助けられて家の前まで逃げた。

どんな道を通ったかは覚えてないが、確かに家までは辿り着いた。それは、はっきりと覚えている。

だが、家の中に入ろうとした瞬間に、何かがオレの腹を貫いた。「待て……じゃあ、何でオレは生きてるんだ？」

昨日の出来事を思い出したオレは、まずその事を疑問に思った。オレを貫いた物……形状から見るに、あれは恐らく立花とか言う女の大鎌だろう。

三日月のような形だったし、声などから推測しても間違いない。

大鎌に貫かれたオレは、かなりの重傷を負った筈だ。いや、あれは致命傷と言っているだろう。

そして、ここで疑問が生じてくる。

どうしてオレは死んでないんだ？

見た所、制服は血だらけだが、腹の傷は治っている。

まさか、全てが夢だったのだろうか？

いや、それはあり得ない。夢と言うにはリアル過ぎるし、第一この大量の血はどう説明する？

ならば、誰かが救急車を呼んでくれて奇跡的に助かったのだろうか？

だが、それも違う。素人目に見ても助からない事は明らかだったし、万が一そうなら、オレが病院にいないのはおかしい。

「なら、どうして……？」

もう一度、考え直そうとした時、不意に一人の少女の姿が頭に浮かんだ。

「水原……？」



水原 真依。何故、彼女の姿が？

関係ないと思い、頭から振り払おうとした瞬間、昨夜の最後の記憶が脳裏に蘇る。

月光に輝く白銀のコート。血の海に佇みながら、オレを見下ろす冷徹な双眸。

「あつ……！？」

思い出した。あの時、真依は確かに現場にいた。

ならば、真依が助けてくれたのだろうか？

でも、どうやって？ もし、オレが逆の立場なら救急車を呼ぶ事くらいしかできない。

それに、これは偏見かも知れないが優依ならばともかく、真依は目の前にオレが倒れていても平気で素通りして行きそうなイメージがある。

「……んっ？」

そんな勝手な想像をしていると、ベッドの上にビニール袋に入った真新しい制服が置いてある事に気付いた。

制服の横にはオレの携帯電話が置かれており、メールの着信を示す光が点いていた。

携帯を開きメールを確認するが、それはとある携帯サイトからのものだった。

配信登録をしているので、特に不自然な事ではない。

オレは、落胆気味に溜息を吐き携帯電話を閉じようとした。

「あれ？ なんだ、これ？」

見ると、画面の右上の方に見たことがないマークが点滅していた。一度も使った事がないが、確かこれは保存メールを示すマークだったと思う。

不思議に思いながら、オレは保存メールBOXを開いてみる。すると

『目が覚めたら、この制服を着て正面の部屋に来なさい』  
行数にして三行。当然アドレスは空欄で、絵文字も改行も一切な

し。

何の飾り毛もない、ただ要件を伝える事だけを目的とした文章がそこに保存されていた。

「要するに、置手紙ってワケかよ？」

メールを送ればアドレスが分かる。手紙を残せば筆跡が残る。

だが、この方法なら手袋でも嵌めていれば何の痕跡も残らない。どうやら、これを残した人間がオレを助けてくれたのだろうが、

全く誰なのか分からない。

まあ、別にここまでしなくともオレはアドレスだけで本人を割り出せるワケでも、筆跡鑑定が出来るワケでもないのだが。

「さてと……」

取り敢えず、オレは服を着替えて、メールの文章通りにリビングに行ってみる事にした。

恐らく、ここはメールを残した奴の家なのだろう。

何故、オレを助けたのか？ 致命傷をどうやって治したのか？

聞きたい事は山ほどあるが、恐らく、そいつに会えば分かるだろう。

「うわあ、凄いふかふかしてるな」

よほど高価な代物なのだろう。

ベッドから飛び降りて、絨毯に足を下ろすと、何とも言えない心地の良さを感じる。

「まあ、仕方ないよな」

そんな絨毯を踏む事に一抹の罪悪感を覚えつつも、オレは扉を開けた。

## 死神の目覚め（後書き）

さあ、震えるがいい！！

どうも、皆さん。今回のクソゲーオブザイヤーが楽しみな作者です。年末には魔物が潜むと言いますし、どうなるか分かりませんね。

次回は、長いのでいくつかに区切る予定です。

読みにくくなるかも知れませんが、ご了承ください

## 契約紋と水色の少女（１）

幸い、目的の部屋は直ぐに見つかった。

暖炉の部屋から出て、正面にあつた大きな扉。

長い廊下を渡つて、いざ中に入ろうとした時ふと思った。

……ノックとかした方がいいのか？

オレの想像が正しければ、一応、命の恩人になるわけだし、やっぱり礼儀は通しておくか。

そう思い、扉を叩こうとすると、

「お待ちしておりました、七瀬様。どうぞ、お入りください」  
聞き覚えのある声と共に、内側から扉が開かれた。

「……………」

中にいたのは、ある意味では想像通りの人物。

裏路地でオレを助けてくれた、白いドレスの少女。

彼女が笑顔で出迎えてくれた。

「あつ……その、ありがとう」

此処は何処だ？ どうして、オレを助けてくれたんだ？

咄嗟に質問をしようとしたが、そのままドアを押さえていて貰うもの悪いので、部屋の中に入る。

「……広いな」

中に入って、まず部屋の広さに驚いた。

オレがいた部屋もそうだったが、此処はもっと広い。

先ほどと同じシャンデリアが天井から三つ吊るされ、暖炉では激しく炎が踊っている。

しかし、次に驚いたのは、本の数だった。

広い部屋の大半を占めるのは、大量の書架。

部屋全体を囲むように、壁づたいに三メートルはあるかという書架が並び、その中に更に二列の本棚が奥まで続いている。

見渡す限りの本の数に、まるで図書館にいるような気分になる。

「えーと、此処は図書室？」

率直な感想だった。

並んでいるのは見たこともないような本ばかりだが、あれだけの家具を揃えている家だ。

それくらいあっても、不思議ではないだろうと思ったが、彼女は首を横に振り意外な答えを口にした。

「いいえ、此処は我が主のお部屋にございます」

「……主？」

言われてみれば、なるほどと思った。

会った時から感じていたが、この少女の振る舞いはまさに従者。なら、その主とやらがオレを助けてくれたのか？

そう訪ねようとすると、少女は突如、深々と頭を下げた。

「申し訳ございません、七瀬様。色々と質問があるとは思いますが、主が待っています。詳しい話はその時にいたしますので、今はわたくしの後について来て頂けませんか？」

「えっ？ ああ、分かったよ」

「ありがとうございます。では、参りましょう」

あんなに頭を下げられては、断るに断れない。

オレは仕方なく、踵を返して歩き出した彼女の後に続いた。

## 契約紋と水色の少女（1）（後書き）

今回の話は長いので、幾つかに分けようと思います。

次回の更新は明日の夜。大体、二時くらいになる予定です。（その時までには、書き終わっていれば……）

## 契約紋と水色の少女（2）

「真依様。七瀬様をお連れいたしました」

少しの間、書架の森を歩き続け、少し開けた場所に出る。

そこには、大きめのソファアールが並び、小さなテーブルが置いてある。

そのソファアールの一つ。

「んっ？ あら、七瀬君。気分はどうかしら？」

そこには、テーブルの上に本を広げ、更に両手に一つずつ本を広げた主　　水原　真依の姿があった。

「み、水原ッ！？ お前、どうして此処に！？」

意味が分からなかった。

どうして、彼女が此処にいるのか？

オレは知らず、そう叫んでいた。

「ふふっ、此処が私の家だから。ただ、それだけの理由よ？」

そんなオレに、真依はいつも通りの冷静な声で答えを返した。

別に大した理由ではないと、言わんばかりに真依は本から目を離さない。

二冊同時に読んでいるのだろうか？

ワケが分からずに佇むオレを他所に、真依は器用に片手でページを捲っていく。

「ちよつと待て。此処がお前の家なら、もしかしてオレを助けたのも……？」

「はい。我が主、真依様にございます」

その答えは、すぐ横から返って来た。

「申し遅れました、七瀬様。わたくしの名は、千里　蓮花。どうぞ、蓮花とお呼び捨て下さい。以後、お見知りおきを」

「ああ……どうも」

にこやかに自己紹介され、どう返していいものかと対応に困る。

そんなオレを見兼ねてか、真依がため息混じりに本を閉じた。

「はあ……七瀬君。取り敢えず、座ったら？　蓮、何か飲み物を用意してあげて」

「畏まりました。それでは、少々お待ちを」

真依の言葉を受けて、不意に横から気配が消える。

見ると、既に蓮花の姿は無く、入口の扉から彼女の後姿が見えた。  
「何から話して欲しいの？　まずは……昨日の事かしらね？」

オレが向かいのソファに座ったのを確認して、真依はそう切り出した。

「やっぱり、オレを助けてくれたのは、水原だったのか」

「うーん『助けた』って表現はちよつと間違いかもね。でも、命を救ったのは私で間違いないわ」

真依は意味ありげな笑みをオレに向けつつ、本をテーブルの上に静かに置く。

その言い回しは気になるが、取り敢えずオレが生きているのは彼女のお陰らしい。

「ありがとう、水原。でも、どうやって傷を治したんだ？　こう言ったら何だが、明らかに致命傷だっただろう」

「ええ、その疑問はもつともね。でもね、七瀬君。それを説明するには、まだ言葉が足りてないの。貴方に分かるように話してあげるから、まずは私の質問に答えてくれるかしら？」

「えっ？　あ、ああ、それは構わないけど……」

唐突に投げられた、真依からの問い。

オレは戸惑いながらも、静かに頷く。

「そう。なら、貴方は今までに“破戒”と言う言葉を聞いた事があるかしら？」

「“破戒”？　いや、初耳だけど」

オレが首を横に振ると、真依は何故か安心したように息を吐いた。  
「はあ……そう。じゃあ、貴方は何か、他人とは明らかに違う力を持つていたりしない？　常識では考えられない。例えば、そうね……」



…何もない空間から扉を出現させたりとか？」

「ッ!？」

思い出すのは、裏路地の出来事。

何の兆候もなく出現した扉。そして 黒い刀。

「思い当たる節はありそうね。大丈夫よ。化け物みたいに扱ったりしないから、正直に話してみて」

真依の言葉には、何故だか説得力があった。

他人に話したら、頭がおかしい奴だと笑われる話も、彼女なら真剣に聞いてくれる。

そう思ったから……。

「ああ、多分持つてるよ。扉から黒い刀を出せる……筈だ」

自然と口から言葉が漏れていた。

実際に、今やれと言われても出来るわけではないので、最後にそう付け加えておく。

「なるほど、まだ自分の意思ではまだ無理……って事ね。分かったわ。まずは、そこから説明してあげる」

真依は息を一つ吐くと、話を切り出した。

「さつき、貴方が言った能力。それは“破戒”と呼ばれているわ」  
「……“破戒”？」

聞き覚えのない単語に、オレは思わず眉を寄せた。

「簡単に言つと、一部の人間だけが使える、特殊な力よ。ほら、貴方が持つてる、扉から刀を出せる能力。それが“破戒”よ」

オレの刀や、立花の大鎌。

“破戒”とは、それらの事を言うんだろう。

「“破戒”について分かっている事は、たった一つだけ。一人につき一つしか宿らないって事よ。例えば、身体能力を向上させたり、手から炎を出せたりと、種類は様々だけど、それをどちらも兼ね備えている者はいない。武器だってそれと同じ。剣、刀、槍、銃。他にもあげればキリがないけど、それを二つ以上は持てない。今、分かっているのはそれだけよ？ “破戒”が一体何なのか？ 何人も

の学者が研究を続けているけど、未だに詳しい事は分かっていないわ。いわゆる、詳細不明ってヤツよ。ある人は、進化を遂げた人類の姿だと言うし、ある人は魔法の一種だと言う。終いには、神の恩恵を授かったのだ、とか言い出す人もいる。まあ、私からしてみればどれも的外れだと思うけどね」

バカらしいと言わんばかりに、真依は肩を竦める。

「じゃ、じゃあ、一体何なんだ？ その……“破戒”って言うのは」「これは一つの仮説にすぎないけど、“破戒”は心を具現化させたものだ、私は思うの」

「心を……具現化？」

意味が分からない。

つまり、何かの魔法みたいな力なのだろうか？

「ええ、人間の精神エネルギーが、現実を侵食して形を成す。そして、心を形に出来る人間を“破戒者”と言うの。まあ、もっと簡単に言えば“破戒”は、貴方の分身みたいなものかしら」

さらに、と言い放つ真依に、オレの困惑は更に募っていく。

「破戒”には、それぞれ段階ごとに名前が付いているらしいわ。第一段階が“具現（Germination）”。第二段階の“戒放（Fleurir）”。そして、もう一つの最終段階。これらはね、貴方自身の“想い”から生まれたものだからよ。そう考えた方が分かりやすいかも知れないわね」

「オレの“想い”？」

真依の言っている事は、相変わらず意味が分からない。

だが、何故だろう？ 理由は分からないが、何故か嫌な予感がある。

「“想い”……もしくは、願いかしらね。ねえ、七瀬君。何処で、どうやって“破戒”に目覚めたかは知らないけど、その時の貴方は何を考えてた？ 何を想っていたの？」

ぞくりっ！ と、背筋に冷たいものが奔る。

あの時、オレが想っていた事。それは

「死にたくない。そう想つたでしょう？」

そうだ。あの黒い刀を掴んだ時、オレは確かに思った。でも……。

M e m e n t o M o r i (死を想え)。

果たして、本当にそれだけだろうか？

死にたくない。確かに、そう想つた。

それが、オレの“想い”と言われれば、間違いは無いんだろう。だけど、オレはこうも思っていた。

“想い”だけじゃ、何も出来ない。

幾ら、死にたくないと思つても、それが何にもならない事を知っていた。

だから、きつと違う事も想っていた筈だ。

『ならば、どうするんだい？』

オレは、その問いに何と答えた？

不気味に笑う悪魔に、オレは何と告げた？

思いつけ。大切な事なんだ。

しかし、その時の記憶はまるで霧が掛かったように、忘却の向こうに隠れている。

「その、水原。オレは……」

何か、恐ろしい“想い”を抱いているのかも知れない。

何故だか分からないが、そんな気がする。

本当に恐ろしい、真つ当な人間なら考えもしないような狂った“想い”。

無関係の人間を、見ず知らずの通行人を、隣の誰かを。いつ巻きこむとも知れない爆弾のような“想い”。

そんな危ないモノを持っていると、彼女に告げようとしたが。

「ううん。何も言わなくていいわ。今は　それでいいのよ」

だと言つのに、真依の口元に浮かぶのは全てを包み込むかのような優しい笑み。

「悲劇が起これば、そこに憎しみが生まれる。人間なんて、そんなものよ。貴方の“想い”が何なのか、私には良く分からない。でも、

今はそれでいいじゃない？ 思い出さない方が幸せな記憶だってあるわ」

その口調は、いつも通りに冷たい。

確かに冷たいのだが、その中には優しさが感じられる。

「だから、私は貴方を否定しない。私には、そんな権利もなければ資格もないわ。貴方の“想い”がどんなものでも、それが貴方の在り方なら、逆に胸を張って、立派に構えていいとも思っくらいよ。でもね……」

それは、本当に分かりにくい優しさ。

諭すように、導くように、真依は言葉を続ける。

「でも、それを向ける相手を間違えてはダメよ。力があれば、何でも許されるワケじゃない。時と場所。それに、力を行使する人間を正しく見極めること。それが“破戒者”と“殺人鬼”の違い。これだけを忘れなければ、どんな”想い”であつても大丈夫よ」

それだけを告げると、真依は一つ息を吐く。

“破戒者”と“殺人鬼”。一歩間違えれば、オレはどちらにも成り得る。

それを、忘れるなと真依は言う。

ああ、なるほど。

恐らく、真依はそれを伝えようと、オレを屋上に呼んだのだろう。ちよつとしたトラブルに見舞われて、それが一日早まってしまったが、多分、真依ならそうするだろうと何となく思った。

## 契約紋と水色の少女(2) (後書き)

更新時間が少し遅れて申し訳ありません。

この章は、全体的に説明が多いですね。

ちなみに、設定については作者が三年かけて考えましたが、よくある中二設定なので、読み飛ばして頂いても多分、問題ないです。

### 契約紋と水色の少女(3)

「さて、じゃあ今度は“神術”についてなんだけど……ねえ、七瀬君。もしも、私が魔法使いだって言ったら信じるかしら？」

「……はあ？」

一瞬、その言葉の意味が分からなかった。

子供の頃、誰でも一度は聞いた事はある、魔法使い。

それが、優しい魔法使いだったり、悪い魔女だったりとは違っているが、現実には存在しない空想の人物だという事は共通している。

「あら、分からない？ おとぎ話に出てくるような、あの魔法よ。まあ、正確には“神術”なんだけど、貴方からすればどっちも変わらないでしょう」

現実での自称・魔法使いは、恐らく詐欺師かペテン師のどちらかだろう。

だが、真依はどちらにも見えないし、「冗談でこんな事を言っている様子でもない。

「……信じない、って言ったらどうする？」

「信じさせてあげるわ」

即答だった。一瞬の間も置かず、さも当然のように言い放つ真依。

『A holy wall obstructs the way you should advance. (聖なる障壁が、汝の行く手を阻害する)』

突如として唱えられる、意味不明の言葉。

あまり詳しくは無いのだが、単語などからして恐らく英語だろう。

「あつ……！」

オレはそれを知っている。

昨夜、いきなり襲ってきた男。名前は確かアレルドと言っただろうか？

“神術師”を語る彼が唱えていた言葉。

それと同じ感じがする。

「そのまま、手を前に伸ばして私に触れてみて。私は魔法でそれを阻止するから。あっ、何なら殴りかかってきてもいいけど、手が痛いからお勧めはしないわね」

言われなくても、そんな事はしない。

オレは取りあえず言われた通りに、真依の肩に触れようと手を伸ばす。

しかし、

「……あれ？」

触れられない。

まるで、真依の前にガラスの壁があるみたいに、オレの手は見えない何かに阻まれる。

「分かった？　これが魔法よ。この世界には“破戒”以外にも、不思議な力があるってことは、理解できたかしら？」

「ああ、一応……な」

「ふふつ、物分かりが良くて助かるわ」

どれだけ物分かりが悪くても、これだけの事を見せられれば信じるしかない。

現に、オレは昨日、“神術師”に殺され掛けてる。

ここまで来れば、もう認めるしかない。

この世界には魔法も“破戒”も実在する。

間違っていたのは、オレが今まで常識だと思っていた知識の方で、その常識に捕らわれていては何も出来ないと言ったことを。

「……お話中、失礼いたします。温かいお茶をお持ちしました」

オレと真依の話が一区切り付いた瞬間。

まるで、それを狙っていたようなタイミングで、横からティーカップが差し出された。

「御苦労さま。あら、それも持ってきてくれたの？」

「はい。七瀬様に説明する際に、必要になるかと思ってお持ちしました」

「そう、悪いわね」

真依の言葉に再び頭を下げる、蓮花。

その背後　彼女が担ぐようにして持っているモノにオレは瞠目した。

「さて、ここからは少し重要な話になるから良く聞いてね……って、七瀬君？」

それは　黒い棺桶。

あの時は良く見えなかったが、形を簡潔に言葉に表すなら、これが最も適切だろう。

西洋風の、よく映画で吸血鬼が眠るのに使う、あの独特の形をした黒い箱。

側面に取手やベルトが付いている事から、どうやらそれはトランクケースのようだ。

しかし、実際に人間の一人くらいなら収まりそうな大きさをしている。

無骨、と言えばそれまでだろう。

棺桶には一切の装飾はされておらず、よく見れば表面も傷だらけだ。

だが、どうしてだろう？

“それ”はそうであるべきで、そうでなくてはならない。

何故か、そんな風に思えてしまう。

「こら、蓮花に見惚れてないで、私の話を聞きなさい」

「……痛ッ！」

呆れたような声と共に、真依のデコピンがオレに炸裂する。

……別に見惚れていたわけではないが、地味に痛い。

「まったく、昨日は優依と仲良くしていたかと思ったら、今度は出会ったばかりの女の子を……ハッ、まさか優依はもう攻略したも同然だから、別の子に狙いを変えたの？　ねえ、こう言うのをどう思



う？」

「そうですね……さすがは七瀬様、とても言いましょうか。本当にわたくしを見て頂いていたのなら、恐縮の極みでございますが……残念ながら、わたくしの粗末な身体では、七瀬様の興味をそそる事は出来なかったようです」

一瞬だけ、蓮花はぎこちない笑みを浮かべると、背負っていた棺桶を地面に下ろす。

「ふふっ、本当ね。本当に……さすが、としか言いようがないわ」

真依がそれを受け取り、表面を軽く指で撫でる。

自らの身長と同じくらいの棺桶に、後ろから抱きつくように左腕を回し、右の手で優しく撫でていく。

「……………」

その光景に、オレは戦慄した。

労わるように、慈しむように棺桶を撫でる真依。

その口元に浮かぶのは、妖艶で残虐な微笑。

例えるなら、それは

「開きなさい……“獄王”」

それは、死者を愛でる魔女。

「ッ!？」

紡がれた言葉は、甘言か、呪言か？

蕩けるように甘く、耳の奥に響き渡る声。

奇妙な感覚が身体を支配していく。

「直感だけで“これ”に気付くなんて、恐ろしい人ね。これだから“破戒者”は怖いわ。まあ、その直感に免じて特別に見せてあげる。かつて、地獄をも制圧したとも言われる、伝説の暴君。“獄王”の

”呪具“を」

開いていく棺桶。それと共に、周囲の気温が一気に下がったように感じた。

「それは……昨日の？」

真依が取り出したのは、昨夜、蓮花が持っていた双剣。

昨日は暗くて分からなかったが、刃の周りには黒い霧のようなものが漂っている。

呪いとかは良く知らないが、それでも確実に分かる。

これは危険だ。触ってはいけない。

「ええ、少しは覚えてるようで安心したわ。あのね、魔法使いつて言うのは、大きく二つに分けられるの。“神術師”と“神導師”。

“神術師”は、さっき私が見せた“現象を発生させる”者。“神導師”は“現象を具現化させる”者よ」

だが、そんな事はお構いなしに双剣を弄びながら言葉を続ける。

「まあ、簡単に説明するなら“神術師”は漫画とかのイメージで大体正解よ。地面に複雑な模様の絵を描いて、変な呪文を唱える。“

詠唱”とか“術式”なんて、素人に説明しても分からないだろうし、別に知る必要もないわ。“神導師”は……そうね、“魔法の武器”を創り出す者って思えばいいわ。ゲームとかで言うと、“武器職人”みたいな感じかしら？」

「魔法の武器“……つまり、その剣みたいなの？」

恐る恐る、オレが双剣を指差すと、真依は満足げに頷いた。

「半分、正解よ。“神導師”が創り出したモノ。それは“神具”と呼ばれるわ。この剣も、元々は立派な“神具”だったんだけど……時間を重ね過ぎて、今では“呪具”になってしまったわ。ほら、有名な職人が作った日本刀とかも、百年くらい経つと妖刀になるでしょう？ だから、これは“呪具”。一応、昔はどこかの国の王様が持ってた聖剣だったみたいだから、それなりの価値はあるわよ。ふふ、使ってみる？」

「い、いや、遠慮しておくよ。何か、触ったらヤバそうだし」

冗談じゃない、とばかりにオレは首を横に振る。

「あら、別に大丈夫よ。大して強力な呪いでもないし、触るくらいなら問題は無いわ。大体、私が触って大丈夫なんだから……ほら、

遠慮しないで」

ニヤニヤと笑いながら、双剣を差し出してくる真依。

オレはそれに何か不吉なものを感じ取り、慌てて真依から距離を取る。

「ちよつと待て！ 絶対、大丈夫じゃないだろう！？ えーと、蓮花さん……だっけ？ 本当に大丈夫なのか、アレは？」

先程から、オレ達のやり取りを無言で見詰めていた蓮花に、救いを求めるように尋ねる。

「いえ、全く大丈夫ではありません。賢い判断ですよ、七瀬様。こんなにも強力な“呪具”、真依様でも小一時間も持ち続ければ命が危ない。普通の人間ならば、十秒で気を失いましょう」

本当に、全く大丈夫じゃなかった。

「ふふふ……冗談はともかく、七瀬君も大体の話はわかったでしょう？」

真依は肩を竦めると、双剣を棺桶の中へと戻し、蓋を閉じる。

「随分と性質の悪い冗談だな。いい性格をしてるよ」

「あら、そんなに褒めないですよ。照れるじゃない」

「……………」

オレの皮肉をさらりと受け流し、真依は棺桶を蓮へと渡す。

蓮花は一礼をしてから、それを受け取ると自然な動きで真依の後ろに立った。

「まあ、色んなことを言っただけど、私が言いたいことは二つだけ。

一つ目は、ある程度の素質があれば、誰にでも神術は使えること。

そして、二つ目は……貴方にも、その素質があると言うことよ」

「えっ……？」

一瞬、真依の言葉の意味が分からなかった。

「な、なあ、水原。聞き間違いだと思うんだが、お前……さっき、

オレにも“神術”が使える、って言わなかったか？」

「ええ、言ったわよ。何か問題でも？」

何食わぬ顔でそう告げる真依に、オレは思わず眉を寄せた。

ちよつと、待てよ。オレは、今まで普通の生活を送ってきた、ごく平凡な学生だぞ？

確かにワケの分らない力が使えたりするが、これ以上の非日常は勘弁してほしい。

「七瀬様、無理に“神術”を非日常的に考える必要はありませんよ。“神術”は……そうですね。貴方が普段、学校で学んでいる数学や英語。それと、何ら変わりありません」

真依の言葉に頭を抱えるオレを見兼ねてか、今度は蓮花が口を開く。

「例として数学を上げるなら、得意な者と不得意な者で試験の点数に開きはありましよう。しかしながら、不得意であつても時間をかければ問題は解ける。“神術”も、これと同じことです。僅かでも才能があるなら、誰であつても“神術師”になれる。そして、貴方にはその才能がある。真依様が申し上げたのは、そう言うことです」

「“神術”の才能だつて？ 待て待て、そう言うのつてさ、何か特別な家系とかじゃないと駄目なんじゃないか？ ほら、何百年も続いている“神術師”の家系とかさ」

いきなり、貴方は神術師だ、なんて言われても信じられるわけがない。

オレは取りあえず、自分が知つてゐる魔法使いのイメージを上げてみた。

確か、何かの漫画で読んだ魔法使いは、そんな感じのことを言つていた気がする。

「へえ、意外に知識はあるじゃない？」

感心したように呟いたのは、真依だつた。

「貴方の言う通り、確かにそう言うのもあるわ。でもね、七瀬君は“神術師”を遠い存在だと思ひ過ぎてゐるわ。“神術師”なんて、もつと身近よ。本人が気付いてないだけで、“神術”の才能を持つてゐる人だけなら、世界の人口の約七割を占めてゐるわ……まあ、説明よりも実際にやつた方が早いわね」

そう言つて、真依は右手をオレに向けて差し出してくる。

「私の右手のあたりに、何か見えるかしら？　良く目を凝らして見て」

「えっ……？　あ、ああ……」

オレは言われた通り、真依の右手に目を向ける。

しかし、そこには何も見えない。一体、真依は何がしたいのだろうか？

「水原、何も見え……なっ！？」

その瞬間、今まで何もなかった筈の真依の右手に、蒼い霧のようなものが出現した。

「どうやら見えたみたいね。一応、説明しておくと、それが“魔力”よ。“神術師”になるための条件。それは“魔力”が見えること。どう？　これで納得したでしょう？」

満足げに言い放つ真依に、オレは言葉を失う。

何だか、今まで生きてきた日常が嘘のように思えてきた。

「さて、ここで最初の質問に答えたいのだけど……ねえ、七瀬君。

“神術師”って、どうすればなれると思う？」

「どう、って……“魔力”が見えれば、もう“神術師”なんじゃないのか？」

オレの答えに、真依は呆れたように首を横に振った。

「はぁ……あのね、七瀬君。私が言ったのはそんな意味じゃないの。“神術師”に必要な知識と経験。それを、どうやって身に付けるかって聞いたのよ？」

そうだ。例え“魔力”が見えたとしても、肝心の“神術”を使えなければ意味がない。

実際に。オレは“神術”なんて使えないわけだし……。

「そうだな……誰かに、教えてもらうんじゃないのか？」

何気なくそう呟くと、真依は苦笑交じりに頷いた。

「ふふっ、その通りよ。“神術師”になる為には、誰かに弟子入りする所から始まる。“神術師”の師弟関係。私達はその関係を、」

師』と『弟』と呼ぶのだけど、その証が……これよ」

言葉と同時に、真依が右腕を肘あたりまで捲り上げる。

「……ッ!？」

それは 荊いばらの蔓つる。

禍々しい程に紅く、そして美しい荊の刺青。

それが、真依の右腕に螺旋状に巻きついていた。

「この腕に刻まれた “契約紋”。これが、あの魔女と結んだ、契約の証……」

自らの右腕を見詰めながら、真依は静かに呟く。

“契約紋”。複雑に絡み合いながら、腕を覆う美しき荊の刺青。

それは、さながら彼女を苛む棘の檻。

「当然ながら、これは『弟』の方にあたるのだけど……まあ、あまり人様に見られたくないわね」

悲しむように、懐かしむように揺れる真依の瞳。

「……………」

普段とは違う表情に、オレは何と声をかければいいか分からなかった。

「さて、次はこっちょ」

気を取り直すように真依は袖を下ろすと、今度は左手を同様に捲り上げる。

「ふふふ、綺麗でしょう?」

真依の左腕にあったのは、無数の文字式。

肘から手首までを覆いつくすように刻まれたそれは、花の如き鮮やかな青ではなく、深海の如き深い青でもない。

例えるなら、蒼穹の如く澄んだ蒼。

まるで芸術の如く、煌々と蒼き光を放つ文字が螺旋を描き、眩いばかりに輝いている。

「これが、もう一つの “契約紋”。まあ、柄じゃないんだけど、こっちは『師』の方に当たるわね」

照れたように笑いながら、左腕を撫でる真依。

確かに、右腕の刺青からは束縛するような圧迫感を感じるが、左腕からはそれを感じない。

むしろ 何かを包み込むような、優しさを感じる。

「契約紋”はね、半人前の“神術師”が『師』となった“神術師”から“魔力”の供給を受けるために結ぶものよ。つまり、契約を結んだ“神術師”同士なら、“魔力”の受け渡しができるの。ここまでは、いいかしら？」

要するに、“契約紋”は“神術師”同士を繋ぐ証なのだろう。

契約を結んだ “神術師” は、知識も“魔力”も『師』からバツクアップを受けられる。

「ああ……だけど、それが何の関係があるんだ？ オレが聞きたいのは、致命傷を治した方法だ。別に、“神術”の話なんて聞かないぞ？」

今までの真依の説明は、正直に言えば半分も理解できていない。第一、何でそんなに詳しい事を、オレに教える必要があるのかも分からない。

「ふふっ、それはね……」

真依の口元に浮かぶのは、ゾツとする程に妖しげな微笑。

反射的に、危機を感じ取るもオレに出来ることは何もない。

「こつ言つ事よ！」

まるで、見せつけるように真依が左腕をオレの目の前に突き出す。

『 “契約紋”を双方起動。『師』から『弟』に、“魔力”の譲渡を命令する』

宣言するように高らかに、真依が告げた瞬間

「なっ……！？」

真依の左腕から放たれた、青い閃光。

それが、オレの右腕に直撃し、吸い込まれるように消えていく。

「えっ……な、何だよ、これは！」

その刹那、身体中に広がる何とも言えない心地の良さ。

まるで、何かが身体を満たしていくような、そんな感覚。

「右腕を巻くつてみなさい。そうすれば、全てが分かるから」  
嫌な予感がする。

今までの真依の言動。それから、先ほどの出来事。

巻くつてはいけないと、頭では分かっているながらもオレの手は止まらない。

「……………」

肘のあたりまで制服を捲り上げると、そこにはある意味、予想通りのものが刻まれていた。

真依の左腕で光る、蒼い文字の羅列。

オレの右腕には、それと同じものが輝いていた。

「言っておくけどね、それは貴方を助けるためにした事よ。貴方の傷は深く、回復系の“神術”を掛けても、治しているに死んでしまつ可能性が高かつた。だから、“契約”を結んで、私が“魔力”を送り続けている間に蓮が傷を直したの。感謝こそされても、恨まれる筋合いはないわよ？」

言い訳をするような真依の口調に、思わず苦笑が漏れた。

そんな事は、言われなくても分かっている。

「へえ…………意外と冷静なのね。もっと驚くかと思ったのだけど」

感心するように真依は呟き、わざとらしく肩を竦める。

「おい、水原。オレが今日だけでどれだけ驚いたと思ってるんだ？  
これだけ驚けば、さすがに耐性が付いてくるさ」

「ふうん、なるほどね」

ここまでくれば、もう驚かない。

オレは一つ息を吐くと、ゆっくりと袖を下ろす。

「まあ、冷静なのは好都合だね。貴方は、これから重要な選択をしなければならぬのだからね」

「選択？」

「そう。貴方には二つの道があるわ。私と来るか、それとも街に残るか？ 良く考えて選みなさい」



真依の口から放たれた言葉に、オレは思わず眉を寄せる。

「水原……その、一つ目の意味が分からないんだが？」

「さつきも、言ったでしょう？ この“契約紋”は師弟関係を表すものだって。これは、貴方と私にも適応されるのよ？」

真依は短く鼻を鳴らすと、捲り上げた腕を元に戻す。

すると、そのタイミングを見計らったように、蓮花がオレに分厚い紙の束を差し出してきた。

「これ、何だよ？」

「“神術師”が“契約”を結ぶ際の、規約の一部です。重要な部分のみ抜粋いたしましたので、軽く目を通していただけるといいかと思います」

蓮は一部と言っているが、軽く十枚以上はある。

しかも、内容は全て英語で書かれているらしく、いつも単位ギリギリの成績しかないオレには、辞書を使っても読めそうになかった。

「あー、水原。日本語に訳してくれると助かるんだけど……」

「ふっ、こんなの必要ないわ」

真依はオレから紙を奪い取ると、丸めて近くにあったゴミ箱に投げ捨てる。

だが、蓮花はそれを当然のように見送り、一礼して真依の後ろに戻った。

「私は、“神術師”のルールに捕らわれる気は無いのよ。元々、その規約だって『同盟』が決めたものだし、守る必要なんかないわ。だから、単刀直入に聞いわ。ねえ、七瀬君」

真依はそこで一度言葉を切ると、少し間をおいて思いもよらない事を切り出した。

「貴方、“神術師”になる気はある？」

## 決断の時

「貴方、“神術師”になるつもりはある？」

思いもよらない事を尋ねられ、オレは激しく困惑した。

「おいおい、ちょっと、待ってくれ。いきなり、そんな事を言われてもどう反応していいのか分からない。そもそも、“神術師”の事も良く分かっていないんだぞ？ 命を救って貰ったのは感謝しているけど、オレは……その……」

そんな得体の知れないものになるつもりは無い。

言葉には出さなかったが、オレの態度で真依にはそれが伝わったらしい。

「まあ、聞きなさい。昨日、貴方を襲った男。アイツは『神術同盟』って言う組織に加盟してる“神術師”なのよ」

「『神術同盟』……？」

そう言えば、あの男は何度かそんな事を言っていた気がする。

「そう。正式名称は『世界総合神術同盟』。世界中の“神術師”集う大組織で、“破戒者”の事を目の敵にしている奴らよ。その組織に、貴方は狙われてるわ」

驚愕に目を見開くオレを他所に、真依はため息交じりに言葉を続けた。

「街に残るなら、『同盟』と戦い続ける覚悟が必要よ。もちろん、無事でいられる保証は無いわ」

街に残るなら、覚悟を決める。

それは案に、死を覚悟しろと言っているようなものだった。

「なら、“神術師”になると言ったら？」

「そうね。まずは、この街を出るわ。『同盟』の包囲網から逃れつつ、安全な所まで行ったら、貴方を一人前の“神術師”として育てあげるわ。“神術”だけじゃなくて、身の隠し方やお金の稼ぎ方なんかも含めて、私の知識を全部教え込んであげる。そうね……ざ

「つと五年もあれば、一人で生きていけるようになるわ」

どちらにしろ、日常には戻れない。

真依の目は、そう語っていた。

「それで、どうするの？ まあ、急に決めろって言うのも何だし、お茶でも飲んだら？ 蓮花が入れたお茶は……あら？ 今日珍しい葉を使ってるのね。手に入れるのが大変だったでしょう？」

オレの前に置かれたお茶をみて、真依が感嘆の声を上げる。

紅茶か何かだろうか？

カップに注がれた、綺麗な赤色の液体。

それが、良い香りを放っていた。

「いいえ、それ程でも。七瀬様、どうぞ召し上がって下さい。疲労回復、及び眠気覚まし等の効果がありますので、目覚めの直後にはびつたりの代物です」

「ええ、じゃあ、せっかくなので頂きます」

取り敢えず、気持ちの整理をしようと、オレは進められるがままに、カップを口に運ぶ。

一口含むと、花のような良い香りと、ほんのりとした甘さが口いっぱいに広がった。

「……美味しい」

オレが素直な感想を口にする、蓮花は困ったような笑みを浮かべ、真依は呆れたようにため息を吐いた。

「ありがとうございます。しかし、他人の家で出された飲み物を、そんなに簡単に口にしてしまうのは、如何なものかと。毒が入っている可能性もあります」

「えっ？ 入ってるのか？」

飲んだ時には、変な味はしなかったように思うが、まさかこのお茶にも……。

「いいえ、入っていません」

蓮花の言葉に、オレは思わず手に持ったカップを凝視したが、返された答えに胸を撫で下ろした。

「安心して居る場合じゃないわ。蓮はこれからの話をしてるのよ。どちらを選ぶにしろ、今まで通りにはいかないわ。それとも……貴方、まさか自分が、まだ一般人だと思ってるんじゃないでしょうね？」  
安心したのもつかの間、今度は真依が不機嫌そうにオレに問う。

まだ一般人だか思ってるんじゃないでしょうね？

その問い掛けは、オレの心に深く突き刺さった。

「……いけないのか？」

一般人ではない。なら、オレは何だと言うのだ？

“神術師”か？ それとも“破戒者”か？

どちらにしても、オレは嫌だ。

「一般人だと思っていたら、いけないのかよ！？」

知らずに、オレは立ち上がって叫んでいた。

オレは日常に帰りたい。

オレは普通に過ごしたい。

別に、大金持ちになりたいとか。そんな特別な事を望んだわけではないのに。

どうして、こんな事に巻き込まれなくちゃいけないんだ。

真依には悪いとは思ったが、やり場のないこの気持ちを何処にぶつけばいいのかが分からなかった。

「貴方がどう思おうとも、『同盟』はそう思ってくれないわ。正義に反する者を殺す。徹底的に、是非もなく。相手が女子供でも、容赦なく斬り捨てる。それが……『神術同盟』のやり方よ」

そんなオレに対して、真依は冷静だった。

いつも通り冷静に、オレに事実を突き付けて来る。

「貴方にとってみればいい迷惑よね？ なりたくもない“破戒者”になって、いきなり命を狙われて。今まで生きて来た世界が、一晩で崩れ去った。その上、今度は選択肢まで出てきて、何が何だか分からないでしょう。でも……それでも、貴方は選ばなければならぬのよ。あまり時間はあげられないけど、十分に考えて。他人の意見じゃなくて、貴方自身が決断して。でないと、この理不尽な世界

で生きていく事は出来ないから」

「なんだよ、そんな事は                    ツ!？」

言いたい事は山ほどあった。

ふざけるなど。そんな事なんて知らない。

この胸の内に滾る怒りをぶつけてやるつもりだった。

「……………」

だが、それは出来なかった。

オレはこう思っていたんだ。

真依はいつものように、冷徹な相貌で、感情の無い視線を向けているものばかり。

しかし、今オレの目の前にいるのは、何かに耐えるように唇を噛み締め、俯いて拳を震わせる一人の少女。

その表情が酷く哀しげで、オレはそれを                    過去に何処かで見たような気がした。

「七瀬様。申し訳ありませんが、今日はもうお引き取り下さい。真依様もお疲れのようですし、七瀬様もお気持ちを整理する時間も必要でしょう?」

「えっ?    ああ……………」

言われてみれば、その通りだった。

こんな事を今すぐ決めると言われても、決められる筈がない。

「ちよっと、何を勝手に。私は疲れてなんかいないわ。それに、七瀬君を一人で帰すのは危険だわ。また、『同盟』に襲われたらどうするのよ?」

「ご心配なく。七瀬様はわたくしが家まで送ります。それに、真依様はお疲れになっていと思いますよ?    その証拠に、すこし目が赤いように見えます。横になられては如何でしょうか?」

蓮花の言葉に、真依は慌てて目を擦り始める。

別に赤くはないと思うのだが、蓮花からはそう見えたのだろうか?

「さあ、参りましょう、七瀬様。出口はこちらです」

「あつ、ちよっと、蓮花!    まだ話は……………」

真依が何かを言い掛けるが、それよりも早く、蓮花はオレの手を引いて書架の森へと歩みを進める。

本の間を歩いている間、オレは先程見た真依の哀しげな表情が、ずっと脳裏に焼き付いて離れなかった。

## 決断の時（後書き）

今日は、夏休みの最終日ですね。

学生の皆さんにとっては、宿題の追い込み日だと思います。

ちなみに、私はそうでした（笑）。

あつ、もちろん、夏休みが終わっても、毎日の更新は続きますよ。多分、しばらくは続けられると思います。

だんだんとリピーターの人が増えていくようで、嬉しい限りです。いつも、見てくれている人達には心からの感謝を。

## 帰り道

水原邸から出ると、時刻はすっかり深夜だった。

「真依をあまり悪く思わないでやって下さい。あの子は、とても優しい子です。あれでも精一杯、七瀬様を救おうとしているのですよ」  
その帰り道、今まで無言だった蓮花が、突如としてそう呟いた。

「えっ……？」

オレは思わず耳を疑った。

今、蓮花は『真依』と言ったのだ。

「ふふふ、驚きましたか？ 別に、強制されてそう呼んでるわけじゃないませんよ。むしろ、いつも呼び捨てにしてくれて言われるくらいです」

「へえ、オレはてつきり蓮花は水原の弟子なんだと思ってたけど…

…じゃあ、何であんな呼び方を？」

素朴な疑問だった。

蓮花は真依の弟子だから、言う事を聞いているのだと思ったが、  
どうやら違うらしい。

「あの子が好きだから……では、答えになりませんか？ それに、わたしは真依から“契約紋”は貰ってませんよ？ あの子から貰ったのは、もっと大切なものです。他人からしてみれば、当たり前なものかも知れませんが、わたくしにとっては何よりも大切なものでした」

そう告げて、何かを思い出すように蓮花は虚空に目を向ける。

一体、彼女の目には何が写っているのだろうか？

それを知る術は、オレには無い。

「オレは……どうすればいいんでしょうか？」

もう、何もかも分からなくなっていた。

この先、どうすればいいのか？

オレは日常には帰れないのか？



答えの出ない疑問が、頭の中をぐるぐると回っていた。

「それは、七瀬様がご自身で決断しなければなりません」

優しく、そして残酷に蓮花は告げた。

やはり、自分で答えを出さなければならぬのだろうか。

「今までの常識が否定され、さぞかし戸惑っている事でしょう。そして……真依も戸惑っています」

「……水原が？」

意外な言葉だった。

一見、冷静に見えた真依を、蓮花は戸惑っていると言う。

「はい。真依は、今まで我流で生き残る術を見出してきた子です。当然、技術は人から盗むものであり、教えて貰った事は一度もない。だから、自分に何かを教える事が出来るのか、不安でたまらない筈です」

蓮花の言葉に嘘はないように思えた。

長年の付き合いである彼女には、オレには見えなかった、真依の裏側が見えたに違いない。

「だけど、あの子は決断した。血の海に沈む貴方を見て、わたくしに土下座までして頼みました。彼を救ってくれと。あの子が頭を下げて頼んだのは、今まで合わせて二回だけです。真依は、どうしても貴方を救いたかったようですね」

蓮花は上機嫌な笑みを浮かべて、夜道を歩く。

あの真依が土下座をした？

正直、信じられない気持ちでいっぱいだったが、それ以上に信じられなかったのは、真依がそうまでしてオレを救おうとした事だ。

「どうして、水原はオレを……？」

何故、そこまでののか？

意味が分からなかった。

同級生ではあるが、殆んど話した事すらない。

それこそ、他人同然のオレをそこまでして助けようとする理由が分からない。

「それは、真依に直接聞いて下さいな。私が話していい事ではありませんので。あの子が答えてくれるかは分かりませんが、嘘だけは吐かないと思います……さて、そろそろ到着しましたね」

言われて前を見ると、オレの家は直ぐ目の前だった。

玄関前には血の跡らしきものは残っておらず、真依達が上手く処理してくれたらしい。

「明日は学校に行きますか？ もし、休む場合はわたくしの携帯に連絡を。七瀬様の護衛に着きます。それと、番号は真依の物も一緒に、登録しておきましたので、良かったらお使い下さい」

別れの挨拶を告げて、一礼と共に去っていく、蓮花。

その手際の良さに、肩を竦めつつオレは家の敷居を跨いだ。

## 帰り道（後書き）

夏休み中に小説を書きあげようと思っていたんですが……見事に、失敗しました（笑）

ゲームの誘惑が強すぎて、打ち勝てません。

戦国姫が面白すぎて、気が付いたら朝になっていましたよww

## 優しさのカタチ

家から出ると、煌々とした朝日がオレを出迎えた。

「……ッ！ 眩しいな」

学校までの距離は、家から約3km。

普段は何ともないその道のりが、今日はやけに長く感じた。

「……………」

不意に誰かに見られているような感覚に襲われ、オレは恐る恐る後ろを振り向く。

「誰もいないな」

そして、今日で何度目になるか分からない溜息を吐く。

この一連の動作を何度繰り返したか分からない。

気にし過ぎだということは自分でも分かっているつもりだが、昨夜のことを思い出すだけで背筋が寒くなる。

今まで感じたことのない死の匂い。あの大鎌の少女は、それを全身に纏っていた。

まるで、死神のように。

「考え過ぎ……だよな」

大きく息を吐くと、丁度大通りに出る。

ここは既に桜花市に入っており、通勤や通学に向かう人々でこつた返している。

オレは人の流れに乗りながら、いつものように学校を目指す

私立桜花高等学校。そこが、オレの通う高校の名前だ。

偏差値は中の上で結構高く、当時の学力では合格はギリギリのラインだった。

桜花高校に合格出来たのは本当に偶然だった。

何故か、担任から桜花高校の受験を強く奨められ、半分は模試のつもりで特待生入試を受験してみた。

結果、偶然にも合格する事に成功し、オレは特待生として桜花高

校に入学した。

恐らく、適当に解答した選択問題が当たっていたのだと思うが、合格出来たのが今でも不思議なくらいだ。

「まあ、運も実力の内だよな」

この学校は、進学校ではあるが比較的自由が多い高校で生徒からの人気が高い。

簡単に言えば、校則が甘いのだ。

多少、髪を染めている生徒がいても基本的に教師は黙認している場合が多い。

なので、オレのクラスでも髪を染めている生徒はあまり珍しくない。

さすがに、髪を全部水色に染めるのはやり過ぎだと思っただが、どうやら彼女は特別らしい。

もはや教師も諦めているのだろう。

オレは、真依とは二年になってから同じクラスになったが、彼女が教師から注意を受ける姿を一度も見た事がない。

「まあ、何か不思議な奴なんだよな。水原って……」

「んっ？ 私がどうかした？」

オレが呟いた瞬間、背後から声が返る。

「えっ!？」

驚いて振り返ると、オレの目の前には優依と真依が立っていた。

「おはよう、七瀬君ッ！ 今日もいい朝だよな」

「ああ……おはよう」

ニコニコと微笑みながら、元気よく挨拶をしてくる優依。

そんな優依の後ろに立った真依が、鋭い視線をオレに向けてくる。

……昨夜の事は話すなど、その目が語っていた。

「お、おはよう。水原……」

分かっているよ、と返しつつ、真依の目に威圧されながらも、取りあえずオレは挨拶をする。

「……………」

真依は不機嫌そうにオレを一瞥すると、無言で横をすり抜けて行く。

「……蓮花が直ぐ近くに控えてるわ。安心して登校して大丈夫よ」  
オレのすぐ横で、優依には聞こえない声で真依は囁く。

「ッ！」

それだけ告げると、真依はそのまま学校へ向かって歩き出す。

「ちょ、ちよっと、お姉ちゃん！ はあ……挨拶くらいしなさいって、いつも言ってるのに」

大きく溜息を吐き、優依は肩を落とす。一見すれば、まるで優依の方が姉に見えてしまう。

「ごめんね、七瀬君。お姉ちゃんには私から言っておくから、気を悪くしないでね」

オレの事を気遣ってか、優依がすまなそうに頭を下げる。

そんな優依に、気にするな、と軽く手を振りつつ、オレは去り際の真依の一言を脳裏に浮かべる。

どうやら、蓮花が近くにいらしいが、それらしい姿は見当たらない。

あんな派手な服装をしているのだ。

目立たない筈はないのだが。

「ね、ねえ……七瀬君」

辺りを見回しながら歩き出そうとしたオレを、優依が後ろから呼び止める。

「んっ？ どうした、水原？ 何か用でもあるのか？」

「いや、別に用って程の事じゃないけど……その、せっかくだから教室まで一緒に行ってもいい？」

遠慮がちに尋ねてくる優依。

一瞬考えたが、特に断る理由もなかったのでオレはすぐに頷いた。

「そうだな……どうせ同じクラスなんだし、一緒に行こうか」

女の子と一緒に登校するなんて、小学生の登校班以来だな。

そんなどうでもいい事を思いつつ、オレは歩き出した。

気分が沈んでいる時は、誰かと話をするといいいのかも知れない。優依の歩くペースは遅く、自然にオレがそれに合わせる形になる。しかし、他愛のない世間話をしているだけで、先ほどの緊迫感は消えており、やっと日常に戻ってこられたような気がする。

「……お姉ちゃんって、変ってるよね」

話しが一段落すると、優依が突然そんな事を言い出した。

「まあ、確かにそうかもな。髪の色とかも相当変ってるからな」

オレは何と答えたらいいか分からず、取りあえず無難に答えを返す。

話しを振って来たとは言え、身内の人間を悪く言われるのは優依もあまり気分のいいものではないだろう。

「あはは……私もあの色は変だと思う。あつ、でも小学生の時は普通だったんだよ。髪も染めてなかったし、口調も優しそうな感じだったよ」

優依は苦笑を浮かべつつ、昔を懐かしむように遠い目をした。

黒髪で優しそうな真依。今の真依からは、とても想像できない。

「じゃあ、水原が変わったのは中学生の時なのか？」

まあ、中学生と言えば思春期の真っただ中だ。

感受性が豊か過ぎて変な風に歪む事もあるだろう。

「うーん、どうなんだろう？ お姉ちゃんが、また日本に帰って来たのは高校に入る少し前だから、中学生の時の事は分からないんだ」  
「えっ……？」

優依の答えは意外なものだった。

日本に帰ってきた？　じゃあ、つまり水原は……。

「帰国子女……なのか？」

思わず口から漏れた問いに、優依は不思議そうに首をかしげた。  
「うん、そうだけど？　あれ？　もしかして、言ってなかった？  
じゃあ、私とお姉ちゃんが、別々に住んでるってのも……」

「ああ、聞いてないな」

完全に初耳だった。

そう言えば、あの家で優依の姿は見掛けなかった。

話しすら出なかった事を考えると、あの家には真依と蓮花しかいなかったのだろうか。

「へえ、そうだったかな？ まあ、いいや。あのね、お姉ちゃんは三年間くらいイギリスに行ってたんだよ。私はあった事ないんだけど、お祖母ちゃんがイギリスにいて、そこで色々と面倒を見てもらったみたい。日本には、高校受験の時に戻って来たんだよ。久しぶりに会ったら、髪の色が変わっててびっくりしたよ。あつ、でも……優しいところは相変わらずだったけどね」

当手を思い出したのか、嬉しそうに笑う優依。

その横顔に、不覚にも見とれてしまった。

「んっ？ どうしたの、七瀬君？ 私の顔に何かついてる？」  
オレが見つめている事に気付いたのか、優依がしきりに顔を気にする。

「い、いや、何でもないよ。それで、水原がイギリスに行ったのは何かきっかけでもあったのか？ 急に、英語が勉強したくなったとか？」

半ば照れ隠しをするように、何気なくオレは尋ねる。

しかし、それが間違いだった。

「きっかけは……お母さんが死んじゃった事かな」

少しの沈黙の後、優依は静かにそう告げた。

「あつ……」

迂闊だった。人が変わるには理由がいる。

大抵は時の流れだったり、周囲からの影響だったりするが、いくつかの例外がある。

その一つが、身近な者の死だ。

両親や兄弟、他にも親友など、死んだ人間が大切であればある程、喪失の悲しみは大きくなる。

悲しみは人を変える。人を大きく変えてしまう。

悲しみの海に沈み、浮き上がって来れない者。



冷たい現実には怒りを覚え、感情のままに行動する者。  
どうなるかは人それぞれだが、オレにはその気持ちが痛いほど理解できる。

地面に足がついてないような、奇妙な浮遊感に襲われ、急に現実が虚構じみてくる。

どんなに優しい言葉も、人の温もりさえ全てが作り物。  
自分が生きている意味さえ、分からなくなってくる。

「お母さんが倒れた時、偶々お姉ちゃんと一緒にいたから、きっと責任感じちゃったんだね。それで、逃げるようにイギリスに行っちゃった……バカだよな。お姉ちゃんの所為じゃないのに、本当に……バカなくらい優しいから」

優依の頭の中に、どんな光景が蘇っているのかは分からない。  
しかし、優依の声に悲しみの色は無かった。

何てことない、日常会話。

おはよう、と言われたら、おはようと返すくらいに自然な声。

「そうか……昔は優しくかったんだな、水原は」

だから、オレはあえてその事には触れない。

これは、ただの日常会話。

何も特別な事なんてない。当たり前のことを当たり前にするような、それくらい普通の事なのだ。

「ふふつ、今のお姉ちゃんからは考えられないよね？」

オレの言葉に、優依は笑顔で尋ねた。

謝罪をする事は簡単だ。

嫌な事を思い出させてゴメン。

実際、その言葉が喉から出掛かっていた。

しかし、この場合は謝られる事が何よりも辛い事を、オレは知っている。

同じく、親を亡くしたオレだからこそ分かる。  
恐らく、優依もその事を知っているのだろう。  
だから、オレを気遣って自然を装ってくれた。

「ああ、そうだな」

ならば、オレはそれに合わせればいい。  
聞いてしまったのなら、責任を取ろう。

過去の失敗は消せない。

ならば、せめてこれ以上彼女を悲しませないように、オレも自然  
を装おう。

何も難しい事ではない。

何故なら、優依は悲劇のヒロインになる事を望んではないのだから。

「やっぱり、優しいね、七瀬君は。でもね、一つだけ勘違いしてるよ」

「勘違い？ 一体、何を？」

そう尋ねた時には、すでに学校の目の前だった。

行きかう生徒達に混じって、真依が校門の所に立っているのが見えた。

どうやら、先に行ってから優依の事をずっと待っていたらしい。

「ふふっ、それはね」

言いながら、優依が手を振ると、真依は不機嫌そうに顔を背けながら小さく手を振り返した。

「お姉ちゃんは、今でも優しいんだよ」

その声は、既にいつもの優依に戻っていた。

## 優しさのカタチ（後書き）

どうも、最近、妹キャラに萌えを感じる作者です。

リアル妹がいても、妹キャラに萌えられるオレって勝ち組ですか？

w w

俺の妹がこんなに（ry

うん。アニメが楽しみです。

## 一時の日常

校門を抜けて、優依と共に昇降口へと向かう。

あの後、真依は一足先に歩き出し、生徒の雑踏の中に紛れて見えなくなってしまった。

何故、校門で待っていたのかは謎だが、真依の行動自体に謎が多いのでそこは気にしないでおく。

「あれ？ 生徒会の人達だ。挨拶運動でもやってるのかな？」

優依が指さした方向には、何人かの生徒が昇降口で挨拶をしている。

確か、今週は朝の挨拶週間だった気がする。

生徒会は大変だな。

心の中でそう思いつつ、上履きに履き替えようとした瞬間、我が目を疑った。

「そんな……嘘だろ」

忘れる筈がない、見間違える筈もない。

昨夜、オレを襲った大鎌の少女がそこに立っていた。

「……………」

まったく考えていなかった訳ではない。桜花学園の制服を着ていたのだから、もしかしたらとは思っていた。

「くっ……………」

だが、どうやら彼女はこちらに気づいていないらしく、何気ない顔で靴を履き替えている。

「七瀬君？ 早く行こうよ」

不意に隣から優依の声が響き、我に返る。

……落ち着け。冷静になろう。

「ああ、悪い水原。先に行っていてくれ。少し、用事が出来た」

まだ、彼女はオレに気付いていないようだが、もし気付かれた時、いきなり昨夜のような事になりかねない。

オレだけなら、まだ逃げられるが、万が一にも優依が巻き込まれるのは避けたい。

「えっ？ うん。じゃあ、先に行くね」

優依が手を振りながら、廊下を歩いていく。

その姿が見えなつたのを確認して、オレはようやく一つ息を吐いた。

これで、最悪の事態は避けられた。なら、後は……。

「んっ？ よう、広樹……って、どうしたんだ？ そんなに驚いて？」

「ッ！？」

いきなり、後ろから声を掛けられ、オレは飛び上がるくらいに驚いた。

いや、実際に少し飛び上がっていたかも知れない。

「な、何だ、達也か。びつくりさせるなよ」

ここまで空気を読まない奴は、オレの知り合いに一人しかいない。オレの親友 荒井 達也は、当然のようにそこに立っていた。

「いや、オレは普通に声を掛けたただけだろ？ っーか、何でそんなに……あつ、お前、まさか。下駄箱にラブレターとか、そんなベタ

な青春ラブコメやろうとしてんじゃねえよな？」

一瞬、何か感づかれたのかとヒヤリとしたが、そんな事は無かつたらしい。

達也は、時々妙に勘が鋭い。

「……………」

「えっ？ マジで？ 凶星？」

どうしたものかと考えていると、達也はその沈黙を肯定と取ったらしい。

オレの肩をバシバシと叩きながら、一人で腹を抱えて笑っている。「いや、お前、マジでウケる。今時、そんな事する奴いるなんて、俺的に世界遺産級の珍しさだぞ。おい、そんな事やめて直球で行けよ。放課後の屋上で告白とか、青春っぽくてお前にぴったりだって」

もう、誰かコイツを止めてくれ。

少し返答を遅らせただけで、ここまで盛大に勘違い出来るのは、もうある種の才能と言ってもいいのではないだろうか？

「ははは、いや、悪い悪い。それで、相手は誰だ？ まあ、隠すなよ？ 何なら、オレが今から呼びだしてやってもいいぜ。遠慮すんなよ、だって俺達は親友だ」

しかし、達也の言葉はそれ以上続かなかった。

「ねえ、ちょっと聞きたいんだけど。キミって七瀬君じゃないかな？」

肩に掛かる僅かな重み。

ああ、振り向かなくても分かる。

この声は聞き覚えがある。

そう 昨日の夜に。

「……立花」

振り向き際に、名を呼んだ事が決定打となったのか、オレの肩に置かれた手に、痛い程の力が込められる。

「悪いけど。屋上まで付き合ってよ。それとも、今ここで始める？」

ニヤリと笑う立花の瞳は、既に赤く染まっている。

こちらの準備は出来ている。後は、お前次第だと目が語っている。

「いや、行きますよ。丁度、貴方とも話がしたかった事だし」

達也の前で不自然な行動は見せられない。

あちらが友好的な態度を取ってくれているのなら、こちらと同じように振る舞えばいい。

「達也。さっきの答えだけど、水原で頼む」

立花に気付かれないように、オレはあえてそう告げた。

「えっ……？ あ、ああ、水原ね？ でも、どっちの？ 姉か？ 妹か？」

「真依の方だ。よろしく頼んだぞ？」

「マジかよ？ あの水色ちゃんかよ？ 正直、あまりお勧めは出来ねえな」

反応から見ても、達也にはそれで伝わっただろう。

「頼んだぞ、親友」

オレはそれだけ告げると、立花に引き摺られるように屋上への階段を上った。

## 踏み出した一歩

「……こんなにもあつさり連いて来てくれるなんて。正直、意外だったよ。てつきり、昨日みたいに逃げ回るのがかと思っただけけど」  
屋上の扉を後ろ手に閉めて、オレは立花と対峙する。

「オレが逃げれば、貴方は追ってくるでしょう？ その時、友達を巻きこむのが嫌ですからね」

「へえ、自分の命が危ないって時に、他人の心配するなんて。いやいや、感心したよ。ほら、何て言ったかな、えーと、自己犠牲？ まあ、呼び方は何でもいいよ。でもさ 私、そう言うの大嫌いなんだよね」

不意に立花の後ろの景色が、不自然に歪む。

『 Melt Down (奪い去れ) 』

辺りに立ち込める、神々しくも禍々しい気配。  
知っている。この感覚は知っている。

『 Emperor of krufieze (貴方の一番、大切なモノ) 』

顕現するは、赤き扉。

鮮血を塗り付けたようなその色に、思わず身の毛がよだった。

「んっ？ どうしたの？ キミもさっさと“破戒”を出しなよ？  
うすら寒い自己犠牲なんかを語ってるなら、“現界 (Germaniation)” くらいは出来るでしょ？」

“現界 (Germaniation)”。“破戒”の第一段階  
目だと言うそれは、恐らくあの黒い刀の事を言っているんだろう。  
「くっ……！」

だが、どうすればいい？

立花はいとも簡単に出現させて見せたが、オレは自分の意志でほいほい出せるような便利な方法は知らない。

「ああ、もしかして、まだ出来ないの？ 何だ、なら最初からそう



言いなよ。ふふつ、そのまま戦っても面白くないから、少しだけ“破戒”について教えてあげる」

大鎌を肩に担ぎ、こちらの現状をあっさりと見抜いた立花は、余裕のある笑みを浮かべた。

「そもそも、“破戒”って言うのはね、自分の“想い”を具現化する事を言うの」

“想い”の具現化。

確か、真依も似たような事を言っていた気がする。

「でもさ、普通なら“想い”が具現化するなんてあり得ないでしょ？ 世界法則で、そう決まってるし。だから“破戒者”は、自らの“想い”を、扉を通じて第二異界へ送り出しているの」

「……第二異界？」

聞いた事が無い単語だ。

昨日、真依から説明を受けた時には、そんな事は言われなかった。

「第二異界は……この世界の一つ上の世界。えーと、“神術師”<sup>ネルト・エデン</sup>達は、確か“神の領域”って呼んでたかな？ まあ、神様とか天使とか、そんな上位存在が居る世界。つまり、この世界の常識が通じない世界だよ。そこではね、人の“想い”は具現化する。そして、“破戒者”は具現化した“想い”をもう一度この世界に戻して、武器として使用しているの。簡単に言うと、扉は“想い”の変換装置なんだよ。この世界では見えないし、何の影響力も持たない私の“想い”が、第二異階ではこの大鎌になる。私達“破戒者”がやってるのは、ただそれだけ事なんだよ？」

つまり、あの黄金の扉は、“想い”を中に入れると、黒い刀になって返ってくる魔法の扉。

この世界の一つ上の世界があるなんて、いきなり言われても信じられないが、何となくオレがすべきことは分かった。

「なら、その“現界（Germination）”とやらをする為には、何かを想えばいいのか？」

「その通り。“想い”のある所に、神の扉はあり。強い“想い”が

“神の領域”への道を開く。この世界の戒めを破る者。それを“破戒者”って呼ぶんだよ」

確かに、あの時は我武者羅に一つの“想い”を抱き続けた。  
立花の言葉を信じるなら、その“想い”が扉を呼びよせたのだらう。

「さあ、始めようか？ “破戒者”同士の殺し合いを。“想い”と“想い”のぶつけ合いを」

刹那、立花の大鎌が炎に包まれる。

離れていても、火傷するくらいの熱気が伝わってくる。

普通に考えれば、立花があれを持っていられる筈がない。

腕まで炎に包まれて、涼しい顔をしていられる人間などいるわけがない。

だが、あの大鎌は立花の“想い”。

第二世界に送られ、形状が変わってもその本質は変化しない。

故に、それは自らの身体の一部に等しく、あの炎は絶対に立花を焼く事は無い。

「ふーん、意外に冷静だね。一応、聞いてもいいかな？ あの傷を、どうやって治したの？ 確かに、止めは刺さなかったけど、致命傷なのは明らかだった。ねえ、どうしてなの？」

それは、当然の疑問だろう。

昨夜、殺した人間が、翌朝には元気に登校して来ている。

逆の立場だったら、軽くホラーだ。

もちろん、立花は驚いただろう。

平然を装ってはいるが、オレには分かる。

わざわざ、オレに“破戒”の事について話したのも、恐らく気を落ち着ける為の時間稼ぎが目的だったのだろう。

内心の動揺を悟られないように、オレの注意を別の所へと向けさせた。

だから、

「それはな、何処かの天使様が助けてくれたからだよ」

嘘は言っていない。

あの時の真依は、まるで天使のようだった。白いコートが、月光を受けて白銀に輝き、迫りくる死の闇からオレを救い出してくれた。

「そう。だったら、もう一回殺してあげるよ。今度は天使でも治せないように、きちんと首を切り落とすッ！」

振り下ろされる刃を寸前で回避する。

大丈夫。今のは予想出来ていた。

命の取り合いは、これが初めてじゃない。

むしろ、昨日は実際に一度殺された。

なら、今オレがすべきなのは、恐怖に震える事じゃない。

「それは、困るな。せっかく助けて貰った命だ。無駄にしたら申し訳がない。それに……」

勝った気になるのは、まだ早い。

何故なら、オレはまだ死ねない。

こんな所で死ねない。だって、オレはまだ……。

「まだ 昨日の答えを伝えられてないから」

それを伝えるまでは、死ねないし、死にたくない。

だから、想おう。

強く、何よりも強く。

その“想い”が形となるまで、強く激しく。

その“想い”を、彼女は何と言った？

それが、貴方の在り方なら、胸を張って、立派に構えろと。

ただ、それを向ける相手を間違えるなど、そう言った。

恐らく、今こそが、決断の時なんだろう。

ここで“破戒”を出せば、もう戻れない。

今まで過ごしていた日常から、非日常へと足を踏み入れる事になる。

今度は誰の意志でもない。他ならない、自分自身の意志で踏み入れるのだ。

言い訳はもう通じない。

今なら、真依の言っていた言葉の意味が分かる。  
覚悟はあるのかと。

自ら足を踏み出す覚悟。最初の一步を踏み出す、その覚悟。  
それがあるなら、私が手を引いてやると。

彼女は、あの時そう言っていたのだ。

なら、何を迷う事がある？

何を戸惑う事がある？

私は貴方を否定しない。

誰かが、それを認めてくれるなら。

オレはただ、その自分勝手な“想い”を、貫き通せばいいだけじゃないか。

『 M e m e n t o M o r i (死を想え) 』

“ 現界 ( G e r m i n a t i o n ) ” の時に放たれる、独特の波長。

同じく“破戒者”である立花なら、それを感じ取った筈だ。

「……へえ、意外とやるね」

感心したように呟いて、立花が大鎌を構え直す。

覚悟は出来た。もう、迷いは無い。

死にたくない。

ただ、その“想い”の為に。

オレは一步を踏み出そう。

傍から見れば、ただの醜い、自分勝手な“想い”だけど。

誰もが抱く、生への渴望。

その“想い”は、神の扉を通り、

『 F a u s t T h e O r i g i n (断獄の起源詩) 』

何よりも強い、最強の剣へと変わる。

## 四大神術師

黒刀を握り締めたオレは、大鎌を構える立花に向かって疾走する。

「速いッ！」

その眩きは驚愕か恐怖か？

立花は苦々しげに吐き捨てる。

いいぞ。あの時と同じで身体が軽い。

これなら、立花の動きにも十分に連いて行ける。

「だけど……甘いよ」

刹那、横薙ぎに払われる大鎌。

確かにリーチならば、あちらの方が上。

どんなに速くても、近付けなければそれまでと、燃える刃が弧を描く。

躲すか受け止めるか。

どちらにしても、オレは近付く事が出来ない。

前者ならば、後ろに大きく飛ばなければならぬし、後者ならばその場で足が止まる。

速さで劣る敵に、真っ向からぶつかる必要は無い。

立花は安全な距離を保ちつつ、炎でじわじわと体力を奪えばいいだけだ。

「ちっ……！」

結果、オレが選択したのは前者だった。

強化された身体能力を頼りに、一瞬で立花の間合いから身を引く。

「ははっ、どうしたのかな？ ほら、掛かって来なよ」

大きく手を広げ、オレを挑発する立花。

落ち着け。鎌も炎も届かない距離にいれば、何の問題もない。

真依が来るまで持ち堪える事が出来れば、オレの勝ちだ。

「ふーん、何かを待ってる？ もしくは、何か狙ってるのかな？  
でも、残念。私から逃げ切るのは、ちょっと難しいよ？」

そう言つて、立花がパチンと指を鳴らす。

瞬間、炎の柱が足元から噴き出した。

「ッ！？」

それは、まるで間欠泉。

物理法則を完璧に無視した火柱が、地面を突き破りオレを襲う。

「くっ……！　おいおい、こんな事して、下の階には被害が無いんだらうな？」

ギリギリでそれを察知出来たのは、ただの幸運だった。

立花の視線が、ほんの少しだけ下を向いた瞬間に、危険を察知して後ろに飛ばなければ、今頃はあの火柱の中にいたに違いない。

「それなら、大丈夫。この炎は、私の“想い”。標的以外を焼く事は無いから」

「まったく、本当に便利な能力だな」

そう毒づきながらも、オレは状況を整理する。

炎の攻撃は、オレをどこまでも追ってくる。

このまま逃げていても、捕まるのは時間の問題。

だからと言って、迂闊に近付けば大鎌が真つ二つにされる。

更に、その先には立花を包む炎の壁がある。

「打つ手なし……だな」

状況は絶望的。

本当に絶望的ではあるが、打開策が無いわけではない。

だが、もしオレの予想が外れていたら、その時は炎の中に突っ込むことになる。

「さあ、覚悟は決まった？　なら、来なよ。臆病者じゃないんでしよう？　キミがどれ程の器なのか、私が試してあげる。ふふっ、大丈夫。ちゃんと手加減してあげるから、心配はいらないよ」

オレを試すと立花は言う。

何のつもりか知らないが、そこまで言われたら引き下がれない。

「あはは、同じ人間を二回も殺せるなんて、凄く貴重な体験だと思わない？　多分、世界中探しても、私だけなんじゃないかな？　き

やは、そう思うと興奮するよ。ねえ、キミはどう？ 一生の内で二回も同じ女に殺されるんだよ？ 何か、運命感じない？」

そんな嫌な運命は御免だ。

臨死体験なんて、好き好んでしたいとも思わない。

「残念だけど、運命を信じてないんでね」

地面から噴き上がる炎を躲し、一直線に立花へと斬りかかる。

「そう。だったら、仕方ない。嫌という程、感じさせてあげる。その身が燃え尽きるほどに、熱く、熱く刻んであげるよ」

別に挑発に乗ったワケじゃない。

ただ、今の立花は完全に油断している。

オレに勝機があるとすれば、そこに付け込む以外にないだろう。

「ふっ、確かに手加減するとは言ったけど、簡単に近付かせるほど、私は甘くないよ」

迫りくる、赤い三日月。

まあ、当然そう来るとは思っていたさ。

だけど、そこで退いたら、先程と同じだ。

炎の柱に狙い撃ちにされる、ワンサイドゲームに逆戻り。

だから オレは跳んだ。

「えっ ？」

立花の目が驚愕に見開かれる。

何も難しい事ではない。

大鎌での攻撃は、あくまでも牽制でしかない。

なら、それは横薙ぎに振るわれるだけであり、身体能力が強化されている今のオレに、飛んで避けられない道理は無い。

「嘘でしょ？ 炎に突っ込むつもり？」

棒高跳びの要領で、大鎌を躲したオレはそのまま立花との距離を詰めに掛かる。

だが、眼前には炎の壁。

立花にとっては盾であり、オレにとっては剣であるその炎が、激しく燃え盛っている。

「まあね。でも、死ぬつもりはないさ」

もしも、この炎が現実のものであったなら、オレはどうする事も出来なかった。

だが、立花は何と言った？

この炎は、立花の“想い”だと。

そして、“破戒者”の戦いは、“想い”と“想い”のぶつかり合いだと彼女は言った。

なら、話しは簡単だ。実際に、それをしてみればいい。

「まさか！？」

立花がオレのしようとしている事に気付いたようだが、もう遅い。オレは黒刀を振り下ろす。

別に、何か特別な事をするワケではない。

ただ、上から下へ真っ直ぐと。一直線に切り捨てただけだ　立

花の“想い”を。

「そんな……こんなに早く見抜かれるなんて」

“破戒者”同士の戦いとは、“想い”と“想い”のぶつけ合い。

この炎が、立花の“想い”と言うならば、手中の黒刀もオレの“想い”。

ならば　オレの“想い”（黒刀）が、炎を斬れない道理はない。  
「うおおおおッ！」

炎を切り裂くは、漆黒の刃。

もう、立花を護る盾は無い。

振り上げられる黒刀に、彼女は咄嗟に大鎌を引き戻す。

だが　いける。オレの“想い”は、立花より強い。

なら、例えば大鎌で防がれたとしても、その“想い”（大鎌）ごと立花を斬ればいいだけの話だ。

「終わりだ、立花ッ！」

オレは再び、黒刀を振り下ろす。

何の躊躇いもなく、一切の手加減もなく斬り捨てる。  
本当なら、それで終わり。終わる　　筈だった。



「なっ……！ バカな！？」

しかし、オレの斬撃は受け止められた。それも、いとも容易く、立花の大鎌で。

バカな。どうしてだ？ 何で、斬れないんだ？

そんな疑問が頭の中を、駆け巡る中、立花の口元には笑みが浮かんでいた。

「へえ、中々、やるね。正直、甘く見てたよ。さすがは、あの人が気に掛けるだけはあるね」

信じられない気持で、更に力を込めてみるが結果は同じ。

“想い”は拮抗して、崩れる事は無い。

「んっ？ ああ、何でこの鎌が壊れないのかって？ ふふっ、どうしてだろうね？」

それに、この状況は明らかにおかしい。

オレの身体能力は強化されて、今の力は普段の何倍にもなっている筈だ。

そのオレと、立花は競り合っている。いや、それどころか徐々に押し返し始めてる。

立花の能力は、間違えなくあの炎だ。

だから、これはおかしい。こんな事はあり得ない。

身体能力を強化してない立花が、純粋な女の力だけでオレに勝てる筈がない。

「くっ……！」

遂に、押し負けそうになり、オレは自ら距離を離す。

意味が分からない。一体、何が起きているのだ？

「あはは、何が何だか分からないって顔してるね。そうだよ。うん、そりゃそうだよ。さすがのキミでも分からないか。でも、力は予想以上だよ。ねえ、キミ。私達と一緒に世界を変えてみない？」

状況が分からずに頭を抱えるオレに、立花は更に追い打ちを掛けるようにそんな事を言いだした。

「はあ………？」

「あつ、伝わらなかった？　つまりね、私達の仲間にならないか、  
って言ってるんだよ」

立花の手から大鎌が消え、代わりにオレに手を差し伸べる。

何だ。コイツは？　本気で言っているのか？

さっきまで、殺そうとしていたくせに、今では何故か勧誘されて  
いる。

冗談じゃない。何が仲間だ。

そう、立花の手を払いのけようとした瞬間、

『The arrow would be able to  
freeze your heart（祖は、心臓すらも凍て尽か  
せる氷の刃）』

「ッ!？」

立花が差し出していた手を、素早く引つ込めて後ろに跳んだ。

一瞬、オレの手を避けようとしたのかと思っただ、直ぐに違うと  
気付いた。

さっきまで立花の手があつた空間を、凄まじい速さで何かが通り  
過ぎた。

「その場を動かないで下さい。二人共です」

その声は、屋上の出入り口の方から聞こえた。

「やっと来てくれたか、みずは　えっ？」

だが、そこにあつたのは、オレの予想とは全く違う人物の姿。  
どうして、彼女がここに？

「『世界総合神術同盟』。『四大神術師』第四位。アルヴィン家の  
佐伯　冬花Ⅱシルビア・メリエルです。『同盟』の規則に従い、貴  
方達を拘束します」

佐伯　冬花。その名乗り通りに、彼女は悠然とそこに立っていた。  
片手には赤い本を持ち、もう片手には槍のような形をした杖を構  
えている。

「おやおや、これはマズい状況だね。天下の『四大神術師』様が出  
て来るなんて、本当に最悪に近いよ。えーと、七瀬君だっけ？　悪

いけど、お話しはまた今度と言う事で……ばいばい」

「えっ……？」

それだけを告げると、立花は脱兎のごとく走り出し、フェンスを飛び越えて姿を消した。

## 四大神術師（後書き）

ここからは、神術もたくさん出てくるので、詠唱の英語を考えるのが、大変になってきました。

ちなみに、作者の英語の成績は3でしたよw w

## 天使の声

「くっ、待ちなさい！」

慌てて、佐伯が立花を追いかけようとフェンスに駆け寄るが、もうその姿はどこにも見当たらなかった。

「……逃げましたか」

悔しげにそう呟き、今度は佐伯の杖がオレに向けられる。

「えーと、佐伯？ これは、一体？」

「武器を捨てなさい。大人しく投降するなら、危害は加えません」  
オレの問いを黙殺して、厳しい目付きで佐伯が告げる。

『神術同盟』と、彼女は確かにそう言った。

なら、佐伯はアレルドと同じで、オレを殺そうとしていると言う事になり、この状況はかなりヤバいのではないだろうか？

「あのさ……その……取り敢えず、落ち着こうぜ？ な？」

「五秒だけ待ちます。その間に武器を捨てて下さい」

じりじりと後退しながら、何とか佐伯を宥めようとするが全く効果がない。

最初から、こちらの話聞く気などないのだろう。

「五……四……」

佐伯はオレを見据えながら、淡々とカウントダウンを始める。

武器を捨てたら、身体能力は普段通りに戻ってしまう。

それでは、佐伯から逃げるのは難しくなる。

だったら

「三……二……」

そのカウントがゼロになる前に、オレは駆け出した。

狙いは単純。ただ、逃げる。

はつきり言っ、佐伯の実力は未知数だ。

そんな相手と戦うのは危険すぎる。

今のオレなら、フェンスを飛び越えるのに一秒も掛からない。

しかし、そんな刹那の間に、

『That's the absolute trap to prevent an escape.（祖は、脱出不可の絶対の氷獄）』

牢獄は完成した。

「嘘……だろ？」

オレが驚愕したのは、オレの行動が読まれていた事ではない。

ましてや、屋上を取り囲むように氷の檻が出現した事でもない。

佐伯が一瞬の間に、“詠唱”を終えた事だった。

アレルドとは、格が違うと、改めて実感する。

「一応、誤認の無いように言っておきますが、『四大神術師』とは『神術同盟』最高位の四人の事を差します。つまり、貴方の目の前にいる者は、世界で四番目に強い“神術師”と言う事になりますので、それを頭に置いて行動してください」

あまり、こう言うのは好きではありませんが、と最後に付け足して、佐伯は一つ息を吐いた。

「さて、まだカウントは終わっていませんが……どうでしょう？武器を捨てては頂けないでしょうか？ 私個人としても、顔見知りに危害を加えたくはないので」

どうする？

佐伯はアレルドとも……立花と比べても段違いに強い。

戦っても勝てる可能性はゼロに等しい。

だが、ここで武器を捨ててしまったら、逃げられる可能性は無くなってしまう。

なら、どうすればいい？

「そうですね。なら、仕方ありませんね」

だが、彼女はそれを考える暇を与えてくれはしなかった。

『That hits household goods with a cool thief.（祖は、武器を奪い去る、

冷たき盗人）』

「がっ　！」

腕に奔る激痛。

何かが右腕に直撃し、黒刀が地面に落ちる。

「ぐっ……！」

咄嗟に左手で刀を拾おうとするが、そこに佐伯の鋭い声が響く。

「拾わないで下さい！　左も同じようにされたいのですか？」

ピタリと、身体の動きが止まった。

佐伯の声に従ったワケじゃない。

ただ、理解してしまったのだ。

拾っても、どうせ結果は同じ。

なら、左だけでも無傷でいた方が、まだマシだ。

「賢い判断ですよ、七瀬先輩。そのまま、ゆっくりと三步程、後ろに下がって頂けますか？」

「……………」

オレは右腕を押さえながら、言われた通りに後退する。

右腕の怪我は、思ったほど酷くは無い。

血も出ていないし、骨も折れていないようなので、刀を振るう分には問題ない。

だが、問題なのはこの状況をどう打開するかだ。

一步、二歩と、オレが後ろに下がると、黒刀は佐伯に蹴り飛ばされ、更に遠くに転がって行った。

「さて、では拘束を……えっ？　“契約紋”？」

杖を向けながら、近付いてきた佐伯が、オレの右腕を見て突如として足を止める。

どうやら、先程の一撃で制服が破れて、“契約紋”が見えたようだ。

「そんな！？　どうして、貴方が“契約紋”なんか……いや、それ以前に、“破戒者”と契約するような“神術師”がいる事自体が前

代未聞です」

オレの“契約紋”を見て、佐伯は酷く驚いたようだった。  
何だ？　これは、そんなに大切なものなのだろうか？

「……名乗りなさい」

静かに、だが怒気を込めて佐伯が言った。

「名乗るって、オレの名前？」

「違います。貴方の師匠の名前です。その“契約紋”の『師』に値する“神術師”。どれ程の値段で買ったのかは知りませんが、それは冒涇です。“神術”に対する、最大の冒涇ですよ」

佐伯の声に凄味が増す。

何故かは分からないが、相当に怒っているようだ。

「あのさ、その前に聞きたいんだけど……これって、そんなに大事なもののなか？」

「なっ……！」

聞いてから直ぐに、自分が墓穴を掘った事が分かった。

佐伯は絶句し、肩を震わせながらオレを睨みつける。

「……“契約紋”とは、“神術師”にとって命の次に大切なものです」

絞り出すと言う表現が正しいくらいに、彼女は沈黙の後にそう口にした。

「えっ？　命の次に？」

「そうです。人間が契約出来るのは、一生のうちに二回だけ。その内の一回は、“神術師”となる為に必ず結ぶので、実際には一回です。契約を結んだ“神術師”は、その『師』のみに生殺与奪の権利が与えられ、『師』以外の“神術師”に殺害された場合、『師』、『弟』、及びそれに関する全ての“神術師”が、正式に決闘を申し込む権利が与えられるので、“契約紋”がある“神術師”には、迂闊に手出しが出来なくなります」

つまり、オレが佐伯に殺されると、『師』である真依は勿論、彼女の『師』、もしくは『弟』には復讐の権利があり、そのまた『師』



の……と言う風に、ネズミ算の如く人脈が広がって行く。

事実上、全ての“神術師”を敵に回す事になる。

「嘘だろ？　だって、そんな事は一言も……」

オレの脳裏に、次々と誰かの言葉が蘇ってくる。

あの子は、とても優しい子です。あれでも精一杯、七瀬様を救おうとしているのですよ。

その通りだ。真依は、十分にオレを救おうとしてくれていた。

でもね、一つだけ勘違いしてるよ。

そうだ。オレは、勘違いをしていた。

ふふっ、それはね。

そう、それは。

真依が、今でも優しいと言う事。

だから、真依は言わなかったんだろう。

命を救ってもらっただけでなく、そんな大切なものを、彼女から貰ってしまった。

一生の内で、たった一度しか出来ない契約。

悩まなかった筈がない。

佐伯の言う通り、莫大な値段で売りつける事も出来た筈だ。

だが、真依はそれをしなかった。

なんて事もない。近所の子供に、お菓子でもあげるくらいな気軽さ。

内心を悟られないように、オレの前ではそう振る舞った。

ああ。本当に優依の言う通りだ。

真依は優しい。本当に、バカなくらい優しい。

「さあ、言いなさい。この“契約紋”の『師』は誰ですか？　でなければ、貴方を殺します」

槍のように鋭い杖先を、オレの喉元に突き付け、佐伯が問う。

だが、オレの答えは決まっていた。

「ごめん、佐伯。それは言えないよ」

「……いいのですか？　本当に殺しますよ？」

佐伯の声が低くなる。目を見て直感する。彼女は本気だ。殺すだって？ ああ、殺せばいい。

本音を言えば、死ぬのは怖い。だって、オレは具現化する程に強く生に執着している人間だから。でも……それでも、言えない。

「オレの答えは変わらない。例え、殺されてもね」  
むしろ、それは好都合だ。

オレを殺せば、真依が『師』だとは分からなくなる。どうせ、殺されるなら、せめて真依を巻きこまずに逝く事を選ぶ。う。

「最終警告です。貴方の『師』の名前を言いなさい。もしも、正直に話して頂けるなら、特別に貴方を見逃す事を考えてもいいですよ」それは、願ってもない条件だ。

いつものオレなら、脇目も振らずに飛びついたに違いない。でも、

「それは 何処かの天使様だよ」  
言える筈がない。

知ってしまったのだから。

彼女の優しさを。

天使の如き、その優しさを。

「そうですか。なら、もう良いです。七瀬 広樹。貴方を殺します。己が罪を悔い改めて、地獄の業火に沈みなさい」

静かに、そして冷酷に佐伯は告げた。

彼女が“詠唱”に費やす時間は、本当に一瞬。

次の瞬間には、もうオレの命はない。

そう思っ て目を閉じた。

その刹那だった。

「 スカーレット・マリア。それで分かるかしら、メリアル卿？」

天使の声が屋上に響いたのは。

## 鮮血のマリア

響く声音は冷たく、そして何よりも優しい。

「なっ　！？」

驚愕の声は誰のものか？

屋上のドアを吹き飛ばし、一閃の光が冬花へと向かう。

『“Mearil aigice”（不朽を示せよ、神の盾）

』

しかし、冬花はそれに、見事に反応してみせた。

一瞬にして完成する“神術”。

神の盾に守られた彼女は、閃光の直撃を受けても無傷でその場に佇んでいた。

「あら、せっかく名前が分かったのに、あまり嬉しそうじゃないわね？　もつと喜んだらどう？」

だが、そんな事は当たり前。

完璧な奇襲を防がれたのにも関わらず、むしろ、そのくらいは当然と言わんばかりに、真依は微笑む。

「水原……先輩」

「ふふっ、第四位様に、名前を知っていて貰えるなんて私も有名になったものね」

そんな真依に対して、冬花の表情は固い。

ゆっくりと、こちらに歩みを進める真依に、彼女は杖を握り締め、氷の矢を放つ。

『The arrow would be able to freeze your heart（祖は、心臓すらも凍て尽かせる氷の刃）』

警告はなし。威嚇もなし。

何故なら、冬花は知っていたから。

止まれ。投降しろ。

そんな言葉は　この人には何の効果もないと。

時間にして、本当に僅かな刻。

冬花の“詠唱”も然る事ながら、放たれた矢は更に速い。

避けらず、常人には見る事すら出来ない、それを　。

「はぁ……遅いわね」

真依はいとも簡単に躲し、挙げ句の果てにはため息まで吐いた。

「　」

てつきり、“神術”で防がれるものと、佐伯は予想していた。

自分の“詠唱”に反応し、何らかのアクションを仕掛けて来ると。  
しかし、彼女がした事と言えば、少し横に動いただけ。

本当に少しだけ横に動き、最小限の動作で、氷の槍を躲して見せた。

「……………」

冬花は知らず、奥歯を噛みしめていた。

完全になめられている。

“神術”を使うまでもないと、その目が語っている。

「くっ……………」

ならば、思い知らせてやると。

冬花の注意が、真依に向いた瞬間。

「　　ッ!？」

すぐ後ろに気配を感じ、反転しながら横に跳ぶ。

その直後、今まで自分の立っていた床のタイルが、轟音と共に粉砕された。

これは“神術”ではない。ただの純粹な打撃による破壊。

破戒音から推測するに、恐らく何か重い物を振り下ろしたに違いない。

空間転移　いや、違う。

頭によぎった考えを、冬花は直ぐに振り払う。

そんな“大神術”を使われて、気付けない筈がない。  
ならば、これは一体？

様々な可能性を頭の中に廻らせるが、周囲を見回した瞬間、その理由が分かった。

先程、築いた屋上を覆う氷牢。

脱出不可の牢獄が、消え失せている。

「……目視妨害の“神術”？」

「はい、仰る通りでございます」

そう。その“神術”は周囲の光を捻じ曲げて、姿を見えなくするもの。

檻が消えた瞬間、真依の仲間が屋上に侵入したに違いない。

再び振り下ろされる何かを躲し、冬花は状況を整理する。

氷牢が消えたのは、いつの事だ？

消えた原因は、真依にあると見て間違いないだろうが、何故、彼女は檻を消す必要があったのだ？

応援を呼ぶ為か？

いや、それは違う。

それなら、屋上の入り口から一緒に入ってくれば良いだけの事だ。現に、真依は今、二人掛かりで攻めて来ているワケではない。

ならば、どうして？

一見無駄に見える真依の行動に、冬花は違和感を感じた。

それに、考えてみれば、あの攻撃は変だ。

普段、自分に向けられる殺意が、全く籠っていない。

まるで、何か別の目的があるかのように……。

「ハッ、まさか！？」

不意に頭に浮かぶ、一つの可能性。

氷牢を消した理由 それは、入る為ではなく出る為だ。

そして、それに気付いた時には、時はもう遅かった。

「やられました」

屋上には、自分と真依しかない。

そう。彼女の『弟』である、彼の姿が何処にも見当たらない。恐らく、先程、姿を隠していた者と一緒に逃げたのだろう。

「くっ！ やってくれましたね、水原先輩。最初から、これが狙いだったんですか？」

冬花は二人だけになった屋上で、真依に向き直る。

「ええ、これでも一応、七瀬君の『師』だからね。巻き込んだ責任くらいは、果たしておかないと……でも、どうして私の名前を知ってるのかしら？ “神術師”としての名前じゃなくて、本名まで知ってるなんて、何処かで会ったかしら？」

不思議そうに首を傾げる真依。

知っている。その独特の口調と、落ち着いた雰囲気。

この人も、昔と全然変わっていない。

「 鮮血のマリア」

ボソリと呟いた言葉に、真依の眉がピクリと動く。

「まさか……貴方、ガルノイア大戦の生き残り？」

その一言で、冬花は確信した。

今や知る者も少ない、三年前に存在した『神術同盟』の主力部隊。壊滅し、忘却の彼方へと葬られた、最強にして最凶の十人。

彼らが出撃した時には、もう全てが終わるとまで言われた『同盟』の最終兵器。

それが、『樂園の守護者』テュルファンゲ。

その中でも、ただ一人だけ。他の九人とは群を抜く実力で、戦況を大きく好転させた者。

たった一人で、ガルノイアの大地を血に染めた、赤き女神。スカーレット・マリア

そして、自分の目の前にいる彼女こそが

“神術師”達の、畏怖と敬意を一身に集めた、ガルノイア大戦の英雄 『鮮血のマリア』なのだ。

## 鮮血のマリア（後書き）

鮮血のマリアww

えっ？ 中二だって？

知ってるかい？

掛ったなと思ったその瞬間から、キミは中二病なんだよ。

この時点でもう中二ですね、すみません。

ちなみに、作者が実際に言った事のあるセリフだったりもしますよ。  
大爆笑されましたけどww



## 脱出と逃亡

「七瀬様。失礼いたします」

黒い棺桶を地面に叩きつけ、佐伯を遠ざけた蓮花は、オレを抱えて屋上のフェンスを飛び越えた。

「えっ……？ うわぁあッ！」

もの凄い速さで迫りくる地面に、オレは思わず悲鳴を上げたが、何の考えもなく飛び下りるほど、蓮花は早計ではない。

「重力支配」

ふわり、と身体が宙に浮くような感覚。

蓮花がそう呟いた直後、オレ達の落下速度は一気に減速し、彼女は優雅に着地を決めた。

「さあ、行きましょう。一人で走れますか？」

「ああ……でも、水原はどうする？ 佐伯は“四大神術師”だって言ってたぞ？」

真依の実力は知らないが、世界で四番目に強い佐伯を相手に、一人で勝てる筈がない。

そう、思ったが。

「大丈夫です」

短く、だが自信を持って、蓮花は断言した。

「あの子を信じなさい。貴方の『師』は、あんな小娘に負けるほど、弱くはありませんよ」

そう告げて、走り出す、蓮花。

オレはその小娘に、ボロ負けしてたんだが。

そんな言葉を、喉の奥に押し込んで、オレは彼女の後を追い掛けた。

蓮花の後を追って、辿り着いた先は意外な場所だった。

「オレの……家？」

そこは、間違いなくオレの家。

朝、確かに鍵を閉めた筈の玄関を、蓮花は事も無げに押し開けた。

「えっ？ 鍵……開いてた？」

「いえ、閉まっていたよ。先程までは」

さらに、とそう言って、妖しげな笑みを浮かべる、蓮花。

一体、何をしたのか激しく気になるが、嫌な予感しかしないので聞くのは止めておく。

「『神術同盟』の動きが、思ったよりも早いです。貴方の選択がどうであれ、取り敢えず必要なものを持って、真依の家に身を隠した方がいい。あの家は特殊な“神術”で護られており、一度も来た事もない人間には、絶対に見付けられないようになっています。幾ら“四大神術師”と言えども、あの子の護りは突破できないでしょう」  
そう言いながら、どんどん奥へ進んでいく、蓮花。

まるで、家の中を知っているかのような足取りに、オレはふと疑問を抱いた。

「あれ？ 蓮花は、オレの家に来た事があったかな？」

「はい。貴方を助けた夜に、勝手に上がらせて頂きました。一刻を争う状況だったので、治療の為に場所を借りましたのですが……何か、いけなかったでしょうか？」

心配げに尋ねる蓮花に、オレは慌てて首を横に振る。

「いや、オレを助ける為だったんだから、気にしないでくれ。あつつ、そうだ。荷物を纏める間、客間で適当に休んでいてくれ。えーと、客間には廊下の突き当たりを……」

「いえ、大丈夫です。この家の間取りは把握しておりますので。それよりも、準備をお急ぎ下さい。まだ数刻の余裕はあると思います。が、いつ『同盟』が此処に来ないとも限りませんので」

場所を説明しようとしたオレの言葉を、蓮花は遮ってそう告げた。

念には念を入れて、と言っ事だろうが、彼女の表情に若干の焦りが見える。

「ああ、出来るだけ急ぐよ」

蓮花が客間に向かったのを確認してから、オレは急ぎ足で自室へと向かった。

## 誓いの言葉

必要最小限の荷物をボストンバックに詰め込み、オレは客間へと向かう。

時間にして約十分程だが、佐伯を相手にそれだけの時間、戦い続ける事がどれだけ難しい事なのか、オレには分かる。

現に、本気で逃げに回っても一分で捕まった。恐らく、佐伯が本気ならば三秒も掛からなかったに違いない。

「蓮花、準備が終わったよ……って、何してるんだ？」

客間の扉を開け中に入ると、テレビの上の写真立てを、険しい顔で眺めている蓮花の姿があった。

「あつ、七瀬様。この写真は？」

「んっ？ ああ、オレの家族が写ってるんだ。三年前の事故で、今は全員いないけどな」

三年前。オレが、まだ中学生だった時、家族で出かけていたショッピングモールの屋上で爆発事故が起こった。

オレは奇跡的に助かったのだが、その事故で両親と姉は帰らぬ人となった。

屋上で使っていた出店のガスボンベに引火した事が原因らしいが、今でもあまり詳しい事は分かっていないらしい。

「真ん中に写っているのが、七瀬様と……お姉様でしょうか？」

「ああ、何年も前のものだけだな」

写真を覗き込むと、家族が笑顔でこちらを見ている。

この時はまだ、あんな事になるなんて考えもしなかった。

もう一度、この時に戻れたらと、どれだけ思った事だろうか？

「貴方にとって家族とはどんな存在ですか？」

しばらく感傷に浸っていると、不意に蓮花がそう尋ねて来た。

「大切な存在……かな？」

少しだけ考えてから、オレは答えた。

普段はいる事が当たり前だったけど、失って初めてその大切さに気付く。

それは、まるで酸素のように、あるべきもので、無くてはいけない存在。

「そうですか。大切な存在……確かに、その通りかもしれませんが」蓮花は、そこで納得したように一つ息を吐くと、くると振り返り正面からオレを見据えた。

「七瀬様。わたくしに血の繋がった家族はありませんが、真依の事をそれ同然と思っております。あの子は、わたくしにとって何よりも大切な存在です。では、貴方はあの子をどう思っていますか？」

「えっ……？」

真依と蓮花の間に、何があつたのかは知らないが、今まで見ていただけでも固い絆で結ばれている事が分かる。

だが、それにどうしてオレの事が出て来るんだ？

質問の意図が掴めずに困惑するオレに、蓮花は更に問いを投げ掛けた。

「本当は恨んでいるのではないですか？ 貴方は、未だに日常への未練を捨て切れていないように見えます。命を助けたとは言え、自分を非日常に引き込んだ相手は紛れもなく、あの子です。心の底で、憎しみを持っていても不思議ではありません」

彼女の言葉に、オレは愕然とした。

そんな事は思ってもみなかった。

真依が非日常に引き込んだ？

いや、それは違う。それを言うなら、最初に問答無用で襲いかかってきた『神術同盟』を恨むべきだろう。

「おいおい、それは幾ら何でも飛躍しすぎだろ？ それに、水原はちゃんとオレに選択肢をくれたじゃないか。他人の意見じゃなくて、自分の意志で決めるとまで言ってくれたしさ」

真依を恨むのは、お門違いもいい所だ。

咄嗟にオレは言い返すが、蓮花はそれを鼻で笑った。

「本当にそう思っているのですか？ 貴方に選択肢があつたと？ 残念ですが、それは違いますよ。ふふっ、どうせ、貴方は“神術師”になるおつもりなんでしょう？」

確かに蓮花の答えは当たっているが、意味がさっぱり分からない。最初から、オレに選択肢は無かつたのだろうか？

「えっ？ どういう事だよ？」

オレの動揺が伝わったのだろう。

蓮花は大きくため息を吐き、それからこう告げた。

「はあ……七瀬様。相手の言葉を純粹に信じると言う心掛けは、立派だと思います。しかし、それでは簡単に相手の策に引っ掛かってしまうでしょう。これから、貴方が歩む“神術師”の世界は、バカ正直なだけで生き残れるほど優しくはありません。いいですか？ もう少し、物事を客観的に考えてみて下さい。冷静に状況を分析して、相手の真意を探るのです。そうすれば、真依は選択肢を与えたのではなく、貴方を脅迫していた事に気付くでしょう」

脅迫、と蓮花は確かにそう言った。

選んだのではなく、選ばされたのだとその目が語っている。

「真依が与えた選択肢。言葉を換えて言い表すと、つまりは生きるか死ぬかと言う事です。普通の人間ならば、殺されておいて尚、死を選ぶ者はいないでしょう」

“神術師”にならなければ、オレは『同盟』に殺される。なるほど。

そう考えると、蓮花の言う事は正しいのかもしれない。

死にたくないなら“神術師”になれと。

真依がそうオレを脅したというのも、あながち間違いではないだろう。

でも、

「蓮花、それは違うよ」

それは、ただの客観的な意見。オレの本当の気持ではない。

「オレはね、別に死にたくないから“神術師”になろうと思ったわけじゃないんだ。あつ、確かに死にたくは無いけどさ、でも他にも理由があるんだ」

「……理由？」

眉を寄せて尋ねる蓮花に、オレは右腕を突き出して袖を捲り上げる。

「“契約紋”？　それが、どうかしましたか？」

相変わらず冷静な声ではあったが、蓮花の眉が一瞬だけピクリと動いたのを、オレは見逃さなかった。

「佐伯から聞いたんだけどさ。この“契約”って、一生の内に二回しか出来ないらしいな。それも、一回は『師』と契約するから、実質は一回だけなんだろう？」

「……………」

オレの問い掛けに、蓮は沈黙で応じた。

恐らく、真依から口止めでもされていたのだろう。

だが、その沈黙が肯定となった。どうやら、佐伯の言う事は嘘ではなかったらしい。

「どうして、水原がそこまでしてくれるのかは分からないけど、オレは返しきれないほどの恩を受けてる。命を救ってくれただけでなく、アイツの命の次に大切な“契約紋”まで貰った。だから、オレは恩を返さなきゃいけないんだ。“神術師”になる事が恩返しになるかは分からないけど、何一つ返せずには死ねない。それが、オレの理由だよ」

そう。理由は単純明快。

ただ、恩返しをしたい。

命を救ってくれた天使へ、少しずつ恩を返していきたい。それだけなのだ。

「つまり、真依を恨んではいないと？　あの子に恩返しがしたいと？」

確認するように尋ねた蓮に、オレは大きく頷く。

当然だ。それ以前に、どうして蓮花はそんな事を気にしているのだろうか？

普通に考えて、命の恩人を恨める人間は少ないと思うのだが。「そうですか。これから、貴方は真依の下で様々な事を学び、“神術師”となるでしょう。ああ、『同盟』の“神術師”等と一緒にしないで下さいね。群れていなければ何も出来ない、下等な三流とは違う。貴方は本当の意味で、一流の“神術師”になって、強大な力を持つでしょう。でも、その前に誓って下さい。何があっても、真依の味方であり続け、絶対にあの子の敵にはならないと。今、この場で。わたしくしと……貴方の家族に誓えますか？」

蓮花はそう言うと、テレビの上にあった写真をオレの目の前へと突き出した。

彼女の声は真剣そのもの。その姿に、オレは一抹の不安を抱いた。何だ？ どうして、蓮花はこんなにも真剣なんだ？

これでは、まるで近いうちにオレが、真依を裏切るかも知れない出来事が起こるみたいじゃないか？

「ああ、誓うよ」

だが、そんな事は関係ない。

例えばどんな事があつたとしても

「<sup>オレ</sup>七瀬広樹 <sup>アイツ</sup>は水原真依 の敵にはならない。そう、誓うよ」  
その瞬間だった。

蓮花がオレを突き飛ばし、自らも後ろに跳んだのは。

「えっ……？」

オレが驚愕の声を上げたのとほぼ同時。

「ほう、人形にしては勘が良いじゃないか？」

天井を切り裂いて、二つの人影が客間に降り立った。



## ”神術師”の戦い

桜花高校の屋上では、二人の“神術師”が対峙していた。

一方は杖を構え、その油断なく切っ先を相手に向ける。

対するもう一方は、無防備にも徒手空拳で、それに応じていた。

「ふふつ、あの大战の生き残りなら“四大神術師”になるのも頷けるわ。黙って逃がしてくれそんな雰囲気でもないし……仕方ない。

少しだけ、遊んであげるから掛かって来なさい」

面倒そうに肩を竦め、大きく腕を広げて見せる、真依。

いいだろう。そっちが、そのつもりなら全力で相手になろう。

“神術”など、使わせはしない。

最速で攻め立て、“詠唱”の暇を与えずに終わらせてやろうと、冬花は口元を綻ばせた。

『The arrow would be able to freeze your heart（祖は、心臓すらも凍て尽かせる氷の刃）』

紡がれる詩は、正確であり、そして何より速い。

並みの“神術師”ならば、二秒ほどの時間を費やすであろうそれを、冬花は一秒にも満たない僅かな刻で完成させた。

そもそも、“神術”とは、十九世紀に“破戒者”に対抗する為に生まれた、新たな科学だ。

『神の領域』<sup>ネルト・エデン</sup>、通称では『第二世界』と呼ばれる上位世界に自らの“想い”を転送し、それを武器として使用する“破戒者”。

それは、傍から見れば魔法に等しい行為。

“想い”の具現化など、通常ではありえない事だ。

純粋な兵器のみが力だった、当時の人々は焦っただろう。

自分達が最強と信じて来たものが、彼らには通じない。

銃も刀も戦車も爆弾も。

何一つとして、有効な手段がない。

“破戒者”の持つ武器は、この世界の法則から逸脱したモノ。故に、彼らの武器は銃弾を防ぎ、戦車を切り裂き、爆風をも消し去る。

だからこそ、必要だったのだ。

“破戒”に対抗できる、新たな力が。

そして、“神術師”が注目したのは、この世界　つまり『第一世界』だ。

この世界の法則に捕らわれたままでは、“破戒者”には勝てない。だから、まずはその法則を変えようと、長きに渡る研究が行われた。

そして、遂に人類は世界法則を書き換える術を見付けだした。

“神術”の発動に必要な工程は二つだけ。

それが、“術式”と“詠唱”。

“術式”とは、世界法則に干渉する扉の役割をするもの。

一般的には、杖などに特殊な文字が刻まれており、その文字に魔力を通した時のみに、それは“術式”として初めて機能する。

つまり、魔力を通していない段階の“術式”とは、ただの文字でしかないのだ。

そして、二つ目の“詠唱”。

全ての生きとし生ける者が、少なからず持つており、少しずつ空気中に放っている魔力。

それは酸素と同様に、世界に常に満たされている存在。

“詠唱”とは、空气中に漂っているその魔力を、集結させる為のものだ。

“詠唱”で集めた魔力を“術式”に通せば、自身の魔力を使わずに世界法則に干渉出来る。

だが、これは省略も可能であり、その時は自らの魔力を“術式”に通さなければならぬので、術者の負担が大きい。

「詠唱　完了」

そして、冬花の“詠唱”が終わり、杖に描かれた“術式”に魔力

が通された今。

彼女の目の前には、光り輝く文字が出現している。

これこそが、世界の法則。

絶対不変にして、全ての現象を支配する神の掟。

“神術”とは、それを一時的に書き変える事だ。

人は何故、自力で空を飛べないのか？

翼がない。腕の筋力が足りない。

そんなものは後付けでしかない。

世界法則でそう決まっているからだ。

だが、その法則を書き換えたとしたら？

人間は飛べると、常識を変えてみたらどうだろうか？

理論上では人は飛べる。

道を歩くのと同じくらい簡単に、人は大空に舞い上がる。

だが、それなら何故、“神術師”は空を飛べないのか？

答えは簡単。それは、法則が修正されてしまうからだ。

法則が書き換えられると、世界は直ぐにそれを元に戻してしまう。

その時間は、たった数刻。一秒にも満たない僅かな時間。

空を飛ばうと法則を書き換え、地面を蹴った瞬間には、既に法則

は元に戻っている。

故に、空は飛べない。

しかし、人の手から炎が出ると言った法則にしたらどうだろうか？

実際に炎を出した瞬間に、法則は書き換えられる。

しかし、炎を発生してしまっている。

これが、先程のケースとの違い。

現実では人の手から炎は出ない。しかし、数刻前の世界では、炎

が出る事が当たり前だった。

今の世界と数刻前の世界。

“神術師”は、この二つの世界を上手く利用する。

出現しない筈の炎だが、現実としてそこにある。

故に、その炎は“破戒”と同じく、世界法則から逸脱した存在へ

と変化し、彼らに対抗する唯一の武器へと変化する。

「さあ、行きますよ」

冬花が書き加えるのは、こんな法則。

『 佐伯 冬花は、何もない空間から氷の刃を発生させる事が出来る』

光る文字列の中に、新たな文が何行も追加される。

この文字は彼女の魔力で描かれたものであり、この時の魔力とはインクに等しい。

つまり、書き換える法則が多ければ多い程、魔力の消費量も多くなる。

まず、氷を創る為に必要なものは水。

その水の成分を事細かに記し、『水は冷却すると氷になる』と言う世界法則を引用。

そして、凍らせるその形状。さらには、それを出現させる緯度や経度なども書き加えて、初めて“神術”は完成する。

“詠唱”に一秒。法則の書き換えに、また一秒。

冬花は全ての工程を二秒の内にこなして見せたのだ。

「……………」

杖の先に先程書いたのと同じ物質が出現し、それが氷の刃が真依を襲う。

『 A h o l y w a l l o b s t r u c t s t h e w a y y o u s h o u l d a d v a n c e . （聖なる障壁が、汝の行く手を阻害する）』

しかし、それは見えない壁に阻まれ、彼女に届く事は無かった。  
「なっ……………」

「だから、遅いつて言ったでしょう？ 書き換えに一秒も掛かっている時点で、遅過ぎるのよ。貴方、よくそんなので生き残れたわね」

冬花が驚いたのは、真依の反応速度。

彼女の“詠唱”は、氷の刃が出現してから始まった。

詩が完成した時には、既に刃は真依の目の前に迫っており、それ

と同時に障壁が出現した。

「詠唱”している間にする事は二つよ。書き換えるべき法則を頭の中に受かべる事、そして”

不意に真依が言葉を切る。

その後、

「周囲の警戒よ」

頬に奔る鋭い痛み。

そして、地面に突き刺さる光の剣。

冬花はそれを信じられない気持で見詰めていた。

「そんな……会話中に“詠唱”を省略して、“神術”を完成させるなんて」

真依がその気ならば、今頃、この剣は自分の胸を貫いていた。  
あり得ない。何だ、この人は？

「貴方……確か“四大神術師”の末席だっけ？ “神術師”同士

の戦いは初めてかしら？」

当たり前だ。今まで、数多くの“破戒者”とは戦ってきたが、“神術師”と戦った事など一度もない。

冬花にとって、“神術師”とは共に戦う仲間であり、敵に回る事などあり得なかったのだから。

「勝負ありね。それじゃあ、私は行くわ。いくら蓮花でも、あの二人と戦いながら七瀬君を守るのは大変でしょうから」

真依は脱力したように息を吐くと、そのまま踵を返して屋上から出て行くとする。

「ま、待ちなさ」

だが、それを冬花が黙って見ている筈もなく、制止の声を掛けようとしたが。

「ッ！？」

再び、頬に奔る痛み。

今度は、先ほどよりも深く切れたらしく、熱いものが伝う。

「バカな子ね。貴方、死にたいの？ 格が違うって分からないかし

ら？」

確かに格が違う。

自分では、敵わないと本能的に冬花は悟った。

「いいわ。『同盟』らしいやり方で、選ばせてあげる。三秒以内に杖をこつちに投げなさい。さもなければ……」  
「四大神術師」の席が、一つ空く事になるわ」

瞬間、真依の魔力が一気に膨れ上がる。

恐らく、先程までは押さえていたのだろう。

馬鹿げてる。これは何の冗談だ？

勝てる筈がない。こんな化け物に、勝てる筈がない。

「三……二……一……」

さつきとは、逆の立場だ。

怖い。手が震える。

追い詰められると言うのは、こんなにも怖い事だったのかと、冬

花は初めて思い知った。

「一……」

「あつ、待つて！」

本当に咄嗟の行動だった。

死ぬ。確実に殺されると思った瞬間、冬花は自然と杖を真依へと投げていた。

普通なら、あり得ない行動。投げた所で、助かる保証など何処にもない。

ならば、武器を敵に渡すなど愚の骨頂。

例え負け戦だと分かっているとしても、諦めずに挑んだ方が、まだ助かる可能性がある。

その筈だったのだが。

「あら、良い杖ね。術式装飾に自動修復。それに、予備の『魔封石』まで付いてるなんて。創ったのはバルテル卿かしら？ 永劫回帰の“術式”なんて、あの人らしい作品ね」

足元に転がった杖を拾い上げると、真依はそれを壁に立て掛け、

屋上のドアに手を掛けた。

「ふふっ、他人に命を握られる気分はどうだった？ まあ、せつかく拾った命なのだから、無駄にしない事ね。ああ、あとユリイによりしく言っておいて」

それだけを告げると、真依は屋上を後にした。

「……………」

一人残された冬花は、味わった事のない敗北の味を噛み締めて、未だに震え続ける指先を眺めていた。

## 楽園の守護者

「まったく、人の家に土足で踏み込んで来るなんて、相変わらず無粋ですね、ダリア・グラフィード。正義を語っているくせに『同盟』は礼儀も知らないんですか？」

大きな穴が空いた天井。

屋根瓦がパラパラと落ちる客間に佇む侵入者を、蓮花は冷めた声で出迎えた。

「ふふつ、礼儀知らずだって怒られちゃったわよ、ダリア？　しかも、奇襲に失敗してるし、普通に玄関から入っても良かったんじゃない？」

土煙りの中から聞こえたのは、鈴が鳴るように綺麗な少女の声。徐々に煙が晴れて行くと、そこには一組の男女が立っていた。

一人は二メートルはあるかと言う、長身の男。

アレルドと同じ黒いローブを着ている事から、一目で『同盟』の“神術師”だと分かる。

対して、もう一人は小柄な少女。

顔立ちは整っており、服装も特におかしな点はない。

故に　異様。

街を歩いても違和感がなく、あまり“神術師”らしくない。

得体が知れないと言う点では、彼女の方が男よりも異彩を放っていた。

「家を壊した事については謝罪しよう。すまん、少年。てっきり仕留められるものばかり思っていたが、予想以上にやるようだ。敵の力を見誤るなんて、俺も衰えたものだ」

蓮花がダリアと呼んだ男は、ため息混じりにそう告げて、オレに目を向ける。

その目は氷のように冷たく、どこまでも純粹だった。

「だから　」



一言でいえば、一切の無駄が無い。

混じりけのない、無機質で透明な殺気。

アレルドのものとは、似ても似つかない。

人を殺す事だけを目的とした、ある意味、何よりも完璧な殺意。

「今度は確実に葬ろう」

「……………ッ!？」

バサリとロープをはためかせ、黒き烈風が客間を駆ける。

その手に携えるのは、不気味に煌めく小太刀。

蓮花に突き飛ばされたまま、未だに立ち上がれていないオレに、

ダリアは容赦なく、その手を振り下ろす。

ダメだ。とてもじゃないが、“現界（Germination）

”は間に合わない。

次の瞬間に襲い来るだろう死の痛みに、オレは思わず目を閉じた。

「……………えっ？」

しかし、その痛みはいつになってもやって来ない。

恐る恐る目を開くと、いつぞやの再現のように、蓮花が黒い棺桶

でダリアの一撃を受け止めていた。

「……………邪魔をするな、マリアの人形」

「殺戮機械サイボーグみたいな狂人にだけは言われたくありませんね。まあ、

もつとも……………」

蓮花の手に力が込められる。拮抗した状態を打ち崩すかのように、

徐々にダリアを押し戻していく。

「『楽園の守護者（貴方達）』の中に、まともな人間なんて一人も

いないでしょうけどねッ!」

まるで野球の打者のように、大きく棺桶を振り回す、蓮花。

凄まじい風圧と共に、ダリアの身体が後ろに吹き飛び、そのまま

壁を突き破って隣の部屋へと姿を消した。

「……………」

自分よりも遥かに背の高い男を、軽々と吹き飛ばした蓮花に、オレは啞然とした。

あり得ない。どう見ても、女の力じゃないよな。

「さて、立てますか、七瀬様？ わたくしの無駄話のせいで、こんな事になって申し訳ありません。しかし、よりもよって『樂園のデュルファンク守護者』ですか。最凶の十人部隊。第四位も、厄介な相手呼びよせたものですね」

蓮花の差し伸べて来る手に捕まって立ち上がる。

こんな細腕に、あれだけの力があるなんて信じられない。

そんな事を思っていると、壁に空いた穴を潜ってダリアが再び客間に戻って来た。

「おかえり、ダリア。どう？ 昔の感覚は戻った？」

「ああ、まだ完全ではないがな。俺はあの人形を押さえておく。エレナは少年と遊んでやれ」

肩の関節を、鈍い音と共に嵌め直すダリアの殺意は、もうオレには向いていなかった。

新しい獲物を見付けたと言わんばかりに、蓮花を凝視している。

「別に構わないけど。やるなら、騒がしいから外でやりなよ？」

「ふっ、了解した」

短く答えて、ダリアが床を蹴る。

壁に激しく叩きつけられたと言うのに、その動きからはまるでダメージを負っていないように見える。

「七瀬様ッ！ “現界（Germanation）” は使えますか？」

小太刀による刺突を棺桶で受けながら、蓮花がオレに問い掛ける。

「えっ？ ああ、多分、使えると思う」

「なら、今すぐに……なっ！？」

オレに何かを告げようと、一瞬だけ気を裂いた蓮花。

だが、その一瞬が致命的な隙を生んでしまった。

「おっと、敵前でお喋りは良くないな。一瞬の油断が死を招く。マ

リアから、そう教わらなかったのか、千里 蓮花アアッ！」

ダリアの長い腕が、棺桶の防御を突破して蓮花の頭を掴む。

「ぐっ！ 七瀬様、お逃げ」

「そら、こっちに来い！」

そのまま、蓮花を振り回しながら半回転し、彼女を掴んだまま最初に入って来た天井の穴から外に飛び出して行った。

## 世界創造（１）

「れ、蓮花ッ！」

直ぐに扉を出現させ、黒刀と共に彼女を追いかけてようとするが。

「まあまあ、落ち着きなよ。キミが行っても、はつきり言って邪魔なだけだつて。それよりも、私と少しお話ししようよ？　正直、戦いとかはうんざりしてるからさ」

オレの前に立ち塞がったのは、もう一人の侵入者。

ダリアと一緒にいたと言う事は、彼女も“神術師”なのだろう。

どれ程の強さなのかは知らないが、あの蓮花が厄介と言っていた相手だ。

一瞬たりとも油断は禁物だろう。

「私はエレナ・ソルディア。長いからエレナって呼んでくれていいよ。それで、さっきのはダリア・グラフィード。まあ、見ての通りの堅物よ。今は『王者の剣』<sup>デュランダル</sup>って部隊に所属してるけど、元々はマリアと同じ『楽園の守護者』に所属してたわ……っと、自己紹介はこのくらいかな？　それで？　キミの名前は？」

今の所、エレナからは敵意は感じない。

確かに彼女の言う通り、オレが蓮花の所に行っても邪魔にしかないのかもしれない。

エレナは無防備に、座布団に正座してるし、本当に争う気は無いんだろうか？

「……七瀬　広樹。見ての通り学生だけど」

例え、それが演技だとしても、こちらが油断しなければ良いだけの事だ。

あまり個人情報とは与えなくなかったが、今は少しでも時間を稼ぎたい。

まともに戦うよりは、こうやって話を引き延ばしていた方が危険は少ないだろう。

「へえ、七瀬か。うん？ どつかで聞いたような気がするけど……まあ、いいか。なら、何か聞きたい事とかある？ 一応、情報交換だからね。暇つぶしに、答えられる範囲で答えてあげるよ」

聞きたい事なら、山ほどある。

お前達の目的は？ 『同盟』は、どうしてこんな事をする？

しかし、一番に出た質問は、真依の事だった。

「その……マリアってのは、水原の事なんだろう？ 屋上で佐伯にそう言ってたし。アイツの事について、教えて欲しい」

考えてみれば、オレは真依の事をあまり知らない。

直接聞けばいいのかもしれないが、彼女がすんなりと教えてくれるとは限らない。

何となく、上手くはぐらかされて終わってしまうような気がする。「えっ？ マリアの事？ それは構わないけど、私もあまり詳しく知ってるわけじゃないよ。それでもいいの？」

オレが無言で頷くと、エレナは軽く肩を竦めて話し出した。

「彼女の真名はスカーレット・マリア。出身は、確かアルフィーネ家だったと思う。ああ、真名ってのは、“神術師”が一人前になった時に、自分の『師』から貰う名前だね。本名は……えーと、水原真依だっけ？ うん。何かそんな感じだったよ。私達はマリアって呼んでたから、そこら辺は良く覚えて無いよ」

「名前は大丈夫だ。それで、他は？」

スカーレット・マリア。何か、不吉な感じがするのは気のせいだろうか？

オレは一抹の不安を胸に抱きながら、先を促す。

「私達が出会ったのは、三年前かな。当時、ガルノイア大戦って言う大きな戦争が五年間くらい続いててね。私達は、そこで一緒に戦ってたの。何か、小競り合いは十九世紀から続いてたらしいけど、まあ、要するに科学と神術の戦争よ。銃とか戦車とか。核兵器とかを力と考える科学派には、“神術師”が邪魔だったんだろうね。それで、時間の流れと共に火種が大きくなって行って、遂には爆発し

たのよ」

「……戦争？　しかも。三年前だって？」

エレナの言葉に、オレは愕然とした。

三年前と言えば、オレが中学生の頃だ。

その時、真依は戦場に身を置いていたと言うのか。

「そう。日本人（キミ達）には、あんまり実感が湧かないかもしれないけど、今でも実際にドンパチやってる国はあるわよ？　小さな紛争だと、平均的にイスラム圏が結構多いかな？　お題目は宗教上の問題が主だけど、領土問題や独立問題とかが本当の所かな。ガルノイアと『神術同盟』は、それが少し他の所とは違っただけ。多分、どっちも焦ってたんだと思うよ」

その口調は、何故か優しく、酷く哀しげに聞こえた。

何故だろう？　どうしてかは分からないけど、彼女は敵ではない。そんな気がしてしまった。

「『神術同盟』と言えば、イギリスの中枢機関。イギリスは“神術”で成り上がった国だからね。まあ、当時は凄く力があつたんだよ？　何たって、“破戒者（キミ達）”に対抗できる唯一の国。銃で倒せない相手を、“神術師”は倒せるんだよ？　そりゃ、何処の国だって裏で手を回して、『同盟』から“神術師”を派遣してもらうよね」

“神術師”だけが“破戒者”を倒せる。

詳しい事は知らないが、十九世紀のイギリスと言えば結構発展してたように思える。

その発展の裏には、“神術”が絡んでいたと？

こんな事なら、もっと歴史の授業をきちんと受けておくんだった。でもさ、『神術同盟』が頑張り過ぎちゃって、今じゃ“破戒者”は少なくなつたんだよ。昔はたくさんあつた“破戒者”の集団も、『銀の歯車』って組織だけになつたし。そりゃ、もう絶滅危惧種くらいに貴重になつてさ。『同盟』が草の根分けても探そうとする筈だよ。人類の存在を脅かす“破戒者”を倒さなきゃ、“神術師”の

存在意義が無くなっちゃうんだからさ」

“破戒者”に対抗できるのは“神術師”だけ。

だが、その“破戒者”がいなくなったら、どうなる？

今まで築いてきた『同盟』の名誉が地に落ちてしまう。

「まあ、要するにさ。“神術師”は“破戒者”を倒し続けてこそ“神術師”なんだよ。“破戒者”も“神術師”も、普通の人から見ればどっちも化け物でしょ？ その内の一方は人類に敵対し、一方は味方した。だから、『同盟』はあれだけ大きくなって、イギリスはあれだけの発展を遂げた。さて、ここで問題です。“破戒者”がいなくなったら、“神術師”は何になるでしょう？」

人類の味方であるからこそ、“神術師”は“神術師”でいられる。人々に仇なす化け物と、人々に味方する化け物。

倒すべき敵を失った化け物は、何になるのかとエレナは問う。

「第二の“破戒者”って事か？」

「ふふっ、正解。七瀬は頭いいね」

別にオレの頭が良いワケじゃない。

ただ、話しが簡単なだけだ。

所詮、化け物は化け物。

味方であるが故の“神術師”なら、敵がいなくなれば、再び化け物に戻るのは当然の事。

そうなりたくないから、“神術師”は“破戒者”を狩るのだ。

「化け物にならない為に、『同盟』は頑張ったよ。“破戒者”を見付けては殺し、見付けては殺し。自分達の行動を正当化する為に、意味不明な正義まで掲げてさ。でも、結果的にそれが、自分達の首を絞めてるだけだって、何で気付かなかったんだろうね？ それから、間もなくイギリスの衰退して、兵器の発展と共に、『同盟』は人類の敵となったんだよ」

“破戒者”を殺せば殺すほど、“神術師”は化け物に近付いて行く。

だが、“破戒者”を殺さなければ、“神術師”は化け物になる。

どう足掻いても、化け物は化け物でしかないのだ。

「それから科学と神術の対立が起こって戦争が起こった。まあ、何か裏では『銀の歯車』が糸を引いてたって噂もあったけど、今はどうでもいいか。前置きが長くなったけど、マリアはその戦争の終盤から部隊に配属されたの。ううん。あの子が来たから戦争が終わったと言った方がいいかもね」

衝撃だった。真依が戦争を終わらせるような力を持っていた事は、この際どうでもいい。

それよりも。もっと重大な事がある。

「水原は……『同盟』に所属してたのか？」

「うん。今は違うけど。戦争が終わって、一度だけ任務をこなした後、姿を消しちゃった。でも、それがどうかしたの？ 何か問題ある？」

あるに決まっている。

真依がオレを助けた意味が、益々分からなくなってきた。

昔、『同盟』にいた人間が、どうして“破戒者”を助ける？

「えーと、続けてもいい？」

「あ、ああ、悪い。それで？」

考えるのは後で良い。

今は少しでも、情報を集めておこう。

「あと、私が知ってるのは、マリアが」

不意に、エレナの言葉が止まる。

不自然な彼女の行動に、オレは首を傾げた。

「おい、どうしたんだ？」

「あつ、ごめん。ううん、何でもないよ。ちょっと、足が痺れただけ」

そう言つて、エレナは立ち上がり、後ろの壁に背中を預けた。

「それで、どこまで話したかな？ えーと、ああ、そうそう。今はどうか知らないけど、私の知ってるマリアは、凄く怖い人だったよ」



「怖い？ 水原が？」

考えてみて、確かに怖いと思った。

最初にあつた時は、心臓が止まるかと思ったし、一步も動けなかった。

真依が『同盟』を抜けてくれて良かったと、改めて実感した。

「私達の部隊は『楽園の守護者』って言うてね。十人の精鋭が集められた部隊で、彼女はその中で一番の年下だったけど、誰もそれを咎める人はいなかった。だって、分かってたもの。そんな事言えば、即座に自分の首が飛ぶ。彼女は当然のように命令して、私達はそれに当然の如く従う。ねえ、キミはマリアの事を知ってるみたいけど。キミから見たマリアって、どんな感じ？」

「えっ……？」

「キミ達の関係は聞かないよ。でも、ここまで丁寧に説明してあげたんだから、それくらいはいいでしょ？」

確かに、エレナの説明で、色々な事が分かった。

真依の事だけではなく、『同盟』の事についても。

「……最初は、怖いと思ったよ」

「まあ、そうだろうね」

エレナが納得するように呟く。

彼女の中での真依は、相当に怖い存在らしい。

「でも、今は違う」

そう。たった一日だけだが、今は怖いとは思わない。

「水原は、優しい奴だよ」

「へえ、優しい？ マリアが？」

その言葉には、明らかに嘲笑が混じっていた。

そんな筈は無い。何をバカな事言っているんだと、エレナは笑う。  
「マリアの瞳を見なかった？ キミがマリアの知り合いなら、今度見てみると良いよ。多分、キミなら直視されただけで動けなくなるんじゃないかな？ そうすれば、そんな事は絶対に言えなくなるよ……」  
って、何で笑ってるの？

知らず、オレの口からは笑みが漏れていたらしい。

ああ、知ってるさ。アイツの目は怖いよな。

実際に、動けなくなっただし、しばらく身体の震えが止まらなかった。

でも

「それを含めた上で言ってるんだよ。確かに、水原の瞳は冷たいよ。氷のように冷たくて、深淵のように深い。だけど、その中にある一片の優しさ。それに気付けば、印象は変わってくるさ」

分かりにくく、伝わりにくいけれども、確かにそこにある。

その優しさを知っているからこそ、優衣は笑って真依の前に立てるんだと思う。

「……………」

そう断言したオレを、エレナは数秒の間、無言で見詰めていた。

何かを確かめるように、オレの目をじっと見詰め、やがて大きなため息を吐いた。

「はぁ……ダメだ。こりゃ、本気で言ってるよ」

呆れたように、それでいて何処か楽しそうにエレナは言う。

「本気で言ってるからな」

追い打ちを掛けるようなオレの言葉に、エレナは更に大きなため息。

でも、オレにはそれが少しだけ嬉しかった。

お前達は知らないんだろう。

真依がどれだけ優しいのか。

彼女の優しさを知る者は数少ない。

その中に、自分が入っている事が、何故か嬉しかった。

「彼はこう言っているけど……」

そんなオレを横眼で捕えて、口元に微笑を浮かべながら、

「あなたのには、どうなのよ？　ねえ、マリア？」

エレナは、この場にいる筈がない相手に問い掛けた。

「えっ……………」

驚愕は直ぐに、数瞬の後に訪れた。

「　　そうね。見当違いも甚だしいつて所かしらね？」  
いつも通りの冷たい声。

その声と共に、天井の穴から天使が舞い降りた。

## 世界創造（１）（後書き）

お久しぶりです、中二作者のなかみんです。

やっと、物語の四分の一くらいは来たでしょうか？

相変わらず、私の書く物語は中二街道まっしぐらですよww

感想を書いて下さった方、個別に応援メッセージを下さった方。

本当にありがとうございます。

全員に返信が出来なかったので、この場を借りてお礼を申し上げます。

これからが物語の本番になるので、更に中二な展開が待っていると  
は思います。

最後までお付き合い頂けると幸いです。

世界創造(2)(前書き)

> i 2 5 8 4 3 | 3 3 6 8 ^

## 世界創造（2）

「そうでしょうか？ わたくしは、存外に当たっていると思いますか？」

続いて響くは従者の声。

まるでそれが当たり前の如く、蓮花は主の横に華麗な着地を決めた。

「水原！？ それに、蓮花！？ 二人とも、無事だったのか？」

学校に残して来てしまった真依と、ダリアに連れ去られた蓮花。

二人とも大丈夫だとは思っていたが、こうして無事な姿を確認するとやはり安心する。

「ふふっ、心配してくれたの？ でも、私があんな小娘にやられる筈ないでしょう？」

口元に浮かぶ黒い微笑みに、オレは思わず苦笑した。  
心配などいらない。自信ありげに言い放つ彼女は、少しだけ嬉しそうに見えた。

「あら、メリアルを小娘扱い？ 一応、『同盟』のトップの一人なんだけど…… あはは！ まあ、あなたから見たら小娘か」

楽しげな笑い声を上げ、壁から背中を離す、エレナ。

その手には、いつのまにか一冊の赤い本があった。

「ダリアはどうしたの？ まさか、殺しちゃった？」

「それこそ、まさかよ。七瀬君家の庭に転がってるわ。近所から苦情が来るといけないから、帰りに回収して行ってくれない？ 骨の二、三本折っておいたから、自力で動くのは難しいと思うから」

了解、とエレナは頷き、本を開く。

『解錠（開け） ソロモンゲーティアの小さき鍵まが』

黒き本から放たれる、凶き赤光。

それが、室内を鮮血の色に染め上げる。

「魔書・ソロモンの小さき鍵ゲーティア。世界に三つしかない、創造の“神具

”。久しぶりに見るけど、やっぱり凄いわね」

真依の口からは感嘆の声。

七十二もの悪魔を記したと言われる書物が、今その姿を現そうとしている。

『That's a sincere apostle. Please give your assistance who broke a troop of an archangel to me. (其は誠実なる使徒。大天使の軍団をも打ち破りし汝が力を我が元に)』

それを一体、何と表現すればいいだろう？

周囲に立ち込めるは、禍々しい空気。

“破戒”とは違う。あれは、第二異界への門を開くものだ。だが、これは何だ？

第二異界に似ているが、微妙に違っている。

だが、明らかに第一異界の空気ではない。

故に、これは

「疑似空間。世界法則の更なる中核へとアクセスして、偽りの世界を創り出す“神術”。こんな事が出来るのは、世界で貴方しかないわよ」

“神術”とは、何かを生み出す神の術。

ならば、新たな世界を生み出す事も出来る。

“神術師”では、第二異界へは届かない。

ならば、創造ろつ。第二異界に酷似した空間を。

『I'll give permission to your crime which tries to return to heavens beyond thousand and two hundred. (千二百の時を超え、天界へ戻らんとする汝の罪に我が許しを与えよう)』

滝のように汗が流れ出し、呼吸が困難になる。

ダメだ。此処にいてはいけない。

此処（この世界）は、人間が存在していい場所ではない。

涼しげな顔でエレナと対峙する真依とは裏腹に、オレの意識は霞み立っている事も困難になって来る。

隣に立つ蓮花が、さり気なく支えてくれているなければ、とつくに倒れているだろう。

『 罪の章・第三十五節 』

“ 詠唱 ” が終わり、エレナの前に黒い何かが顕現する。

何だ、アレは？

渦？ いや、深淵か？

『 罪を背負いし翼ある狼 マルコキアス 』

囁くように、エレナはその名を告げる。

次の瞬間、深淵から這い出たのは一匹の獣。

身体は狼だが、その尾は蛇。そして二枚の翼を持った、住天使。ドミニオン

アレキスター・クロウリーが召喚したとも言われるその悪魔が、

真依の前へと立ち塞がった。

「ふふつ、罪を背負いし翼ある狼。マルコキアス 序列三十五位程度で、私をどう

にか出来ると思ってるの？」

微笑と共に言い放つ真依に、翼狼が咆哮する。

「 ツ！？ 」

物理衝撃をも伴う音波を、蓮花は棺桶で防ぎ、オレはその後ろで目と耳を塞ぐ。

次元が違い過ぎる。

これが『楽園の守護者』。

過去の大戦を生き抜いた、“神術師”の力。

「はぁ……うるさいわね」

不意に響いた真依の声。

それと同時に、咆哮が止む。

「……………」

目を開けた時には、既にエレナの姿は無く、代わりに翼狼が床に倒れ、苦しそうな息を吐いていた。



何が起こった？

オレが目を閉じていた一瞬の間に、一体何が起こったと言っただ？  
「さて、そろそろ帰りましょうか？ 久しぶりに良い運動になったわ」

オレは失念していた。

これを生み出したエレナが『楽園の守護者』ならば、目の前に立つ真依もまた同じ。

「ほら、行きましょう、七瀬君」

「えっ？ あっ、ちよつと、水原！」

エレナの生み出した悪魔を事もなげに葬った真依は、オレの手を引いて歩き出す。

その横顔が、何処となく楽しそうに見えたのは気のせいだろうか？

## 世界創造（2）（後書き）

この詠唱を考えるのに、三日くらい掛かったぜw  
学力のない作者でサーセン。

ちなみに、画像はエレナ姉さんですぜ。

エレナ姉さん、オレを踏んでくださ（ry

## 神を殺す者

人通りのない裏路地に入り、追手が無い事を確認した立花は、安堵の息を吐いた。

「ふう……何とか逃げ切れたみたいだね。まったく、第四位だけならともかく、もしマリアまで出て来られたら命が幾つあっても足りないよ」

苦々しげにそう呟き、立花はとある建物に入る。

そこは、小さな居酒屋。

営業時間外で客の姿はなく、代わりに濃厚な鉄の匂いが立ち込めている。

「……………」

店主だろうか？

立花は、床に倒れ血を流す男に一瞬だけ目をやると、それを踏み越えて奥へと進んでいく。

「何だ、立花か？ 意外と速かったな」

暗がりの向こうから声が掛かり、立花は一瞬だけ身を固くしたが、直ぐにそれが仲間の声だと分かり力を抜いた。

「詩織……ちよっと予定外の事が起きたの。昨日、報告した“破戒者”。あの子が、まだ生きててさ」

暗い室内に立っていたのは、真っ黒な少女。

纏う長衣は漆黒のロングコート。靡く長髪も、やはり漆黒。だが、それよりも黒いのが、その瞳だ。

闇に同化するような姿とは裏腹に、瞳だけは何故か目立つ。それはどうしてか？

一言で言うなら、闇の深度が違う。

「生きてた？ だが、確かに致命傷を与えたのだろうか？」

それは、並大抵の闇ではない。

日が差さない室内よりも暗く、夜の闇よりの深く。

闇の中の更なる闇。

混沌の如き漆黒。

それが、彼女 “神を殺す者”<sup>タナトス</sup>の瞳だ。

歳は立花よりも少し上。

本名かどうかは分からないが、詩織と名乗っていたので立花はそう呼ぶことにしている。

「うん。でも、生きてた。どうしてかは知らないけど、あの傷で生き延びるなんて、ただ者じゃないよ。ねえ、彼は一体、何者なの？」  
「ただの“破戒者”。それだけだ」

絶対的な闇を宿した少女は、立花の問いに短く答えると、店の奥から出て来た、もう一人の少女に目を向けた。

「終わったか、ユキ？」

それは 白雪。

ユキと呼ばれた少女の肌は、その名の通りに白く清い。

腰まではあるうかと言う詩織の髪とは違い、肩までに切り揃えてある彼女の髪も同じく白色。

否 それは白色というよりは、白銀というべきか。

「うん、終わった。それよりも、立花。さっきの話は本当？ もしも、嘘だったら……」

「ほ、本当だつて。何なら、自分で確認して来なよ？ アンタの、昔の友達……だったんでしょ？」

ユキの目が細められるのを見て、立花は慌てて言葉を紡ぐ。

昨日は大変だった。

普段は温厚なユキが、七瀬とか言う男を殺したと言ったら、血相を変えて襲い掛かって来た。

あんな優男の何処がいいのかは分からないが、どうやら相当にこ執心のようなのだ。

「……分かった。そうする」

何とか場が落ち着き、胸を撫で下ろした瞬間、

「詩織？」

彼女の口元が妖しく歪んだ気がした。

「ふふ……なるほど。やはり日中に動くのは好ましくないな。『同盟』の犬共が此処を嗅ぎつけて来たぞ」

詩織に言われて初めて気が付いた。

店の外には、“神術師”の気配を感じる。

それも一人や二人ではない。

二十……いや、三十以上はいるだろうか？

「ごめん、詩織。ちゃんと追手は撒いたつもりだったんだけど……私、行ってくるよ」

どうやら、後を着けられていたらしい。

こんな初歩的なミスをするなんて、今日の自分はどうかしている。せめて責任を果たそうと、立花が外に出ようとするが、それを詩織は優しく制した。

「別に、構わんさ。奴らは私に用があるんだろう？ ふふっ、イギリスから、わざわざ会いに来てくれたんだ。少しは相手になってやらんと失礼だろう？」

小さな靴音を立てて、詩織が足を踏み出す。

「ユキ、立花。十五秒経ったら外に出て来い。それ以上は時間の無駄だ」

二人で一秒。それで十分だと彼女は言う。

“神を殺す者”<sup>タナトス</sup>と。

今なら、『同盟』が彼女をそう呼んだ理由が少しだけ分かる。

それは 悪魔。

それは 死神。

呼び方など、どうでもいい。

ただ、“アレ”が人外の生き物である事は確かだ。

人を遥かに超越した存在<sup>タナトス</sup>。

故に “神を殺す者”<sup>メフェイス</sup>。

もしくは “大悪魔” か？

「怖いのか？ 震えてるよ？」

いつの間にか隣に立っていたユキに指摘され、やっと自分の体が震えている事を自覚した。

「いや、逆だよ。嬉しくてさ」

怖くない筈がない。だが、同時に嬉しくもある。

まともじゃない？ 当然だ。

むしろ、そうで無くては困るのだ。

「なるほどね。その気持ちは何となく分かるかも」

納得したようにユキが呟くのと同時に、詩織の手が扉へと掛かる。そして、彼女は

『 M e m e n t o M o r i 』  
メント・モリ

何処かで聞いたような言葉と共に、店の外へと出て行った。

## 定例集会

イギリスの首都・ロンドン。人口七百五十万を超える大都市の、観光名所と言える『ロンドン塔』。『神術同盟』の本部はそこにある。

要塞宮殿の中心に立つ白い塔。その地下には、”四大神術師”のみに入室を許された特別な一室が存在し、円を描くように四つの椅子が並べられている。

「はあ……それにしても、遅いですね」

その内の一つ。『第四位』の席に座りながら、佐伯 冬花はうんざりしたようにため息を吐いた。

今日は月に一度の、定例集会の日。本部を管理するマティルド卿以外は、特殊な”術式”で意識のみを此処に飛ばして参加する手はずになっている。

しかし、冬花が意識を飛ばして部屋に入った時には、誰の姿も見えず、かれこれ一時間以上は待っている。

幾ら意識のみを飛ばしているだけとは言え、さすがに小一時間も待たされては疲れる。

そんな時、ようやく正面の扉が開き、一人の女が部屋に入ってきた。

「ふむ、カーティスとフィルアルト卿は欠席か。まあ、いつも通りだがな」

「……マティルド卿」

空席を横目に、『第二位』の席に座ったのは、レオリス・マティルド。放浪癖のある『第一位』の代わりに、『同盟』を纏め上げる細身の女性。冬花は、はつきり言ってこの女性が苦手だ。

「集会の開始時刻は、一時間ほど前だったと思いますが？」

「ああ。だが、それがどうした？」

「……いえ」

せめて一言くらいあつてもいいだろうに。そんな気持ちを押し殺して、冬花は姿勢を正す。本当ならば、これから報告することは全員の耳に入れておきたかったが仕方ない。

「さて、それではさつさと済ませてしまおう。シルビア、月末の報告書を見る限り問題はなさそうだが、あれから何かあったか？」

「はい。実は、私の管理地区である桜花市に、”神を殺す者”<sup>タナトス</sup>と思われる者を確認しました」

「ほう、あの”死神”か。随分と懐かしい名前だな」

”神を殺す者”<sup>タナトス</sup>の名に、僅かばかりレオリスは驚いたようだが、それ以上は何も言わない。それどころか、かつて『同盟』を壊滅状態に陥らせたと言う相手を、懐かしんでいる。

「懐かしい……ではありません。非常事態なんですよ。今、奴を止めなければ、再び悲劇が起こる。また、罪なき人々の血が流されるのですよ？」

「そうだな。なら、貴様はどうするつもりだ？ 言っておくが、我は此処を離れられんぞ。最近、『歯車』におかしな動きがある。我が日本へ向かえば、奴らは嬉々として本部へ攻めこんでくるだろう」  
「分かっています。ですから、『王者の剣』の半数を日本に送って頂きたい。彼らと共に、今度こそ”神を殺す者”を止めてみます」

レオリスが加勢に来てくれれば、大きな戦力になるが、彼女は本部を離れられない。『歯車』に睨みを効かせる役目もあるし、彼女がいなければ非常時に命令系統が麻痺して使い物にならなくなる。

だからこそ、冬花が要求したのは『同盟』最強の戦闘部隊。五百人の精鋭を集めた『王者の剣』。ダリア達を含めて、『王者の剣』が半数も集まれば、幾ら”死神”とて敵ではない。

「馬鹿が。話にならん」

しかし、その要請はあつさりと拒否された。

「『歯車』の襲撃に備えて、全ての戦闘部隊は配置済みだ。貴様に貸せる部隊は無いし、それに『王者の剣』だと？ よりにもよって切り札を貴様のような小娘に任せると言うのか。少しは考えてから



物を言えよ」

「し、しかし……」

「くだいな。もし仮に、貴様の言う通り『王者の剣』の半数を日本に送ったでしょう。しかし、その間、本部の守りはどうする？ 貴様が罪なき者を守るように、我も『同盟』に属する者を守らねばならん。分かるか？ 不確定な情報だけで部隊は動かせん。今、貴重な戦力を失う訳にはいかんだ」

確かに、レオリスの言っている事も分かる。彼女には彼女の立場があるし、同士を案ずる気持ちも理解できる。

「ですが、本部には数千の”神術師”が在籍していると聞きます。戦闘部隊では無いとは言え、それだけの数ならば、『齒車』など脅威にはならないはず。ましてや、マティルド卿が直接指揮を取れば、何も問題はないでしょう」

「問題はない？ 数で勝るならば、戦いには勝てる？ はあ……甘いな。反吐が出るほどに甘い、小娘の戯言だ。貴様はガルノイアで、一体何を学んだ？」

心底、呆れ果てたと言わんばかりに、レオリスはため息を漏らす。「いいか。確かに、此処には五千近くの”神術師”が在籍している。しかし、彼らの殆どが研究専門の奴らだ。実用性を無視し、机上の空論で戦場を判断する輩の集まりでしか無い。そんな馬鹿どもを戦場に出してみる。我先にと逃げ出すならばまだマシな方。最悪、錯乱して味方に”神術”を使い被害を拡大させるのがオチだ。どちらにしても、我々の敗北は動かない」

実戦を知らない有象無象ならば、いない方が百倍は良い。小娘扱いされた事には腹が立つが、これについてはレオリスが正しい。

「で、ですが……不確定と言えば、『齒車』が動くかどうかと同じです。私の考えが甘かったのは認めますが、”神を殺す者”も『同盟』にとっては大きな脅威です。半数は無理でも、せめて数十人は派遣して頂けませんか？ 私だけでは、手に余ります」

だが、ここで退くわけには行かないと、冬花は食い下がる。する

と、彼女は短く鼻をならし、ある名前を呟く。

「ダリア・グラフィードに、エレナ・ソルディア。この二人を知っているか？」

「……そのお二方ならば知っています。あの『楽園の守護者』に名を連ね、ガルノイア大戦では、数々の武功を上げた英雄。それがどうかされましたか？」

「ふっ、やはり甘いな、シルビア。それで誤魔化せると思ったのか？ 貴様が秘密裏に、二人を呼び寄せている事はもう分かっている」  
「可能な限り動揺を抑えたつもりだが、レオリスにはお見通しだったらしい。妖しげな笑みを浮かべて、真実を言い当ててくる。」

「さて、これはどういう事かな、メリアル卿？ 『王者の剣』を個人の都合で動かすなど、幾ら”四大神術師”とは言えども許される行為でない。場合によっては反逆の意とも取れるが？」

「くっ……！」

藪をつついて蛇を出す、とはこの事だ。的確に痛いところを突かれ、冬花は押し黙る。

マズイことになった。一番、知られてはいけない人にバレた以上、次に来る展開は予想できる。

「『同盟』に反意を持つ者を、”四大神術師”の席に座らせておくわけにはいかんな。そう思うだろう、シルビア？」

そう。この人なら、絶対にそう言うと思った。シルビア・メリアルを、”四大神術師”の地位から引きずり下ろせる絶好のチャンスを見逃すはずもない。

「と、普段ならばそうなるのだが。今は状況が状況だ。この件は保留にしておいてやる」  
「えっ？」

意外だった。良くて地位剥奪。最悪、逆徒として『同盟』に追われる事を覚悟していたのに。

「正直に言えば、我は貴様が気に食わん。しかし、貴様を退席させたとしても、相応しい後任がいらない。グラフィードやソルディアは

断るだろうし、ミルドレッドでは不安が残る。研究専門の奴らなど論外だ。プライドばかりで、何の役にも立たん。まあ、どちらにしろ今よりも状況は悪くなるだけだ」

「……………」

「だから、こうしようではないか、シルビア。」神を殺す者”は貴様が止める。それで、この件は見逃してやる」

なるほど。そう来たか。

「つまり、功績によって罪を償えと？」

「そうだ。感謝しろよ。自分で言うのも何だが、我がこんなチャンスを与えるなど珍しいぞ。良かったな、シルビア」

上から目線で、楽しみに笑うレオリスに、冬花は心の中で舌打ちをする。

結局、いつもこうなのだ。何かと理由を付けられて、自分の申請は通らない。誰かの血が流れると分かっているながら、また見ていくことしか出来ない。

「返事は？」

「分かり……ました」

悔しさに拳を震わせながら、冬花は渋々ながら頷く。それを見たレオリスは、話しは終わったとばかりに席を立ち、冬花の横をすり抜けていく。

「ああ、そうだ。貴様に聞いておきたかった事がある。なあ、貴様はこの時代をどう思っている？」

「はあ……………」

てつきり、そのまま扉を開いて行ってしまえばかり思っていた冬花は、レオリスの問いに間抜けな声を出してしまう。

「答える。貴様を守りたいと願う、国や人。それらが創るこの時代を、どう感じるのか？」

しかし、レオリスは問いかけを繰り返す。いつものような上から見下す態度ではなく、対等に。あくまでも一人の”神術師”として尋ねていた。

「私は」

だからだろうか？

「私は 寂しいと感ずます」

不意に、浮かんできた本当の気持ち。

何の考えもなく、それを口にしてしまったのは。

「ほう、寂しい……か。如何にも、貴様らしい、気に食わん答えだ」  
それで納得したのか、レオリスは扉へと手を掛けた。そして、部屋から出ていく直前、

「我は 虚しいと思った」

静かに、だがハツキリとした口調でレオリスは呟いた。

「虚しい、ですか？」

「そうだ。時代を重ねる毎に、進化を続ける科学。それとは逆に、排斥されていく”神術”。虚しいよな。我々がどう足掻こうとも、直に”破戒者”の存在は脅威では無くなり、『同盟』は人類の敵となる」

既に、力が全ての時代は終わり、”破戒者”の脅威は過ぎ去った。  
「つまり、我々は敗北したのだ。利用されるだけ利用され、最期は科学に漁夫の利を奪われてな」

”神術師”と”破戒者”。長きに渡る因縁の対決に勝者はなく、それを眺め続けた者が勝利を掴んだ。

「仕方ありませんよ。それで、平和が訪れるならば、私は流れに従います。私たちの役目が終わるだけです」

「ハッ、だから貴様は気に食わんのだ。自らの理想に殉ずる？ ああ、大いに結構。だが、それは貴様の意志ではない。貴様は『正義』に縋っているだけだ。誰かの為に、誰かの為に、と下らん偽善を振りかざし、言われるがままに座して死を待つ操り人形。そんな者が人々の上に立つ？ ふざける、見ていて苛つくんだよ。貴様は、本当の意味では一度も”戦って”いないのだからな」

「……………」

『同盟』は新時代を求め、時代は『同盟』を求めなかった。た

だ、それだけのこと。そこに、皆の幸せがあるのなら。二度と悲劇が起こらないのならば、それで良かった。

「我は認めんぞ。いつでも道を切り開いてきた、我々の居場所がない新時代など認めん。『同盟』と時代が決別した時、貴様はどちら側に立つのか。それを考えておくといい」

言うだけ言つて、レオリスは部屋から出て行つた。

貴様は、本当の意味では一度も”戦つて”いないのだからな。

冬花の頭の中では、別れ際に言われた言葉がいつまでも残つて離れなかった。

## 英雄

日が落ちて、再び夜の雑踏に包まれる桜花市。

駅の近くにあるファーストフード店に、真依の姿があった。

気紛れに注文した大人気メニューの数々は、手付かずのままテーブルの上に放置され、苛立ちながら時計と店の入り口に目を向ける様は、待ち合わせ相手が酷く遅れている事を示していた。

「あー、悪いね。待った？」

謝罪の言葉とは裏腹に、まったく悪びれた様子のない態度。

真依と同じ桜花高校の制服を着た少女が、手を振りながら到着したのは、それから一時間後の事だった。

「いいえ、私も今来た所よ、神奈。待ったのは、ほんの三時間くらいだから気にしないで。ほら、貴方の好きなジャンクフードよ。奢ってあげるから、冷めない内に食べなさいよ」

テーブルの上に並んだ品々を少女の方へと押しやり、真依は薄く微笑んだ。

「うつ……悪かったよ」

その軽薄な笑みに、思わず少女が身を引いたのは言うまでもない。「それで？ どうだったの？ 『銀の歯車』の情報網で、何か分かったかしら？」

『銀の歯車』。それは、今ではたった一つとなった“破戒者”が集う組織。

『神術同盟』に対抗する為に生まれた、“破戒者”達の最後の砦である。

「ああ、ここから少し南にある居酒屋で、“神を殺す者”<sup>タナトス</sup>と“王者の剣”<sup>デュランダル</sup>がぶつかったみたいだ」

「……結果は？」

言うまでもないだろう、と少女は肩を竦める。

月島 <sup>つきしま</sup> 神奈 <sup>かなな</sup>。真依の古い友人であり、『歯車』を纏める“破

戒者”の一人だ。

屋上での一件も、彼女が知らせてくれなければ、気付くのが遅れて大事に至ったかも知れない。

その点では、神奈に感謝しているのだが……

「ねえ、神奈。『歯車』が『同盟』を憎んでるのは分かるわ。“神術師”が“破戒者”にした事は許されないってのも分かってる。でも、今は“神を殺す者”<sup>タナトス</sup>をどうにかする方が先でしょう？ でないと、此処がガルノイアの二の舞となるのよ。それを、理解してるかしら？」

「うーん、まあ、真依の言いたい事は分かるよ。私達も、ガルノイア大戦では沢山の仲間を失ったし、あの女を憎んでないワケじゃない。でもさ、これはチャンスなんだよ？ 第四位は“神を殺す者”<sup>タナトス</sup>にしか目が行ってなくて、私達の事を見落としてる。なら、その今が『同盟』の一角を崩す最大のチャンス。奴が住んでるマンションは調査済みだし、仲間と総攻撃すれば、あの化け物を殺せるかもしれない」

打倒『神術同盟』に燃える神奈に、真依は思わずため息を吐く。

彼女と唯一、意見が合わない点はそこなのだ。

幾ら言っても、話しは平行線を辿るばかりで進展はなし。

『同盟』と『歯車』の溝は、思ったよりも深いようだ。

「分かったわ。“神を殺す者”<sup>タナトス</sup>は、私だけで何とかしてみせる。じやあね、貴方達も頑張つて。学校にいたお仲間にもよろしく伝えておいて頂戴」

時間を無駄にしたとばかりに、真依は立ち上がり苛立ちを顕わに歩き出した。

「ちょ、ちよっと、待ってよ。ねえ、真依。私達と一緒に戦わない？ ほら、同盟では英雄って呼ばれてたんでしょ？」

店を出た所で神奈に引き止められて、真依は立ち止まる。

「……その話はしないでよ」

神奈の媚を売るような態度が、酷く癢に障る。

英雄。その一言が、真依の頭の中で何度も木霊した。

「何でさ？ 真依がいれば、第四位なんて敵じゃない。だって『赤き女神』スカーレット・マリアなんだろう？」

やめろ。頼むから、やめてくれ。

私は英雄なんかじゃない。

脳裏に浮かぶのは、壊滅した街とそれでも尚、銃を手に取る人々。愛する者を、大切な者を守ろうとする彼ら。

だが、それを無慈悲にも蹂躪する、わたし英雄の姿。

それを見て、誰かは言った。

スカーレット・マリア  
赤き女神と。

それを見て、違う誰かはこう言った。

スカーレット・マリア  
赤き悪魔と。

つまり、私はそう言う存在。

慈悲の欠片すらも持ち合わせない、殺戮の朱い女神。あか

「ねえ、お願いだよ？ もう一度、英雄に戻ってよ。今度は、私達の英雄として。」

瞬間、真依の全てが沸騰した。

「私は、もう二度と英雄にはならないッ！」

それは、悲鳴に似た絶叫。

普段の彼女からは、考えられない。

追い詰められた者が、どうする事も出来ずに上げる断末魔。

真依の叫びは、驚くほどにそれに酷似していた。

「えーと、真依？ ごめん、私はそんなつもりじゃ……」

戸惑い気味に掛けられる声に、真依は我に帰った。

「ッ！」

人々の注目を集める中、神奈を突き飛ばし、真依は逃げるように夜の街を駆け抜けた。



## 英雄（後書き）

最近、ちよつとリアルが忙しくなつて参りました。  
それでも、定期的に更新は出来ると思いますので、気長に待つて下さる皆様。  
これからも、よろしくお願いします。

## 冬花の決意

「私は、一度も戦っていない？ くっ、何が……貴方に、何が分かると言っんですか！」

桜花高校から近い、とあるマンションの一室。定時報告を終え、部屋に戻ってきた冬花は、怒りのあまりテーブルに拳を叩きつけた。その衝撃で、買ったばかりの携帯電話が音を立てて床へと落ちる。「……どうして」

腹が立つ。知ったふうな口ばかり叩く、レオリスが。

そして、何よりも彼女に一つも言い返せなかった自分自身が。怒りに満ちた呟きと共に、冬花は携帯を握り締めた。

最後まで、自分が『四大神術師』に加盟することに反対していた上司。彼女の顔を思い出すだけで、更なる怒りが沸き起こる。

「私だって、貴方の事は気に喰わない。そうやって、いつも無理難題ばかりを押し付けて！」

怒りに任せて、冬花は壁に携帯を投げ付けた。ガンッ、という鈍い音の後、床の上に機体が転がる。

「はぁ……はぁ……」

肩で息をしながら、冬花は画面にひびが入った電話をもう一度手に取る。

割れてはいるものの、まだ機能は停止していないらしい。亀裂の向こうから漏れる光が、酷く癢に障る。

「何が」『歯車』に不審な動きがあるので応援は出せんな”ですかッ！ 今更、『同盟』も『歯車』もないでしょうに！」

怒号と共に、再び電話を壁へと投擲する、冬花。

今度はボタンの幾つかが外れて、床に散らばった。

「あらあら、随分と荒れてるわね。察するに、応援要請は却下されたみたいね？」

その声に振り向くと、入口の所でエレナが壁に寄り掛かるように

して立っていた。

「ソルディア卿……すみません。少々、取り乱しました。グラフィード卿の怪我の具合は如何でしょうか？」

「別に、大した事はないわ。治癒を早める”神術”を掛けたから、明日になれば全快する筈よ。それよりも、続けたら？ マンションごと買い取ったんでしょ？ 隣人に気を使う必要もないし、私達の事なら気にしないでいいわよ？」

「そうですか。では、遠慮なく」

そう言つと、また携帯電話を拾い、怒りにまかせて床に叩きつける。

「くっ、末席だからって甘く見て！ 小娘って、自分だって大して年齢変わらないくせに！ フィルアルト卿は何処にいるのか分からなし、カーティス卿は出席しない！ 『同盟』どころか世界の危機に動かなくて、一体、いつ動くと言うんですか！」

一しきり怒りをぶつけて、疲れたのか冬花は床に座り込んだ。

そんな様子に、エレナは人知れずため息を漏らす。

……まあ、仕方ないと言えば仕方ないんだけどね。

現在、『神術同盟』を動かしているのは、第二位である、レオリス・シャルロット・マティルド。通称・マティルド卿だ。

第一位のフィルアルト卿は、実力は群を抜くだろうが、興味の無い事には関わらない性格だ。

第三位のカーティス卿は、就任と同時に隠居を決め込み、会合に参加すらしていないらしい。

冬花が”四大神術師”に就任出来たのは、彼女の『師』であるバルテル・アルヴィンが元第三位だった事もあってだろう。

彼の死後、後を継ぐようにして末席に加わったのが、シルビア・メリエルこと佐伯 冬花だ。

当時は『同盟』の中に、日本人を”四大神術師”をするのに反対意見もあり、実際、マティルド卿は大反対したそうだ。

彼女は『楽園の守護者』の中から、選別すべきと考えたみたいだ

が、生き残ったメンバーはエレナを含めて三人だけ。

それも、一人は『同盟』を裏切り、目下逃亡中だったのだ。

エレナにも話が来た事は来たが、面倒だったので断ってしまった。結果として、冬花が末席に加わったのはいいが、『同盟』の中にはそれを、未だに快く思わない者たちも多い。

事実としてマティルド卿は、冬花を毛嫌いしているようだし、応援要請の却下も彼女が裏で手を回していたのだろう。

……こんな事なら、私が就任していれば良かったかしら？

今更ながらにエレナが思い始めた時、冬花が不意に立ち上がった。「あら？ どうしたの？」

てつきり泣いているだろうと思っていたが、冬花の目に涙はない。代わりに、何かを決意したような瞳がそこにあった。

「あの年増に文句を言っても始まりません。こうなったら、私達……いえ、私だけでも動かなくてはなりません」

冬花はクローゼットを開けると、中にあった大きめの段ボールを五つ取り出す。

冬花の行動を不思議そうに見詰めるエレナには構わず、彼女はそれに魔力を注ぎ込む。

『起動』

次の瞬間、段ボールを切り裂いて、冬花の前に飛び出す五つの人影。

「へえ、魔導人形か」

魔道人形。その名の通り、魔力で動く人形の事。

魔力を送っている者を主と認識し、命令を忠実にこなす感情なき機械。

その昔、魔導人形に心を与える実験があったらしいが、人道から外れた行為と非難を浴び、その時に製造されていた人形は全て廃棄されたらしい。

故に、これはただの機械。

人の形をしてはいるが、先程、冬花が壊した携帯電話と何ら変わ

りはない。

「とは水原 真依の搜索を。その他は”神を殺す者”<sup>タナトス</sup>の動向を探りなさい」

冬花がそう告げた瞬間、窓から飛び出していく人形達。

その動きに一切の無駄はなく、本当に機械である事を冬花は実感した。

「五体も手に入れるのは大変だったでしょう？ それにしても、どうしてマリアの搜索を？ 今は彼女に構っている暇は無いんじゃないの？」

不思議そうに尋ねるエレナに、冬花は静かに頷く。

そして、机の上に飾ってあった、クリスタルのオブジェを手にとった。

「貴方……まさか」

それは、冬花が”四大神術師”に就任した時に、証しとして授かった物。

代々、受け継がれて来たそれは、冬花にとって何よりも大切なモノの筈だ。

「ハミルトン家のエレナ・ソルディア卿。現時点をもって、貴方に第四位を譲渡します。受け取って下さい……いえ、受け取りなさい。これは命令です」

目の前に突き出されたそれを見て、エレナは信じられないとばかりに目を見開く。

「どういう……つもりなの？」

エレナからそう問われ、冬花は真っ直ぐに目を見据えて答える。

「私は、”神を殺す者”<sup>タナトス</sup>を止めたい。例え……それが、『同盟』の規律に反していようと。それだけです」

その姿に、駅で彼女が口にした言葉が思い起こされる。

私は ”神を殺す者”<sup>タナトス</sup>を止めます。恐らく、命を賭ける事になるでしょう。

命を掛けてでも止めると、彼女はそう言った。

「ねえ、ソルディア卿。貴方なら、分かるでしょう？」神を殺す者<sup>タナトス</sup>を放っておけば、どうなるのか？どんな悲劇を招くのか？

また沢山の人が死んで、この街が第二のガルノイアになるんですよ！」

叩きつけるように、冬花は言葉を紡ぐ。

あの悲劇を知っているエレナにだからこそ、冬花は告げる。

「もう、あんな悲劇はいらない！皆が笑える世界を。誰も泣かないで済む世界を。そんな世界を創るのが『神術同盟』。私はずっとそれを信じてきました。痛くても耐えた。苦しくても頑張った。だから、再び悲劇が起こるなら、私はそれを止める人になりたい。その為に、私は『四大神術師』になった。それなのに！」

知らず、涙が頬を伝う。

哀しいワケじゃない。ただ、悔しい。

”破戒者”を殺す事が正義。

何が正義だ、ふざけるな！

『同盟』は何も救わない。

手を差し伸べる事すらしない。

それが、正義の筈がない。

「何かもう……疲れちゃいましたよ。先程、救援要請が却下された時、分かりました。私の信じて来た正義は、こんなものなのかと」憎悪を込めて、冬花は言う。

レオリス・シャルロットがいる限り、『同盟』動かない。

彼女の言う現実とは、体裁とか名誉とか。

多分、そんな下らないものだろう。

「だから、私は水原先輩に、協力を要請してきます。『同盟』の裏切り者である彼女に、頭を下げるのです。私はもう、第四位でいる資格はありません。だから、第四位は貴方が継いで下さい。どうせ、私はお飾りの末席です。私の言う事なんて、誰も聞いてはくれない。応援要請も通らない。そんな名ばかりの第四位に胡座を掻いて、死んでいく誰かを見捨てたくはありません。これが最後の命令です。」

受け取りなさい、エレナ・ソルディア」

そう、これが最後の命令。

だから、聞いてよ。

お願いだから、受け取ってよ。

そんな思いで、冬花はエレナを見詰めた。

「まったく……貴方って人は。そんな命令、全力で願い下げに決まってるじゃない」

「……そうですか。残念です。無責任に放り出す事はしなくなかったのですが、仕方ありませんね」

呆れたように呟くエレナの言葉を聞いて、冬花は静かにオブジェを机の上に戻した。

まあ、彼女に継ぐ気が無いのならばそれでいい。

何となく、その答えは予想していたし、自分の後任はマティルド卿あたりが喜んで決めてくれるだろう。

「何処へ行く気？ 外は寒いわよ？」

エレナの前を通り過ぎて、冬花はドアに手を掛ける。

「私はもう、第四位ではありません。動かせる部下が人形しかないなので、自身で動くしかないでしょう？ ああ、後は好きにして頂いて結構ですよ。今の私に、命令権など存在しませんから。帰国するなり、国外に逃げるなりと、自由にして下さい。グラフィード卿にもそう伝えておいて下さると幸いです。まあ、こう言う時にこそ、人望とやらが試されるのでしょうか……どうやら、私はそれに恵まれてはいなかったみたいです。ただ、上だけを目指して駆け抜けてきましたので、当然と言えば当然ですけどね」

自虐的にそう笑い、冬花はドアを押し開ける。

身を切るような冷たい空気が全身に突き刺さるが、何故だか今はそれが心地良い。

「短い間でしたが、お世話になりました。私のような若輩の我儘に付き合って頂き、本当に嬉しかったです」

そう。本当に彼らには感謝している。

実力も知識も格下である自分の要請を受けて、ここまでやって来てくれた。

それだけで、もう十分過ぎる。

第四位どころか『同盟』の一員でいられるかも怪しい自分に、これ以上、連いて来て欲しいと言うのは、虫が良い話だろう。

「Sophia The Gnosticism（総ての人々に救いあれ）」

最後にそう締め括り、冬花はドアを閉めた



## 過去の亡霊

「はぁ……どうしたものかな、この状況？　どうする、ダリア？　今なら、貴方が第四位になれるわよ？」

冬花が出て行った室内で、独り言のように呟いたその問いに、答えたのは嘲りを含んだ声。

「ふっ、愚問だな。『過去の亡霊は記憶の中で眠れ』。そう言ったのは貴様ではないか？」

ドアの向こうから聞こえた声に、エレナは思わず笑みを零した。

「ああ、それはマリアの言葉よ。カッコ良かったから、拝借しただけ」

ほう、あの女らしいな、と返すダリア。

ドア越しで顔は見えないが、何となく苦笑しているように思えた。「で？　実際問題、どうするの？　メリアルは好きにしていって言うってだけ？」

「ふん、ならば好きにさせて貰おう。確かに我らは過去の亡霊かも知れん。しかし、眠る前にやる事があるだろうに？　正直、メリアルの事は見直したぞ。まだ小娘だと思っていたが……いやはや、中々どうして見所がある。名ばかりの第四位に胡座を搔いて、死んでいく誰かを見捨てたくはない。マティルド卿あたりが聞いたら、『同盟』を侮辱していると激怒するだろうが、俺にとっては久々に胸に響く言葉だった。なあ、メリアルは何処となくマリアに似てるとは思わんか？」

それだけを告げて、ダリアの気配が消える。

何処へ行ったのかは、言うまでもないだろう。

「そうね。私達が畏敬し、共に戦場を駆けた、英雄。まだまだ、實力は劣るけど……でも、優しい所は少し似てるわね」

エレナは一瞬だけ遠い目をした後、ダリアに続いて冬花を追った。



## 凶行

真依が家に辿り着いたのは、それから一時間後の事だった。

「あつ、水原。何か、いきなり出掛けてったけど、一体どこに……  
つて、水原!？」

玄関のドアが開く音がしたので、何となく出迎えてみると、そこには壁に寄り掛かるようにして座り込む、真依の姿があった。

「おい、水原!？　しっかりしろ」

急いで駆け寄り、ぐったりとしている真依を抱き起こす。

見た所、怪我などはしていないようだが、一体何があったのだろうか？

「……ちが……たし……ない」

意識が朦朧としているのだろうか？

何かを呟いているようだが、よく聞こえない。

視点が定まらず、瞳がふらふらと揺れている。

「どうした？　誰かにやられたのか？」

考えられるとすれば、新手の“神術師”だろうか？

もし、そうだとすれば、かなりマズイ状況だ。

真依はこんな状態だし、頼みの綱の蓮花は少し前に外に出て行った。

オレ一人で何とかなる相手だろうか？

いや、やるしかない。

何とか撃退を、最悪でも蓮花が帰ってくるまで時間を稼ぐんだ。

そう、密かにオレが決意を固めていると。

「私は……英雄なんかじゃないよ」

「はっ？　英雄？」

思いもよらない言葉に、間拔けな声が出てしまう。

「もう、嫌よ。痛いのは嫌。怖いのは嫌。だけど、英雄なんかになりたくない。もう……誰も殺したくなんかないのよッ!」

「……………」

錯乱したように叫ぶ真依に、オレは言葉を失った。

これは、誰だ？

本当に、コイツは水原 真依なのか？

「……ッ!？」

不意に、オレを突き飛ばすようにして真依が立ち上がる。

「み、水原？」

だが、その足取りは覚束ない。

壁に手をついて、ようやく立っているような状態だ。

「何よ……何なのよ！ そんな目で、私を見ないでよ！」

普段の姿からは考えられない。

いつもの冷静な仮面は剥がれ落ち、涙を流しながら真依は叫ぶ。

「待て、水原。落ち着けよ、オレには何が何だか……」

「もう、嫌だつて言ってるでしょう。私を褒めないで！ 私を憎ま

ないで！ 私を苦しめないでよ！」

もう、真依はオレを見ていなかった。

いや、初めからオレに話しかけていたワケではないのだろう。

「やめてよ……銃なんて向けないで。助かったなら、そのまま起きないでよ。あと、一分……いや、三十秒でもいいから。ねえ、お願いよ。殺したくないの。殺したくないのよッ！」

彼女の視線は虚空に向いている。

そこにいない誰か。

いや、既にこの世にはいない、誰かだろうか？

「……やめろ」

知らず、オレは呟いていた。

「どうして起き上がるのよ。勝てるワケないって分かってるんですよ。貴方も、貴方も、そして貴方も。そのまま起きずに、やり過ぎばいいじゃない。えっ？ お母さんの敵？ でも、貴方が死んだら意味ないじゃない！」

「やめてくれよ、水原……」

叫び続ける彼女の姿が、胸に痛い。

やめてくれ。こんな彼女は見たくない。

もう、見てられない。

でも、どうしていいか分からずに、オレはただ呆然と立ち竦む事しか出来なかった。

「真依様！」

勢い良く開くドア。

鋭い声と共に、蓮花がオレ達の間割って入る。

恐らく、外で真依の叫び声を聞いて、瞬時に状況を把握したのだろう。

「七瀬様。お怪我はありませんか？」

「えっ？ ああ、大丈夫だけど……」

オレの答えに、蓮花は安堵の息を吐き、再び真依に目を戻した。

「真依様。落ちていてください。わたくし達は敵ではありません。

ほら、銃なんて持っていないですよ」

「何で、そんなに死に急ぐのよ。もう、やめてよ。こっちに来ないで。死にたいの？ ねえ、貴方死にたいの？」

真依を落ち着かせようと、蓮花が両手を広げて、何も持っていないことをアピールするが、彼女は聞く耳を持たない。

それ所か、状況が危ない方向へと進展したような気がする。

「くっ、仕方ありませんね……真依様、失礼いたします」

「あつ……！ おい、蓮花！」

オレの静止を振り切って、蓮花が拳を握り締め、真依へと向かう。

「はああッ！」

容赦のない一突き。

いや、彼女なりに手加減はしたのだろうが、それでも軽く骨の一本や二本は砕きそうな鋭さだ。

「ッ！？」

しかし、それは真依に当たることはなかった。

緩慢でありながらも柔軟な動き。

ふらりと真依は横に動いたかと思うと、蓮花の拳を掌底でいなす。

そして、そのまま彼女の胸に肘を叩き込んだ。

「がっ……！」

勢いのまま蓮花は一回転して、床に叩きつけられる蓮花。

背中を打って、呼吸が止まった彼女は、苦しげに呻いた。

「そう。じゃあ、殺してあげる。ふふっ、送ってあげるわよ。お母さんの所にね」

凄絶な笑みを浮かべ、真依が蓮花のマウントを奪い、首に手を置く。

「私だってね、忠告はしたのよ？ でも、聞いてくれなかった。仕方ないよね？ うん、仕方ない。私の所為じゃないんだから、仕方ないよね？」

「かはッ……真依様。い、息が……！」

叫びも虚しく、真依は全体重を掛けて、蓮花の首を締め上げる。

「おい……何やってんだよ、水原？ なあ、おいつてば？」

呼びかけに答える声はない。

オレが呼びかける中、真依は涙を流して蓮花の首を締める。

蓮花も必死の抵抗を見せるが、先程の衝撃で力が入らないようだ。

「な、七瀬……様。真依様を……！」

「……ッ！ 水原、やめろ！」

苦しげな蓮花の声に我に返り、真依を引き剥がして羽交い絞めにする。

「ふっ……ふふふ……また、殺した。殺したくないのに……殺しちゃった」

てつきり抵抗されるかと思ったが、意外にもすんなり真依は手を離した。

「ねえ、どうしよう？ どうすればいいかな？ ふふふ」

不気味な笑いを浮かべてはいるが、取り敢えず危機は脱したようだ。

「蓮花！ 大丈夫か？」

「ぐっ、ごぼっ！ はい、七瀬様。大事ありません。そのまま、その子を押さえていて下さい。暴れても、手を離さないで下さいね」  
息も絶え絶えに立ち上がり、蓮花は真依の頭に手を置く。

「That's the style of the silver which carries a sleep. The person who gets angry and a sick person give a good sleep to all people equally, please.」  
祖は眠りを運ぶ、銀の風。荒ぶる者、病める者、全ての者に等しき安眠を」

蓮花の“詠唱”が始まって、真依が抵抗する事は無かった。  
先程の狂行が嘘のように、大人しく成すがままになっている。

「……………」

不意に真依の首が、かくりと前に落ちる。

「おっと……………何だ？」

同時に身体の支えもなくなり、オレは少し力を入れて真依を支えた。

「もう、大丈夫ですよ。真依を眠らせました。最初からこうすれば良かったのですね。下手に刺激しなければ反撃を誘発する事もなく直ぐに終わったでしょうに。七瀬様のお手を煩わせて、大変申し訳ありませんでした」

「いや……………それよりも、水原はどうするんだ？」

色々と聞きたいことはあるが、取り敢えず真依を何とかしなければいけない。

このまま玄関で寝かせておくワケにもいかないし。

「わたくしがお部屋に運びます。七瀬様はリビングにてお寛ぎ下さい」

蓮花はオレの手から、真依を受け取り、軽々と抱き抱えた。

「……………ふふっ、寝顔だけなら天使のようですね」

苦笑混じりに告げて、蓮花は廊下を進んでいく。

ついさっき殺されかけたと言うのに、その顔はまるで我が子の悪戯を笑って許す母のように見えた。

「まったく……驚かすなよ」

嵐の過ぎ去った玄関で、オレは脱力して呟いた。



天空の覇者（前書き）

> i 2 5 8 4 0 | 3 3 6 8  
<

## 天空の覇者

町外れの食品工場。

深夜でも作業が続けられ、製品を出荷している、その場所が紅蓮の炎に包まれていた。

「ふふふ、あははは！ いいね、最高だよ。他人の大切なものを奪い去る瞬間。ああ、堪らない。これだから殺しは止められないのよ！」

そこは 灼熱地獄。

地獄の大釜を思わせる炎熱が、工場の敷地全体を包み込み、夜勤だった人間を容赦なく飲み込んでいく。

しかし、それは火災ではない。

製品の原料や機械の油に引火したわけでもない。

その地獄は、たった一人の少女から始まっていた。

「おい、立花。邪魔者を追い払えとは言ったが、皆殺しにしろとは言ってないぞ？ 幾ら何でも、これはやり過ぎだ。この分だと、『同盟』の連中が此処を嗅ぎ付けるのも、間もなくだろう」

「別にいいよ、詩織。立花は人殺しが趣味みたいなものだから、好きにさせてあげなよ。それに……もう直ぐ終わるし」

呆れたような口調の詩織と興味なさげなユキ。

その二人の前に出現していた、光る文字列が地面へと吸い込まれていく。

「よし、これで終わり。後は、“術式”が地脈に染み込んで定着するのを待つだけ。自動修復機能も付けておいたから、万が一破壊されても直ぐに元に戻るよ」

「ふむ、いつ見ても不思議なものだな“神術”と言うのは？ 私達の“破戒”とは違うのだろう？」

「うん。でも、異能と言う点では同じ。そこら辺で燃えてる人にとっては、どっちも変わらないよ」

ユキの指差す先には、炎に包まれた人間。

仮に今から助かったとしても、全身火傷で長くないだろう。

しかし、それでも尚、地獄を抜けだそうと彼らは足掻く。

「死にたくない。奴ら突き動かすものは、その一心なのだろうな。ああ、世界とは何と理不尽なのだろうな。こんなにも簡単に、人が死んでいく世界。安らかに眠れよ、罪なき者よ。お前達の未練が、『灰色の街』<sup>アスタ・リビア</sup>を完成へと導く」

歌うように告げる詩織の目の前では、炎による虐殺が行われていた。

既に息絶えた者も、まだ息がある者も関係なしに、立花の“想いは彼らを灰へと変えていく。”

「さあて、次の獲物は何処かな？」

これだけ殺しておいて、まだ物足りないのだろうか？

立花は楽しげに辺りを見回すが、半分焦土と化した土地に生者がいる筈もなく、がっくりと肩を落とした。

「さて、行こうか？ 今夜は随分と冷え込む。この場で、氷漬けにされるのは困るからな」

「えっ？ 何を言って……ッ!？」

詩織の言葉に、立花はその異常に気が付いた。

寒い。微かにだが、冷気を感じる。

どういう事だ？ この炎は自分達以外の全てを焼き尽くすように念じた。

工場も地面も空気すらも。

だと言っのに、これは何だ？

これでは、まるで

「炎が凍っていく。何なのよ、これ？」

灼熱地獄から寒冷地獄へ。

工場全体を霜が覆い、立花の炎ごと凍結していく敷地内。

そこに立つは、黒き長衣。

槍の如き杖と胸に付けられた、黄金の四本柱。

煌びやかに輝くローブは、並みの“神術師”が身に纏う事を許されない一級品。

耐熱、耐寒、防弾、更には魔力耐性を兼ね備えた、世界に四着しか存在しない、幻の“魔具”。

「なっ……アンタは！？」

「ほう、これは珍しい」

彼女の存在に、立花は悲鳴に似た叫びを上げ、詩織は静かに笑みを浮かべた。

これが、二人の差。

詩織と立花の埋めようのない徹底的な差。

「シルビア・メリアル 氷の女王。『同盟』の第四位様が、わざわざ出向くとはな。

『齒車』の事は放っておいてもいいのか？」

「ええ、私はもう第四位ではありませんから。あんな狂った正義は、こつちから願ひ下げです。このローブだって、ただ単に暖かいから着ているだけです。良く考えたら、私ってあんまり服を持ってなかったんですよ」

少し照れたように言い放ち、冬花は胸のあった四本柱の装飾を引き千切った。

「何なら、貴方が継ぎますか？ むしろ、その方がいいかも知れません。あんな組織は、ぶっ壊れた方がいいですよ」

絶対的な正義の象徴。“神術師”達の頂点。

その証が、宙を舞う。

「まさか……本物か？」

冬花が投げたそれを受け止めた詩織は、一瞬だけ驚いたように目を見開いた後、

「はは、あはは、あははははは！」

たまらないとばかりに大爆笑した。

「えっ？ 詩織？」

壊れたように笑い出す自らのリーダーに、立花は困惑の表情を見せる。

当然だ。“神術師”の事を何も知らない立花にとっては、冬花の取るに足らない挑発にしか思えなかった筈だ。

「ふふふ、狂った正義？ 第四位は願い下げ？ ははは、あははは！そして、果てには継げと言うのか？ この私に？そして、壊せと？ 仮にも『同盟』の一員である、お前が？ はは、はははは！」

立花はただ、詩織の狂変に狼狽えるばかり。

助けを求めるように周りを見ると、普段はくすりともし笑わないユキすらも腹を抱えて笑っている。

何だ？ 意味が分からない。

何がそんなに面白いと言うんだ？

「ね、ねえ、一応聞くけど、ふふふ、そのロープ。それを纏う資格を得るために、どれだけの数の“神術師”が血の滲むような努力をしているか、分かっているの？」

笑いを堪えながら尋ねるユキに、冬花はあつさりと言い放つ。

「ええ、知ってますよ。私だって、その努力を重ねてここまで這い上がったワケですから。でも……だからこそ、着てるんですよ。ただ、暖かいというだけの理由で」

再度、巻き起こる爆笑の渦。

氷の世界に響く笑い声に、立花は本当に二人がおかしくなったのではないかと思っただけだ。

「これはこれは、実に面白い。『同盟』の第四位としてではなく、あくまで個人で私を止めると言うのか？ あはは、いいぞ。シルビア・メリアル。お前が気に入ったぞ。少しだけ、遊んでやろう」

バサリ、とコートの裾を翻し、詩織が刀を抜く。

「Memento Mori（死を想え）」

その刀身は、黒光りする程の漆黒。

何処かで見たとある気がするの、気のせいだろうか？

「It's a flower of an ice lot  
us to wrap the world.（世界を包むは氷蓮

の花)』

“詠唱”を開始した冬花を援護するように、彼女の後ろから飛び出す三つの人影。

「魔道人形。なるほど、“詠唱”途中の“神術師”は隙が大きい。戦法として間違いではないが……」

左右前方と後方から、隙のない包囲陣で人形たちが詩織に迫る。

『A flower scatters for the world which dies out, sea urchin is also collapsing transiently fragiley. (滅びる世界は散花の如く、脆くも儚く崩れ去る)』

冬花の“詠唱”は続く。

詩を響かせ、世界に呼びかける。

ここで、貴方を止めれば全てが終わる。

その為になら、私は『同盟』すらも敵に回してみせよう。

「……護衛としては、いささか役不足だな」

右の人形を袈裟斬りに、それと同時に後方の人形をソバットで蹴り飛ばす。

そして、左からの攻撃は片腕一本で受け止めてみせる。

「なっ……!!」

魔道人形の大半は機械で出来ている。

人間の何倍もの力を持つ拳を、片手で受け止めるなんて。

「“破戒”の中には身体能力を強化するものもあってな。私のは、それが少々、強力らしい」

鈍い音と共に、人形の拳が碎ける。

鋼鉄の部品が地面に散乱すると同時に、人形の首が斬り飛ばされた。

全滅。たった、一呼吸の間に三体の護衛は姿を消した。

「おい、そのまま続けろ、シルビア。全力で来いよ、全力で。ヒーローの変身を待つのが悪役の美学だろ? “詠唱”を潰すなんて邪

道を進むのは、『歯車』のバカ共くらいだ」

咄嗟に“詠唱”を切り変えようとした冬花に、詩織はあくまでも全力で来いと言う。

いいだろう。ならば、思い知らせてやる。

シルビア・メリアルの全力を。

悪役は華々しく散る運命だと。<sup>さだめ</sup>

「Well, please don't scatter.

You said that you wanted you

not to scatter. (ああ、散らないで。散らない

でくれ、と貴方は言った)」

もう、悲劇は起こさせない。

此処をガルノイアにはさせない。

「So I can freeze. (だから、私は凍結させよう)」

貴方は知っているのか？

家族を失い、無く子供を。

故郷を失い、呆然と佇む背中を。

貴方が起こした悲劇が、どれだけの不幸を招いたのかを。

「ああ、素晴らしいな。その目だよ。私を倒す気で……倒せると信じてる目。でも、まだ少し足りない。お前は根が優し過ぎるな。倒すのではダメだ。殺す気で来ないとな。憎悪かな？ 憤怒かな？

さてさて、どうすればお前は、その気になってくれる？」

響く声が、酷く耳障りだ。

やめろ。もう、何も言うな。

何かに陶酔したような声が、冬花の中のどす黒い感情を湧き上がらせる。

「ああ、こう言えいいのか？ なあ、メリアル……」

頭が割れそうに痛い。

やめろ、やめろ。

本当に、もうやめろ。

でないと、取り返しの付かないことになる。

「ガルノイアは楽しかったな？」

瞬間、冬花の中で何かが切れた音がした。

今まで、冬花は人を殺したことがない。

結果として死に導いたことは何度もあるが、殺意を持って殺したことは一度もない。

だが、それも、今日で終わりだ。

「This moment can be frozen. Everything of the world can also be frozen, of course, time can also be frozen. (この瞬間を凍らせよう。世界の全ても時すらも)」

“神を殺す者”<sup>タナトス</sup>。貴方は 悪魔だ。

悲劇を楽しみ、人の不幸を糧とする。

だから、殺そう。凄惨に、そして残虐に。

簡単に死ねると思った大間違いだ。

「But when you wished for fall of the world……(だが、もしも貴方が望むなら。世界の滅びを望むなら……)」

教えてやる。

人々の痛みを。

刻んでやる。

人々の怒りを。

絶望と共に、地獄に送ってやる。

「ははは！ そう、それだよ、メリアル！ さあ、来い。私を殺したいのだろう？ 殺してみせろよ！ 私に、地獄を見せてみる」

ああ、いいだろう。

今更の命乞いなど聞きたくはない。

笑っている。そうやって、ずっと笑っている。

私が心臓を握り潰す、その時まで。



『 When there is resolution which dances with me until the last moment……（もしも、最後の刻まで私と踊る覚悟があるならば……）』

さあ、行くぞ。

悲劇のない世界を創るために。

もう、誰も泣くことがないように。

その為に、貴方は消える。

『同盟』ではなく。第四位でもなく。

この私 佐伯 冬花「シルビア・メリアルの正義で、貴方を誅伐しよう。」

『 Your, I love and want you to melt. I want you to invite me to eternal darkness.（貴方の愛で溶かして欲しい。永久なる闇へ、私を誘って欲しい）』

刹那、天空に咲く巨大な氷蓮の花。

普段、池の上に咲く筈のそれが、今は上空より人々を見下ろす最高神のように君臨していた。

『 Sky Conqueror Gurf tppen（彼方に聳える天空の覇者）』

術名が告げられ、“神術”が完成する。

次の瞬間、花びらの間から現れたのは、大きな筒状の物体。

それは 砲台。

無論、全てが氷で出来ており、月光を受けて神秘的に輝いている。五十を超える砲口は、全て詩織に向けられ、発射と同時に一帯が消し飛ぶことは眼に見えていた。

「ほう、やるじゃないか」

それでも尚、この余裕。

感心したように呟いて、刀を脇へと構える、詩織。

『 Memento Mori（死を想え）』

再び紡がれる、開扉の詩。

しかし、周りの空気が“現界（Germination）”と違っていることは、今の冬花に分かる筈もなかった。そう。これはもつと深く。

第二世界の奥深くまでの扉を開く、二つ目の詩。

「行けえッ！」

これで終わる。

術者の命令を受け、氷の無敵砲台が牙を向く。

手加減などしない。容赦なく消し飛ばす。

貴方に、慈悲など……くれてやるものか！

そして、砲身が火を吹いた瞬間

『Convict of Sataele（屍山血河の創成詩）』

序詩ではなく、もう第二の詩。

断罪の詩が響き、黒き死神が顕現した。

## 天空の覇者（後書き）

皆様、お久しぶりです。

最近、あまり更新できなくて、すみません。

のんびりながらも、更新していきたいと思いますので、これからもお付き合い頂けると嬉しいです。

挿絵は冬花さんです。

## 来日

「へえ、ここが桜花市か。しばらく、見ない内に随分と変わったわね。この前来たのは、えーと……五十年くらい前だったかな？」

駅の前に止まった黒塗りの外車。

そこから降り立った黒いドレスの少女を見て、周囲の人々は困惑と共に立ち止まった。

いや、正確には彼女を見ているのではない。

彼女の後続に停まった車から出て来た、黒いローブの集団。

まるで要人を警護するボディガードのように、彼らは素早く彼女を取り囲む。

「フィルアルト様。長旅、お疲れさまでした。この後は如何なされますか？ 外でお食事、もしくはこのままご宿泊先へと案内いたしましょうか？」

啞然と立ち尽くす人々を他所に、ローブの集団から男が一人、前に出て深々と少女に頭を下げた。

映画かドラマの撮影だろうか？

彼女を見詰める人々は、そう思ったに違いない。一体、誰が知ろう。

十九世紀に発足され、今では世界最大の“神術師”の集団となった組織 『世界総合神術同盟』 頂点の四本柱。

彼女こそが、第一位の席に座る“四大神術師”。

ユリイ・アルフィーネ・フィルアルトだと言う事を。

「メリアルルの住んでる所に送ってよ。そしたら、貴方達は帰っていいから。面倒はあの子が見てくれるでしょう」

「メリアル様……ですか？」

ユリイの言葉に、男は思わず眉を寄せた。

「フィルアルト様。今のメリアル様とは、関わらぬ方がよろしいかと。第四位を返上したとの噂も流れていますので」

「第四位を返上？　へえ、あの子が自分で？　ふーん。それで、あの子は何て？」

大して驚いた風でもなく、ユリイは男に尋ねた。  
何気ない日常会話のような気軽さ。

その様子に、男のほうが目を見詰めた。

今や、シルビア・メリアルといえば組織内では知らぬものはいない。

末席といえども、その若さで最高峰に登り詰めた唯一の日本人。  
彼女が“四大神術師”に就任して数年で、壊滅した敵対組織はかなりの数に登るだろう。

「それが……その、『同盟は正義ではない』と。そう、仰っていたと」

言い難そうに、そう告げる男。

当然だ。自分の言葉ではないとは言え、その『同盟』を纏める者  
に向かつて、侮辱を伝えるのだ。

これが、第二位であったなら、間違いなく男は縊り殺されていた  
だろう。

「正義じゃない？　なるほど。あの子らしいね」

だが、ユリイは逆に嬉しそうな笑みを浮かべた。

自らの作り上げた組織。

言わば半身のような『同盟』を侮辱されても尚、彼女は笑っていた。

「メリアル様の処分は、マティルド様が近い内に下されると思います。  
す。恐らく、第四位はソルディア様がグラフィード様に……」

「ダメだよ。辞めさせない」

男の言葉を遮ったのは、地の底から響くような冷たい声。

「ひっ……！」

それが、目の前の少女から発せられたものと気付いて、男は短い悲鳴を上げた。

その声は、果たして人間のものか？

いや、それを言うなら、彼女の存在こそが人間の定理を覆している。

十九世紀から、第一位の席に座り続けている化け物。

見た目は年端もいかぬ少女だが、男が知る限り二十年以上はそのままだ。

「私ね、あの子の事を凄く気に入ってるの。今の『同盟』に必要なのは、マティルドのような現実主義者でも、カーティスのような臆病者でもない。真っ直ぐで向こう見ずで、正義の為に戦う。そういう信念を持った人だと、私は思うわけよ。それにあの子、少しだけマリアに似てるし」

「マリア？ あのスカーレット様ですか？」

ユリイが口にした名前に、集団の中にざわめきが起こる。

マリア？ あの『鮮血のマリア』か？

「あら？ 貴方達、あの子の事を知ってるの？」

「いえ、直に拝見したことはありませんが、噂ならば誰もが知っております。ガルノイア大戦の英雄。我々を勝利へと導いた彼女を、知らぬ者の方が数少ないでしょう」

「ふーん、『英雄』……か」

口々に彼女の功績などを並べ立てる男の話を聞き流し、ユリイは空を見上げた。

「あの子。今頃、どうしているかな？」

上空の月は、驚くほどに丸く　そして、赤い。

その凶月が何を示すのか？

月下の役者達に、それを知る術は無かった。

## 来日（後書き）

こんにちは、随分とお久しぶりになってしまいました。何とか帰って来れました。あと少ししたら休みが取れるので、そしたらガンガン更新していきたいと思います。たまに失踪しがちな中二病作者ですが、きちんと完結させたいと思いますので、見捨てずにいて下さると幸いです。

それでは、本日はこの辺で。

い）  
ラ・ヨダソウ・ステイアーナ（別れの挨拶。特に意味はない）

## 時代改革

「遂に動き出したか」神を殺す者<sup>タナトス</sup>”。あれから三年。存外に早かったな」

礼拝堂と二十近くの塔からなるロンドン塔の一室。心地よい朝日が差し込む最上階の部屋。桜花市に潜ませていた部下が全滅したとの報告書を読みながら、レオリス・マティルドは小さな笑みを零した。

ガルノイアの一件から、ずっと行方不明だった”死神”が、やっと姿を現したのだ。中々、面白い展開になって来た。

「それで、ミルドレッド。例の”箱舟”は完成しているのか？」  
「もちろんだよ。私を誰だと思ってるのよ？ 既に準備万端。細かい調整が終われば、直ぐにでも飛べるよ」

”四大神術師・第二位”であるレオリスの問いに、目の前の少女は自信ありげに答える。

外見だけ見れば、齡十を超えたあたりの少女。顔立ちは幼く、綺麗と言うよりは可愛らしいと言った目鼻立ち。流れるような金髪を後ろで一つに纏め、部屋の中央のソファでクツキを齧る姿は、まさに歳相応の子供にしか見えない。

しかし、忘れてはいけないのが、此処がレオリスの前だと言うこと。『同盟』の最高位、ましてやその第二席に座る彼女に、通常の”神術師”ならば平服して目も合わせられないのが条理。ある程度の地位の者でも、膝を着いて頭を低くするのが礼儀だ。

だが、少女はそれを全く気にせずに甘菓子を頬張り、まるで自室のように寛いでいる。

「ふむ、そうか。ならば……」

レオリスが懷からベルを取り出し、二、三度打ち鳴らすと、直ぐに扉がノックされる。

「入れ」



「失礼します。お呼びでしょうか、マティルド卿？」

短い返事の後、一人の”神術師”が扉を開き、レオリスの前で膝を着いた。

「レオリス・マティルドの名において命令する。『王者の剣』<sup>デュランダル</sup>は”箱舟”に搭乗し、直ちに日本へ向かえ。目的地はシルビアが管理する桜花市だ」

「はっ、了解しました」

深々と一礼し、退出していく背中にも目を向けながら、ミルドレッドと呼ばれた少女は首を傾げた。

シルビアと言えば、”四大神術師・第四位”の日本人だ。先程、彼女の救援要請はレオリス自身が却下した筈だが、何か事情が変わったのだろうか？

「この時期に『王者の剣』を動かしているの?? 救援は却下したんでしょう？」

『王者の剣』は、『同盟』が誇る最強の部隊。彼らが動かすことは、すなわち本部の守りを手薄にするということ。最近、『銀の歯車』に不穏な動きがあると聞いているが、一体どういふつもりなのだろうか？

「ふっ、バカを言うな。何故、我が小娘の助けなどしてやらねばならんのだ」

「ちよつと、待って。だったら、彼らを動かすのは止めた方がいいんじゃない。主力がない時に、『歯車』に攻められたら面倒よ。

幾らアンタがいるって言っても、危険じゃないの？」

ミルドレッドの疑問を一笑するレオリス。

ならば、どうして? 救援でないとすると、何のために『同盟』の切り札を動かすというのだ?

「いや、問題はない。我も日本に向かうからな……おい、何を呆けている? 当然、貴様も同行するのだぞ」

「はあ……?」

レオリスの口から飛び出した信じがたい言葉に、ミルドレッドは

食べかけの菓子を、思わず取り落とした。

レオリスが日本に向かう。そして、自分も同行すると？

「ちょ、ちよっと、待ちなさいよ！　じゃあ、此処は誰が守るのよ？」

「『賢者の盾』<sup>グラフィウス</sup>にでも任せれば良からう。新設されたばかりの部隊だが、”破戒者”<sup>グラフィウス</sup>風情に、不覚は取るまい」

『賢者の盾』。それは『王者の剣』に次ぐ、第二の戦闘部隊。しかし、『王者の剣』に比べれば、数も練度も大きく劣る。精鋭五百人から構成される『王者の剣』に比べて、『賢者の盾』は新米ばかりが二百人。化物揃いの『歯車』を相手にするには、正直実力が違いすぎる。

「マティルド卿。アンタ、本気で言ってるの。大体、指揮系統はどうするのよ？　アンタが本部を離れたら、他の連中が……………ッ！？」

最初に感じたのは、違和感。清らかな水面に、墨汁の一滴を垂らしたように、徐々に広がっていく不純物。

何だ、この感覚は？　明らかにこの世界のモノではない異端を感じ取り、ミルドレッドは言葉を止めた。

「……………」

まさか、気が付いていないのか？　いや、それはあり得ない。むしろ、何か異常があれば、レオリスの方が先に察知するはずだ。

「どうした、ミルドレッド？　言いたいことがあるならば、最後まで言えよ」

ならば、自分の気のせいだろうか？

釈然としない物を抱えながらも、ミルドレッドはそれを飲み下して言葉を続ける。

「アンタが此処を離れたら、誰が戦闘の指揮を取るのよ？　実戦を知らないような奴が指揮すれば、『賢者の盾』は数分で瓦解するわ。そうだったら、もう時間の問題。あと、残ってるのは研究が専門の”神術師”だけだから、碌な抵抗も出来ずに本部は壊滅する。ねえ、

本当に分かつてるの？ 全盛期ならまだしも、今は昔とは違つもの？」

ミルドレッドは勢い良く立ち上がってレオリスに詰め寄るが、彼女はそれを涼しい顔で受け流す。

「ああ、分かつているさ。ユリイ・フィルアルトが創り上げた、最強最大の組織『世界総合神術同盟』。しかし、三年前の戦いで主力部隊は壊滅。所属人数ならば、確かに今も最大の組織だが、殆どは研究専門。まともに戦える奴らなど、『歯車』にすら数が劣る始末だ」

そう。『同盟』が最強と呼ばれたのは、三年前までの話し。ガルノイアの悲劇により、戦闘部隊の殆どが壊滅し、生き残りを掻き集めても、まともに戦えるのは五百にも満たない。

幸いにも、研究機関は無傷だったが、彼らは戦場知らずの”神術師”。机上の空論で指揮を取られては、勝てる戦いも負け戦へと変わる。

「だったら、今は此処の守りを固めるのが先決でしょう。日本に何があるのかは知らないけど、『王者の剣』を動かせば間違いなく本部は落ちる。分かつたら、早く命令を取り消して。じゃないと、『神術同盟』は早い内に終わることになるわよ」

こんな事は、少し考えれば分かること。レオリスが気付いていない筈がないのに、一体どういつつもりなのだ？

「ふん、『同盟』の最期か。なあ、ミルドレッド。それは、いつになるのだ？」

「いつって、そりゃ……数日後じゃないの？ 『歯車』がこのチャンス逃すとは思えないし、早ければ明日かも知れないわね」

「明日か。確かにそうかも知れんな。ふふふ、しかしミルドレッド。それは間違いだ。何故なら――」

何だ？ 一体、どうしたと言うのだ？

今日のレオリスは少しおかしい。少し考えれば、誰でも分かるような悪手を、堂々と命令し。分かりきった答えを求めてくるなん

て。

「残念だが、『神術同盟』は今日で終わる」

それは、本当に唐突に。何の兆候もなく現れた。

「なっ……!？」

異常。怪異。呼び方は何でもいいが、つまりはそういうモノ。何か……いや、全てが根本的におかしい。人間と言う枠から逸脱した存在が、そこにはいた。

「天下の『神術同盟』。その内側に、こうして敵を入れてしまった失態。そして、それが招くのは、当然の結末だ。そうだろう？」

それは 黒い死神。いつの間に、そこにいたのか。レオリスの真横に立つのは、ロングコートを羽織る女。壁を背にし、寄りかかるように佇む彼女が纏うのは、黒い炎。まるで、闇から生まれた焰の如く、赤黒く不気味な色彩でゆらゆらと燃える。

「……………」

言葉がでない。此处は『同盟』の中枢。一番、嚴重に守られた部屋の筈。そこに、こうも安々と。当然の顔で現れた彼女は、何者なのか？

「け、警備の者は何をやっているの！ 不審者が、此处に」

次の瞬間、窓の外で炎が上がった。地面から、間欠泉のように吹き出す五つの炎柱。それは、塔の一つを包む込み、あっという間に炎の塔へと変えた。

「あれは……騎士の塔か」

『賢者の盾』を始めとする、新設部隊が在籍する巨大な塔。それが一瞬にして紅蓮に染め上げられる。

「まさか……そんな馬鹿な」

全滅。数少ない戦闘部隊が、たった一瞬で灰燼となる。そんなバカげた現実に、ミルドレッドはただ安心してそれを見詰めることしか出来なかった。

「レオリス様！ ご無事ですか!？」

切羽詰まった叫びと共に、二つの足音が部屋に乱入してくる。恐

らく、警備でこの塔を任されていた『賢者の盾』の生き残りだろう。運良く何を逃れた彼らが、異常を察して此処へと駆け付けたのだ。

「そいつよ！ その黒い女を殺しなさい」

ミルドレッドの指示で、即座に剣を抜いて斬り掛かる一人の”神術師”。更に、その広報ではもう一人が”詠唱”を開始する。

前衛と後衛に別れての二段攻撃。”神術師”の基本戦術ではあるが、敵の数が自分たちよりも少ないならば、そう悪い手ではない。むしろ、相手がたった一人となれば、最善手とも言える戦術。

そう。その相手が　ただ一人であつたならば。

「えっ……？」

何だ、これは？　意味が分からない。

頬に感じる、生温かい感触。そして、飛び散る鮮血の噴水。

「がっ……ぐがあ！」

剣を振り上げた”神術師”の胸から突き出たのは、銀の杖。シャルロット家の家紋である、蜘蛛の装飾を施された”神具”。

「ククク、戦闘時は常に周りに目を向ける。何処から敵が向かってくるか分からんからな」

「マ、マティルド卿……何やってんのよ？」

目の前には信じがたい光景が広がっていた。侵入者を排除すべく駆け付けた同士を殺したのは、他ならないレオリス・マティルド。血迷ったとは思えない狂気の沙汰に、ミルドレッドは掠れた声で尋ねる。

「ふむ、ただ客人に斬り掛かった逆徒を始末しただけの事。言っておくが、馬鹿な真似はするなよミルドレッド。まあ、もう動けんと思うけどな」

「……ッ！　何ですって！」

言われてから気が付いた。咄嗟に動かそうとした腕が上がらない。いや、それだけではなく、身体中が凍り付いたかのように動かない。

「おい、詩織。外の奴らは、大体片付けたよ。何だか齒ごたえの無い奴らだったけど、退屈しのぎくらいにはなったかな」

背後から、どしゃり、と何かが床に落ちる音。見ると、”詠唱”の途中だった”神術師”の首から上が無くなっており、その後ろには茶髪の少女が立っている。

「ああ、良くやってくれたな、立花。後は、好きにすると良い。気が済むまで暴れていいぞ。壊して、奪って、焼き尽くすといい」

「きやはは！ 了解。じゃあ、行ってくるよ」

楽しげに頷いて、少女は部屋から出ていく。何だ、この状況は？ 一体、何が起こっている？

これは『齒車』の襲撃などではない。恐らく、もっと少数。そして、確実に内部事情に精通した者が絡んでいる。でなければ、『騎士の塔』が真っ先に狙われる筈がない。

「……ああ、そういう事ね」

外に目を向けると、火の手は更に広がっていた。敷地内に張り巡らされている侵入者用の迎撃術式が、一つ足りとも作動せずに、研究施設が焼き尽くされていく。『偶然にも』今日が、”術式”の調整日だったがために。

「ユリイ・フィアルトが創った『神術同盟』は、既に終わった。牙を失った『同盟』など、やがて世界から駆逐されゆくだけの存在だからこそ、我が創ろう。新たな、『神術同盟』を。もう一度、”神術師”が世界を支配していた時代をな」

故に、これは終焉ではなく再生であるとレオリスは告げる。

「ミルドレッド。お前は どうする？ 我々に続くか？ それとも、古き『同盟』の後を追うか？」

「はっ、決まってるでしょ？」

答えなど、既に決まっている。

「一緒に行くわ、マティルド卿。世界を相手に戦争なんて、やることとが派手じゃない」

時代を創る。つまるところ、レオリスは宣戦布告をしたのだ。

もはや、現代は科学の時代。”神術”など恐れるに足らん、と高を括るバカどもに、思い知らせてやろうと。

「良い答えだ。貴様ならば、そう言うと思ったがな」

不敵に笑うレオリスの姿に、ミルドレッドは知らず身震いした。高揚から来る武者震い。

所詮、”神術師”とは戦いの中でしか生きられない人種。ああ、戻ってくる。退屈な日々から、戦乱の時代へ。人の生死が交錯する死の時代が、やっと戻ってくるのだ。

「さあ、行くぞ。我らの新しき門出。その為に、古き支配者にはご退場願おう」

『同盟』の变革を告げる一言。それは、『神術同盟』を率いる者の交代を意味していた。

## 切り札

太陽が高く上る昼の桜花市を、オレと蓮花は歩く。

今朝、朝食の後に真依から聞かされた現状は、思ったよりも切羽詰ったものだった。

現在、神森町から桜花市周辺は、『同盟』に包囲されている。

電車、バス、タクシーと言った交通機関には、当然『同盟』の手が回っており逃亡には使えない。

そして、『同盟』相手に徒歩で逃げ切れるとも思えない。

更に、こうしている間にも確実に包囲網は狭まっていき、補足されるのは時間の問題という八方塞がりな状況である。

通常ならこの状況に、相当な危機感を覚え、迫り来る『同盟』の網に絶望すら感じざるを得ないだろうが、彼女は特に慌てた様子もなく、いつも通りの冷たい声で告げた。

なら、その網を破壊して逃げればいいじゃない、と。

どうやら、真依は本気で包囲網を破るつもりらしい。

世界規模の大組織を相手に、真っ向から立ち向かう。

オレみたいな凡人が言えば、ただの戯言だが、真依が言えば何故か不可能ではないと思えるのが不思議だ。

しかし、何の準備もなしに逃げられる程、『同盟』は甘くない。

逃亡に必要な“術式”を刻む為、オレ達は平日の真昼間から街に繰り出したのだ。

「な、なあ……蓮花。こんなに人の多い道を歩いて大丈夫か？」

『同盟』に見つかったりしないのか？」

だが、目下逃亡中であるオレ達にとって、この状況は危険なのではないだろうか？

『同盟』の“神術師”が何処にいても知れない街中を、大手を



振って歩いていいのだろうか？

「大丈夫です。逆に、人通りの無い道の方が危険ですよ。彼らの活動には秘匿義務があります。それなりの危機的状況で無い限りは、“神術師”が人前で仕掛けて来る事はないでしょう」

むしろ、堂々としていなさいと、蓮花は笑う。

そんな蓮花の後に続きながら、オレは昨夜の出来事を思い出した。結局、真依に答えを告げられなかった。

何となく流れて、街から出る事になってはいるが、やっぱり伝えた方がいいのは確かだろう。

だが、昨日、家に戻って来た真依は、とても話しが出来る状態ではなかった。

「なあ、蓮花。昨日の事だけどさ……」

尋ねていいものかと不安もあったが、昨日の真依は明らかにおかしかった。

「七瀬様」

理由を聞こうとした瞬間、蓮花が遮るようにオレの名を呼ぶ。

「貴方にとって、『英雄』とはどんな存在ですか？」

「英雄？ そんなの、今は関係……」

「いいから、答えて下さい。話しはそれからです」

真依の事に関係あるのだろうか？

オレは自分の中にある、英雄のイメージを正直に言葉にしてみる事にした。

「うーん、何か、偉大な人かな？ 強くて皆を救って、正義の味方って感じ？」

「正義の味方ですか。いささか稚拙な表現ではありますが……なるほど、結構です」

言葉にしてみると、自分でも何だかチープな感じがした。

しかし、蓮花にはそれで充分だったらしく、くるりと踵を返した。

「かつて、一人の英雄がいました」

それは、唐突に。

まるで、絵本の読み聞かせでもするように、蓮花は続ける。

「とある国との戦争によつて、苦境に立たされていた『同盟』に現れ、多くの“神術師”を救った一人の少女。彼女は強かったですよ。常に皆の先頭に立ち、戦場を駆け抜けた。それによつて、救われた人は多かつたでしょう。彼女は多くの人を救い、それより多くの人を殺した。ただ、それだけです。結果だけ見れば、貴方の言う通り、まさに正義の味方ですね」

彼女は正義の味方だ。

そう告げた蓮花の声には、明らかな嘲りが含まれていた。

「でも……仕方なかつたんだろ？ そうしなければ、自分が殺されたかも知れないわけだし。知ったかぶりかもしれないけど、それが戦争なんじゃないか？」

それはただの綺麗言。

蓮花から見れば、実際に戦場を見た事がない、子供の戯言だ。

お前に何が分かるんだ？ そう一蹴されても仕方ないだろう。

「ありがとうございます、七瀬様」

だと言つのに、蓮花からは感謝の言葉。

まるで、真依にするように、深々と頭を下げ、礼を告げた。

「実際の所、真依は自分でも、それは分かっているのだとは思いますが。でも、簡単には割り切れない。さっきの言葉は、直接あの子に言つてあげて下さい。例え、綺麗言だったとしても、それで救われる人間はいますから」

そう締め括り、再び歩みだす蓮花。

綺麗事でもいい。だから、真依を慰める。

蓮花は、オレにそう告げた。

それだけで、真依は救われると。

確かに、蓮花はオレよりも真依との付き合いが長い。

彼女の事も良く分かっているだろうし、少なくともオレよりは詳しいだろう。

だから

「それで……いいのか？」

だからこそ、尋ねずにはいらなかった。

真依の味方……一番の味方である筈の貴方が、それでいいのかと。自分でも、どうしてそんなに事をしたのか？

それすらも分らないまま、オレは問う。

「水原が何であんな風になったのかは知らないけど……本気で苦しんでる奴に、口先だけの慰めを告げるだけで、本当にいいのかな？」

昨夜の真依は、はつきり言って異常だった。

普段の冷静さは見る影もなく、ただ何かに怯えるているようにも見えた。

そんな真依に『お前の所為じゃないから気にするな』なんて安い言葉が、一体何になると言うんだ？

「……人は、他人を完全に理解する事は出来ません。あの子が何を思い、何に苦しむのか？ わたくしだって、半分も把握出来ていませんよ」

問い掛けに答えるのは、静かな声。

悲しげに、そして儚く蓮花は微笑む。

「ですが、わたくしはそれでいいと思います。全てを理解するよりも、少しでも理解しようと努力すること。貴方の持つ、その優しさ。あの子には、それが何よりも嬉しいはずですよ」

その微笑に、オレは一抹の胸騒ぎを感じた。

何だろう？ この違和感は何？

どうして、こんなにも不安になる？

「本当はですね、わたくしは”契約紋”を使うことに最後まで反対でした。見ず知らずの”破戒者”など助けて、何になるのです？

慈善事業している余裕など、我々にはありません、と大反対したのですが……今なら、自信を持って言えます。貴方を助けて良かった」と

「ああ、それはどうも……」

どうやら、褒められているようだが、今はそんな事どうでもいい。

何故だ？ 何でいきなり、蓮花はこんな事を言い出した？

「わたくしは、あの子を傷付ける事しか出来ません。貴方の言う、口先だけの慰めを投げ掛け、立って進めと背中を押す。もう嫌だ、と泣くあの子を、わたくしは戦場に送り出す事しか出来なかった。でも、安心しましたよ。わたくしとは違う……貴方は、本当の意味であの子の味方になってくれるみたいですね」

何だ、これは？

これでは、まるで

「七瀬様。そんな貴方を見込んで、一つだけお願い申し上げます。もしも わたくしが、いなくなるような事があれば……あの子を支えてあげてくださいね」

彼女が、今どんな顔をしているのかは分からない。

恐らく、意図的に顔を見られない様になっているのだろう。

人に物を頼むときは、顔を見るのが礼儀だと言うが、何故だろう？

背中越しに頼まれたのにも関わらず、彼女の言葉は何処までも真摯で誠実だった。

「

」

オレは堪らずに、彼女の後ろから肩を強く掴んだ。

怖かった。そうでもしないと、彼女が何処かに行ってしまう気がして。

まだ、出会って日は浅いけど、何度もオレを助けてくれた蓮花がいなくなる。

彼女が消えた時、頭に浮かぶ、誰かの哀しげな顔。

その涙を止めたくて、何よりも笑って欲しくて。

その一心で、蓮花を引き止めた。

思ったよりも小さな肩。

しかも、少し震えているように思える。

「……ッ!？」

蓮花は驚いたように一瞬だけ身を強ばらせると、意図を察したように優しくオレの手に触れた。

「大丈夫ですよ。言ったでしょう？ 『もしも』と。言うなれば、これは保険です。万が一の不足の事態に対する、唯一の”切り札”<sup>ジョーカー</sup>。簡単に使うつもりはないのでご安心を。あの子が『千里 蓮花』を必要としなくなるその日まで、わたくしは付き従うと誓ったのですから」

だから安心しろ。

そう言いたげに、蓮花はオレの手を肩から外した。

「さあ、行きましょう。”術式”は描く事よりも、その場に馴染ませる方が難しいです。いずれは、貴方一人で出来るようになって頂くのですから、そのつもりで見えていて下さいね」

不敵な笑みをオレに投げ掛け、蓮花は歩き出した。

その背中が、いつもより小さく見えたのは、オレの気のせいだろうか？

## 偽りの草原

「術式”定着 完了”

蓮花が“術式”を施したのは、駅前の噴水の中。

今は冬なので水は止められているが、そんな場所で一体何をしているのだと、通り掛かる人々の視線が痛い。

「蓮花……お疲れ」

「いえ、これくらい何ともありません」

しかし、そんな事はどこ吹く風。

蓮花は何食わぬ顔で噴水から出ると、オレに預けていた棺桶を受け取る。

どちらかと言うと、これを持って佇んでいたオレの方が目立っていたかも知れない。

「さて、では戻りましょう。真依の事が気掛かりです。大人しく待っていてくれるといいのですが……」

念のため、真依は家に残してきた。

昨日の記憶は無いらしく、朝起きてみたらいつも通りの真依がリビングでお茶を飲んでいた。

本人は当然、連いて来る気でいたのだろう。

蓮花が家で待っているように告げると、不思議そうな顔をしていった。

「いつその事、もう一度眠らせるべきだったでしょうか？ あの家にいる限りは、絶対安全ですから。何たって、世界一の“神術師”が描いた“術式”があるので」

世界一。まあ、蓮花からしてみれば当然の評価か。

「はは……確かに世界一かもな」

「えっ？ 何を笑って……ああ、なるほど」

オレが苦笑混じりに同意すると、蓮花は一瞬だけ眉を寄せて、それから何かに気付いたように頷いた。

「七瀬様。わたくしは、別に真依を世界一と言っているわけではありませんよ?」

「あれ? 真依のことじゃないのか?」

正直、意外だった。

てつきり、真依をベタ褒めしているのかと思ったが、どうやら違うらしい。

「はい。現在、世界一なのは、真依の『師』である        ツ!？」

言い掛けて、不意に蓮花の言葉が止まる。

「んっ? どうしたんだ、蓮花?」

不思議に思い、隣を見ると彼女は厳しい表情で前を見つめていた。

「何やら、不吉な気配を感じます。これは……“現界（Germanation）”? 多少、距離はありますが、念のためです。七瀬様、わたくしの後ろに」

どうやら、誰かに狙われているみたいだ。

直ぐに戦闘態勢に入れるように、蓮花が棺桶を下ろし、地面に置く。

有無を言わさぬその口調に、オレが彼女の後ろに移動しようとした瞬間

「えっ……?」

一瞬、何が起こったのか分からなかった。

意味が分からない。

目の前であり得ないことが起きていた。

オレはその現実を理解するのに、少しだけ時間を要した。

「蓮花? 何処に行った?」

隣にいた筈の蓮花がいない。

手を伸ばせば届く距離にいたのに、その姿が煙のように消え失せていた。

「……………」

だが、直ぐにそれは間違いだと気付く。  
辺りには人の姿はない。

おまけに、駅も噴水もない。

「何処だよ……此処は？」

つまり、消えたのは蓮花ではなく、オレの方だ。

周囲に広がるのは一面の草花。

彼方まで続く緑の草原と、蒼い空。

その様は、幻想的であり何処か寂しい。

一陣の風が頬を撫で、同時に草たちのざわめきが聞こえる。

何だよ、此処は？

ワープ？ タイムスリップ？

様々な可能性が頭に浮かぶが、どれもあり得ないと即座に振り払う。

ならば、一番可能性があるのは

「」

真っ先に思い浮かんだのは、“神術同盟”による襲撃だ。

蓮花は、人目のあるところでは仕掛けてこないと言っていたが、どうやらその予想は裏切られたらしい。

「……ッ！？」

不意に感じる、背後からの視線。

一体、誰だ？

決まっている。どんな手段を使ったかは知らないが、この空間を創りだした奴が後ろにいる。

当然ながら、蓮花は近くにいない。

一人ずつ確実に仕留めていく為か、それとも単に弱い方を狙ったのかは知らないが、どうやらオレだけで何とかするしか無いのだから。

「くっ……！」

だが、やれるのか？

“神術師”の強さは、嫌というほど分かっている。

あの路地裏で、立花の乱入がなければ、オレは間違いなく殺されていた。



だけど

『 M e m e n t o (死を) M o r i (想え) 』

思い描くは漆黒の刀。

恐怖はある。だが、オレは“破戒”を行使する。

それは、弱者が取り得る唯一の道。

死を跳ね除ける、たった一つの希望。

一部でも望みがある限り、オレはそれに縋り付く。

「行くぞ」

顕現した扉から、オレは黒刀を引き抜く。

さあ、戦闘開始だ。

来るなら来い。例え、それが無駄だとしても、座して死を待つことは、オレ自身が許さない。

「えっ……？」

しかし、身構えつつ振り返ると、そこには意外な人物の姿があった。

驚くほどに白い肌。

風に靡く白銀の髪。

知っている。オレはこの少女を確かに知っている。

だが、さっきまでは知らなかった。

忘れていたとか、そう言うレベルではない。

オレの記憶の中から完全に、彼女の存在は消えていた。

「……ユキ？」

気付けば、自然に言葉が口から漏れていた。

『ユキ』。それは、彼女の名前。

少女の姿を見た瞬間に、忘却の海から浮上していく記憶。

重りと共に沈められた思い出が、一瞬の後に蘇った。

「久しぶり、広樹。いや、初めましての方が正しいかな？」

オレが名を呼ぶと、彼女はいつも通りに微笑んだ。

## 偽りの草原（後書き）

二ヶ月以上も更新が停滞して、本当に申し訳ありません。  
待っていてくれた方が……いると嬉しいです。  
次はもっと早くに投稿できるように頑張ります。

一つの願い（前書き）

> i 2 5 8 4 2 | 3 3 6 8 <

## 一つの願い

「久しぶり、広樹。いや、初めましての方が正しいかな？」

そう言って彼女は微笑むと、ゆっくりと近付きオレの隣に腰を下ろした。

不思議と敵意は感じない。

本当に自然に、偶然再会した友人と会話するように、彼女は言う。

「ねえ、座ろうよ？ 話しはそれからでも遅くないでしょ？」

「えっ？ あ、ああ、いいけど……」

座った状態で、オレの袖を引っ張る、ユキ。

知っている。オレは、全てを思い出した。

彼女の姿が、本当に昔と変わらなくて、オレは状況を忘れて言われるがままに草の上に座った。

「ふふっ、久しぶり。最後に会ったのは、三年前くらいかな？」

「ああ、そうだな」

隣で話しかけて来るユキに答えを返しながら、オレはこの状況を整理する。

よし、まずは落ち着こう。

大きく深呼吸をして、頭をクリアにするんだ。

「……………」

少し冷静になって考えてみると、これは夢なんじゃないかと思えて来る。

常識的に考えて、こんな事はある得ない。

だが、手に触れる草の感触に、頬に当たる風。

その全ての感覚がリアル過ぎて、夢と現実の区別が付かない。

「そろそろ、私の事を思い出してくれたかな？ 一応、中学の時はそれなりに親しかったと思うんだけど」

ユキの言葉に心臓が跳ねる。

ああ、思い出したさ。

本当なら、絶対に忘れる筈がない。

オレを絶望の淵から救い出してくれた、たった一人の親友。

一歩先から手を伸ばし、オレに生きる希望をくれた存在。

幾ら感謝しても足りないくらいの彼女を、オレはどうして忘れていたんだろう？

「あのさ、一つ聞きたいんだけど……お前、オレに何かしたのか？」  
傍から見れば意味不明な質問だっただろう。

『お前』と『オレ』を言い間違えたように、思われたに違いない。  
でも、

「そくだよ」

静かに、だが確かにユキは頷く。

「少し、記憶を弄らせてもらったの。私の事を覚えてると、キミの身が危険だったからね」

それで分かった。

中学の卒業式の後、突如として失踪したユキの元に辿り着けなかった理由。

いや、正確には捜そうとすらしていない。

ユキは元気か？

友達からそう尋ねられても、道理で意味が分からなかったわけだ。  
「なるほど。そう言う事か」

だって、この草原でユキに出会う瞬間まで、彼女の存在はオレの中には無かった。

忘れていたのだ。

声も、顔も、名前も全て。

本当に綺麗さっぱりと。

「ユキ……お前は『神術同盟』の”神術師”か？」

むしろ、それ以外に考えられない。

”神術師”なら、一人の人間の記憶を弄る事くらい簡単だろう。

オレはそう確信していたが、意外にもユキは首を横に振った。

「うーん、中学の時はそうだったけど、今は無所属だよ。その辺り

は、義姉<sup>ねえ</sup>さんに教えて貰うといいよ」

「姉？ お前に姉なんかいいたのか？」

ユキに姉がいるなんて初耳だった。

何度かユキの家に行ったことはあるが、彼女の姉とは会ったことはない。

もつとも、その記憶さえ正しいかも分からないが。

「うん。血は繋がってないけどね。ああ、私の名字を思い出してくれれば誰だか分かるよ。さすがに分かるよね？ 憶えてなかったら、少しショックかも」

忘れさせたのは、お前だろう。

そう言い掛けたが、ユキの顔を見てやめた。

甘い考えかもしれないが、ユキもオレの事を考えてやったことだろう。

あれからどんなに時間が経っていても、ユキは無意味に人を傷付けない。

何故だか、そんな気がした。

「ユキの名字だよな？ えーと……えっ？ 嘘だろ？」

その名字で、一番最初に思い浮かんだ一人の少女。

「あつ、その様子だと、分かったみたいだね。そうだよ、あの水色の釣り目女の事だよ」

姉と妹のどちらの可能性もあったが、どうやら、オレが思った方で当たっていたらしい。

水原 ユキ。その名字からオレは一人の少女を連想する。

「なるほど。一応、筋は通っているワケか」

ユキの義姉が彼女だとするなら、中学の時に会わなかったのも頷ける。

優依の話によれば、彼女はその時、日本にはいなかったのだから。「じゃあ、そろそろ私は行くよ。あんまり、ゆっくりしてる時間もないんだ。久しぶりに会えて嬉しかったよ……ねえ、キミはどう思ってるか分からないけど、私はね、まだキミを友達だと思ってる。」

だから、一つだけ忠告……ううん、これはお願いかな？」

二人きりの草原で、ユキは立ち上がり遠くを見上げた。  
何処までも広がる草花の海。

他には何もない。

いや、何もいらないのだろう。

無駄なものがない、故に美しい。

そんな偽りの楽園で、ユキは告げた。

「義姉さんには関わらないで」

自らの義姉には関わるな。

ユキは憂いを帯びた口調で呟く。

「あの人は悪魔だよ」

彼女は人間ではないと。

「何でも完璧にこなして、出来ない事なんて何もない。天才……って言葉は大嫌いだけど、あの人はそうとしか言えないよ。私達がどんなに頑張っても、義姉さんには追いつけない。力の限り走って、限界を超えて走っても、あの人はその先にいる」

彼女とは住んでる世界が違うと。

「ねえ、広樹は”神術師”になって、どうするの？ 義姉さんなら、確かに広樹を一流にしてくれるよ。あの人は天才だからね。でも、その先は？ 『同盟』と戦う？ それとも、『歯車』と戦う？ 力を持つって言うのは、つまりはそれだよ？」

二つに一つ。

二者択一しか道はない。

「静かに暮らしたいかと思ってても、絶対に無理だよ。強すぎる力は破壊しか生まない。”破戒”に対抗するために”神術”があるように、強い力は争いを生む。人間なんてそんなものだよ」

争いは、不幸を生み出す無限連鎖。

決して抜けられない、永劫不変の環。メビウス・リング

「世界は、悪意に満ちている。昔、そう言った人がいてね……私は、その通りだと思ったよ。悪意があるから、争いが起こる。争

いが起こるから、不幸が生まれて　そして、悲劇が起こる。だからね……」

ユキはそこで一つ息を吐くと、ふと空を見上げた。  
上空には、彼方に続く蒼穹。<sup>そうきゆう</sup>

彼女はそこに何を見ているのか？

その瞳には、何が写っているのか？

それすらも悟らせずに、ユキは言う。

「　キミはこっち側には来ないで」

此処は、キミの居場所じゃない。

キミの居場所は、非日常（こちら側）じゃなくて日常（あちら側）でしょうと。

「ユキ、オレは……」

「答えはいらない。これは、ただのお願いだから。親友からの、たった一つのお願ひ。どうするかは、キミが決めてよ。私に強制は出来ないし……そんな資格もないから」

その資格は、既になくした。

キミの前から消えた時に、私は全て捨てて来たから。

オレの言葉を遮って、ユキはそう告げた。

「じゃあね。あまり時間はないけど、十分に考えてね。他人の意見じゃなくて、キミ自身が決断するんだよ」

その言葉は、誰かに言われた気がする。

哀しげな表情で、オレにそう言った彼女。

それは、ユキが義姉さんと呼ぶ彼女に他ならない。

「待て！　おい、ユキ！」

「さようなら。出来れば……二度と会わないことを祈ってるよ」  
言いたい事は沢山ある。

どうして、いなくなっただんだ？

あの時、何があっただんだ？

しかし、それらを告げる寸前に



『 Valschnall Calttlud Toriaden  
t (キミを想う。私の愛は永遠に) 』

楽園の門は閉ざされた。

## 一つの願い（後書き）

ユッキユキにしてやんよ

はい。皆の予想通り、画像はチート能力を持つ水原 ユキさんです。何か急に登場しての超展開じゃんwwとか、思われるかも知れませんが……べ、別に、忘れてたわけじゃ無いんだからね！！

久しぶりにプロットを見直して「あれ？ そう言えば、こんなキャラもいたなー」とか、思い出して、急に出版を作ったわけじゃ絶対に無いんだからね。

……はい。見苦しいツンデレですみません。いや、これはマジで忘れてたわけじゃないんですよ。結構、お気に入りのキャラですし。えっ？ 手に持つてる剣？ 気にするな。それは幻覚だ

## 目的

「……………」  
意識を失った広樹を、近くのベンチへと運び、ユキは改めて想い人の顔を見た。

……変わっていない。

少し背が伸びて、体にも筋肉が付いたようだが、その優しげな顔立ちに変化はない。

「……広樹」

彼と一緒に過ごした中学時代。

今思えば、あの時が一番幸せだったのかも知れない。

人生に何の希望も見いだせなかった私に、唯一、光くれた人。

広樹は私を命の恩人と言っているが、別に恩に着る必要などありはしない。

自分も彼に救われたのだから。

この狂った世界で、唯一の癒しとなってくれた人。

何をする訳でもなく、ただ何気ない会話をしているだけで、心が癒された。

水原家の”神術師”ではなく、水原　ユキを一人の人間でいさせてくれた存在。

だからこそ　彼の記憶を消した。

巻き込んではいけない。

間違っても、彼を非日常へと引きこんではいけないのだ。

干感傷に浸っていたユキの前に、不意に黒い炎が燃え上がる。

唐突に、何の兆候もなく現れた炎の中から、立花とそれに続いて詩織が現れた。

「ああ、楽しかった。久しぶりに思いつ切り暴れて、ストレス発散になったよ」

「それは良かったな、立花。それと、ユキ。私の留守中に何か問題

はあつたか？」

ユキに掛けられる、死神の声。その一声で、ユキは自分の心が凍て付いていくのを感じた。

「何も無い。それよりもそっちはどう？ 収穫はあつた？」

「ああ、邪魔だった『同盟』は壊滅し、我々を阻む者はいなくなつた。後は、あの”英雄”が出張つて来なければ問題は無いな」

そう言つて珍しく笑みを浮かべた詩織だったが、ベンチに横たわる広樹を見て、表情を曇らせた。

「念のため聞いておくが、もしもコイツが敵に回ったら、お前はどつする？」

「……殺すよ」

短い沈黙の後、ユキは答えた。

勿論、出来れば避けたいが、敵対するのならば仕方ない。なぜならば……。

「私には目的がある。どうしても、成し遂げなければならない目的が。だから、もしそれを邪魔するのなら、例え広樹でも容赦はしないよ」

そう。全ては目的の為。

その為に、全てを捨てたのだ。

普通に進学し、真つ当に生きる事も出来た。

”同盟”に所属して、”神術師”として生きること出来た。

友情すらも投げ捨てた自分に、彼の前に再び親友として立つことは許されない。

もしも、もう一度、目の前に立つことがあるのなら、きっとその時は敵として立つだろう。

「そう言えば、まだ聞いていなかったな。ユキが仲間に加わって二年が経つが、その目的とやらは何だ？ お前は一体、何を望むのだ？」

本来なら、敵対するはずの”破戒者”と”神術師”。

しかし、利害の一致が彼女たちを結びつけている。

「私は」

水原 ユキは想う。七瀬 広樹を、他にも愛すべき人々を。それらを天秤に掛けた上で、改めて告げる。自らの望み。全てを捨ててまで、掴みたかったモノを。

「私は世界の終焉を望む。この狂った世界を、破壊するわ」

## 目的（後書き）

投稿までにかなり時間がかかってしまいましたね。いつもながら、申し訳ありません。気長に待っていてくださる人達に感謝しつつ、本日はこの辺で失礼します。

## 姉妹

「申し訳ありません、真依様。わたくしが着いていながら、七瀬様を……！」

家に戻った蓮花は、これで何度目になるか分からない謝罪を、自らの主に告げた。

「どうか、自害を命じて下さい。この千里　蓮花。甘んじて、その罰を受けましょう」

「はあ……バカなことを言わないで、蓮花。あと、いい加減に顔を上げて。別に、貴方だけの責任じゃないわ」

床に額を擦りつけて謝る蓮花に、真依はため息混じりにそう告げる。

「いいえ、この一件はわたくしの失態です。真依様に責任などありません。ですから……」

「はいはい。分かったから、少し落ち着いて。失態だと思うなら、罰ではなく、功績で償えばいいじゃない。冷静になって考えても見なさいよ。貴方が死んで、本当に得をするのは誰なのか？」

「……………」

暫くの沈黙の後、蓮花はようやく頭を上げた。

「申し訳ありません。少々、取り乱しました」

「まったく、もっと客観的に物事を見なさいよ」

優雅に一礼して静かに立ち上がる、蓮花。そんな彼女に、真依はやれやれと肩を竦めた。

「それで？　もう一度、確認するけど、”現界（Germinations）”の波長を感じ取った後、七瀬君は突然いなくなったのね？」

頷く蓮花に、真依は表情を硬くする。

”契約紋”が、まだ光っているの、彼が生きている事は間違いない。

現在、何とか居場所を特定しようとしているのだが、どうやら特殊な”術式”で守られた場所にいらしく、割り出すにはもう少し時間が必要だ。

「しかし、こんな事があり得るのでしょうか？ 油断していたとは言え、手を伸ばせば触れる距離にいたのです。接近すらも気取られずに、七瀬様を連れ去るなど……」

「いえ、可能だわ。あの子……ユキの”破戒”を使えばね」

こんな事が出来るのは、真依が知る限り一人しかない。

一体、何のつもりかは知らないが、厄介な事をしてくれたものだ。くっ……！ 不覚です。ユキ様がいるなどと、考えもしませんでした。では、わたくしは見当違いに辺りを捜し回り、直ぐ近くにいた七瀬様を置き去りに戻って来た。そう言う事でしようか？」

「気にしないでいいわ。一度、ユキに捕まれば、私だって何も出来ない。あの子の”破戒”は、そう言うものよ」

悔しげに唇を噛み締める蓮花の肩を、真依は軽く叩いてポケットから携帯電話を取り出す。

「ふっ、優依に番号を聞いておいて正解だったわ」

アドレス帳から目的の人物の名前を探し出し、携帯を耳に当てた。果たして、出てくれるだろうか？

そんな不安もあったが、何度目かのコール音の後、数年ぶりの電話が繋がった。

「もしもし、ユキ？ ちょっと、話があるんだけど、今から会えないかしら？」

電話の向こうの相手は、不機嫌そうな声で承諾を告げた。



## 冬花の願い（１）

気が付くと、薄暗い部屋にいた。

目を開けて、最初に目に入っただのは真つ白な天井。

真依の家ではない。まるで、マンションのような一室。

「……………」

取り敢えず、起き上って辺りを見回すと、置いてあるものが極端に少ない事に気が付いた。

部屋の入り口付近にある、小さな机。

大きめのテーブルと、それを囲む四つの椅子。

他は、オレが今寝ていたベッドだけでテレビすらない。

「あれ……？ 此処は？」

外を見ると、既に日は落ちていた。

何十階にいるのかは知らないが、地面が酷く遠い。

西側の窓からは夕暮れの太陽が差し込み、室内を赤く染め上げている。

此処は何処だ？

オレはどうして此処にいるんだ？

昼前に、蓮花と街に出かけたのは覚えている。

それから、”術式”を描いて……。

「………… ユキ？」

突然、頭に浮かぶユキのイメージ。

そうだ。オレは彼女に会った。

突然、周囲に人がいなくなり、草原のような場所で彼女に再開した。

その後、オレはどうなった？

義姉さんには関わるな。

ユキはそう言っていた。

駄目だ。それからの記憶が全くない。

「あれ……？」

その時、不意に机の上で何かが光っている事に気が付いた。近付いてみると、どうやらクリスタルの置物のようだ。

「何だ、これ？ 四本の柱？」

それは、透明な四つの柱。

一本ずつ長さが違っており、右に行くに連れて階段のように高さを増している。

何かの順位を示しているのだろうか？

光っているのは、その一番低い柱だけだ。

「全てを司る、正義の四本柱。それは、私が第四位を継承する際に、頂いたものです。まあ、今となつては、ただの置物に過ぎませんが」

響く声と同時に電気が点けられ、オレは危うくそれを落としそうになった。

「まったく、気が付いたなら電気くらい点けて下さいよ」

入口に佇むのは一人の人影。

「さ、佐伯！？」

漆黒のローブに、先端が槍のように鋭い杖。

見間違える筈もない。

昨日、いきなりオレに襲いかかって来た、『神術同盟』の第四位。

佐伯 冬花の姿が、そこにあった。

「くっ……！ どうして、お前が此処に？」

オレは咄嗟に、彼女から距離を取ろうと数歩後ろに後退する。

未だに良く現状を把握できないが、これがいい状況でないのは確かだ。

どうする？ 取り敢えず、下がって見たはいいが、実力で敵わないのは証明済みだ。

出口は彼女に抑えられているし、強行突破以外に逃げる手段がない。

「どうして、と言われましても。此処は私の部屋ですから。まったく

く、そんなに露骨に警戒しなくてもいいじゃないですか。駅前のベンチで意識を失っていた貴方を、此処まで運んだのは私ですよ？一応、言っておきますが、貴方が抵抗しなければ、危害を加えるつもりはありません」

「……それを、信用しろって言うのかよ？」

信用出来る筈がない。

オレが駅前で倒れていたと言うのは、取り敢えずどうでもいい。恐らく、ユキが何かしたのだろう。

だが、佐伯は『同盟』の”神術師”。

昨日は、問答無用で殺され掛かったんだぞ。

「そうしてくれると嬉しいのですが……まあ、無理でしょうね。色々聞きたい事などもあるでしょうが、取り敢えずは落ち着きましよう」

佐伯は自傷気味に肩を竦めると、オレのこちらに近付いてくる。

「ッ!？」

一瞬、何かされるのではないかと身を固くしたが、佐伯はそのままオレの前を通り過ぎて、部屋の奥へと進んで行った。

「ああ、適当に座っていてくれて構いませんよ。今、何か温かい飲み物でも入れますから」

佐伯の声に、敵意のようなものは一切ない。

そんな佐伯に違和感を覚えた。

まるで、本当に客人を持て成すかのような、その言い方。

どういつつもりなんだ？

油断させる作戦か？ でも、そんな事をする理由が分からない。

オレを殺したいなら、手に持った杖を振ればそれで終わる筈だ。身体を拘束されているワケでもないし、一体、何が目的なんだ？

「では、少し待っていて下さいね」

オレの心情を知ってか知らずか、佐伯は自らの杖を壁に立て掛けると、奥にあった扉を潜った。

状況から察するに、そこはキッチンだろうか？

先程は暗くて見えなかったが、他にも幾つかの扉がある。

「……………」

佐伯がいなくなった事を確認したオレは、彼女の置いて行った杖に目を向けた。

……取り敢えず、少しでも状況を良くしないとな。

手に取ってみると、その軽さに驚いた。

長さの割には意外に軽く、木の棒を持っているような感覚だ。

これで安心、と言うワケではないが少なくとも、佐伯に持たせたままにしておくよりはいいだろう。

「お待たせしました」

扉から出て来た佐伯の手には、二つのマグカップがあった。

中身はどうやら、コーヒーのようだ。

佐伯は二つのカップをテーブルの上に置くと、椅子の一つに腰掛けた。

「おや？ 気に入ったんですか、それ？」

一口コーヒーを飲んでから、ようやくオレが杖を持っている事に気付く、佐伯。

しかし、その口調に焦りは無く、親しみの色すら見える。

「良かったら、差し上げましょうか？ 元々、私には不相応な代物です。第四位ではない、今の私に持つ資格はありませんから」

「えっ……………」

第四位ではない？

それは、どういう事だ？

「そろそろ、こちらに来て話ませんか？ 杖は持っていて結構です」

良く聞くと、佐伯の声にはいつもの覇氣がない。

むしろ、落ち込んだ時のように弱々しく、顔には疲れの色が見えた。

「分かった」

佐伯を完全に信用したわけではないが、こんな状態の彼女相手に、

一人で怯えているのはバカバカしく思えて来た。

「……インスタントですが、良かったらどうぞ。身体が温まりますよ」

念のため杖を持ったまま佐伯の隣に座ると、彼女はマグカップを差し出してきた。

「ああ、ありがとう」

礼を言っ受取り、そのまま口に運ぼうとして、ふと手を止める。

そう言えば、この前、他人の家で出された飲み物を簡単に飲むな、と真依に怒られた事があった。

「どうかしま……ああ、なるほど。さすがは、水原先輩。そう言う所は、しっかり教えていますね」

どうするべきか迷っていると、オレの考えを見透かしたように佐伯は呟く。

その声は酷く哀しげで、昨日までの佐伯とは別人のように思える。

「まあ、無理にとは言いません。昨日の一件もありますからね。簡単に信用が得られるとは思っていませんよ」

口元には自虐的な笑み。

本当にどうしたと言っんだらうか？

こうまで人が違ったようだと、何だか調子が狂う。

## 冬花の願い(2)

「その……大丈夫か？ 何か疲れてるみたいだけど。それに第四位じゃないって、どういう事なんだ？」

コーヒの事は、取り敢えず脇に置き、今は佐伯が何故こうなったのかが気になる。

昨日までの彼女なら、間違いなくオレを拘束、もしくは殺そうとしていた筈だ。

「ええ、少し上司と揉めましてね。『こんな組織なんて辞めてやる！』って、啖呵を切ったんです。多分、もうクビになっていると思うんで、私はもう第四位ではありません。まあ、それについては大した問題じゃないんですが、常に魔力を送りながら、動くって言うのは思ってたよりも大変でして。普段なら一日くらい寝なくても、どうと言う事はないんですけど、今は……ちょっと、頭が痛いんですよ」

言いながら、こめかみを押さえる、佐伯。

近くで見て初めて気が付いたが、彼女の目元にははつきりと隈くまが浮かんでいる。

「それで、七瀬先輩に一つ頼みがあります。少しの間、この部屋で大人しくしていて貰えませんか？ 勿論、安全は保証しますし、必要なものがあれば可能な限り揃えます。恐らく、長くても一日くらいだと思いますよ。私が水原先輩と話しをする間、貴方はここにいてくればいい。どうか、お願いできないでしょうか？」

「水原との話しの内容にもよる。それによっては、見過みごせない場合もあるし」

可能性は低いとは思っけどな、と心の中で呟き、佐伯の反応を待つ。

はつきり言っつて、今日の彼女は少し異常だ。  
オレに頼みごとをする時点でおかしい。

わざわざ、そんな事をしなくとも、実力でねじ伏せればいいだけの話だろう。

「そうですね……簡単に言えば、協力要請ですね」

「協力？ 水原に？」

幾ら第四位ではないと言っても、昨日までは敵同士だったんだ。

何についてかは分からないが、手を組むのは無理じゃないのか？ そんな事を思いながら、オレは聞き返す。

「そうです。私だけでは、手に負えない敵がいるので力を貸して欲しい。そう、お願いするつもりです。あつ、別に七瀬先輩を交渉の道具にするつもりはありませんよ。水原先輩の答えがどうであれ、貴方は解放します。本当は、こんな人質のような真似はしたくなかったのですが、私では彼女を見付けられなかったので……」

信じるかどうかは別として、佐伯の言う事には筋が通っている。

真依の家は、特殊な”術式”で守られて、絶対に見つからないと言っていた。

だから、佐伯は話し合いの機会を設ける為に、オレを此処に連れて来た、と言う事だろう。

「なるほど。急な話で頭が混乱してるけど、話しは分かったよ。でも、その敵つてのは何なんだ？」

「……………」

正直に言えば、佐伯の行動は謎が多い。佐伯が”破戒者”と敵対しているならば、別に『同盟』を抜ける必要は無かったはずだ。しかし、わざわざ組織を抜けてまで、彼女は一体、何をしたかったのか？

その問い掛けに、佐伯は沈黙で応じた。

「佐伯？」

答えを急かすように名を呼ぶと、佐伯は一つ息を吐くと、真っ直ぐな眼でオレを見据えた。

「ねえ、七瀬先輩。貴方はガルノイアについて、何か知っていますか？」

「えっ？」

質問を質問で返され、少し戸惑う。

「第二帝国連合。その首都だった、緑豊かな都市です」

「えーと、確か戦争が起こったんだったか？ ガルノイア大戦とか言う」

以前、エレナに聞いた話を思い出す。真依が参戦したという、  
”科学”と”神術”の戦争。その戦場となった地だと聞いた。

「そう。かつて、大きな戦争が起こった場所。そこを滅ぼしたのは…… たった一人の破戒者です」

「待て、街は戦争で滅んだんじゃないのか？」

「いいえ、むしろ逆です。街が滅んだから戦争が終わった。既に終わりが見えていた戦争。その最終局面で、あの女 ”神を殺す者”<sup>タナトス</sup> が現れて、全てを滅ぼしました」

タナトス。確か、死神を意味する呼び名。何だろう？ その

名前に、何か言い知れぬ不吉さを感じる。

「じゃあ……その”神を殺す者”<sup>タナトス</sup> が？」

「そうです。私が『同盟』を抜けてまで止めようとしている敵。私だけでは、彼女を止められない。だから、水原先輩に助力を頼むのです。ご理解頂けましたか？」

「ああ、でもソイツは……」

オレが重ねて尋ねようとした時、無造作に部屋のドアが開かれた。

「こんにちは、メリアル。元気だったかしら？」

それと共に、響く少女の声。

抑揚のない冷たい声は、誰かに似ているような気がした。

「えっ……？」

振り向くと、そこには小さなトランクを持った、黒いドレスの少女が立っていた。

「なっ！ フィルアルト卿！？」

佐伯の顔が驚愕に歪む。

身に纏うドレスは、まるで黒き荊<sup>いばら</sup>。



闇のような深い黒なのに、そこに華々しさも兼ね備えている。  
深淵と言う棘を持ち、それすらも容易に着こなす荊姫。  
本能で分かる。彼女は危険だ。  
絶対に、関わってはいけない。

### 冬花の願い（3）

「七瀬先輩ッ！ 杖をこちらに。そして、私の後ろへ」

切羽詰った佐伯の声に、思わず彼女に杖を渡してしまう。

大きな音を立てて椅子から立ち上がると、彼女はオレの腕を掴み、自らの後ろへと引き寄せた。

その姿は先程までとは、まるで違う。勇ましく、そして力強い。

さすがは第四位と言っべきだろう。だが、この少女の前では、それも霞む。

彼女はもつと強大で、まるで別次元の怪物を相手にしているように思える。

「壁際まで下がって下さい。ゆっくりと、出来るだけあの人を刺激しないように」

前を向いたまま、佐伯が小声でそう呟く。

有無を言わせぬ、彼女の言葉に、オレは頷き一步步後ろに下がる。

「あらあら？ 他人行儀な呼び方しないでいいのよ。前みたいに、ユリイって呼んではくれないの？」

そんな佐伯の事など、お構いなしに少女はフレンドリーに語りかける。

あれ？ 何だろう？

この少女の仕草と、会話の流れ。

身近な人間で、似てる奴がいたような気がするのだが、それは一体誰だっただろう？

「生憎と、そんな恐れ多いことは出来ませんね。今は違うと言っても、貴方は私の上司でしたから。マティルド卿ですら、貴方を呼び捨てには出来ないでしょう」

「悲しい事言わないでよ。貴方になら、呼ばれても構わないわ。ふっ、その反応からすると、第四位を辞めたって話は本当だったの

ね。一応、理由を聞いてもいいかしら？」

「……別に、大したことではありません。『同盟』の掲げる正義は、私の正義と相反する。ただ、それだけの事ですよ。それに、貴方を呼び捨てに出来るのは、私が知る限り水原先輩くらいでは無いでしょうか？」

オレが壁際まで下がった事を確認すると、佐伯は苦々しくそう答えた。

「ああ……水原か」

佐伯の言葉に、今までの疑問が吹き飛んだ。

そう。彼女は真依に似ている。

抑揚のない声も、独特の会話運びも、彼女にそっくりだ。

「んっ？ ああ、マリアの『弟』ね。あら？ でも、貴方……」破戒者”よね？」

無意識に声に出していたのだろう。

少女は初めてオレに目を向けて、そして不思議そうに首を傾げた。「か、彼は関係ありません！ 貴方は、私を殺しに来たんでしょう？ だったら、余所見なんてしないで下さい！」

言っが否や、佐伯の杖が光を帯びる。

『Of the ice that carries out, a pile. With a gale and pleas e make a hole in an enemy who opposes me. (祖は貫きの氷杭。疾風と共に、我が敵を穿て)』

相変わらず、佐伯の”詠唱”は速い。

一秒にも満たない間に法則を改竄し、生み出される”神術”。

銃弾の如き速度で、氷の杭が少女の顔面へと放たれる。

「うーん、相変わらず書き換えが遅いわね。直線的で捻りもないし。それに、何よりも……」

高速で迫る杭を見ても、少女は避けようもしない。

それ所か、前に一歩前進する。

そして

「殺意が籠ってないのよ。そんな攻撃だと、虫一匹殺せないわよ？」  
受け止めた。氷杭を、至極簡単に。

まるで、キャッチボールでもしているかのように。

「……化け物め」

「あら、酷い。貴方がそれを言うの？」

苦々しげに呟く佐伯の目の前で、少女は氷杭を握り潰す。

粉々に砕け散った欠片が床に落ち、跡形もなく消え去っていく。

「そんな……」

圧倒的過ぎる。

相手にならない所の話ではない。

初めから、勝負にすらなっていない。

「七瀬先輩、窓から脱出を……えっ？」

そう言い掛けて、佐伯がオレの元に駆け寄ろうとした瞬間、彼女の体がふらりと揺れる。

恐らく、自身でも何が起きたのか分からなかったのだろう。

「あっ……！」

突然、膝から下の力を失ったようにバランスを崩す、佐伯。

そして、そのまま床に激しく顔面を打ち付けた。

「ぐっ！ な、何を？」

自分に、一体何をしたのか？

困惑に満ちた表情で、佐伯は尋ねる。

だが、その答えを知っているだろう少女は、呆れたように、ため息を吐いた。

「はぁ……別に、私は何もしてないわよ？ 貴方が、勝手に魔力切れで倒れただけじゃない？」

「魔力切れ？ そんなバカな」

信じられないといった風に、佐伯は立ち上がろうとするが、腕に力が入らずに再び顔面を床に打ち付けてしまう。

「佐伯！？」

咄嗟に黒刀を出現させ、少女の前に躍り出る。

何故、そんな事をしたのかは自分でもよく分らない。

ただ、このままじゃマズイと思った瞬間、自然に体が動いていた。

## 冬花の願い（４）

「くっ！ ダメです。その人は貴方の手に負える人じゃない！」  
背後から聞こえる佐伯の叫び。

ああ、知っているさ。目の前の”これ”は真正正銘の化物だ。  
オレなんかが相手になるような、レベルじゃない。

「力の差を理解しつつも戦う。へえ、さすがはマリアが見込んだ人間かしらね。勇気と蛮勇は違う、何て言うけどね。やっぱり、男子は少しくらい無謀な方がカッコイイわよ」

感心したように少女は呟くと、一歩前に踏み出した。

さあ、どう出る？

別次元の化物を相手に、オレは僅かな初動すら見逃すまいと集中するが、彼女がとつたのは意外な行動だった。

「『世界総合神術同盟』。『四大神術師』第一位。アルフィーネ家のユリイ・フィルアルト。気軽に『ユリイ』って呼んでくれていいわよ」

ドレスの裾を翻し優雅に一礼して見せる、黒き少女。

「えっ……？」

思ってもみない展開に、オレは呆然と立ち尽くす。

「あら、名乗り返してはくれないの？ 困ったわね。早速、嫌われちゃったかしら？」

「あっ……いや、その。七瀬 広樹……です」

ため息混じりに肩を落とすユリイに、オレは思わず名乗り返してしまった。

一体、何をやっているんだ。相手は『神術同盟』。しかも、その第一位だぞ？

そんな自責の念に捕らわれるオレには構わず、ユリイは微笑と共に髪を掻き上げた。

「ふふ、七瀬……か。なるほど。そう言う事ね」

そして、何かを悟ったかのように頷くと、今度はじっとオレの目を見据えた。

「……ッ!？」

宝石のように綺麗な目。全てを映しているようで、実は何も映していない瞳に見詰められ、オレは言い知れぬ恐怖を覚えた。

……怖い。彼女は怖い。

背筋は凍り付き、手が震える。足は動かずに、心臓は早鐘になる。

そう。この感覚は初めてじゃない。まるで、あの時の再現。

教室で真依に見詰められた時と、まったく同じだ。

「ねえ、貴方……」

不意にこちらに伸びてくるユリイの手。

触れてはいけない。頭ではそう分かっているのに、足は動かない。逃げろ、避ける、何でもいいから身体を動かせ。

しかし、オレの身体は脳からの命令を無視して、硬直したまま。もう、駄目だ。そんな諦めが頭を過ぎった時、彼女の手を横から掴んだ者がいた。

「ご無沙汰してますね、アルフィーネ卿。相変わらず、お元気な様子で何よりですよ」

#### 冬花の願い（４）（後書き）

こんばんわ、皆さん。実は、数日前にキャラデザをuploadしておいたのですが、お気付きでしたでしょうか？

先頭に『 』の付いた章に、キャラデザを載せております。良かったら、見てやってくださいな。ちなみに、キャラデザは頂きものです。とある知人の方に描いて頂きました。

他にも、中二病全開の絵を送って頂いた皆様。本当にありがとうございます。いつも、楽しみに見させて頂いてます。「見る！これがオレの黒歴史だ！」と、素晴らしい絵を送ってくださった方も居られました。が、メッセージの返信が遅れ気味で、すみません。ちゃんと見てますし、大歓迎ですよ。久しぶりの方も、初めましての方も、気軽に話しかけてくださいな。

それでは、今日はこの辺で。



## 王者の剣と第一位

ユリイの腕を横合いから掴んだのは、以前エレナと名乗った小柄な少女。

「あら、貴方も元気そうね、エレナ。それにダリアも久しぶりね」  
その後ろには、いつの間にかダリアの姿もある。

「それで、今回はどう言った御用向で？ 事と次第によりましては、私達も黙ってみていることは出来ないのよ」

一瞬にして膨れ上がる殺気。普段のエレナからは考えられないような鋭い眼光がユリイを射抜く。ダリアにいたっては、既に小太刀を抜いており、佐伯を守るように彼女の前に立ちはだかっていた。  
「……………」

言葉が出なかった。

壮観にして華麗。これこそが『王者の剣』。あの戦争を生き抜いた英雄の姿。

「アルフィーネ卿。出来れば、早々に御用向をお伺いしたい。我らとて、あまり気が長い方ではないのよな」

数秒の沈黙の後、ダリアが唸るように言い放つ。

「ふうん。なら、私がメリアルを始末しに来たと言ったら、貴方達はどうするのかしら？」

「そうね……こうするわよ！」

殺那、ユリイの手を放し、エレナが出現させたのは赤き本。世界を創り出すという、あの魔道書。

「ソルディア卿！ グラフィード卿も！ 何をしているのですか」  
唐突に展開した一触即発の空気に、呆氣に取られて立ち尽くしていたオレは、佐伯の叫びで我に返った。

「私などを庇って、お二人が命を落とすのはいけません。幾ら貴方達と言えども、アルフィーネ卿には勝てません」

「そうかしら？ やってみなくちや分からないと思うけど？」

さすがは英雄と呼ばれただけはある。ユリイの前に立つても、崩すことのない余裕。無策に蛮勇を奮ったオレとは違う。彼女たちは、何かしらの勝算があつて、ユリイと対峙している。

「違う……違うんですよ、ソルディア卿」

しかし、佐伯は杖を頼りにふらふらと立ち上がると、力なく首を横に振る。

「貴方達は”神を殺す者”を止められる、最後の希望。こんな所で終わっていい人達じゃない。私の為を想うなら、その命は別の所で使うべきです」

「シルビア……」

それを機に、場に沈黙が訪れる。エレナは目を伏せ、何かに耐えるように拳を震わせている。ダリアにいたっては既に武器をしまい、一步後ろに下がっている。

「……うふっ」

しかし、その静寂を打ち破ったのは、場に似合わない無邪気な笑い。

「あはは、ごめんごめん。そこまで本気にするとは思わなくて」

「えっ……？」

「メリアルを殺すなんて嘘よ。この子が『同盟』を抜けるなんて言い出したから、ちよつと脅かしに來ただけ。一応、『四大神術師』に推薦したのは私なんだから、勝手に抜けられると気分が悪いじゃない」

事もなげにそう告げて、ユリイは目の前の椅子を引き、テーブルに着いて一息吐く。

そして、佐伯の飲み掛けのコーヒーを見付けると、両手でカップを持ってクピクピと飲み始めた。

## 王者の剣と第一位(2)

「はは……脅し？ アルフィーネ卿、貴方は最初から……」  
「佐伯！？」

それで緊張の糸が途切れたのか、佐伯の体がガクリと崩れる。咄嗟に手を伸ばし、床に落ちる前に何とか、受け止めることに成功したが、打ち抱えた彼女の体が異常に冷たいことに気付いた。

そんな、これじゃあ、まるで……。

「お、おい！ 佐伯、佐伯！？ 大丈夫か、おいってば！」  
生きている人間の体温じゃない。

軽く揺さぶりながら、呼び掛けてみると閉じていた目がうつすらと開く。

「あ……七瀬、先輩？ 何……ですか？」

ヤバイ。これは、本当に危険な状態なんじゃないか。

「……ッ！ お前、佐伯に何をした？」

「えっ？ 私？ いやいや、だから何もしてないって言ったじゃない。ただの魔力切れよ。マリアの弟子なら、それくらいで騒がないの」

「それくらい……だと？」

馬鹿にしたようなユリイの言葉に、オレは刀を強く握り締める。

”神術”の知識がないから詳しいことは分からないが、誰がどう見たって危険な状態に違いない。

佐伯はお前達の仲間だろ？ それなのに、コイツは……。

「落ち着きなさい。その女に構っていても、時間の無駄。確かに危険な状態だけど、ただの魔力切れだから、あまり心配しなくていいわ。体温の低下も、その所為ね」

「魔力切れ？」

”魔力”って、確か”神術”を使うときに必要な力だよな。でも、おかしい。佐伯が”神術”を使ったのは、たった一度きり。前に屋

上であつた時は、何度も使つていたのに。

「そう。”魔力”って、要は生命力みたいな物だから、最低限の量を下回れば、生命を異持出来なくなるのよ」

「待て、でも佐伯は一回だけしか”神術”を使つてないんだぞ？」

「ふん、それは魔道人形を使つていたからだろっ」

オレの問いに答えたのは、ダリアだった。彼は入り口のドアに背を預けて、無表情でこちらを見詰めている。

「魔道人形？ 何だよ、それ？」

「貴様は何も知らんのか？ 魔道人形とは、”魔力”で動く人形の事だ。一体でも莫大な”魔力”を消費するのに加えて、それを五体も使用したのだ。一応、日常生活に支障がない程度の”魔力”は残してあつたのだろうが、貴様をアルフィーネ卿から守ろつと、最後の”魔力”を使い切つたのだろう。ふん、バカな奴だ」

バカな奴、とダリアは佐伯をそう切り捨てる。しかし、彼の声には何処か親しみが込められているような気がした。

### 王者の剣と第一位(3)

「じゃあ、佐伯は”魔力”の使い過ぎで倒れたって事か？」

「そうそう。だから、”魔力”が足りないなら、補充してあげれば良いだけの話。単純でしょ？」

「……待て。でも、”魔力”のやり取りは、”契約紋”を通してじゃないと出来ないんじゃないのか？」

「ビンゴ。いい所に気が付いたわね。ふふつ、何も知らないように見えて、意外に物知りじゃない」

大したことではなさそうにエレナは言うが、”魔力”の補充には大きな問題がある。”契約紋”で通じ合った”神術師”　つまり、オレと水原ならば、”魔力”の受け渡しが可能だ。

しかし、それ以外の受け渡しは不可能。なら、佐伯を救えるのは、彼女の『師』だけなのだ。

「じゃあ、佐伯の『師』って、エレナなのか？」

「まさか。あんな変態ジジイと一緒にしないでよ。この子の『師』は、元『第三位』バルテル＝アルヴィン。今はもう、この世にはいない。まあ、仮に生きていたとしても、ちょうど日本に来ていた、なんて事はある得ないでしょう。神様は意地悪だからね。世の中、そうそう都合良くは行かないものよ」

「そんな……それじゃあ、佐伯を助ける方法が無いじゃないか」

打つ手なし。絶望的な状況に、一瞬、諦めの言葉が頭に浮かぶ。

「いや、一つだけ手があるわよ。でも、いいの？　敵同士なのに？」

「……………」

確かに、佐伯とは敵対していた。問答無用で襲われたこともあるし、此処にいるのだって、拉致まがいのことをされたからだ。

「それに、元々貴方は日常側の人間。まだ、”神術”の一つも使えないんでしょ？」

「……さ、さあ、どうかな？　もしかしたら、使えるかも知れない

ぞ？」

「いや、バレバレだから。下手な嘘を吐かないでも良いよ。私が言いたいのは、非日常に巻き込まれただけの貴方が、どうしてこの子を助けようとするのか、って事よ」

オレの必死の強がりをおつさりと見抜き、エレナは真剣な表情でこちらを見つめてくる。イギリス特有の青い瞳が、オレを映している。

「ねえ、別に無理をする必要は無いんじゃない？ 人には出来る事と出来ない事があるわ。だから、出来ないことを無理にやらなくても良いんじゃないの？」

「……………」

「正直に言えば、貴方は此处で手を退くべきだと思う。だって、貴方はマリアと同じだもの」

「えっ…………？」

オレが水原と同じ？ どういう事だ？

「今の貴方は、過去のマリア。純粋で、優しくて、それでいて自分の実力を理解してる。自身の無力さを知っているからこそ、正義の味方を気取るわけじゃなくて、せめて手の届く範囲の人を救おうとする。でもね……………」

エレナはそこで一度、言葉を切ると、大きく息を吐き遠くを見詰めた。彼女の瞳に、何が映っているのか？ 何となくだが、それが分かるような気がした。

「でも、そんな貴方が力を付けたら、今度は全てを救おうとする。周囲からは英雄と呼ばれ、不可能と知りつつも手を伸ばす。でも、結果的にそれは悲劇を生むだけ。出来ないことを無理にやらなくてもいいの。分かるでしょ？ 今の貴方には、この子を救えない。世界には、どうにもならない事もあるのよ。だから、諦めて手を引きなさい」

彼女の言葉は優しくかった。そうだ。仕方ないさ。オレにはどうすることも出来ない。

そう自分に言い聞かせて、目を閉じてしまいそうになる。でも

……。

「違う」

「えっ……？」

その優しさは必要ない。それは偽りの優しさだから。

「出来ない事と、やろうとしない事は違う。それは、ただの逃げでしかない。此处で諦めたら、オレは後悔すると思う」

オレは知っている。逃げた先に、何かがあるのか。エレナの優しさに身を委ねた結果、何が待っているのか。

「無理だ。自分には救えない。他の誰かがやってくれるさ。そんなのは、全部言い訳だ。我が身可愛さに他人を見捨てる。最低野郎の言い訳なんだ」

オレは知っている。『死にたくない』と家族を見捨て、助けを求める手を振り払った奴を。

「だから、オレはもう後悔したくない。嫌なんだよ。誰かが死ぬとかさ。悲しいんだよ。知ってる奴が居なくなるとき。佐伯とは、確かに敵同士だけど……それでも死んで欲しくない。生きていて欲しいだよ」

そう、オレは知っている。その事をずっと後悔し続けた最低野郎

『七瀬 広樹』の事を。

## 王者の剣と第一位（4）

「はぁ……まったく、頑固なところもマリアに似てるんだから」  
呆れたようにため息を吐き、エレナは杖の表面を軽く撫でる。

「正義の天秤」（ウロボロス） 連結解除」

次の瞬間、柄の部分に刻まれた文字が光り出し、先端の刃が浮力を失ってテーブルの上に落ちた。

「そこまで決意が固いなら、私からはもう何も言わない。貴方が信じる道を進むといいわ」

言いながら、杖をバラバラに分解していくエレナ。どうやら、佐伯の杖は組み立て式のようだ。柄は大きく二つに分けられ、先端の部分も徐々に取り外されていく。

「はい、そんな貴方に餞別よ。これで、さっさとシルビアを治してあげなさい」

「……これは？」

エレナが投げて寄越したには、立方体の宝石。手の平に乗るくらいの大きさで、中には青い液体が入っている。透き通った蒼が、石の中でチャプチャプと揺れる。

「それはね、『魔封石』。魔力”を貯めておける”神具”よ。」

神術師”が、万が一の状況……今みたいになった時に備えて、予め魔力”を貯めておくの。”魔力”は自分の物だから、『師』がいなくても補充が可能。因みに、使い方はその子の上で石を割れば良いだけよ。見た目に反して、結構脆いものだから、少し強く握れば割れると思うわ」

まあ、使い捨てなのが痛い所ね、とエレナは肩を竦める。

「なら、これを使えば、佐伯の”魔力”は？」

「ええ、元に戻るでしょうね。でも、その前に……あつ、ちょっと待った」

エレナが何かを言い掛けたが、そんな事は後で良い。今は一刻



も早く、佐伯を治してやりたい。その一心で、オレは彼女の上で宝石を強く握り締めた。

パキツ、と言う短い音。エレナの言った通り『魔封石』は、簡単にヒビが入った。例えるなら、それは弾力性のある硝子。力を込めれば、指が中に喰い込み、そして……。

「……っ！」

ついに親指が外側を突き破り、青い水が佐伯の上に降り注ぐ。不思議なことに、その液体は服を濡らすこと無く、身体に吸い込まれていく。それと比例するように、今まで真っ青だった佐伯の顔色が、普通に戻りつつある。

「……あれ？ 七瀬先輩？」

そして、全ての”魔力”を注ぎ終えた後、佐伯はゆっくりと目を開き、不思議そうにオレを見上げた。

「ふう、驚かすなよ」

先程までとはうって変わって、佐伯の顔色は良好そうだ。どうやら、本当に只の”魔力不足”だったようだ。

良かった。これで一安心だ。そう思い、大きく息を吐いた直後、佐伯が鋭くテーブルの方を睨み付けた。

「佐伯？」

振り返ってみると、そこにはコーヒに砂糖を大量投入するユリイの姿が。嫌な予感がした。

## 王者の剣と第一位(5)

「シルビア、待ちなさい!」

静止の声はエレナから。しかし、もう遅い。佐伯は決意に満ちた声で、自らの相棒を呼ぶ。

「 回帰せよ 正義の天秤 ” (ウロボロス) 」

分解された杖に光が灯る。尾を噛む蛇は、始まりにして終わり。名を呼ばれた永遠の蛇は、主の求めに応じて回帰する。

それは、まるで逆再生だった。佐伯の ” 正義の天秤 ” は、エレナが分解したのとまるつきり逆の順番で蘇っていく。

「それで、貴方は何をしに此処へ? 私を殺しに来たのではないなら、他に用でもありましたか?」

「家出した娘を連れ戻しにね。ほら、私ももう歳でしょ? だから、そろそろ第一位をマリシアに預けようかと思って。そしたら、もう一人の家出娘を見つけてね」

「……何が歳ですか。ただ、面倒になっただけでしょ。あと、私は貴方の娘になった覚えはありませんが」

「あら、貴方はアルヴィンの娘でしょう? なら、私の娘も同じだわ。だって、あの子は私が ” 育てた ” のだからね」

「無茶苦茶な理論ですね。それなら、『同盟』全員が貴方の子供ですか?」

組み上がった杖は、宙に浮き佐伯の手へと収まる。それを見たユリイが、楽しげな笑みを浮かべる。ゾツとするような、悪魔じみた笑みを。

「その通りよ。『同盟』は人間に ” 神術 ” を伝えるために作った組織。ちゃんと人間同士でバランスが取れるようにね。じゃないと、貴方達って ” 破戒者 ” 相手に何も出来ないでしょ」

「なるほど。さすがは悪魔公<sup>ドラクレア</sup>。貴方らしい、人間を見下した意見ですね。まあ、それはいいとして、貴方に言いたいことが二つほどあ

ります」

「何かしら？ 言ってみなさい」

どうも、と短く礼を述べて、佐伯が身を起こす。大きく息を吐いて、首を鳴らすと再びユリイに目線を戻す。

「まず一つ。私はバルテルでも貴方の娘でもない。私は佐伯家に生まれた日本人。それ以上でも以下でもありません」

「シ、シルビア！ それは……」

「違います。私は冬花。佐伯 冬花です」

耐え切れずに口を挟んだエレナを一蹴し、佐伯はそう宣言した。自分は、ただの日本人。『氷の女王』<sup>シルビア</sup>の名は捨てたのだと。

「そして、二つ目。私は、この瞬間をもって 『神術同盟・四大神術師第四位』を返上します」

「……決意は変わらないのね？」

「はい。私は『同盟』には、戻りません。”絶対的な正義”では、神を殺す者”を止められませんから」

「『神術同盟（私たち）』を敵に回したとしても？」

轟ッ、と膨れ上がる殺気。世界最強とも言われる”神術師”の殺気が、物理衝撃を伴って佐伯に向けられる。

「が、ツツツ！」

自分に向けられたワケでもないのに、オレは言葉すら出せない。死ぬ。これは間違いなく死ぬ。レベルとか桁が違うとか、そんな次元の話じゃない。これは、もっと根本的な そう、生き物としての格が違う。

『 Lodge at my hand , small speaker（我が手に宿るは、小さき槍）』

それに佐伯は”詠唱”で応じた。降り掛かる圧力を諸共せず、力強い声で詩を奏でる。

そうして、部屋の丁度中央辺りに、ハンドボール程の丸い氷塊が出現する。テーブル越しに、エレナが息を飲むのが分かった。

「そう。それが、貴方の答えなのね。なら、此处で死んでも文句な

いわね？」

「それも、御免です。私には、まだやるべき事がある。昨夜は逃げられました。私はあの女を殺さなくてはいけない。だから――」  
佐伯が氷塊に手を翳し、ぐっとオレを近くに引き寄せる。それだけで、空気が変わった。

そう。これは 殺気。『神術同盟第一位』を前に、彼女が放った決別の殺意。それは、佐伯 冬花が、はつきりと敵対を宣言した瞬間だった。

『break（砕ける）』

直後、氷塊が弾けた。それは、まるでクレイモア。先端を尖らせた氷が、千の針となってユリイに炸裂する。

「なっ！？ ゲーティ」

「ちっ、任せろ、エレナ！」

いや、それはユリイだけでは無かった。少し離れたところにいたエレナとダリア。彼女たちにも、針の嵐は降り注ぐ。

直ぐ様、”魔道書”を取り出そうとするエレナだったが、いかんせん距離が近すぎた。直感的に間に合わないと思ったダリアが、咄嗟にエレナを背後に押し込み、自らは腕で顔を覆った。

唯一の例外は、その術者のみ。彼女の近くにいるオレを除いて、部屋中に針が突き刺さっていく。

「七瀬先輩、今の内に！」

佐伯に手を引かれ前を見ると、木っ端微塵に砕け散った窓が目に入る。

待て待て、まさか。

「飛びますよ。捕まって下さい」

「ちょ……まっ……！」

ちよっと、待ってくれ。それすら言えずに、オレは佐伯と窓の外に飛び出した。

## 再開（１）

数年ぶりの姉妹の再開は、二人にとって懐かしい場所で行われた。水原の本家。現在は、優依しか住んでいない屋敷の応接間。大きなテーブルを囲んで、三人の人物が椅子に腰掛けていた。

「……じゃあ、もう一度だけ確認するわよ？ 貴方は七瀬君に会った後、蓮花が見付けやすいように駅前のベンチに寝かせた。それからは、何もしてないのね？」

「うん、何度もそうだって言ってる。義姉さんの方で何とか探せないの？」

「それが出来れば苦労しないわ。はあ……まったく、面倒なことをしてくれたわね」

「ま、まあまあ、お姉ちゃん。ユキちゃんも、悪気は無かったんだから……ね？」

ため息混じりに、非難の目を向ける真依に、優依が紅茶の入ったカップを差し出す。一触即発の二人に対して、優依はどうしたものかと頭を悩ましていた。

久しぶりに帰ってきたと思ったら、直ぐにこれだ。昔から、仲が良くなかった二人だが、こんなにも殺伐としているのは見たことがない。

「義姉さん。優依義姉さんが、困ってる。あと、私を睨んでも状況は好転しないと思う」

「くっ、元はと言えば貴方の所為でしょ。大体、何よ。中学時代の友達って。”破戒”で記憶まで消したんだったら、もう関わらなくてもいいじゃない。今更、出しゃばらないでよ」

「出しゃばってるのは義姉さんの方。せつかく、日常に隠した広樹を、何で非日常に引き込んだじゃうの？ 私がこの三年間、どんな思いでいたのかも知らずに」

「知らないわよ、そんな事！ 私だって、彼をこっち側に引き込み

たくは無かった。でも、七瀬君と”契約”しなければ、彼は死んでたわ。そうせざるを得ない状況を作ったのは、立花とか言う貴方の仲間でしょ。貴方達が何をしようと勝手だけど、最初に彼を非日常に巻き込んだ責任は貴方にあるわ」

テールを叩いて立ち上がった真依に続いて、ユキも負けずと腰を上げる。

「落ち着いて下さい、真依様。此处で争っても、時間を無駄にするだけです」

「そ、そうだよ。ユキちゃんも落ち着いて。ほら、席に着いて話し合おう」

今にも取っ組み合いを始めそうな二人を、蓮花と優依が引き離す。渋々ながらも引き下がった二人に、優依は安堵の息を吐く。

「……そうね。こんな所で時間を取られているわけにはいかないわ。ユキが何も知らないなら、もつと最悪の事態になってるかも知れない。行くわよ、蓮花。優依、邪魔したわね」

もう、何も話すことはない、真依は颯爽と踵を返した。椅子に掛けたままだったロングコートを蓮花が持ち、二人に会釈して後に続く。

「待つて」

意外なことに、静止の声はユキからだった。彼女は優依が入れた紅茶を口に、真依とは視線を合わせないようにボソリと呟いた。

「何かしら？ もう話すことは無いと思うのだけ」

「シルビア・メリアル」

「……………」

真依の言葉を遮って、ユキが告げたのは一人の少女の名前。佐伯冬花”シルビア・メリアル”。『四大神術師・第四位』の事だ。

「それが、どうしたのかしら？」

「隠さなくても良い。さっき、その人形が義姉さんに近付いたときに、耳打ちしたのは分かってる。そこに広樹がいるんでしょ？」

相変わらず、油断ならない女だ。真依は心の中で、軽く舌打ちを

した。

確かに、ユキの言うことは当たっている。先程、二人の仲裁をした時に、蓮花は真依にそう囁いた。恐らく、読唇術でも使ったのだろう。

「だったら？ 取り戻すのに協力するだけでも言うつもり？」

「うん。広樹が『同盟』に捕まったのは、確かに私の責任。だから、一つだけ良いことを教えてあげる」

「良いこと？」

意外にも素直に自分の非を認めたユキに、真依は眉を寄せた。この女。一体、何を考えている？

『明日の深夜。街の南東に位置する廃工場で、私達は行動を起こす』

唇の動きだけで伝えたのは、優依に聞かれたくない内容だったからだろう。

「……優依、悪いけど、急に甘い物が食べたくなつたわ。近くまで行って、何か買ってきてくれないかしら？」

「えっ？ お菓子なら、ちゃんと用意……あつ、うん。分かった。

じゃあ、買ってくるね。私がいけない間、喧嘩しちゃだめだよ」

そう言い残して、優依は部屋から出て行った。本当に、空気の読める妹で助かる。

「……甘い物とか、キャラに似合わないよ、義姉さん」

「大きなお世話よ。それより、さっきのは貴方が『同盟』をおびき寄せるって事ね」

優依の気配が消えたのを確認してから、真依は話を再開した。

## 再開（２）

「理解が早くて助かる。あと、一応、言っておくけど、私の邪魔をしようとしたら、容赦なく潰す。あくまでも、私が協力するのは『同盟』を引っ張り出すまでだから」

慣れ合うつもりはないと、ユキは冷やかな声で警告する。此処が優依の家でなければ、遠慮無く殺気を叩きつけてきただろう。

「分かってる。私も、そこまで暇じゃないから安心して。でも、私からも一つ言っておくわ。七瀬君を取り戻したら、私達は直ぐにこの街を出るつもりよ。それを邪魔しようとしたら、容赦はしないわ」  
「へえ……」 今度”は逃げるんだ。ガルノイアでは、最後の最後で邪魔してくれたのに、どう言つつもり？ ” 鮮血の女神”（英雄）は引退したの？」

ユキの言葉に、歩き出そうとした足が止まる。知らず、拳を握り締めているのに気付いた。

「真依様。此処はどうか冷静に。挑発に乗るのは、得策ではないかと」

「……ええ、分かってるわ、蓮花」

分かってる。これは、安い挑発だ。何の意味もない戯言だと、頭では理解しているはずなのに。

「そんなモノは、初めから何処にもいなかったのよ。世界を救えると勘違いした馬鹿が、言われるがままに人を殺しただけ」

気付けば、自然に言葉が出ていた。

ユキがしようとしている事は、何となく察しが付く。だが、それが何だ？

英雄はいない。過去の亡霊は、思い出の中で眠るべきだ。世界の危機は、『同盟』（正義）とやりに任せればいい。もっとも、彼らが本当に”正義”ならばの話だが。

「変わったね、義姉さん。以前に会った時は、自己批判なんて絶対



にしなかったのに」

「三年あれば人も変わるわ。特に、自分の愚かさを実感したならね」  
「へえ、なるほど。あっ、そうだ。話しは変わるけど、広樹も三年前と変わったと思うんだけど、どうしてだと思う？」

「それは……」

咄嗟に、真依は答えることが出来なかった。七瀬 広樹は確かに変わった。三年前、一度だけ見た彼とは、性格も話し方も違う。何故なら、それは

「義姉さんが、広樹の両親を殺したから。そうだよね？」  
「違うわッ！ あれは……」

否定しようとした瞬間、脳裏に蘇るあの光景。

親子連れで賑わう休日のショッピングモール。その屋上にある、小さな遊園地で笑顔を見せる親子。

両親と二人の子供。ごく一般的な四大家族に、一人の少女が近付いて、そして。

「あれは、私の本意じゃなかったわ」

ようやく搾り出したのは、そんな言い訳じみた言葉。否定することも肯定することも、今の彼女には出来なかった。

「ハハッ、本意じゃなかった？ 何よ、それ？ 英雄様が聞いて呆れる」

「……勝手に呆れてなさい。あと、もう一度だけ言うけど、英雄なんていないわ」

あからさまの挑発にも、真依は静かに言葉を返すのみ。そんな様子に、ユキは失望したと言わんばかりに肩を落とした。

「はあ……暫く見ないうちに、義姉さんもつまない人間になったね。分かった。もう良いよ。じゃあ、明日の事。確かに伝えたからね」

空になったカップをテーブルに戻し、ユキは真依の横をすり抜けてドアに手を掛けた。

「バイバイ、義姉さん。次に会うときは、もう少しマシな表情にな

つてる事を祈つてよ」

馬鹿にしたような笑みを残して、部屋から出て行くユキ。真依はその背を、黙って見詰めることしか出来なかった。

## 鉄壁

家具や硝子の破片が散乱する室内で、ダリア・グラフィードは静かに立ち上がった。自分が片膝を着いた事など何年ぶりだろうか。それも、相手が他でも無い、小娘と侮っていた少女であるとなれば、怒りよりも驚愕のほうが勝る。

「ダリア！ 大丈夫なの！？」

背後から飛び出したエレナが、ダリアの姿を見て啞然と目を見開く。一瞬、何かと思ったが、自らの腕から流れ出る液体を目にして、なるほどと納得した。

「ああ、ただの掠り傷だ。大事はない」

そう。これはただの掠り傷。通常の”神術師”にとっては、何ら問題がある訳ではない。だが……。

「ほう、さすがは第四位と言うべきか。俺の”鉄壁”を破るとは」

アフリリユート・ウォール

”鉄壁”。それは、『身体強化』と『皮膚硬化』の同時掛け。

さらに、不可視の障壁を三重にまで重ねた最堅の鎧。そもそも、ダリアの真の武器は、小太刀などではない。己が身体。そのみを武器として、ガルノイア大戦を勝ち抜いてきた超人。

人並み外れた怪力と、複数の武道を極めたのは勿論。彼が”英雄”と崇められたる謂われは、その防御力にある。

如何なる名剣も、斬首の斧でさえも彼の者を切り捨てること叶わず。

第二帝国連合から、そう囁かれる程、ダリアの防御は完璧だった。遠距離からの狙撃ではビクともせず、かと言って接近戦では勝ち目はない。故に”鉄壁”と呼ばれた。

しかし、それを突き崩して、血を流させた事に、ダリアは感嘆の息を吐いた。

「それよりもアルフィーネ卿は？ 先程からお声が聞こえないが」  
まさか、この程度で死ぬはずもあるまい。そんな確信と共に、顔

を横に向けるが、そこには誰の姿もない。バラバラになったテープ  
ルが、無残にも散らばっているだけ。

「マズイわよ、ダリア！ あの女、シルビアの後を追ったんだわ。  
早く助けないと」

「了解した。まったく、世話の掛かる奴だ」

言うが否や、躊躇いなく窓から身を躍らせるエレナ。やれやれと  
肩を竦めて、ダリアは彼女の後に続いた。

## 始動（１）

窓の外から見た街は、美しいものだった。眼下に広がるネオンは光のイミテーション。遙か上空から見下ろし、まさに絶景とも言える夜景。もし、それが落下中に見る景色でなかったなら。

「うわあああ、落ちる落ちる！ ヤバイってマジで！」

「はい。落ちてます。まあ、人が翼を持たぬ以上、重力に逆らえぬのは当然のこと。あと、現在の速度を計算すると……」

「そんなのいいから！ 早く何とかしてくれ」

その前に、何で佐伯はそんなに冷静なんだ。物理の授業とかどうでも良いから。それに、多分説明されても、オレの頭じゃ理解出来ないと思うし。

「むう、仕方ありませんね。減速させますから、手を離さないでくださいね」

言われずとも、そのつもりだ。こんな空中で放り出されたら、そのまま地面に真っ逆さま。そんな終わり方は、御免被る。

オレがしっかりと手を握っていることを確認して、佐伯は杖を頭上に掲げる。ふわり、と何かに身体を持ち上げられるような感覚の後、落下の速度が急激に落ちた。

「……あれ？」

「どうかしましたか？」

不意に首を傾げたオレを不思議に思ったのか、佐伯は杖をかざしながら聞いてくる。

「いや、以前にも同じような状況になったことがあるんだけど、その時は、こう……何て言うか、自分自身が軽くなったような気がしたんだ。でも、今は違うと思ってさ」

「何だ、そんな事ですか……あつ、丁度いいのでこのまま隣のビルの屋上に降りますよ。一応、速度は落ちてますが、足から着地することをお勧めします」

「ああ、分かった」

目標地点は隣接したビル。佐伯の”神術”のおかげで、屋上に降り立つのはそう難しい事ではなかった。

「さて、それでは先程の事です。話しは単純な事です。使っていた”神術”が違うから。答えはこれだけです」

「……すまん。良く分からないんだが」

「つまり、求めるべき”結果”は同じでも、辿り着くまでの”過程”が違う。要はこれだけの話しなのです。分かりましたか？」

「……………」

なるほど。さっぱり分からん。と、言うか、さっきの説明で余計に分からなくなったぞ。

「あつ、えーと、具体的に言うなら、七瀬先輩が望んだ”結果”は『減速すること』ですよね。なら、その為にはどうすればいいですか？」

自分の解説では伝わらないと思ったのか、佐伯はオレに質問しながら説明する方法に切り替えたらしい。

「えーと、体重を軽くするとか？」

「いや、七瀬先輩。物体の質量に関わらず、密度と形状が同じなら、落下速度は変わりませんよ。ほら、思い出してください。一年の時に習いませんでしたか？ ガリレオが鉄球と羽を同時に落として、実験をしたじゃないですか」

「……あはは」

ヤバい。思わぬ所で馬鹿が露天してしまった。そう言えば、そんな事も習ったような気がするな。いや、でも普通は重い物が先に落ちると思わないか？ でも、違うらしいけど。

「正解はこれです」

苦笑いを浮かべるオレに呆れたのか、佐伯が杖を軽く振る。すると、一陣の風が目の前を駆け抜けた。

## 始動（2）

「……風か」

「はい。上昇気流で一時的に身体を支えました。さすがに直接身体に当たると、風圧が凄いので薄い障壁を張りましたけど」

「あれ、でも佐伯の”神術”は……」

「私はメインは”氷”の属性ですが、サブで”風”も学びましたから。普通の”神術師”は、メインとサブを場合によって使い分けるのが主流なんですよ」

オレの質問を先読みして、佐伯はそう答える。”神術師”は、二つの”属性”を持ち合わせているらしい。

「なるほど。じゃあ、蓮花の場合は？」

「彼女の場合は、恐らく”重力”の制御でしょう。以前に、屋上で対した時の推測に過ぎませんが。一時的に重力を軽くして、落下速度を落とした。まあ、このように、”神術”は様々な応用が出来るのです。今度こそ、分かりましたか？ そろそろ、移動したいのですが」

「ああ、サンキューな、佐伯。でも、これからお前、どうするつもりだ？ 『同盟』と敵対したんだろ。行く所はあるのか？」

佐伯の後ろ盾だった『神術同盟』。その『第一位』に牙を剥いたとなれば、もうあのマンションは使えない。

そこら辺を考えなしで飛び出す奴では無いと思うんだが。

「ご心配なく。私はこれでも元『第四位』ですよ？ 少し離れてはいますが、隠れ家の一つや二つ、当然用意してあります。まずは、そこに移動しましょう」

佐伯の言う通り、まずは何処かに身を隠すのが最善だ。彼女を、完全に信じたわけではないが、『同盟』と敵対しているのは本当みただし、水原と合流するまでは一緒にいた方が安全だ。

「分かった。案内してくれ」

そう考えたオレは、佐伯の後に続くことにした。

「でも、どうやって移動するんだ？ 電車やバスは『同盟』の息が掛かってるんだろう？」

「

桜花市の包囲網は、既に完成していると真依は言っていた。下手に公共の交通機関を利用すれば、居場所を特定されるばかりか、最悪、先回りされかねない。

「電車もバスはおるか、タクシーや徒歩すら危ういとなれば、手は一つだけ。空から行けばいいのです。良かったですね、先輩。また、空の旅を楽しめますよ」

ニヤリと口元を歪めて、上を指さす佐伯。冗談じゃない。また、アレを体験することになるのか？

「ああ、でも安心してください。先程よりも、ずっと快適な旅になる筈ですから」

そう言つて、佐伯がロープの懷から何かを取り出す。それは赤き本。禍々しい程に紅い、見覚えのある魔書。

「おい、それって……」

「やっぱり分かりますか？ ソルディア卿が持っていた”ソロモンの小さき鍵”<sup>ゲーティア</sup>。残念ながら、これは写本なので世界を創り出す事は出来ませんが、それで充分です。世界を創るより、今ある世界を守りたい。私の願いは、ずっとそれだけでしたので」

求めていたのは、秩序でも正義でもなく、ただの現状維持。世界が今のままで、何も変わらなければそれでいいと、佐伯は言う。

待て。それなら、佐伯はどうして『同盟』に入ったんだ？ もしかすると、オレはこの佐伯 冬花と言う少女を、誤解していたのかも知れない。



### 始動(3)

『 That's a sincere apostle . Please give your assistance who broke a troop of an archangel to me . (其は誠実なる使徒。 <sup>ミカエル</sup> 大天使の軍団をも打ち破りし汝が力を我が元に) 』

そんなオレの思考を打ち破るように、佐伯の詩が周囲に響く。

『 千二百の時を超え、天界に戻らんとする汝よ。既に罪は許された。汝が軛を解き放とう ( You return to heaven beyond time of 1200 . Already , a crime was permitted . A wedge would be freed . ) 』

佐伯の”詠唱”は、エレナとは少しだけ違ったものだった。”ソロモングイティアの小さき鍵”は、魔獣を召喚する魔道書。その為に、エレナは上位世界 擬似第二異界を創り出す。

しかし、佐伯は違う。魔獣の方を第一異界(こちら側)に同化させ、一時的に存在させる。

『 罪の章・第三十五節 』

故に、それらは似て非なるもの。出て来いと命じるのではなく、力を貸してくれと呼び掛ける。

『 罪を背負いし翼ある狼 <sup>マルコキアス</sup> 』

名を呼ばれた魔獣が、咆哮と共に現れる。それは、まごう事無き住天使 <sup>ドミニオン</sup>。エレナが召喚したものよりも小さいが、名前負けしないだけの魔力と威圧感を纏っている。

「隠れ家には、これに乗って行きましょう。かなり高度を上げて飛ばば、『同盟』にも補足されないはずです」

「乗るって……これに？」

単純な理屈だった。人間が空を飛べないのなら、別に無理して飛

ぶ必要はない。代わりに、飛べる存在を生み出せばいいのだから。  
「はい。もたもたしていると、アルフィーネ卿が追ってくるかも知れませんが。その前に、早くこの場を離れましょう」

次は、逃げ切れるか分かりませんから。

俯きがちに呟いて、佐伯は顔を伏せた。確かに、あの少女は化物だ。さっきだって、佐伯がいなければ動くことすら出来なかった。  
「分かった」

直ぐそこに追っ手が迫っているかも知れない。その恐怖に押され、オレはマルコキアスへと足を踏み出した。

「……………」

近くで見ると、予想以上に大きい。身体だけでも、オレの身長のお二倍、翼を含めれば三倍以上にもなる。

まさに 魔獣。鋭い鉤爪と、口には親指並の長さを持つ歯が、ずらりと生え揃っている。

「ッ……………!？」

自分の身長よりも大きな相手に、どうやって乗ったものかと考えていると、マルコキアスが足を折って地面に伏せる。

反射的にその場を飛び去ったオレを見て、佐伯が呆れたようにため息を吐いた。

「はあ……………そんなに怖がらなくても大丈夫です。そのレベルの魔獣なら、私でも制御が可能ですし、いざとなれば魔力供給を止めて、消してしまえば良いだけの話ですから」

「そ、そうだよな。よし、行くぞ」

自分自身に気合を入れて、魔獣の背中によじ登る。おお、何か毛がフサフサしていて、意外に乗り心地は良いぞ。

「乗りましたね、では、早速行きま」

そこまで言い掛けて、佐伯の言葉が止まる。それを合図にして、オレを乗せたまま魔獣が静かに立ち上がった。

「飛びなさいッ!」

切羽詰った佐伯の叫び。マルコキアスが地を蹴って、大空へと舞

い上がる。

「うわっ……！」

突然の出来事に、オレは振り落とされないように縋り付くことで精一杯。何が起こったのかわんて、確かめる余裕はない。

しかし、

『 The wind becomes the blade  
and attacks it（風よ。刃となりて敵を討て）』

状況は分からずとも、確かに聞こえた。何処かで聞いたことがある”詠唱”。

『 That hits household goods with a cool thief.（祖は、武器を奪い去る、冷たき盗人）』

ガキンツ、と硬い何かがぶつかり合う音。さっきのは佐伯の声だ。“神術”を使っただけ事は、追っ手が来たのか。

## 始動（４）

「……ぐっ！ 佐伯、大丈夫か？」

魔獣の背で何とか体制を立て直す。一体、誰が追って来た？

ダリアか？ エレナか？ それとも、ユリイなのか？ 三人同時に追って来た、と言う最悪のシナリオも想像しつつ、佐伯のいる屋上に目を向けると……。

「なっ……！？」

若い女がいた。遠目だが、歳は恐らく二十歳を過ぎた辺り。夕日の如き真つ赤な髪を靡かせ、鋭すぎる眼光をこちらに向けている。

彼女が”神術師”だと、一目でそう分かった。なぜならば、

「A wind rages, and a blade is produced.（風よ。荒れ狂いて刃と成れ）」

女の腕が上がり、漆黒のコートがバサリとはためく。そして、そのコートは、佐伯が着ているものと同じもの。彼女が非日常の存在であることの証だった。

「七瀬先輩ッ！」

気付いた時には、もう遅い。彼女の手は、佐伯の方では無く、空中にいるオレへと向けられていた。

「えっ……？」

撃ち出される、風の魔弾。渦巻く旋風の中を、猛スピードで風刃が迫る。正直、オレが一人だったなら、反応すら出来なかっただろう。過去に戦った風を操る”神術師”アレルドとは、速さが桁違いだ。弾道を見切る以前に、指一本動かすせない。だが、それはオレが一人だった時の話しだ。

「ガアアアアア！！」

魔獣が吠える。魔獣が猛る。

さすがは序列第三十五位。伝説の魔書に名を連ねる羽狼に、それは脅威に成り得なかった。

咆哮のみで魔弾を打ち消した魔獣は、愚かな襲撃者へと牙を剥く。その頭を噛み砕かんと、空を駆けて女へと突進する。

「ふん、写本の分際で、我に刃向かうか」

それに対して、女は不敵な笑みで応じた。顔は笑っているが、目は少しも笑っていない。むしろ、嫌悪と憤怒で満ちていた。

「いけない！ 避けてください！」

ぞくりつ、と背筋に悪寒が疾った。特に、何らかの根拠があったわけではない。理屈ではなく、直感で感じたのだ。此処にいては駄目だと。

「ッ！」

魔獣の背を蹴って屋上に跳ぶ。加速が付いていたおかげか、不安定な足場でも、何とか屋上に着地することが出来た。

「グオオオ」

一回転しながら、受身を取ると、魔獣の苦しい呻きが聞こえる。そして、オレはそこに信じられない光景を見た。

「何だよ……どうなってんだよ？」

## 始動(5)

魔獣が 引き伸ばされていく。

そう、まるで見えない巨人が、魔獣を引き裂こうとしているかのように、前足と後足が、それぞれ逆方向に伸びていく。

グシャツ、と骨が外れるような鈍い音と共に、ゆっくり空中に浮かんでいき、そして。

「 消え失せる。出来損ないが」

血の雨が降った。二つに引き裂かれた魔獣から鮮血が吹出し、巻き起こる旋風によって、更に細かな肉片となって地上に降り注ぐ。

悪魔序列・第三十五位。複製本とは言え、莫大な”魔力”を持った魔獣を、造作も無く屠った女が鼻を鳴らして、こちらに顔を向ける。

「呆けるな、”破戒者”。さもなくば、死ぬぞ」

「なっ……!？」

次の瞬間、女が地面を蹴り、オレに向かって一直線に駆けてくる。

速い。

目にも留まらぬ速さで接近し、女は右手を振り上げ突きを放つ。

拳は握らず、指を軽く曲げて、掌底を使う突き。まるで、鉤爪の如き手の形には、見覚えがある。

まさか、この突きはッ!？

「ぐっ、おおおお!」

オレは咄嗟に、ガードしようとクロスした腕を解き、首を逸らして横に跳ぶ。直後、オレに放たれた突きは、起動を変え、先程までオレの頭があつた位置を通過した。

「ほう、躲したか」

それを避けられたのは、まさに偶然。過去に、一度それを見てい

たからだろう。胸を突くように見せかけ、本当は敵の頭部を鷲掴みにする鉄の鉤爪。それは……。

「ふっ、見覚えがある、と言う顔だな。いいだろう、本来なら”破戒者”に名乗る名など無いが、貴様は特別だ。しかと刻めよ？ 我が崇高なる名を」

不遜な態度と、”破戒者”を毛嫌いする傾向。似ている。”神術”と戦い方もそうだが、何から何まであの男とそっくりだ。

「『世界神術同盟』。『四大神術師』第二位。シャルロット家のレオリス・マティルド。”破戒者（貴様ら）”に殺された、フレイ・アレルドの『師』だ」

フレイ・アレルド。オレが非日常に足を踏み入れる原因となった男。その『師』が、オレの目の前にいる。

「仇討ち……などは主義ではないのだがな。一応、ケジメは付けておきたい。ほら、この杖に見覚えがあるだろう？」

「それは……」

レオリスがコートの中から取り出したのは、銀の杖。そこに施されているのは、蜘蛛の装飾。なるほど。確かに、これはアレルドの物だ。

「知っているかな、少年？”神術師”には、『師』と『弟』と言うものがあってな。弟子が誰かに殺害された場合は、正式に決闘を申し込む権利が与えられているのだよ」

整った目鼻立ちと、緩やかにウェーブした髪。顔だけを見るならば、レオリスは怜悧な美女だと言って差し支えない。

しかし、彼女の目に宿るのは絶対的な殺意。真依の目とはまた違う恐怖。真依を氷と例えるなら、この女の殺意は燃え盛る業火だ。内から湧き出る激情を一部も抑えること無く、オレに叩きつけてくる。

## 始動（6）

「それは相手が”神術師”の場合のみ、適応される掟ですよ、マテイルド卿？」

そんな中に、悠然と割り込んだのは佐伯だ。まるで、オレを庇うかのように、レオリスの前に佐伯は立つ。

「ふん、こうして実体で顔を合わせるのは久しぶりだな、メリアル卿。聞いた話によれば、『同盟』を裏切ったとか。是非とも、その辺りはじっくりと聞きたいが、今はその少年に用がある。下がっているといい」

「いいえ、退きません」

「……なんだと？」

まさか、断るとは思っていなかったのだろう。きっぱりと言い放つ佐伯に、レオリスは一瞬の沈黙の後、眉を寄せて聞き返した。

「聞こえなかったのか？ 我は退けと言ったのだが？」

レオリスの声が低くなる。これが最終通告だ、とでも言うように佐伯に詰め寄る。しかし……

「勿論、聞こえてましたよ。それを承知で言ったのです。私は、此処を退かないと」

「……………」

佐伯は一步も退かなかった。レオリスを正面から見据えて、しっかりとした口調で言い放つ。

「大丈夫ですよ。貴方は、必ず守りますから」

そして、佐伯はオレを安心させるように、優しく笑った。

「佐伯……」

ちっぽけな背中だった。細い身体で、オレの前に立つ彼女の背中とは、間違いなく震えていた。

不安でない筈がない。怖くない筈がない。それでも、守ると彼女は言った。



「ふん、”破戒者”を守ると？ 堕ちたものだな、シルビア・メル。もはや、貴様に『第四位』を名乗る資格はない」

殺那、膨れ上がる殺気。杖の先端に凝縮された魔力が、魔弾となつて放たれる。

「くっ……！？」

目にも留まらぬ速さで駆け抜ける疾風。佐伯に突き飛ばされるような形で、何とか初撃を躲すが、その頃には既に彼女はオレの前にはいなかった。

「行きますよ。マテイルド卿」

一瞬にして距離を詰める、佐伯。狙うのは短期決戦。相手が実力を出しきる間に、倒さなければならぬ。

「はあああッ！」

突き出される”正義の天秤”。先端に刃を付けた、佐伯の杖がレオリスを串刺しにせんと向かっていく。

「馬鹿が。直線的過ぎる」

しかし、そんな佐伯に、心底呆れたと言わんばかりにレオリスは半歩身体を横にずらす。ただ、それだけ。最小限の行動で、佐伯の突きを躲してみせた。

「やはり通じませんか。私の戦闘スタイルを見たことがない貴方なら、もしかしたら一度くらいは……と期待したのですが」

「ふん、それで奇襲のつもりだったのか？ 貴様のそれが槍だと言うことくらい、形状から予想がつく。我とて、伊達に『同盟』の第二位など務めてはいないさ」

まるで当たり前の事のように言つてのけるレオリスに、佐伯は短く息を吐いた。

……力の差は理解していたつもりだった。でも、まさか掠りもしないとは。

「でも、まだ終わつたわけではありませんよ」

そう、まだ終わりではない。むしろ、これは……。

『Start the dance macble（さあ、死

の舞踏を始めよう)』

ダンッ、と佐伯が地面を踏み鳴らす。それを合図に、二つの人影がレオリスの背後から躍り出る。

「魔道人形？ ふっ、無駄なことを」

佐伯に残された唯一の手駒。最期の人形を、レオリスへと向かわせる。

「無駄な事は百も承知です。だから 勝たせてもらいますよ。例えば、どんな手を使ったとしても」

「ハッ、ほざけ。道具に頼る時点で、底は知れている。パートナーのいない貴様など、雑魚に過ぎんのだ」

しかし、それが時間稼ぎにしかないことは、佐伯も理解していた。『神術同盟』の第二位の前では、魔道兵器もただの人形。"神術"など使うまでも無いと、拳を振るい人形を鉄くずへと変えていく。

「ははっ、雑魚……ですか」

ああ、そうだ。『魔道人形(こんな物)』に頼る時点で、実力の底は知れる。本来、"神術師"の戦いは二人一組が基本だ。

一人は近接戦闘で時間を稼ぎ、もう一人が"神術"で止めを刺す戦闘スタイル。"神術師"の力を、最大に引き出せると言われるその戦い方をするには、自身を守るパートナーが必要不可欠。

ダリアとエレナのように、お互いを補いあって初めて"神術師"は力を引き出せる。それが存在しない自分は、彼女にとってはどうやら雑魚らしい。

## 始動（7）

だが、仕方がないではないか。人種の違いで、『同盟』の者達からは疎まれ、第二位（貴方）からは無茶な任務ばかりを押し付けられる。

それでも尚、上へ、ただ上をだけを目指して走り抜けてきた。

『同盟』が人々を救うと信じて。『同盟』だけが、唯一の正義だと信じて。

そんな状況で、背中を預けられる相棒を探せというのが無理な話。一体、誰が付いて来るというのだ？ 結局、私は

「私は誰も救えない。そんな事は分かっています。どこまで行っても一人ぼっち。実力も人望もない雑魚なのは私が一番よく知っています。でも……」

例え、そうであっても

『It's a flower of an ice lot  
us to wrap the world.（世界を包むは氷蓮  
の花）』

雑魚は雑魚なりに。

『A flower scatters for the world  
which dies out, sea urchin  
is also collapsing transiently  
fragilely.（滅びる世界は散花の如く、脆くも儚く崩れ去る）』

無駄に足掻いて、手を伸ばしてみたいのですよ。

「むっ、この”詠唱”は……」

佐伯の”詠唱”を聞いて、レオリスの表情が変わる。凄まじい量の”魔力”が、佐伯の周囲に集結し、唸りを伴って圧倒的な威圧感を醸し出す。

「ハッ、させると思うか？」

しかし、レオリスが黙ってそれを眺めている筈もない。彼女は二ヤリと妖しげな笑みを浮かべると軽く握った右手を前へと差し出し、一本ずつ指を解きながら旋律を奏でる。

『No one of the world and not hing forms to escape. (祖から逃れうる者この世の何処にも存在せず)』

キラリ、とレオリスの指から何かが迸る。それは一体、何なのか？ オレが把握する前に、レオリスは腕を振り下ろす。

『Curvele Binder (絡み取れ カルヴァールの糸)』

「ッ！」

何かが空気を切り裂くような音と共に、佐伯が突如として大きく後ろに跳ぶ。勿論、”詠唱”は中断され、集結していた”魔力”も一瞬で霧散してしまった。

「カルヴァールの糸……弦系系の”神具”ですか。ならば……」

『A cold blade gives punishme nt to a sinner. (咎人に死を。祖は罪人を裁く氷光の刃)』

とにかく距離を取ろうと、佐伯は”詠唱”の短い”神術”を発動し、氷の礫を杖から打ち出す。だが、そんな急ごしらえの攻撃で、どうにかなるほど、彼女は甘くはなかった。

「甘いわ、それで攻撃のつもりか!？」

物理法則など、まるで無視して空中を自在に動く糸に、佐伯の攻撃はあっさりと起動を変えられ、あらぬ方向へと飛んでいく。それどころか、残りの糸は速度を落とさずに佐伯を絡め取ろうと宙を駆ける。

「ククク、貴様に見切れるかな？ 我が最強の”神具” 『カルヴァールの糸』。コキュートスに潜み、罪人の生き血を啜る蜘蛛の糸。日本の物語で『蜘蛛の糸』は、地獄から救い出す希望として描かれているが、これはそうではないぞ。貴様を地獄へと導く、不可

視の糸。我が”魔力”を通すことで、手足のように動いてくれる優れものだ」

「佐伯！」

オレの脳裏に、先ほどの魔獣がバラバラにされた光景が蘇る。

きつと、アレはこの糸を使ったのだろう。蜘蛛の糸に絡み取られ、羽狼は引き裂かれた。それが、もし佐伯を捕らえたとしたら、彼女も魔獣と同じ末路を辿るだろう。

それを想像してしまい、オレは咄嗟に佐伯の名を呼ぶが、

「長々とご説明をどうも。おかげで攻略法が見つかりましたよ」

しかし、彼女はあっさりと糸を躲していく。左右前方、時には後ろから。縦横無尽に迫り来る糸を、彼女は全て何処から来るのが分かっているかのように避けていく。

まるでダンスでも踊っているかのように、余裕を持って糸を躲し、隙があれば”神術”を放つのも忘れない。

戦えている。あの第二位を相手に、自分は戦えていると。佐伯は思わず口元を綻ばせた。

……正直に言えば、油断があったのかも知れない。絶望的な状況に、突如として見えた一筋の光り。ようやく見え始めた勝機の前に、ほんの少しだけ気を緩めてしまった。それが、決定的な隙を生むとも知らずに……。

「むっ、どうやら何か小細工を使っているらしいな。だが、いいのかな？ 自分の事ばかり気にしていて。我の目的は貴様ではないと言った筈だぞ？」

「えっ……？ まさか！？」

突如として、空気が変わる。今まで佐伯に向けられていた殺気。それが、一瞬にしてオレへと矛先を変える。

「くっ、七瀬先輩！」

叫びながらこちらに駆け寄ってくる佐伯。くそっ、このままじゃマズイ。直ぐ様、黒刀を出現させようと身構えるが、もう遅い。レオリスの放った糸は、既にオレの目の前へと迫っており、とても躲

せる距離じゃない。

「避けてッ！」

横からの強い衝撃。襲い来る死の糸を前に、足がすくんで動けないオレを、ギリギリの所で間に合った佐伯が横に突き飛ばす。

「ぐっ……！」

恐らく、加減する余裕すらなかったのだろう。かなりの強さで吹き飛ばされ、オレは受け身も取れずに地面を転がる。だが、それは良い。問題はむしろ、佐伯の方。

オレを突き飛ばした衝撃で、必然的に身体はその場に硬直することになり、そして

「ほら、捕まえたぞ、シルビア」

次の瞬間、遂に大蜘蛛カルヴァールの糸は佐伯を捕らえた。

### 3つ目の術式

立花 瑞希は思う。世界は常に弱肉強食であると。

「はあ、つまらないな。少しは抵抗してくれないと」

桜花市の東南に位置する小さな公園。閑静な住宅街の中心にあり、昼間は学校帰りの子供たちで賑わうのだろうが、今は時間が時間だ。髪をカラフルに染めた、今風の若者が数人いただけで、他には人気がない。

もつとも、彼らも今では物言わぬ死体となっており、切り飛ばされた頭部が恐怖の表情でこちらを見ている。

「キモ。こっち見んな」

あまりに気持ち悪かったので、蹴り飛ばすと植えこみの中へと飛び込んで見えなくなる。

わざわざ探すのも手間だし、もうそのままでもいいだろう。

「ご苦労、立花。しばらく見張っていてくれ」

「はいよ。さつさと終わらせてね」

労いの言葉と共に、詩織が肩を叩いて公園の中へと進んでいく。その後ろを、無言でユキが続く。

いつもの手筈通り。さすがに三回目となれば、慣れたものだった。

「……まあ、誰も来ないと思うけどね」

物憂げに呟いて、立花は公園の入口へと歩き出す。

結局の所、この世は闘争に溢れているのだ。受験や就活から、バーゲンの品物まで。限られた席を奪い合う、イス取りゲーム。

弱者は席から蹴落とされ、強者のみが生き残る。つまり、弱者は死ぬまで強者から搾取され続けるのだと。

「あれ？ キミ、隼人の友達？ へえ、結構可愛いじゃん」

公園の入口に佇み、思考の海に沈んでいた立花に、突然一人の男が声を掛ける。恐らく、先程殺した男の知り合いだろう。舐めるよ

うな視線を、無遠慮に向けてくる。

「ねえ、アンタさ。この世界をどう思う？」

立花は視線を男に向けること無く、唐突にそう切り出した。

「はあ？ 世界って……キミ、何言ってるの？」

男は当然と言えば当然の困惑した反応を返すが、立花はそれを無視して言葉を続ける。

どうでも良かったのだ。別に男が、話を聞いていようがいまいが、これからすることは変わらない。言ってしまったえば、意味のない独り言と同じ事だ。

「世界は悪意に満ちている。弱者は強者の悪意で、全てを奪われる。家族も友人も、自分の命すらも。でも、弱者はね何も出来ないんだよ。力がなければ何も守れない。ずっと奪われ続けるんだ。大切なモノを全部……全てを」

「な、何だよコイツ？ 狂ってるんじゃないの？」

「違うよ。狂ってるのは世界の方。強者しか生き残れない間違った世界。そんな世界は嫌だ。アンタも、そう思うでしょう？」

「おい、隼人！ 何か変なのがいるぞ。お前の友達じゃないのか？」

男が公園の中へと呼びかけるが、返事は返らない。死者からの返答など、ありはしないのだから。

「だから……さ」

一瞬にして、立花の瞳が赤く染まる。闇夜に灯る紅蓮の業火。真紅の大鎌が、彼女の手へと現れる。

「……………」

悲鳴など、上げる暇さえ無かったのだろう。男の首は、何が起きたのかすら把握していない。ポカンとした間抜け面のまま、宙に舞う。

「アンタは此処で死んどいてよ。新世界への礎<sup>いしやす</sup>。その無念で、アタシを『灰色の街』<sup>アスタ・リリア</sup>に導いて」

噴出す鮮血を身に受けながら、立花は一人そう呟く。そして、次の瞬間、桜花市に三つ目の”術式”が刻まれた。



## 絶望の円舞曲

「なっ、これは……」

自身の腕に巻きついた不可視の糸。それに気を取られた僅かな間に、左右から迫った別の糸が、佐伯の四肢を拘束する。

まさに、それは一瞬。瞬く間に、身体中に糸が絡みつき、磔にされた聖人の如く、身動きを封じられた。

「ククッ、他人に命を握られる気分はどうだ？」

お前の命は手の中にある。そう言わんばかりに、レオリスは指先を少しだけ折り曲げてみせる。

「ぐっ……！」

その瞬間、両腕を拘束する糸が引つ張られ、佐伯の顔が苦悶に歪んだ。

「な、七瀬先輩。今のうちに逃げて下さい！ 此处は、私が押さえますから」

「佐伯……」

思わず言葉を失った。こんな絶望的な状況でも尚、佐伯はオレを逃がそうとする。

自分の命が一番危ないって時に、どうして……。

「言っただでしょう。貴方は、私が守ると。ずっと考えていたんです。私の力は、何の為にあるのかを。『同盟』の為？ 正義の為？ そんなモノの為に、私は罪のない人達を傷付けているのかと。でも、今やっと分かりました」

「……………」

「私は <sup>マリア</sup>英雄になりたかった。子供の頃、憧れたあの女神に、私は少しでも近付きたかった。そう、丁度こんな風に、悪者に襲われている人を、颯爽と助ける正義の味方になりたかったんです」

ギリギリと嫌な音を立てて、佐伯が空中へと釣り上げられていく。それでも、彼女の目には迷いはなく、ただ鋭い眼光で目の前の敵の

みを見据えていた。

「ふん、世迷言はそこまでだ。貴様が英雄？　ハッ、夢は寝て見ろよ、劣等種。貴様が、この状況を分らないほど、愚かだとは思ってもみなかったぞ」

「ッ　　があッ！」

瞬間、佐伯が地面に叩きつけられる。上空から、受け身も取らせずに頭から激突。下手をすれば死んでもおかしくない一撃を与えて、レオリスは楽しげに口元を釣り上げる。

「て、てめえ……」

気付けば、自然に黒刀を握っていた。怒りで周囲が見えなくなり、何も考えられない。今はただ、佐伯を助けたいと。それだけを想っていた。

「おおおおおオオッ！」

黒い炎を纏って、ただ直線的にレオリスに向かっていく。力が欲しい。彼女を助けられるだけの力が。

そう、だからオレは気付かない。オレの”想い”が、既に死への拒絶のみでは無くなっていること。そして、それは”破戒”の原点。オレが想った、本当の”想い”へと近づいていることにも。

「喧しいな、”破戒者”。おい、ミルドレッド卿。コイツの相手を頼むぞ」

殺那、レオリスの呼びかけに応じて、闇夜に現れる人影。数は正面に一つ。

……まさか、新手か？

そう思った瞬間、背後での風切り音。背中に焼けるような痛みが疾る。

「ぐっ……があッ！」

一体、何が起こったのか？　それを確認する前に、今度は右方向で何かが動く気配がする。

幸い、背中への傷は浅い。確かに痛みはあるが、動けないほどの傷ではない。

「ちっ……！」

咄嗟に振り下ろされた何かを、刀で受け止めると、鋭い金属音が響く。飛び散る火花で、敵を認識したオレは、直ぐ様、目の前の人物に向かって斬りかかろうとするが

「ッ！？」

この時、オレは知らず、後ろに飛び退いていた。

避ける。でなければ死ぬぞ。

言うならば、それはただの直感。 ”破戒” によって研ぎ澄まされた感覚が、紛れも無い ”死の前兆” を察知し、オレは反射的にそれに従っていた

## 絶望の輪舞曲（2）

「……………」

次の瞬間、振り下ろされる重量の刃物。雄に一メートルを超える大戦斧が、先ほどまでオレが立っていた地面を、粉々に粉碎していた。

「なっ…………バカな」

その斧を手にとったモノを見て、オレはその場に硬直した。

巨人がいた。

鎧を纏った、黒い影のような巨躯。化物だ。これは人間でなく、怪物。あんな馬鹿でかい斧を振り下ろす怪力も、身に纏う覇気も人間の物ではない。

「アハハッ！ 良い勘してるじゃん。直ぐに終わると思ったけど、少しは楽しめそう。暇つぶしくらいにはなるかな」

突如、この場には似つかわしくない可憐な声が響く。無邪気で、まだ幼さを感じさせる声は、巨人の肩の辺りから。見ると、そこには黒いローブ姿の少女が、悠然と立っていた。

「ミルドレッド…………まさか、ミルドレッド・アーサー？ くっ、ならば彼らが円卓の騎士ですか」

「その通り。頭上から失礼しますよ、氷の女王（メリアル卿）。私は、エレクトラ家のミルドレッド・アーサー。まあ、適当にお見知りおきを」

彼女の名前に聞き覚えがあったのか。目を見開く佐伯に、ミルドレッドと名乗った少女は軽く一礼する。

『Concentration of Rounds Knight・（集結しろ、円卓騎士団）』

たった一節。ともすれば聞き逃してしまいそうな声量で、ミルドレッドが囁く。しかし、次の瞬間、その呼びかけに応えるように、濃密な気配が次々と屋上に現れる。

その数にして、およそ九人。いや、周囲の気配とデカイ奴も含めれば、十二人か。

「それが、噂に聞く円卓騎士団ですか。『王者の剣』最強の魔道兵団。その洗練された動き……とても『魔道人形』には見えませんね」

『魔道人形』？ コイツら、全員が人形だつて言うのか。

「ふふん、当然だよ。だつて、私が自分で作つたんだからね。アンタが使つてたような出来損ないとはレベルが違うよ」

ミルドレッドは得意げに鼻を鳴らし、デカブツの肩からピョンと飛び降りる。そして、愛おしげに自らの人形たちを見回した。

「理解できたか？ 貴様らは、どうあつても逃げられん。我がカルヴァールと、ミルドレッドの騎士団がある限りな」

「コキュートスの大蜘蛛に、アーサー王の騎士団。まったく、随分と厄介なモノを持ち出してくれますね」

厄介。そう、佐伯は言つたが、明らかに強がりだと分かる。

佐伯は動けず、新手の強さは未知数。だが、十二体を同時に戦うなんて、オレには無理だと言うことだけは分かる。

「……………」

こんな時、水原だったらどうするだろう？ もし、彼女がこの場にいてくれたなら、どんな風に切り抜けるのだろうか？

「ふん、強がり。何かを企んでいるようだが、所詮は無駄だ。ミルドレッド、貴様はその小僧の相手をしている。だが、殺すなよ？

止めは我が刺す。生きていれば虫の息でも構わんがな」

「きやははっ、了解。さあ、絶望の輪舞曲<sup>ロンド</sup>を奏でましょう」

ミルドレッドの命令を受けて、騎士団が動き出す。

駄目だ。こんな時に、オレは何を考えている。二度も窮地を救われておいて、まだ彼女に頼ろうと言うのか。

もう、誰も殺したくない。あの時、見た弱りきつた水原の姿。彼女の過去に何があつたのかは知らないが、きつと辛いことがあつたに違いない。オレなんかが想像も出来ないほどに、辛い出来事が。

「……やってやる」

だから、もう水原は戦っちゃいけない。もう、戦わせちゃいけないだ。

「うおおおおオオツ！」

オレはこの修羅場を自力で乗り切るべく、黒糖を握り締め、騎士団へと飛び掛った。

## スキャンサー

「さて、こちらもそろそろ終わりにしよう。あの小僧が、騎士団相手に何秒戦うかは知らんが、どうせあと十秒も持つまい」

悔しいがレオリスの言葉は、残酷なほど正しい。客観的に見て、戦力差があり過ぎる。単なる数の問題ではなく、あの騎士団は一体一体のレベルが、他の『魔道人形』とはケタ違いに高い。

「あは、あははは！　ちゃんと避けないと死んじゃうよ。ほらほら、前ばかり見てていいのかな？　後ろがお留守だよ」

「ぐっ……ま、まだまだ！」

一際大きな騎士の攻撃を躲した七瀬先輩を、背後から別の人形の鞭が打つ。前転して衝撃を殺し、彼は直ぐに立ち上がって刀を構えるが、どう見たって戦力差は明らか。完全に遊ばれている。

見た所、ミルドレッドに殺すつもりはないようだが、それでも七瀬先輩が危険な事に変わりはない。ならば……

「ッ！？　」

最期の切り札。本当なら、これは最後の最後まで隠しておきたかったのだが、仕方がない。

冬花は軽く地面を蹴ると、頭の中で”神術”の起動に必要な詩を紡ぐ。

「なっ、しまった！」

氷の龍。”破棄詠唱”によって創り上げた、五メートル以上の氷龍が、突如としてミルドレッドの背後に出現する。

「後ろがお留守。その言葉を、貴方にそっくり返しませう」

氷龍が牙を剥き、ミルドレッドの矮軀に襲いかかる。いくら、防刃コートを着ていると言っても、その衝撃までは防げない。

例え、”四大神術師”である自分のコートでも、直撃を食らえば昏倒は免れないだろう。

これで、後の問題はレオリスをどう出し抜くか。一度、こちら

の手を見せてしまった以上、同じ手は使えない。だが、レオリスが自分を捉えている間は、少なくとも七瀬先輩は安全な筈だ。ならば、今のうちに彼を逃して……

「えっ……？」

しかし、この先のパターンを十通り程考えた所で、冬花は予想外の展開が目の前で起きていることに気付いて、思考を止めた。

「ふう、危ない危ない。まさか、そっちから攻撃が来るとは思ってたよ」

無傷。ミルドレッドを守るように、あの一番大きな騎士が立ちふさがり、氷龍の牙を受け止めていた。

「……そんな」

あり得ない。『魔道人形』は、主人である者の命令を受けないと行動できない。そして、一度与えた命令を書き換えるには、少なくとも一秒以上の時間が掛かる。

咄嗟に命令変更をしたとしても、間に合うはずがない。どんなに、優秀な『魔道人形』であっても、性質上それは変わらない。

人が水中で生きられないように、人形が動くには、誰かの命令が絶対必須。しかし、現状として、あの騎士は自分の攻撃に反応してみせたのだ。

「まさか……」

冬花の頭を過る一つの可能性。しかし、その可能性を佐伯は、直ぐに頭から振り払った。

いや、あり得ない。あの計画は、自分が完全に潰した筈だ。だから……そんな筈はないのだ。

「エニオン・プロジェクト 楽園計画」

レオリスがボソリと呟いた単語に、冬花の肩が跳ねる。

「スキャンサー計画……ですか？」

二度と聞くことは無いと思っていた、忌まわしきその名前。それを、今更に聞くことになるうとは。

「ふふっ、気が付いたか。四年前、貴様が『第四位』に就任してか



ら、一番最初に潰したあの研究。その集大成が此処にある」

「バカな！？ あの計画は完全に潰しました。スキャンサー計画だって例外ではありません。データは完全に抹消。中核にあった”神術師”は、全員処刑したはずで。それなのに、何故……どうして『自意識を持つ魔道人形』が創られているんですか！？」

## スキャンサー（2）

楽園計画。それは、冬花の『師』、バルテル・アルヴィンを中心として進められた、人類救済を目的とした四つの計画。

スキャンサー計画は、その一つであり、主の命令なしでは動けない『魔道人形』に自意識を与え、更なる汎用性を高めようとする研究。

そして、同時に行われていた他の三つと総称して、バルテルはそれらを”楽園計画”と名付けた。

「答えは簡単。潰れていなかったのさ。バルテル亡き後、ミルドレッドが彼の意志を引き継ぎ、研究を完成させた。ただ、それだけだろうか？」

「あり得ません。末席とは言え、”四大神術師”である私が直接手を下したのですよ。それに、彼女が引き継いだのだとしても、私が気付かなかった筈が……なるほど。そういうことですか」

これは慢心ではなく、ただの事実。例え、ミルドレッドが隠れて研究を続けたとしても、”四大神術師”が本気になれば、直ぐにそれは明るみに出る。『同盟』の最高位には、それくらいの権限はある。だとすれば、可能性は一つだけ。

ミルドレッドは、誰かの庇護下にあったのだ。それも、かなりの高位の”神術師”。最高位である筈の自分よりも、格上の権力を持った者の。

「レオリス・マティルド。貴方ですね？」

静かな、だが明らかな怒気を込めて尋ねる冬花に、レオリスは口元を釣り上げた。

この人は、そこまで……そこまで私が気に喰わないのか。

「くく、ふははは！ そうだ。その通りさ！ よく気付いたじゃないか、シルビア。そう、そうだ。その顔だ。貴様の悔しげな顔が見たくて、ミルドレッドを庇護してみれば、とんだ掘り出し物だった

よ。この計画は」

「馬鹿げている！ 自分が何をしたのか、分かっているのですか？ 人間の脳を『魔道人形』に埋め込むなんて、どうかしている！」

この時だけは、冬花は自分の置かれている状況を忘我した。手足の拘束など、どうでも良い。

許さない。この人だけは、許してはいけないと。それだけしか考えられなかった。

「そうかな？ 中々、画期的な発明だと思うがな。主の命令には、絶対服従。そして、命令せずとも、主を守る人形。労せずして裏切ることがない、忠実な捨て駒を創り上げることが出来る」

そう。スキャンサー計画には一つだけ。どうしても、必要不可欠なモノがあった。それが、人間の脳。それも、死体からでは無く、生きた人間の脳が必要だったのだ。

「創り上げる？ それは違う！ 貴方は、ただ人間を人形へと変えているだけ。そんなのは、人間のやることじゃないッ！」

罪なき人々を、殺戮機械へと変える。そんな非人道的な行為が許される筈がない。

「はははッ！ どうした、シルビア？ 普段、むかつく程に冷静なお前が、ここまで感情的になるとはな。だが、もう大人しくしておけ。それ以上、動こうとすれば、我が手を下す前に出血多量で死ぬぞ。それでは、面白く無いだろう」

「……………ッ!？」

言われて初めて気付いた。手の平に、生温かい感触。無意識に、糸を引きちぎろうとして、皮膚が切れてしまったらしい。

「それに見てみる。あちらは、面白いことになっているぞ」

「えっ…………？」

レオリスが指さす方向に目を向けた先には、予想外の光景が広がっていた。

## 円卓騎士団

月下に舞う十二の人影。彼らは空を縦横無尽に飛び回り、一刻たりとも動きを止めることはない。

「これは……」

それは、一種の芸術と言っても良い。彼らは十二にして一、一にして十二。一見してバラバラな動きだが、その一挙一歩には意味がある。いや、十二の騎士達が全て別の動きをすることで、完璧なコンビネーションを生み出している。

鞭を持った小柄な騎士が宙に舞ったかと思えば、それを追いかけて双剣の騎士が跳び上がる。そして、着地地点には別の騎士が立っており、落下してきた二人をそれぞれ別方向へと放り投げる。

再び、二人が宙を舞ったかと思えば、上空から赤い鞭がオレへと迫ってくる。

「ぐっ……このッ！」

咄嗟に鞭を刀でなぎ払うが、次の瞬間には双剣の騎士が上から斬りかかってくる。

……間に合わない。

そう直感したオレは、上空からの二連撃を身を捻って避ける。だが、その瞬間を待っていたとばかりに、前方から三本の投げナイフ。

「なっ、ぐッ!？」

間一髪。ナイフが眉間に突き刺さる寸前で、刀を引戻して弾き返すが、一本が左肩に直撃。激痛に一瞬だけ目を閉じた直後、目の前には槍を持った大柄な騎士の姿があった。

「」

短い気合と共に、オレの喉元目掛けて槍が放たれる。

ヤバイ。躲せ躲せ、何としてでも躲せ。

それを躲せたのは奇跡に近い。我武者羅に身体を動かそうとし

て、バランスを崩した事もあるし、何よりその攻撃が線ではなく点であったこと。

もしも、突きではなく、横薙ぎに振るわれていたら、今頃オレの首は胴体から切り離されていたに違いない。

「っ…… おおあああ！」

紙一重で首を掠めていった槍の刃先。オレは直ぐ様体制を立て直して、目の前の騎士に斬り掛かるが、そいつは決殺の一撃を外したと見ると、大きく後ろに飛んで距離を離す。

「くそ！ ちょこまかと」

このチャンス逃してたまるか。

追いかけて切り伏せようとするが、一步前に踏み込んだ途端、それが罠だったと気付く。

左右から同時に迫る鞭とナイフ。更に、先程、後ろへと跳んだ騎士の遙か後方。屋上の縁辺りで、弓を構えた騎士が矢を放つ。

「しまっ……があッ！」

考えるよりも先に、身体が動いた。せめて、致命傷だけでも避けようと、後ろに飛び去りつつ、刀をでたらめに振るう。しかし、上手く叩き落せたのはナイフのみ。鞭はオレの腹を強打し、矢は見事に足を射抜いていた。

「……ッ！ ぐッ！」

よりにもよって足はマズイ。機動力を削がれるだけではなく、着地にも失敗して、無様に地面に後頭部から叩きつけられる。

一瞬、意識が飛びかけたが、何とか持ちこたえて身を起こす。

気絶は、そのまま死に繋がる。諦めるな、七瀬 広樹。自分自身を奮い起こして、オレは刀を杖にして立ち上がった。

「おお！ 凄い凄い。まさか、ここまで生き残るなんて思わなかったよ。でも、私の騎士団には勝てないよ」

戦斧を携えた巨大な騎士の肩で、ミルドレッドが歓喜の声を上げる。それに、合わせるように騎士達が、彼女の周りに一斉に集結し、全員で拍手を始める。

「……ちつ、完全に遊ばれてるな」

騎士達の動きは、まるで曲芸。目の前で展開される殺戮のサーカスに、オレは手も足も出ずに、ただ踊らされているだけ。

まったく。これじゃあ、どっちがピエロか分かりやしない。

パチパチと拍手が鳴り響く中、ミルドレッドが指揮者よろしく杖を構える。

「ふふふ、生きていれば良い。マティルド卿は、そう言ったよね。

なら、前奏は終わり。プレリュードそろそろ、フィナーレ終幕を始めましょう」

タクトが振られ、騎士が舞う。先程までとは、動きがまるで違う。  
「う……あああああッ！」

初撃は、疾風の如き突きから始まった。神速の槍が一直線。だが、視える。

異常とも言える、生への渴望。感覚を研ぎすました、今のオレなら充分に反応できる

## 円卓騎士団（2）

「甘い！」

繰り出される槍先を、紙一重で躲す。しかし、その後待っていたのは反撃のチャンスではなく、上空からの更なる斬撃。

槍の騎士を飛び越えて、上空から振るわれる大鎌。それは、三日月を描く死の軌道。首だけでなく、胴体すらも真つ二つにする勢いで迫った刃を、しゃがんで躲し、空中へと刀を突き出そうとした瞬間、

「きゃは！」

不気味に響く、少女の笑い声。心底、楽しいなミルドレッドの声を聞くのと同時に、オレの首に鞭が巻き付いた。

「ツツツツ！ かはっ！」

この時になって、初めてオレは気付いた。全ては罠だった。攻撃直後の致命的な隙は、只のブラフ。ミルドレッドが操る円卓騎士に致命的な隙などあり得ない。

初撃の終了は、次撃に移るための合図。壱の太刀を躲せば、弐の太刀。弐の太刀を防げば、参の太刀。それを、十二回繰り返した所で、再び壱へと戻るだけ。勝てる筈がない。数も実力も格上の相手を、そもそも倒せるはずがなかったのだ。

「あはは、無理無理。勝てるわけ無いでしょう。いくら”破戒者”と言っても、所詮は人間。足をやられれば動きは鈍るし、首を絞めれば意識を失う。それに比べて、私の人形は素晴らしいでしょう？ 脳さえ無事なら、部品は幾らでも修理が可能。痛みも感じないし、苦しみもない。これこそ、新しい人類の姿に相応しい。そう思わない？」

目の前には、大剣を構えた騎士。無表情という仮面を貼付けた殺戮機械が、純粹過ぎる殺意を飛ばしてくる。

「心配なくていいわ。心臓が止まったら、脳だけ取り出して、私

のコレクションに加えてあげる。ここまで、粘ったご褒美よ。貴方は、新しい身体で　そう、新人類として救済されるの。どう？　嬉しいでしょう？」

ああ、殺される。直感的に、そう感じた。

「は、ははっ、新人類？　何だよ……失敗作じゃないか」

息苦しさで朦朧とする意識の中、オレは搾り出すように呟いた。  
「ねえ……今、何て言ったの？　失敗作？　何が？　何が失敗作だつて言うの！？」

「何がって、それだよ。お前の前にいる人形。円卓騎士団だっけ？　コイツらは、全部失敗作だ」

オレの言葉に、目を見開くミルドレッド。いいさ。どうせ死ぬなら、言つてやる。自分の無知を、自覚させてやろう。

「お前の言う新人類なんて、ただの道具だ。感情のない、ただ言われたことだけを坦々とこなすロボット。引っ込んでるよ、裸の王様。人形遊びには、もう飽き飽きなんだ」

「……そう。分かったわ」

静かな、そして凍るように冷たい声。彼女の声は冷静だ。怖いほどに、冷静な声。だが、オレにはそれが嵐の前の静けさにしか思えなかった。

「もう殺す。貴方は必ず、殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す。いいですよ、マティルド卿。この”破戒者”は私が殺します。つか、駄目って言つても殺しますからね！」

狂気的笑みを浮かべて、殺気を顕にするミルドレッド。

……怖い。身体中を駆け巡る悪寒に、オレは金縛りにあつたように動けなくなった。

「失敗作？　人形遊び？　言ってくれたね、”破戒者”。だったら、身をもつて確かめてよ。この子達が、どんなに優秀なのか。そして、貴方がどんなに愚かだったのかを」

まるで、見えない力に押さえつけられたかのように、動かない身体。そんなオレに構わず、円卓騎士団の名を持つ十二体が、一斉に



武器を構えて向かってくる。

「くっ……ここまでかよ」

不思議と、恐怖は無かった。ここまで力の差を見せつけられては、もはや抵抗のしようがない。これで自分は死ぬのだと、あれだけ拒絶していた死を、客観的に感じていた。

### 円卓騎士団（3）

「七瀬先輩ッ!？」

不意に、佐伯の叫びが耳に入り、そちらに顔を向ける。そこには、拘束された四肢を、何とか振り解こうとする彼女の姿があった。

ああ、ゴメンな、佐伯。

手足を血に染めながらも、糸を振り解こうとする彼女に、オレは心の中で謝罪をする。

佐伯がどうして、そこまでオレを守ろうとしてくれているのかは分からない。”神術師”としての矜持か、それとも他の何かなのか。出会って間もないオレには、分かるはずも無い。

ただ、一つだけ分かるのは、オレの所為で佐伯は逆転の機を逃したと言うこと。先程、ミルドレッドを攻撃した氷の龍。それを、もしもレオリスに放っていたら、結果は変わっていたかも知れない。いや、奇襲が通らずとも、糸の拘束を抜け出して仕切り直すことくらいは出来たはず。でも、佐伯はそれをしなかった。

……何だよ、それ。

その行為に、怒りを覚えた。いや、正確には彼女の生き方、そのものに。

思えば、出会った時からそうだった。『正義』の為に。『同盟』の為に。彼女は、そう言っただけでオレを襲った。自分の為ではなく、あくまでも誰か他人の為に。

私は、”英雄”<sup>マリア</sup>になりたかった。

きつと、佐伯は正義の味方になりたかったんだ。あの時、死にかけていたオレを助けた”英雄”<sup>マリア</sup>のように。強く、気高く。誰かを助けられる存在に。

「……馬鹿が」

だからこそ、腹が立つのだ。命惜しさに、家族すら見捨てて逃げた最低野郎。そんな奴を助けるために、命を失うなんて馬鹿げてる。

違うだろう、佐伯。お前は、こんな所で死ぬべきじゃない。それも、同じ『同盟』の仲間の手で。今まで信じてきた『絶対的な正義』の手で。

名前も知らない誰かの為に、手を汚し続けた彼女の末路がこれなのか？　それが、相応の結末だって言うのか？

「ふざける。認めてたまるか」

認めない。そんなのは、認めたくない。

ああ、だけどさ。本当にゴメンよ、佐伯。オレには力が無いから、お前を助けてはやれない。無力なオレを、許してくれ。

本当に？

オレは水原みたいに強くはないから、誰かを助けるなんて出来ない。見捨てて逃げるくらいしいしか出来ないんだ。

本当にそうかな？

頭の中に、響くのは聞き覚えのある声。

何だ？　また、お前か。悪いが後にしてくれ。今は、お前に構っている暇はない。

キミは”英雄”にはなれない。

そんなオレの意志とは無関係に、声はただただ頭の中で響き続ける。お前には、英雄にはなれはしないと。

分かっている。分かっているさ、そんなこと。

そう。だからこそ、キミは彼女を救うことが出来る。

英雄にはなれない。故に、佐伯を救えるのだと声が告げる。

前を見てごらん。

目の前には、今にもオレを斬り殺さんと大剣を振りかぶる騎士の姿。上空には二体の人形。既に、ナイフは投擲され、後ろからは鞭が迫っている。

絶望的だ。望みがなさすぎて言葉もない。奇跡が起きたって、この場を生き残る事は出来ないだろう。

いいや、違う。キミは知っている筈だ。この程度で、キミは死なない。本当のキミならば、死ぬはずがない。

本当のオレだつて？

そう。だから、思い出せ。本当の”想い”。キミの内に潜む、”破戒”の原点。深淵の起源を。

声の主が囁いた瞬間、周囲が闇に包まれていく。視界が暗転し、徐々に何も見えなくなっていく。そんな中で、先程見た佐伯の顔が脳裏を過る。

信じた者達に裏切られ、あまつさえ命までも奪われようとする彼女。また、見捨てるのかと誰かが問う。

「違う。オレは……」

キミはどうする？ さあ、選択しろ、七瀬 広樹。このまま見捨てるか？ それとも、神が下した運命に抗ってみるのかを

「オレは」

答えなど、既に決まっている。

ずっと後悔してきたんだ。あの時、自分だけが逃げたこと。自分だけが生き延びたこと。

だから、今度は手を伸ばす。この手よ、届け。ひたすらに、その”想い”を込めて。

『 Memento Mori (死を想え) 』

紡がれるは、開扉の詩。“現界 (Germination)”では、届かない。ならば、開こう。更なる高み。そこへと至る、第二の扉を。

『 Convict of Sataele (屍山血河の創成

詩) 』

前奏は終わり、ここから本当の終幕が始まった。

## 戒放

「まさか ”戒放”（Fleurir）？ いや、違う。アンタ程度の”破戒者”が、使いこなせる訳ないもん。所詮、見掛け倒しに決まってる！」

赤い鞭が宙を疾る。同時に、ナイフが二本。上空には双剣の騎士に、その背後には槍の騎士が控える。

「殺しちゃえ！ さっきの言葉、地獄で後悔させてやるんだから」ミルドレッドのタクトが振られ、騎士の動きが、更に切れを増す。なるほど。さすがは『同盟』の誇る最強部隊。大したコンビネーションだ。躲されても、次に繋げる。一見、単純な事のように思えるが、終わりになき攻撃は最強の防御へと姿を変える。加えて、非常時には『魔導人形』が自分の判断で反応する。まさに、最強の布陣。どう足掻いた所で、打ち破る手段など無かっただろう。

もしも、さっきまでのオレならば……。

「ッ！」

だが、遅いんだよ。今のオレは、この程度じゃ止められない。もう 止められないんだ。

「なっ……！」

その一連の動作を躲し終えた時、ミルドレッドから驚愕の声が漏れる。これで決めるつもりで放った、回避不能の四連撃。それをあつさりと躲したのだ。当然と言えば、当然か。

「ぐ、偶然。そう、偶然よ！ まぐれで躲したくらいで調子に乗らないでよね。まだ、私の攻撃は終わってない。その証拠に、反撃の一つも出来てないじゃん」

しかし、それも一瞬の事。直ぐ様、ミルドレッドは我に帰って、騎士へと命を飛ばす。

無駄だとも知らずに、再度の出撃命令を騎士へと命じた。

「今度こそ殺す。もう、避けられないからね。無駄に足掻かずに、

さつさと死んじゃえ！」

無能な王は、騎士を殺す。いかに優秀な手駒であろうとも、使い手が二流ならばそのその真価は発揮できない。

「死ね死ね死ね死ね死ねえ！ 異端者風情が逆らうな。アンタ達みたいな人類の癌は、大人しく駆逐されればいいのよ」

迫る狂刃は、更に速度を増す。槍には回転が加えられ、投擲されたナイフが雨のように降り注ぐ。

眼前に展開する処刑演舞。それは、ミルドレッドにしか成し得ないもの。他の誰も辿り着けなかった領域。故に、自分は『王者の剣』の中で最強であり、”四大神術師”に勝るとも劣らないと自負している。

「そう。そうよ！ 私は負けない。私の騎士団は……最強よ！ あの『楽園の守護者』すらも凌駕する、『同盟』の切り札なのよ」

過去にマリア・スカーレットが率いたとされる、伝説の十人。彼らが最狂を謳うならば、自分の騎士団は最強を担う。

敗れるはずがない。倒せない相手などいない。その筈なのに

「うそ……何で、こんなの何かの間違いよ！」

七瀬 広樹は生きている。

武器は細い刀のみ。左足は負傷し、ロクに動けるないにも関わらず、騎士の攻撃を躲し続けている。

ただの偶然。最初は純粹にそう思っていた。しかし、時間が経つ毎に、それは疑念へと変わっていき、やがては確信へと変化する。「何よ、何なのよ！？ ただの人間なのに、どうして死なないの？」偶然ではない。そう気付いた時、ミルドレッドの中に、初めて恐怖が生まれた。

自分の騎士団が通用しない。それも、手負いの”破戒者”に。目の前で、あつてはならない事が起こっている。

## 戒放(2)

「無駄だ」

「なっ……!？」

完全な死角。背後から放たれたナイフを、片手でキャッチしてみせると、ミルドレッドが驚愕に目を見開いた。

「あり得ない。ただの人間が、私の騎士団を破るなんて……そんなの、絶対にあり得ないわ」

「人間には無理……か。なら、オレはそれ以外の何かなのだろう」  
そう言いつつ、手の中のナイフをミルドレッドに投げ返す。即座に、近くにいた騎士が対応するが、そんなものはどうでも良かった。オレの目的は、佐伯の救出だ。コイツを殺すのは、後でも出来る。

「……………」

距離は、約十メートル弱。通常の状態ならば、即座に距離を詰めることが可能だが、今は左足が使えない。

機動力を削がれたオレでは、刀の間合いに入る前に、レオリスに迎撃されてお終いだろう。

「佐伯。待つてろよ」

だが、それは普通に近付いたらの話し。動けないならば、違う方法を使うだけ。今のオレには、それが出来るのだから。

『My body is enveloped with Death's flame. (我が身を包むは、死神の炎)』

”戒放”(Fleurir)。それは”破戒者”の第二段階にして、条理を覆す神の御業。

世界法則を歪める程の”想い”。それを持った”破戒者”のみが到達出来る、人外の領域。故に、”神術師”如きに、敗れる筈が

ない。

「直ぐに、助けてやるから」

必ず助ける。その為に力を。

「ぎ、づあああああ！」

刹那、更に濃度を増す黒き焔。

熱い。これじゃあ、炎を纏うというよりも、炎の中にいるに等しい。

「ぐ、があッ！」

次の瞬間　世界が変わった。

目の前に広がるのは、膨大な数式。文字通り、世界が変革している。空、月。風、そして人間すらも。少し見方を変えれば、数字の羅列でしかない。

つまり、これは世界が変わったのではなく、オレの視点が変わったのだ。人間と言う、『第一世界』に囚われた存在ではなく、もっと上位の視点。

世界を情報として捉える、神の視点だ。

「が、あああ！」

痛い。頭が割れそうに痛い。現在進行形で燃えている手足よりも、脳に直接流れこんでくる膨大な情報の方がオレを殺す毒になりかかない。

だが、今のオレならば何でも出来る気がした。

たった一つでいい。この莫大な情報の海から、一つの法則を書き換えるだけで、全てを変えられる。そんな気がした。

「ぐうッ、あああああああああ！」

空間認識。座標固定。速度調整。

およそ人間が処理するには多すぎる情報に脳を焼かれそうになりながら、オレは確かにその祝詞を聞いた。

大丈夫。今なら届くぞ。あの少女の元に。

法則改竄。移行準備完全完了。

全ての準備は整った。だから、行け。奇跡を起こせよ、七瀬 広



樹。

☞ Sunshine Lightning waters  
moon (陽炎稻妻水の月) ☞

詩が響き、黒炎が燃え盛る。

周囲から音が消え、世界が凍結する。人も音も、光さえも置き去りに。オレは、一つの”想い”を抱き続ける。

佐伯を助きたい。

ただ、それだけ。それだけで、この身は閃光となる。

「……ほう」

感心したような、レオリスの声。

それは、まさに一瞬の出来事。目にも映らぬ殺那の間に、オレはレオリスの喉元に刃を突き付けていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2559/>

---

灰色の街でキミは微笑む(真性中二病ファンタジー)

2011年10月11日19時12分発行